

大阪市平野区

長原遺跡発掘調査報告

XV



2006.11

財団法人 大阪市文化財協会

大阪市平野区

長原遺跡発掘調査報告

XV



2006.11

財団法人 大阪市文化財協会



長原87号墳出土巫女形埴輪

大阪市平野区

長原遺跡発掘調査報告

XV



2006.11

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

地下鉄谷町線の工事で長原遺跡が発見されて、早いもので30年が過ぎた。基本層序を基にした発掘調査成果の蓄積により、この地域の旧石器時代から現代に至るまでの歴史的な変遷が明らかになった。

本書では1979～95年度に行われた104件の調査を報告する。この中には44基の古墳や集落、平安時代の土地争議の木簡など多様な遺物・遺構が含まれる。本書の上梓によって、学界の研究進展や市民への普及活動に寄与できれば幸いである。

最後に、発掘調査から本書の刊行まで、ご理解、ご協力を賜った各関係機関の皆様方に、心より御礼申し上げる。

2006年11月

財団法人 大阪市文化財協会

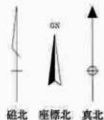
理事長 脇田 修

例 言

- 一、本書は大阪市平野区に所在する長原遺跡の発掘調査報告である。1979～95年度にかけて行った104件の調査を報告する。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、第Ⅰ章第2節の表4・5に記した各調査の原因者の負担による。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査課長永島輝臣(当時)の指揮のもと、表4・5に記した担当者によって行われた。
- 一、本書の編集は、現場終了後に各調査担当者が作成した略報を基礎にして、2004年度に調査研究部研究資料課学芸員(現文化財研究部学芸員)寺井誠が行い、2005・2006年度に若干の修正を加えた。編集に際しては、研究資料課長(現同部事業担当課長)京嶋覚、研究資料課課長代理(現同部長原調査事務所長)松尾信裕の指揮を受けた。また、第Ⅱ章第1節の長原180号墳(NG88-56次調査)については調査課長(現同部技術管理・保存科学担当課長)田中清美、第Ⅲ章第1節の建築部材については調査課学芸員(現大阪歴史博物館学芸員)李陽浩、第Ⅳ章第2節のNG84-86次調査出土古式土師器については調査課学芸員(現同部学芸員)杉本厚典が担当し、担当箇所の末尾に名前を付した。
- 一、木簡の墨書の釈文については文化財研究部保存科学室島居信子(現)が担当し、建築学的見解は李陽浩から教示を得た。
- 一、金属器・木器の保存処理と整理は、文化財研究部保存科学担当係長伊藤幸司および島居が行った。
- 一、巻末の英文目次・要旨は、アメリカ合衆国・ワシントン州立大学のマシュー・バンベルト(Matthew W. Van Pelt)氏の助力を得て、寺井が作成した。
- 一、遺構写真の撮影はおもに各調査担当者が行い、一部は徳永園治氏に委託した。また、NG84-25次調査の航空写真は朝日航洋株式会社による。
- 一、本書で報告した遺物、その他の資料は当協会が保管している。
- 一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には協会職員ならびに補助員諸氏の協力を得た。深く感謝の意を表する。

凡 例

1. 調査回数に冠せられるアルファベットについて、NGは長原遺跡を示し、たとえばNG98-3次という調査は1998年度の3番目の長原遺跡の調査であるということを示す。また、第V章第2節に登場するDDは出戸4丁目所在遺跡を示す。これは現在の長原遺跡に含まれるが、報告では調査当時の回数をそのまま用いた。なお、各調査を示す場合、本文中ではNGを冠するが、位置図などでは特に断らないかぎり省略することにした。
2. 第II章以降の各節の冒頭に掲載した層序表での、各々の地層における遺構欄で用いた記号は、←=上面検出遺構、↓=下面検出遺構、▼=基底面検出遺構をそれぞれ示している。
3. 遺構名の表記は、塼・構(SA)、掘立柱建物(SB)、柱穴(SP)、土坑(SK)、溝(SD)、井戸(SE)、自然流路(NR)、そのほかの遺構(SX)の略号を冠した。遺構番号は長原遺跡の標準層序[越智清2001]を基本とした番号を冠し、以下は各節ごとに通し番号を付した。
4. 遺物番号は、掲載したすべてに対して、各節ごとで通し番号を付した。
5. 本書で用いた方位には、磁北・座標北・真北の3種類がある。これらの区別は右図の指北記号によって示した。
6. 本書に報告する調査はいずれも2002(平成14)年3月以前のものであり、座標北および座標値は世界測地系ではなく、それらの調査で使用した旧来の日本測地系(国土平面直角座標第VI系)を用いている。
7. 水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中では $TP \pm 〇m$ を記した。
8. 本書で用いた土器編年と器種名について、弥生土器は[寺沢薫・森井貞雄1989]、古墳時代の須恵器は[田辺昭三1966・1981]に、飛鳥・奈良時代の須恵器・土器は[古代の土器研究会1992]、平安時代の土器は[佐藤隆1992]、平安時代後期以降の瓦器は[尾上実ほか1995]に従った。
9. 註は各節末に、引用・参考文献と索引は巻末に掲載した。



本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 長原遺跡の発掘調査	1
第1節 長原遺跡の概要	1
1) 概要	1
2) 遺跡の立地と地形環境	2
3) 近年のおもな調査研究	3
第2節 今回報告する調査一覧	8
第Ⅱ章 南・西南地区の調査	11
第1節 NG18次およびその周辺の調査	11
1) 調査地と周辺の概要	11
2) 調査の結果	12
3) まとめ	30
第2節 NG83-66次およびその周辺の調査	31
1) 調査地と周辺の概要	31
2) 調査の結果	31
3) まとめ	36
第3節 NG92-92次およびその周辺の調査	37
1) 調査地と周辺の概要	37
2) 調査の結果	38
3) まとめ	54
第4節 NG86-62および93-91次調査	55
1) 調査地と周辺の概要	55
2) 調査の結果	56
3) まとめ	56
第Ⅲ章 西地区の調査	57
第1節 NG84-25次およびその周辺の調査	57

1) 調査地と周辺の概要	57
2) 調査の結果	58
3) まとめ	88
第2節 NG91-70次およびその周辺の調査	90
1) 調査地と周辺の概要	90
2) 調査の結果	90
3) まとめ	99
第3節 NG92-95および93-26次調査	101
1) 調査地と周辺の概要	101
2) 調査の結果	101
3) まとめ	118
第IV章 中央地区の調査	119
第1節 NG89-25次およびその周辺の調査	119
1) 調査地と周辺の概要	119
2) 調査の結果	119
3) まとめ	128
第2節 NG92-2次およびその周辺の調査	130
1) 調査地と周辺の概要	130
2) 調査の結果	132
3) まとめ	140
第V章 北地区の調査	143
第1節 NG93-37次およびその周辺の調査	143
1) 調査地と周辺の概要	143
2) 調査の結果	143
3) まとめ	151
第2節 DD82-1次およびその周辺の調査	152
1) 調査地と周辺の概要	152
2) 調査の結果	152
3) まとめ	158
第3節 NG84-34次およびその周辺の調査	161
1) 調査地と周辺の概要	161
2) 調査の結果	161
3) まとめ	168
第VI章 東南地区の調査	169

第1節	NG83-8次およびその周辺の調査	169
	1) 調査地と周辺の概要	169
	2) 調査の結果	169
	3) まとめ	179
第2節	NG91-1次およびその周辺の調査	181
	1) 調査地と周辺の概要	181
	2) 調査の結果	181
	3) まとめ	199
第3節	NG93-1次およびその周辺の調査	201
	1) 調査地と周辺の概要	201
	2) 調査の結果	201
	3) まとめ	212
第4節	NG86-3・64次およびその周辺の調査	214
	1) 調査地と周辺の概要	214
	2) 調査の結果	215
	3) まとめ	225
第5節	NG85-18次およびその周辺の調査	227
	1) 調査地と周辺の概要	227
	2) 調査の結果	227
	3) まとめ	234
第Ⅶ章	東・東北地区の調査	235
第1節	NG87-67次およびその周辺の調査	235
	1) 調査地と周辺の概要	235
	2) 調査の結果	236
	3) まとめ	250
第2節	NG84-86次およびその周辺の調査	251
	1) 調査地と周辺の概要	251
	2) 調査の結果	251
	3) まとめ	262
第3節	NG84-4次およびその周辺の調査	263
	1) 調査地と周辺の概要	263
	2) 調査の結果	265
	3) まとめ	272
第Ⅷ章	遺構と遺物の検討	273
第1節	長原古墳群集成	273

1) はじめに	273
2) 時期	273
3) 墳丘形態と外部施設	274
4) 主体部と副葬品	274
第2節 長原117号墳出土の両耳付短頸壺について	287
1) はじめに	287
2) 朝鮮半島における両耳付短頸壺	287
3) 日本における出土事例	287
4) 117号墳出土資料と類例の検討	290
5) おわりに	291
引用・参考文献	293
あとがき・索引	
英文目次・要旨	

原色図版目次

長原87号墳出土形象埴輪

上：鶏形埴輪

下：馬形埴輪

図版目次

- 1 NG18次調査の遺構
 - 上：長原71～74号墳(A区を南から)
 - 中：長原74号墳周溝遺物出土状況
 - 下：SD603完掘状況(A地区を南から)
- 2 NG83-38次調査の遺構
 - 上：長原87号墳全景(北から)
 - 中：長原87号墳墳丘断面と埴輪列
 - 下：長原87号墳主体部(西から)
- 3 NG88-56次調査の遺構
 - 上：長原180号墳全景(南から)
 - 下：長原180号墳主体部(東から)
- 4 NG89-12・83-66次調査の遺構
 - 上：NG89-12次奈良時代水田(南から)
 - 中：NG83-66次奈良時代水田(南から)
 - 下：NG83-66次SB401(北から)
- 5 NG87-70・89-69次調査の遺構
 - 上：NG87-70次長原6Bi層上面全景(東から)
 - 中：NG87-70次長原6Ai層上面全景(東から)
 - 下：NG89-69次長原182号墳全景(東から)
- 6 NG92-92次調査の遺構(一)
 - 上：長原200号墳検出状況(南から)
 - 中：長原200号墳完掘状況(南から)
 - 下：長原200号墳主体部(西から)
- 7 NG92-92次調査の遺構(二)
 - 上：1区奈良時代水田全景(北から)
 - 中：SR501埴輪出土状況(南東から)
 - 下：3区平安時代遺構全景(東から)
- 8 NG92-45・94-67次調査の遺構
 - 上：NG92-45次北区畦畔断面
 - 中：NG94-67次平安時代遺構全景(南から)
 - 下：NG94-67次SE402断面(北から)
- 9 NG84-25次調査の遺構(一)
 - 上：A区古墳時代遺構全景(航空写真：右が北)
 - 下：B区古墳時代遺構全景(東から)
- 10 NG84-25次調査の遺構(二)
 - 上：長原113号墳(東から)
 - 中：長原116・117号墳(上から)
 - 下：長原117号墳(北西から)
- 11 NG84-25次調査の遺構(三)
 - 上：SB702(南から)
 - 中：B区南側の古墳時代溝群(南から)
 - 下：SE701木器出土状況
- 12 NG84-25次調査の遺構(四)
 - 上：A区奈良時代水田全景(航空写真：右が北)
 - 中：A区北東部奈良時代水田(航空写真：右が北)
 - 下：SX601(南から)
- 13 NG86-91次調査の遺構
 - 上：長原166号墳全景(東から)
 - 中：長原166号墳第1主体部(南東から)
 - 下：長原166号墳周溝韓式系鍋出土状況
- 14 NG89-36・90-66次調査の遺構
 - 上：NG89-36次古墳時代遺構全景(北から)
 - 中：NG89-36次SX701検出状況(西から)
 - 下：NG90-66次SD407完掘状況(北東から)
- 15 NG91-70・93-14次調査の遺構
 - 上：NG91-70次SE701断面
 - 中：NG91-70次SD402断面(北から)
 - 下：NG93-14次完掘状況(北から)
- 16 NG93-80・89-15次調査の遺構
 - 上：NG93-80次SD601(北西から)
 - 中：NG89-15次調査地西部完掘状況(東から)
 - 下：NG89-15次SD401(北から)
- 17 NG92-95次調査の遺構
 - 上：古墳時代遺構全景(北から)
 - 中：SB703
 - 下：SB711～713(北東から)
- 18 NG93-26次調査の遺構
 - 上：SB714・SE701(東から)

- 中：SD709・713(北から)
下：SD709遺物出土状況(南から)
- 19 NG89-25次調査の遺構
上：古墳時代遺構発掘状況(北から)
中：SB701(北から)
下：長原6A層上面検出水田(北から)
- 20 NG92-2次調査の遺構(一)
上：SE401-403およびSD401(南から)
中：SE401断面(北から)
下：SE401曲物検出状況(北から)
- 21 NG92-2次調査の遺構(二)
上：SE402曲物検出状況(南から)
中：SE403曲物検出状況(南から)
下：SE402断面(南から)
- 22 NG90-13・95-2次調査の遺構
上：NG90-13次SD602完掘状況(南から)
中：NG95-2次完掘状況(北から)
下：NG95-2次SK402断面(東から)
- 23 NG93-37・87-43次調査の遺構
上：NG93-37次長原199・201・202号墳
(東から)
中：NG93-37次長原204号墳(北から)
下：NG87-43次第5層基底面全景(東から)
- 24 DD82-1次調査の遺構
上：SE301遺物出土状況
中：SE302
下：SE305
- 25 NG91-16・88-90次調査の遺構
上：NG91-16次東壁断面図(北西から)
中：NG88-90次SE401(北から)
下：NG88-90次SE402(北から)
- 26 NG84-34次調査の遺構
上：SX801墳丘断面(2区西壁)
中：SX801周溝遺物出土状況(西から)
下：SX802周溝遺物出土状況
- 27 NG83-8・86-23次調査の遺構
上：NG83-8次SX701(西から)
中：NG83-8次SD601・602
およびSX601(西から)
下：NG86-23次NR601(西から)
- 28 NG89-47・81-12次調査の遺構
上：NG89-47次平安～鎌倉時代
遺構全景(西から)
- 中：NG89-47次SB404柱穴内石製礎板(南から)
下：NG81-12次SX401出土状況
- 29 NG91-1次調査の遺構(一)
上：長原16B層上面化石林全景(南東から)
中：縄文時代石器ブロック検出状況(南から)
下：SD902(南東から)
- 30 NG91-1次調査の遺構(二)
上：長原183～186号墳(北から)
中：長原183号墳(北から)
下：長原184号墳
- 31 NG92-5次調査の遺構
上：SD902(南東から)
中：長原198号墳(南西から)
下：SK710遺物出土状況(南東から)
- 32 NG89-48次調査の遺構
上：旧石器ブロック検出状況(東から)
中：NR901・SD901検出状況(北から)
下：調査地北西部柱穴群(北から)
- 33 NG93-1次調査の遺構(一)
上：弥生時代水田断面(南から)
中：弥生時代水田全景(南東から)
下：弥生時代水田北東部(北東から)
- 34 NG93-1次調査の遺構(二)
上：NR901(北から)
中：SK801高杯出土状況(東から)
下：SE701完掘状況(北から)
- 35 NG86-3・64次調査の遺構(一)
上：旧石器時代石器ブロック
中：横長剥片出土状況
下：石核出土状況
- 36 NG86-3・64次調査の遺構(二)
上：NR901(南から)
中：SD901(北から)
下：NR902(南から)
- 37 NG93-56次調査の遺構
上：調査地東北部古墳時代遺構(北から)
中：SB701(北西から)
下：SD703遺物出土状況(南から)
- 38 NG85-18・87-56・87-81次調査の遺構
上：NG85-18次長原129号墳(南から)
中：NG87-56次SD709・710(東から)
下：NG87-81次長原178号墳および
SD707・708(西から)

- 39 NG87-67次調査の遺構
上: SK801(東から)
中: SX701(北西から)
下: SD712-714(南東から)
- 40 NG84-6次調査の遺構
上: SX703周溝(北から)
中: SX702周溝(北から)
下: SX703上層埴輪出土状況
- 41 NG84-86・84-4次調査の遺構
上: NG84-86次SE701遺物出土状況
中: NG84-4次SD701遺物出土状況
下: NG84-4次SD702遺物出土状況
- 42 NG95-77次調査の遺構
上: 縄文海進時の生痕化石
中: SD801完掘状況(東から)
下: SX701断面(西から)
- 43 NG92-25次SE701出土建築部材
- 44 NG92-2次出土木簡・NG94-67次出土土埴輪陶器

挿 図 目 次

- 図1 長原遺跡の位置と地区割 1
- 図2 長原遺跡周辺の地形分類図 2
- 図3 本書で報告する調査地位置図 8
- 図4 NG18次などの調査地位置図 11
- 図5 NG88-56次東壁断面図 12
- 図6 NG88-40次北壁断面図 13
- 図7 NG88-40次出土スケレーパー 14
- 図8 NG18次調査地における古墳と
古代の溝の分布 14
- 図9 NG18次長原71-74号墳出土遺物 15
- 図10 NG18次長原76号墳実測図 16
- 図11 NG18次長原76号墳出土埴輪 17
- 図12 NG18次長原77・79号墳および
C-5区出土遺物 18
- 図13 NG88-40次出土鳥形埴輪 19
- 図14 NG83-38次長原87号墳実測図 20
- 図15 NG83-38次長原87号墳主体部実測図 21
- 図16 NG83-38次長原87号墳出土遺物 21
- 図17 NG83-38次長原87号墳出土埴輪(1) 22
- 図18 NG83-38次長原87号墳出土埴輪(2) 23
- 図19 NG88-56次長原180号墳平面図
および主体部実測図 24
- 図20 NG88-56次長原180号墳墳丘断面図 24
- 図21 NG88-56次長原180号墳出土遺物 25
- 図22 長吉川辺1丁目一帯の古墳と
飛鳥-奈良時代の溝の分布 27
- 図23 NG89-12次奈良時代水田平面図 28
- 図24 NG18次SE401実測図 29
- 図25 NG18次SE401出土遺物 29
- 図26 NG83-66次などの調査地位置図 31
- 図27 NG83-66次南壁断面図 32
- 図28 NG24次古墳-平安時代遺構配置図 32
- 図29 長原15・39号墳平面図 33
- 図30 NG83-17次長原44号墳平面図 33
- 図31 NG83-66次奈良時代水田平面図 34
- 図32 NG83-66次周辺古墳および畦畔分布図 34
- 図33 NG21次奈良時代水田平面図 35
- 図34 NG83-66次平安時代遺構配置図 36
- 図35 NG92-92次などの調査地位置図 37
- 図36 NG92-45次南区南壁断面図 38
- 図37 NG89-69次北区北壁断面図 39
- 図38 NG92-73次SX901平面図 39
- 図39 NG86-66次長原155-159号墳と
その周辺の古墳 40
- 図40 NG89-69次長原182号墳出土遺物 41
- 図41 NG89-69次南トレンチ古墳時代遺構平面図 41
- 図42 NG92-92次長原200号墳実測図 42
- 図43 NG92-92次長原200号墳主体部 43
- 図44 NG92-92次長原200号墳出土遺物 43
- 図45 NG87-70次飛鳥-奈良時代遺構配置図 44
- 図46 NG89-69次飛鳥時代水田平面図 45
- 図47 NG92-45次奈良時代水田平面図 46
- 図48 NG92-73次飛鳥-奈良時代水田平面図 47
- 図49 NG92-92次奈良時代水田平面図 48
- 図50 NG92-92次SR501実測図 48
- 図51 NG92-92次1区SR501内埴輪出土状況 48
- 図52 SR501および長原6A1層出土遺物 49
- 図53 長吉長原4丁目一帯の奈良時代水田 50
- 図54 NG92-92次平安時代遺構配置図 51
- 図55 NG94-67次平安時代遺構配置図 52
- 図56 NG94-67次SE402断面図 52
- 図57 NG94-67次出土遺物 53

図58	NG86-62および93-91次調査地位置図	55	図102	NG89-15次古墳-鎌倉時代遺構配置図	91
図59	NG93-91次北壁断面図	55	図103	NG91-70次古墳-平安時代遺構配置図	92
図60	NG93-91次遺構配置図	56	図104	NG91-70次出土遺物	93
図61	NG93-91次SD403断面図	56	図105	NG91-70次SE701実測図	94
図62	NG84-25次などの調査地位置図	57	図106	NG93-14次古墳時代遺構配置図	94
図63	NG84-25次層序模式図	59	図107	NG93-80次古墳時代遺構配置図	95
図64	NG86-91次南壁断面図	59	図108	NG93-80次出土遺物	95
図65	NG89-36次南壁断面図	59	図109	NG93-80次西区SD601実測図	96
図66	NG84-25次出土石器	60	図110	NG89-15次SD401断面図	96
図67	NG84-25次A区古墳時代遺構配置図	61	図111	NG89-15・91-70次調査地と その周辺の平安時代遺構配置図	97
図68	NG84-25次A区長原113号墳実測図	62	図112	NG91-70次SD402断面図	97
図69	NG84-25次A区長原113号墳出土遺物	63	図113	NG89-15・91-70・93-80次 平安-鎌倉時代出土遺物	98
図70	NG84-25次A区古墳出土遺物	64	図114	NG93-80次鎌倉-室町時代遺構配置図	98
図71	NG84-25次A区長原116号墳実測図	65	図115	調査地周辺の古墳時代遺構配置図	100
図72	NG84-25次A区長原117号墳実測図	66	図116	NG92-95・93-26次調査地位置図	101
図73	NG86-91次長原166号墳実測図	67	図117	NG92-95次遺構配置図	102
図74	NG86-91次長原166号墳第1主体部実測図	67	図118	NG92-95次A群遺構実測図	103
図75	NG86-91次長原166号墳第2主体部実測図	68	図119	NG92-95次B群遺構実測図	104
図76	NG86-91次長原166号墳出土鉄製品	69	図120	NG92-95次C群遺構実測図	105
図77	NG86-91次長原166号墳出土須恵器	71	図121	NG93-26次遺構配置図	106
図78	NG84-25次B区古墳時代遺構配置図	73	図122	NG93-26次SE701断面図	107
図79	NG84-25次B区掘立柱建物実測図(1)	74	図123	NG93-26次SE701出土遺物	108
図80	NG84-25次B区掘立柱建物実測図(2)	75	図124	NG93-26次SE701・702出土遺物	109
図81	NG84-25次B区古墳時代出土遺物	76	図125	NG93-26次SK701出土遺物(1)	110
図82	NG84-25次B区SE701実測図	77	図126	NG93-26次SK701出土遺物(2)	111
図83	NG84-25次B区SE701出土土師器	78	図127	NG93-26次SK701上層・SK703出土遺物	112
図84	NG84-25次B区SE701出土須恵器・木製品	79	図128	NG93-26次SD714出土遺物	113
図85	NG89-36次古墳時代遺構配置図	80	図129	NG93-26次SD707-709・711出土遺物	114
図86	NG89-36次古墳時代遺構断面図	80	図130	NG93-26次出土遺物(その他)	115
図87	NG89-36次出土遺物	81	図131	NG93-26次出土土瓦・瓦片	116
図88	NG89-36次出土滑石製品実測図(1)	81	図132	NG92-95・93-26次および近隣の 古墳時代遺構配置図	117
図89	NG89-36次出土滑石製品実測図(2)	82	図133	NG89-25次などの調査地位置図	119
図90	NG89-36次出土白玉計測値	83	図134	NG89-5次東壁断面図	120
図91	NG84-25次奈良時代水田平面図	84	図135	NG89-25次南壁断面図	120
図92	NG86-91次奈良時代水田平面図	85	図136	NG89-5次縄文時代遺構配置図	121
図93	NG89-36次飛鳥-奈良時代遺構配置図	85	図137	NG89-5次出土石鏡	121
図94	NG90-66次遺構配置図	86	図138	NG89-25次古墳時代遺構配置図	122
図95	NG84-25・89-36・90-66次出土遺物	86	図139	NG89-25次古墳時代遺構出土遺物	123
図96	NG84-25次B区鎌倉時代水田平面図	87	図140	NG89-25次飛鳥時代遺構配置図	124
図97	NG89-36次鎌倉時代遺構配置図	88	図141	NG89-25次飛鳥-奈良時代水田平面図	125
図98	NG89-36次SE401実測図	88	図142	NG89-5・25次飛鳥-奈良時代出土遺物	126
図99	NG84-25次調査地周辺の古墳時代遺構配置図	89			
図100	NG91-70次などの調査地位置図	90			
図101	NG93-80次2区東壁断面図	91			

図143	NG92-79次飛鳥～奈良時代遺構配置図	126	図184	NG91-16次遺構配置図	160
図144	NG89-25次鎌倉時代遺構配置図	127	図185	NG91-16次SD601・SE409断面図	160
図145	NG95-29次SE401実測図とその位置	128	図186	NG84-34次などの調査地位位置図	161
図146	西ムラ・長原古墳群と NG89-25次調査地の関係	129	図187	NG84-34次調査地周辺の弥生時代の遺構	162
図147	NG92-2次などの調査地位位置図	130	図188	NG84-34次弥生前期土器	162
図148	NG92-2次北壁断面図	131	図189	NG84-34次2区断面図 およびSX801平面図	163
図149	NG92-2次古墳時代遺構配置図	132	図190	NG84-34次SX801出土遺物	164
図150	NG89-13次SD601断面図	133	図191	NG84-34次3区断面図 およびSX802平面図	165
図151	NG89-13次SK501断面図	133	図192	NG84-34次SX802出土遺物(1)	165
図152	NG89-13次遺構配置図	133	図193	NG84-34次SX802出土遺物(2)	166
図153	NG90-13次飛鳥～奈良時代遺構配置図	134	図194	NG84-34次4区断面図 およびSX803平面図	167
図154	NG90-13次SD602出土遺物	134	図195	NG23次SX804実測図	167
図155	NG86-13・87-2次調査地 および周辺の水田	135	図196	NG23次長原100号墳周溝平面図	168
図156	NG92-2次SE401～403・SD401平面図	136	図197	NG23次長原100号墳出土遺物	168
図157	NG92-2次SE401～403断面図	136	図198	長原100号墳と周辺の古墳分布	168
図158	NG92-2次SE401出土木簡	137	図199	NG83-8次などの調査地位位置図	169
図159	NG92-2次SE401～403出土遺物	138	図200	NG83-8次南区南壁断面図	170
図160	NG90-13次鎌倉時代遺構配置図	138	図201	NG83-8次出土土器	170
図161	NG92-2次鎌倉時代遺構配置図	139	図202	NG89-47次出土縄文時代晩期土器	170
図162	NG95-2次鎌倉時代遺構配置図 およびSK402断面図	140	図203	NG83-8次出土庄内式土器	170
図163	NG95-2次SK402出土遺物	140	図204	NG89-47次弥生時代遺構配置図	171
図164	木簡出土位置と推定条里	141	図205	NG83-8次南区庄内式期～ 飛鳥時代遺構配置図	171
図165	NG93-37次などの調査地位位置図	143	図206	NG83-8次奈良時代水田平面図	172
図166	NG87-43次南壁断面図	144	図207	NG81-12次飛鳥～奈良時代水田平面図	173
図167	NG93-37次断面図	144	図208	NG86-23次奈良時代遺構配置図	174
図168	NG93-37次縄文時代遺構配置図	145	図209	NG89-47次奈良時代遺構配置図	174
図169	NG93-37次縄文時代出土遺物	146	図210	NG86-23次NR601および周辺の遺構	175
図170	NG93-37次古墳分布図	148	図211	NG81-12次平安～鎌倉時代遺構配置図	175
図171	NG93-37次出土遺物	149	図212	NG81-12次SX401平面図および出土遺物	176
図172	NG93-37次長原204号墳墳丘断面図	150	図213	NG89-47次平安～鎌倉時代遺構配置図	176
図173	NG87-43次室町時代遺構配置図	150	図214	NG89-47次出土平安～鎌倉時代遺物	177
図174	DD82-1次など調査地位位置図	152	図215	NG83-8次鎌倉時代遺構配置図	178
図175	DD82-1次断面図	153	図216	NG83-8・86-23次平安 ～鎌倉時代出土遺物	178
図176	NG91-16次東壁断面図	153	図217	NG86-23次鎌倉時代遺構配置図	179
図177	NG88-90次北壁断面図	154	図218	NG91-1次などの調査地位位置図	181
図178	DD82-1次調査地区割および遺構配置図	155	図219	NG91-1次南壁断面図	182
図179	DD82-1次出土遺物	156	図220	NG91-1次西壁断面図	182
図180	DD82-1次SK303出土遺物	157	図221	NG92-5次東壁断面図	183
図181	NG88-90次遺構配置図	157	図222	NG92-5次東壁断面図	183
図182	NG88-90次検出井戸実測図	158			
図183	NG88-90次出土遺物	159			

図223	NG91-1 次化石林および ナウマンゾウ足跡化石分布図	184	図262	NG93-56 次各遺構実測図	221
図224	NG92-5 次ナウマンゾウ足跡化石分布図	185	図263	NG93-56 次SE701・702 出土土遺物	222
図225	NG91-1 次縄文～弥生時代遺構配置図	187	図264	NG93-56 次各遺構出土土遺物	223
図226	NG92-5 次弥生時代遺構配置図	188	図265	NG87-36 次古墳時代SX701の位置と実測図	224
図227	NG91-1 次長原183～186号墳配置図	189	図266	NG93-56 次中世遺構配置図	225
図228	NG91-1 次出土土遺物	190	図267	NG85-18 次などの調査地位位置図	227
図229	NG92-5 次長原198号墳平面図	191	図268	NG87-81 次北区北壁中央断面図	228
図230	NG91-1 次古墳～飛鳥時代遺構配置図	193	図269	NG87-81 次古墳～飛鳥時代遺構配置図	228
図231	NG92-5・87-85・89-60 次 古墳～飛鳥時代遺構配置図	194	図270	NG85-18 次古墳～飛鳥時代遺構配置図	229
図232	NG92-5・87-85 次出土土遺物	195	図271	長吉長原東3丁目西部の古墳～飛鳥時代 遺構配置図	230
図233	NG91-1 次鎌倉～江戸時代遺構配置図	196	図272	NG85-18 次長原7A層出土土遺物	231
図234	NG92-5 次鎌倉～江戸時代遺構配置図	198	図273	NG85-18 次SD601 平面図	232
図235	NG91-1・92-5 次弥生時代遺構配置図	199	図274	NG87-56 次飛鳥～奈良時代遺構配置図	232
図236	NG93-1 次などの調査地位位置図	201	図275	NG87-56 次調査地周辺の平安時代遺構配置図	233
図237	NG93-1 次北壁断面図	202	図276	NG87-67 次などの調査地位位置図	235
図238	NG89-48 次長原113号石器分布図	203	図277	NG87-67 次断面模式図	237
図239	NG93-1 次石器分布図	204	図278	NG87-67 次SK801 実測図	237
図240	NG94-83 次長原13A・12A層石器分布図	204	図279	NG81-3 次遺構配置図	238
図241	NG89-48 次弥生時代遺構配置図	205	図280	NG81-3 次SK701 出土土遺物	238
図242	NG93-1 次弥生時代遺構配置図	206	図281	NG87-67 次弥生時代遺構配置図	238
図243	NG93-1 次出土弥生土器	206	図282	NG87-67 次SK801・SB701・SD701 出土土遺物	239
図244	NG93-1 次SK801 実測図	206	図283	NG87-67 次SX701 実測図	240
図245	NG89-48・93-1 次弥生時代遺構配置図	207	図284	NG87-67 次SX701 出土土遺物	240
図246	NG89-48 次古墳～奈良時代遺構配置図	208	図285	NG84-6 次5区SD708 平面図	241
図247	NG89-48・93-1・94-83 次 古墳～飛鳥時代出土土遺物	209	図286	NG84-6 次調査地全体図	241
図248	NG93-1 次古墳～江戸時代遺構配置図	210	図287	NG84-6 次SD708 出土土遺物(1)	242
図249	NG93-1 次SE701 実測図	211	図288	NG84-6 次SD708 出土土遺物(2)	243
図250	NG94-83 次古墳～飛鳥時代遺構配置図	211	図289	NG84-6 次SD707・SX703 出土土遺物	243
図251	NG92-53 次古代遺構配置図	212	図290	NG84-6 次3区平面図	243
図252	NG92-63 次中世遺構配置図	212	図291	NG84-6 次SX702 出土土遺物	244
図253	NG93-1 次調査地周辺の水田と道標	213	図292	NG84-6 次4区平面図	245
図254	NG93-1 次などの調査地位位置図	214	図293	NG84-6 次1区平面図	245
図255	NG86-3・64 次南西壁断面図	214	図294	NG84-6 次2区平面図	246
図256	NG93-56 次東西方向断面図	215	図295	NG84-6 次2区落込みおよびSD703・705 出土土遺物	246
図257	NG86-3・64 次旧石器平面・垂直分布図	216	図296	NG84-6 次SX703 上層土器層出土土遺物	247
図258	NG86-3・64 次縄文～弥生時代 遺構配置図	217	図297	NG84-6 次SX703 上層出土土器層	248
図259	NG87-36 次縄文～弥生時代遺構配置図	218	図298	NG87-67 次古墳時代遺構配置図	249
図260	NG93-56 次古墳～飛鳥時代遺構配置図 およびSB701 実測図	219	図299	NG87-67 次古墳時代土遺物	249
図261	NG93-56 次SD703 出土土遺物	220	図300	NG84-86 次などの調査地位位置図	251
			図301	NG83-65 次南壁断面図	252

図302	NG85-17次出土縄文土器	252	図319	NG95-77次出土遺物	267
図303	NG83-65次弥生時代遺構配置図	253	図320	NG84-4次各トレンチ配置図	268
図304	NG80-1次絵画土器拓影	253	図321	NG84-4次SD701・702実測図	268
図305	NG84-86次とNG16次調査地の関係	253	図322	NG84-4次SD701出土遺物	269
図306	NG84-86次東区遺構配置図	254	図323	NG84-4次SD702・包含層出土遺物	270
図307	NG84-86次西区遺構配置図	254	図324	NG88-6次遺構配置図	271
図308	NG84-86次SE701実測図	254	図325	NG88-6次出土遺物	271
図309	NG84-86次SE701-1a層出土土器	256	図326	長原古墳群の変遷図	274
図310	NG84-86次SE701-1a・1b層出土土器	259	図327	図328・329の位置	275
図311	NG84-86次SE701-2層出土土器	260	図328	長原古墳群分布図(北半)	276
図312	NG85-17次出土遺物	261	図329	長原古墳群分布図(南半)	277
図313	NG83-65次SK706	262	図330	長原古墳群1・2期	278
図314	NG80-1次奈良時代遺構配置図	262	図331	長原古墳群3・4期	279
図315	NG84-4次などの調査地位置図	263	図332	両耳付短頸壺の分類と 朝鮮半島・日本の類例	288
図316	NG95-77次北壁・東壁断面図	265	図333	日本出土の両耳付短頸壺の分布	289
図317	NG95-77次SD801・SK801平面図	267	図334	長原117号墳出土遺物	290
図318	NG95-77次SD801と周辺遺構との関係	267			

表 目 次

表1	長原遺跡の調査・研究略年表	3	表24	NG88-90次層序表	154
表2	長原遺跡の標準層序	5	表25	NG88-90次検出井戸一覧	158
表3	長原遺跡東北地区の基本層序	6・7	表26	NG83-8次層序表	170
表4	調査地一覧(1)	9	表27	NG91-1次層序表	182
表5	調査地一覧(2)	10	表28	NG92-5次層序表	183
表6	NG88-40次層序表	12	表29	NG93-1次層序表	202
表7	NG88-56次層序表	12	表30	NG86-3・64次層序表	214
表8	NG83-66次層序表	32	表31	NG93-56次層序表	215
表9	NG92-45次層序表	38	表32	NG87-81次層序表	228
表10	NG89-69次層序表	39	表33	NG83-65次層序表	252
表11	NG93-91次層序表	55	表34	NG95-77次層序表	264
表12	NG84-25次層序表	58	表35	長原古墳群主体部検出古墳一覧	275
表13	NG86-91次層序表	58	表36	長原古墳群一覧表(1)	280
表14	NG89-36次層序表	58	表37	長原古墳群一覧表(2)	281
表15	NG84-25次B区掘立柱建物一覧	76	表38	長原古墳群一覧表(3)	282
表16	NG93-80次層序表	91	表39	長原古墳群一覧表(4)	283
表17	NG89-5次層序表	120	表40	長原古墳群一覧表(5)	284
表18	NG89-25次層序表	120	表41	長原古墳群一覧表(6)	285
表19	NG92-2次層序表	131	表42	長原古墳群周辺の古墳	286
表20	NG87-43次層序表	144	表43	日本出土の両耳付短頸壺の搬入例	289
表21	NG93-37次層序表	144	表44	日本で生産されたと思われる両耳付短頸壺	
表22	DD82-1次層序表	153		A類および蓋	289
表23	NG91-16次層序表	153			

写 真 目 次

写真1	NG83-38次長原87号墳 鶏形埴輪(63)出土状況	21	写真16	NG89-5次出土鉄製ヤス	126
写真2	長原200号墳主体部鉄剣(鉄刀)出土状況	43	写真17	NG95-29次SE401	128
写真3	長原200号墳主体部土須恵器出土状況	43	写真18	NG90-13次壺(2)出土状況	134
写真4	NG87-70次SD701	45	写真19	NG93-37次現地説明会風景	143
写真5	NG89-69次SR6b04	45	写真20	NG93-37次長原199号墳周溝遺物出土状況	147
写真6	NG92-73次SR6a11	46	写真21	NG93-37次長原204号墳周溝断面	150
写真7	NG92-92次1区SR501埴輪出土状況	46	写真22	NG91-16次SE409検出状況	156
写真8	NG94-67次SP401遺物出土状況	53	写真23	NG92-5次ナウマンゾウ足跡化石	185
写真9	NG86-59次長原4B層準の耕作溝	57	写真24	NG93-1次水田上面弥生土器出土状況	207
写真10	NG84-25次長原113号墳出土馬形埴輪	62	写真25	NG89-48次SD703平底深鉢(4)出土状況	209
写真11	長原166号墳第1主体部出土鉄製品	68	写真26	NG87-36次SX701(南から)	224
写真12	長原166号墳第2主体部金環出土状況	70	写真27	NG95-77次前面のある礎	266
写真13	NG89-25次現地説明会風景	119	写真28	NG84-4次SD701木製品出土状況	268
写真14	NG89-25次SB705・707	122	写真29	長原117号墳出土両耳付短頸壺(1)	290
写真15	NG89-25次SD702出土馬歯	122	写真30	長原117号墳出土両耳付短頸壺(2)	290

第I章 長原遺跡の発掘調査

第1節 長原遺跡の概要

1) 概要

長原遺跡は大阪市平野区の南東部に位置する、旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である。行政的には南北約2.3km、東西約2.0kmの範囲が埋蔵文化財包蔵地に指定されており、便宜的に西南・南・西・中央・北・東南・東・東北の8地区に分けられている(図1)。1974年の地下鉄谷町線延長工事

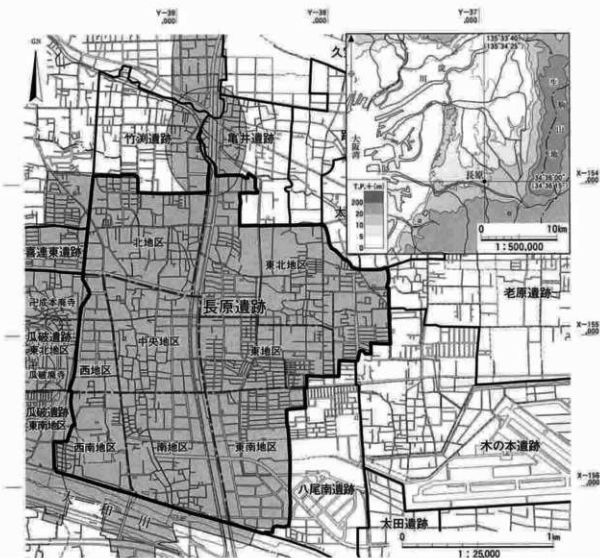


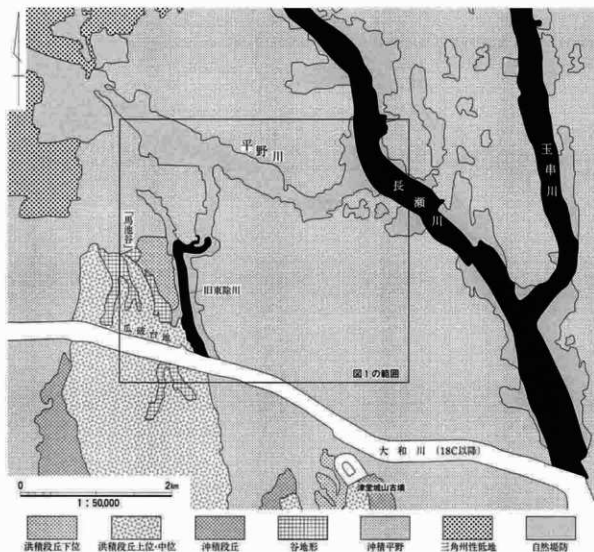
図1 長原遺跡の位置と地区割(右上の枠内は世界測地系の緯度・経度を示す)

の際に、初めて発掘調査が行われて以来[長原遺跡調査会1978]、区画整理事業や下水道工事、住宅建設などに伴って多くの調査が行われてきた。1979年以前はおもに長原遺跡調査会が調査を担当し、1979年以降は大阪市文化財協会が継続して調査を行っている。大阪市文化財協会では約30年の調査成果を基にこれまで計43冊の報告書を刊行している。

2) 遺跡の立地と地形環境

長原遺跡は生駒山地と上町台地に挟まれた河内平野の南側に位置し、瓜破台地から東に広がる沖積平野にまたがる。ここでは非常に多様な堆積環境が見られる。

瓜破台地を形成する低位段丘構成層は、西側では急な傾斜で沖積層に潜り込むが、東縁は南西から北東に向って緩やかに沖積平野に埋没する。よって、西南・南・西・中央の各地区では低位段丘面の埋没深度は比較的浅くなっている。これらの地域については表2のように標準層序が設定されている[趙哲済2001・2003]。



一方、長原道路の東・東北地区は沖積層が厚くなり、特に東北地区は平野川をはじめとする幾筋もの河川と自然堤防が見られ、沖積層は厚いところで6mに達する。これらの状況については長吉東部区画整理事業に伴う東北地区の調査の進展で、年々地層についての知見が蓄積し、表3のような東北地区の標準層序が確立されている[高橋工ほか2000など]。

なお、本書では層序を述べる場合、基本的に長原道路の標準層序を用いて報告し(表2)、東北地区については六反層序と一部並立して記述した(表3)。

3) 近年のおもな調査研究

約30年の調査の蓄積でさまざまな調査成果が挙げられた。主要なものを羅列したのが表1である。長原道路は旧石器時代以降の複合遺跡であるので、各時期の調査研究の蓄積は著しい。詳細な内容は各引用文献に譲るとして、以下で平安時代までの各時期の成果の概要を簡略に示したいと思う。

旧石器時代については東南地区である長吉川辺3丁目では長原13層準の石器ブロックが多数見つかり、[大阪市文化財協会1995・1997a]、NG90-62次調査では平安神宮火山灰(AT)以下の長原14層でナイフ形石器などが出土している[趙哲済1991など]。また、東北地区の調査の進展に伴い、NG97-12・52次調査では現地表下6.5mの阪手火山灰降灰層準で、後期旧石器時代の石器製作址が発見された[大阪市文化財協会2000b]。

縄文時代についてはNG8次や82-6次調査で晩期の居住跡や墓が見つかり、[大阪市文化財協会1982・1983a]、それ以外では遺物が包含層から得られる程度で、遺構とともにまとまって検出されることはきわめて稀であった。しかし、長吉六反2丁目のNG99-41次調査において押型文・捺糸文土器とそれらが伴う遺構が検出され、小規模ではあるものの縄文時代早期の居住跡が確認された[大阪市文化財協会2002d]。また、長吉六反1丁目のNG95-77次(本書第Ⅲ章第3節)やNG97-12次調査ではこの時期の縄文海進による生痕化石が発見されていて、周辺の生活環境を想定すること

表1 長原道路の調査・研究略年表

西暦	内容(括弧内は次数・文献)	西暦	内容(括弧内は次数・文献)
1974	地下鉄谷町線工事現場で長原道路発見	1991	長吉川辺3丁目では平安神宮火山灰(AT)より下からナイフ形石器などが出土(90-62: 趙哲済1991)
1974-76	地下鉄工事に伴う長原道路の調査 縄文時代晩期や弥生時代後期の堅穴住居、堀ノ本古墳などを発見(1: 調査会1978・大文協1982)	1992	平安時代の「長原里」木間出土(92-2: 本書第Ⅲ章第2節)
1979	大阪市文化財協会設立	1993	長原200号墳の調査(92-92: 本書第Ⅲ章第3節)
1980	長吉・瓜破土地区画整理事業に伴う調査が開始	1995	長吉長原東1丁目では5世紀の高床式建物出土・鳥足文タタキの土器多数出土(95-36: 櫻井久之1996a・b・1998) 長吉東部地区土地区画整理事業に伴う調査が開始
1982	長原一ヶ塚古墳発見(82-27: 大文協1990)	1997	長吉六反1丁目では旧石器ブロック発見(97-12・52: 大文協2000b)
1983	長吉川辺3丁目では弥生時代の水田を検出(82-41: 大文協1999a)	1999	長吉長原東1丁目では弥生-古墳時代の集落検出(99-15: 大文協2002a)
1985	長原七ノ坪古墳で横穴式石室を検出(85-23: 高井健司1986・1987a)	2000	長吉六反2丁目では縄文時代早期の押型文・捺糸文土器が多数出土(99-41: 大文協2002d)
1984-85	地下鉄出戸駅前再開発に伴う調査で古墳時代の集落と古墳を検出(84-25: 本書第Ⅲ章第1節)	2003	長吉長原東1丁目では粘土櫓をもつ長原213号墳発見(02-08: 大文協2005)
1987	高麗古墳群で船形埴輪などの形象埴輪発見(86-109・87-35: 大文協1991)		

ができる。

弥生時代については、東南地区の長吉川辺3丁目で中期前葉に廃絶する水田が検出されていて、その一部を本書第Ⅵ章第3節で報告する。また、東北地区でもNG97-52次[大阪市文化財協会2000b]やNG99-19次[大阪市文化財協会2002d]などで同時期の水田が検出されている。また、中期～後期の集落は遺跡東地区の自然堤防上で、中期の墓は東南地区や東地区の集落の周辺で、後期の墓は東南地区で見つかっている[高橋工2000・杉本厚典2003]。

古墳時代前期の遺構・遺物は、弥生時代に引き続き東南地区や東地区で検出されていて、本書第Ⅶ章第1節で報告する方形周溝墓(NG84-6次)や同第2節の庄内式期の井戸(NG84-86次)もそれに当る。近年、東地区のNG02-8・03-6次調査でこの時期の方形・円形周溝墓が検出された[大阪市文化財協会2005]。

古墳時代中期以降の長原遺跡全体の集落と生産域の問題については[高橋工1999]で論じられている。中期になるとまず長原東・東北地区一帯に集落が形成される。これらは「長原東ムラ」と呼ばれ、初期須恵器や韓式系土器が伴う。一方、西・南・中央地区に広がる「長原西ムラ」は、東ムラが衰退するころに登場し、後期前半まで存続する。古墳は前期末から後期前半まで造営されており、本書の第Ⅷ章第1節でその概要を示し、長原古墳群の集成を行った。

飛鳥時代では、長原西地区や東北地区で掘立柱建物群が見つかっている。西地区の建物群は「馬池谷」の西側の細長く延びる尾根状の高まりに立地し、全部で12棟の建物が検出されている[大阪市文化財協会2001b: pp.74-80]。さらに、北側の「馬池谷」では建物群と同じ時期の多量の牛馬骨が出土しており[久保和士ほか2000]、東北地区のNG96-66次調査では掘立柱の抜き取り穴から、ウシの四肢骨が並べられた状態で出土している[久保和士1999]。また、長原遺跡全域で水田や水路が見つかっていて、東除川もこの頃に開削されたと考えられている。

奈良時代も飛鳥時代と同様に全域で水田が広がっているが、同時期の建物は点々と分布しており、最近では東北地区で奈良～平安時代初頭の集落が見つかった[村元健一2003]。集落に伴う祭祀遺物も多く、NG01-14次調査では多量の牛馬骨とともに、人面墨面土器が多量に出土している[大阪市文化財協会2004b]。

奈良時代末に遺跡南・西・中央地区では東除川の決壊による洪水によって、水田が厚い砂礫層に埋まってしまうが、平安時代中頃以降には建物が散在ようになる。この時期の集落の動向については[佐藤隆1992]で整理されている。また、東北地区における近年の成果については[村元2003]でまとめられている。

(寺井)

表2 長原遺跡の標準層序([植2003]の表2を転載)

[illegible]

[illegible]

〔高橋工・杉本厚典・大庭重信・細川一徳2000〕を一部修正)

第2節 今回報告する調査一覧

本書では図3のようにこれまで用いられている長原遺跡の地区分けを採用するが、西南地区と西地区、東地区と東北地区は同一の章で報告することにした。

今回扱う調査総数は104件で、表4・5に一覧を示した。

(寺井)



図3 本書で報告する調査地位置図

表4 調査地一覧(1)

番号	調査地数	面積	調査地番	調査の経緯	担当者	調査期間	年一冊
1	NG88-40	115㎡	平野区長吉川道1丁目	明治製糖工率取り付け機械搬送工事	清水和明	1988年8月22日～9月20日	2-1
2	NG18	1,562㎡	同 長吉川道1丁目	長吉小学校分校校舎建設工事	京崎寛	1979年4月20日～10月26日	2-1
3	NG88-56	120㎡	同 長吉川道1丁目	長吉和歌氏による建設工事	田中清美	1988年10月31日～11月21日	2-1
4	NG89-12	110㎡	同 長吉川道2丁目	大阪市水道局による建設工事	岡村勝行	1989年5月10日～5月25日	2-1
5	NG83-38	935㎡	同 長吉川道2丁目	大阪市住宅供給公社住宅建設工事	水原克司	1983年10月4日～12月26日	2-1
6	NG84-28	6㎡	同 長吉川道2丁目	下水管敷設	田中清美・京崎寛	1984年8月7日～8月30日	2-2
7	NG84-46	24㎡	同 長吉川道2丁目	長坂下水	藤田幸夫	1984年10月9日	2-2
8	NG83-66	374㎡	同 長吉川道2丁目	川道合築建設工事	藤田幸夫	1984年2月6日～4月6日	2-2
9	NG21	27㎡	同 長吉川道3丁目	大阪市下水管搬送工法用発掘機建設工事	鈴木秀典	1979年8月1日～9月20日	2-2
10	NG83-17	148㎡	同 長吉川道3丁目	長吉川道3丁目配水管付設工事	黒田健一	1983年6月23日～8月18日	2-2
11	NG24	17㎡	同 長吉川道3丁目	大阪市下水管搬送工法用掘削機建設工事	森政・京崎寛	1979年11月12日～11月29日	2-2
12	NG89-69	128㎡	同 長吉長原4丁目	福岡秀吉・福岡氏による建設工事	京崎寛・佐藤隆	1989年12月4日～12月19日	2-3
13	NG92-92	283㎡	同 長吉長原4丁目	矢下氏・大野氏による建設工事	高橋工	1993年4月1日～4月9日	2-3
14	NG86-66	360㎡	同 長吉長原3～4丁目、 長吉川道2丁目	長吉長原地区内下水管搬送工事	富山直人	1986年11月6日 ～87年3月20日	2-3
15	NG83-11	530㎡	同 長吉長原3丁目	大阪市平野区長吉、八尾市若林地区電力供給用配電線新設工事	田中清美	1983年4月20日～5月21日	2-3
16	NG87-70	128㎡	同 長吉長原4丁目	タツミ開発(株)による共同住宅建設工事	京崎寛	1987年12月14日～12月25日	2-3
17	NG84-67	67㎡	同 長吉長原4丁目	樋口氏による建設工事	久保和士	1984年1月12日～1月25日	2-3
18	NG92-73	97㎡	同 長吉長原4丁目	樋口所氏による建設工事	小田本	1992年12月14日～12月25日	2-3
19	NG82-45	228㎡	同 長吉長原4丁目	南佐多郎氏による建設工事	佐藤隆	1982年10月11日～10月30日	2-3
20	NG86-13	270㎡	同 長吉長原	長坂下水(夜間)	山本重一・永島輝彦	1986年5月13日～9月30日	2-3
21	NG93-91	40㎡	同 長吉長原6丁目	津山氏による建設工事	松本百合子	1993年3月14日～3月24日	2-4
22	NG86-62	45㎡	同 長吉長原西3丁目、 長吉川道6丁目・8丁目	貨物搬下水管搬送工事	本原克司	1986年10月28日～10月31日	2-4
23	NG86-59	38㎡	同 長吉長原西1丁目	田中川崎ビル地下通廊建設工事	黒田健一	1986年10月18日～10月25日	3-1
24	NG86-91	390㎡	同 長吉長原1丁目	森本氏による事務所ビル建設工事	高井健司	1987年2月3日～3月31日	3-1
25	NG84-25	8,600㎡	同 長吉長原1丁目	田中駅前農園免伐工建設工事	伊藤純	1984年7月30日 ～85年5月31日	3-1
26	NG89-36	330㎡	同 長吉長原1丁目	宮本松枝氏による建設工事	藤井久之	1989年8月1日～9月22日	3-1
27	NG90-66	175㎡	同 長吉長原西1丁目	ウオズランニング(株)による建設工事	清水和明	1991年1月21日～2月12日	3-1
28	NG89-15	475㎡	同 長吉長原西2丁目	坂本長作・坂本氏による建設工事	本原克司・前田勝己	1989年5月25日～6月12日	3-2
29	NG91-70	335㎡	同 長吉長原西2丁目	長原合築建設工事	高橋工	1992年2月10日～3月23日	3-2
30	NG93-14	250㎡	同 長吉長原西2丁目	長原幸氏による建設工事	高橋工	1993年5月13日～6月2日	3-2
31	NG89-80	125㎡	同 長吉長原西2丁目	松原富三氏による建設工事	大庭重典	1989年1月19日～2月16日	3-2
32	NG93-26	120㎡	同 長吉長原西2丁目	福岡氏による建設工事	高橋工	1993年7月12日～7月31日	3-3
33	NG92-95	300㎡	同 長吉長原西2丁目	岡崎孝治による建設工事	岡村勝行	1992年3月13日～3月16日	3-3
34	NG20-20	15㎡	同 長吉長原3丁目	大阪市下水管搬送工法用掘削機建設工事	永島輝彦	1979年6月12日～6月20日	4-1
35	NG89-25	264㎡	同 長吉長原3丁目	東野松氏による建設工事	高橋工・佐藤隆	1989年6月26日～8月25日	4-1
36	NG95-29	50㎡	同 長吉長原3丁目	林氏による建設工事	伊藤純	1995年7月17日～7月25日	4-1
37	NG92-79	120㎡	同 長吉長原3丁目	松山正夫氏による建設工事	岡村勝行	1993年1月8日～1月20日	4-1
38	NG89-5	160㎡	同 長吉長原3丁目	東野松氏による建設工事	高橋工・上野勝子・ 鈴木直子	1989年4月17日～5月31日	4-1
39	NG87-2	150㎡	同 長吉長原1丁目他	下水管搬送工事	富山直人	1987年4月1日～5月26日	4-2
40	NG86-79	250㎡	同 長吉長原1丁目他	長吉長原地区内下水管搬送工事	富山直人	1986年12月15日 ～87年3月31日	4-2
41	NG83-10	23㎡	同 長吉長原2丁目	長原地区下水管搬送工事	松尾信雄・越智清	1983年4月23日～4月30日	4-2
42	NG83-12	19㎡	同 長吉長原2丁目	長原地区下水管搬送工事	越智清	1983年5月24日～6月1日	4-2
43	NG84-27	10㎡	同 長吉長原1丁目	長坂下水(都営開通)	鈴木秀典	1984年8月4日～8月7日	4-2
44	NG93-13	360㎡	同 長吉長原1丁目	(株)長谷川市街開発による建設工事	清水和明・上野勝子	1993年5月9日～8月1日	4-2
45	NG89-13	150㎡	同 長吉長原1丁目	森井和三氏による建設工事	高井健司	1989年5月15日～6月8日	4-2
46	NG92-2	99㎡	同 長吉長原1丁目	長吉総合病院による建設工事	清水和明	1992年4月6日～4月28日	4-2
47	NG83-36	64㎡	同 長吉長原1丁目	岡崎電力通線付替	本原克司	1983年9月7日～9月16日	4-2
48	NG95-2	55㎡	同 長吉長原1丁目	矢下雅彦氏による建設工事	高橋工	1995年4月5日～4月18日	4-2
49	NG87-43	17㎡	同 長吉長原5丁目	樋口氏による共同住宅建設工事	高井健司	1987年9月21日～9月29日	5-1
50	NG93-37	3,077㎡	同 長吉長原5丁目	大阪市市民局による平野区民センター等建設工事	藤田幸夫・藤井秀	1993年8月17日～12月8日	5-1
51	NG85-79	95㎡	同 長吉長原6丁目	ゼムラ石油(株)長吉町給油所改築工事	伊藤純	1985年3月12日～3月29日	5-1
52	DD82-1	110㎡	同 長吉長原4丁目	大阪市下水管搬送工事(出戸下水)	田中清美	1982年9月6日～10月8日	5-2
53	NG91-16	95㎡	同 長吉長原4丁目	長尾新氏による建設工事	田中清美	1991年5月22日～6月7日	5-2
54	NG88-90	240㎡	同 長吉長原2丁目	杉中衛太郎氏による建設工事	本原克司	1988年3月13日～3月31日	5-2
55	NG25	16㎡	同 長吉長原7丁目	大阪市下水管搬送工事(両道間)	京崎寛	1980年1月26日～2月12日	5-3
56	NG23	32㎡	同 長吉長原7丁目	大阪市下水管搬送工事(両道間)	森政	1979年9月17日～10月13日	5-3
57	NG84-34	51㎡	同 長吉長原3丁目	下水工事	藤田幸夫	1984年9月6日～10月18日	5-3
58	NG84-74	20㎡	同 長吉長原3丁目	下水工事	藤田幸夫	1985年1月25日	5-3

表5 調査地一覧(2)

番号	調査地	面積	調査地	調査の経緯	担当者	調査経緯	図-8
59	NG81-12	101㎡	同 長吉川道3丁目	ゼネラル石油(株)長原給油所新築工事	京崎隆	1982年3月11日～4月17日	6-1
60	NG86-23	91㎡	同 長吉川道3丁目	飛行場(南)幹線下水管渠築造工事	高井健二	1986年6月26日～7月25日	6-1
61	NG87-72	78㎡	同 長吉川道3丁目	飛行場(南)幹線下水管渠築造工事	高井健二	1987年12月18日	6-1
						～88年1月14日	
62	NG89-47	270㎡	同 長吉川道3丁目	安田光恵氏による建設工事	本原克司・前田勝己・鈴木京子	1989年9月21日～11月15日	6-1
63	NG83-8	594㎡	同 長吉川道3丁目	(仮称)サンシャイン新築工事	京崎隆	1983年4月18日～6月29日	6-1
64	NG91-1	2,346㎡	同 長吉川道3丁目	大阪市住居供給公社による建設工事	越智浩・平田洋司	1991年4月14日～11月16日	6-2
65	NG87-85	37㎡	同 長吉川道3丁目	関西電力(株)による建設工事	徳井久之	1987年2月8日～2月17日	6-2
66	NG89-60	33㎡	同 長吉川道3丁目	関西電力(株)による市道川道町線管渠新設工事	佐藤隆	1989年11月6日～11月15日	6-2
67	NG92-5	954㎡	同 長吉川道3丁目	関西電力(株)建設工事	岡村勝行・大成可乃	1992年4月15日～8月12日	6-2
68	NG92-53	26㎡	同 長吉川道3丁目	東高屋敷(株)による建設工事	岡村勝行	1992年10月28日～11月5日	6-3
69	NG92-27	15㎡	同 長吉川道3丁目	高津興産(有)による建設工事	田島嘉孝	1992年7月13日～7月16日	6-3
70	NG89-48	440㎡	同 長吉川道3丁目	(仮称)平野東正園建設工事	今津清子	1989年9月29日	6-3
						～90年1月19日	
71	NG99-1	1,158㎡	同 長吉川道3丁目	大阪市民生局による建設工事	田中清美	1993年4月1日～8月30日	6-3
72	NG92-63	88㎡	同 長吉川道3丁目	北岡実子氏による建設工事	岡村勝行	1992年11月19日～12月2日	6-3
73	NG94-83	43㎡	同 長吉川道3丁目	大倉建設(株)による建設工事	田中清美	1995年3月14日～3月30日	6-3
74	NG87-36	67㎡	同 長吉川道3丁目	飛行場(南)幹線下水管渠築造工事	徳井久之	1987年8月27日～10月1日	6-4
75	NG85-63	120㎡	同 長吉川道3丁目	大阪市土木局カルバート建設	本原克司・山崎栄・横田直佐子	1985年1月16日～2月15日	6-4
76	NG86-3・64	2,270㎡	同 長吉川道3丁目	大阪市住宅供給公社八尾南分譲住宅建設	高井健二	1986年4月16日～10月11日	6-4
77	NG93-56	650㎡	同 長吉川道3丁目	宮本憲一氏による共同住宅建設工事	京崎隆	1993年10月4日～11月26日	6-4
78	NG87-81	160㎡	同 長吉長原東3丁目	堀内清司氏による共同住宅建設	京崎隆	1987年2月22日～2月27日	6-6
79	NG85-18	450㎡	同 長吉長原東3丁目	大同ドリンコ倉庫事務所建設工事	富山直人	1985年6月17日～8月10日	6-6
80	NG87-56	200㎡	同 長吉長原東3丁目	松野マツシヨン建設	高井健二	1987年10月26日～12月4日	6-6
81	NG96-56	103㎡	同 長吉長原東2丁目	地下階段建設	黒田重一	1986年10月13日～10月20日	7-1
82	NG86-20	37㎡	同 長吉長原東2丁目	モビロ石油中環長吉給油所改修	徳井久之	1986年5月29日～6月5日	7-1
83	NG81-4	20㎡	同 長吉長原東2丁目	長吉長原地区下水管渠築造工事	鈴木典典	1981年8月26日～8月29日	7-1
84	NG81-6	18㎡	同 長吉長原東2丁目	長吉長原地区下水管渠築造工事	鈴木典典	1981年9月4日～9月7日	7-1
85	NG81-5	6㎡	同 長吉長原東1丁目	長吉長原地区下水管渠築造工事	鈴木典典	1981年6月31日～8月23日	7-1
86	NG81-3	20㎡	同 長吉長原東1丁目	長吉長原地区下水管渠築造工事	鈴木典典	1981年8月19日～8月25日	7-1
87	NG86-44	80㎡	同 長吉長原東2・3丁目、長吉長原東1・2丁目	長吉長原地区内下水管渠築造工事	本原克司・徳井久之	1986年8月22日～9月18日	7-1
88	NG86-35	190㎡	同 長吉長原東1丁目	長吉長原地区内下水管渠築造工事	本原克司・黒田重一・徳井久之・富山直人	1986年10月6日	7-1
						～87年3月31日	
89	NG87-8	64㎡	同 長吉長原東1・2丁目	下水管渠築造工事	富山直人・内田好昭	1987年4月1日～5月26日	7-1
90	NG84-6	131㎡	同 長吉長原東1丁目	長吉長原地区内下水管渠築造工事	京崎隆	1984年4月23日～	7-1
91	NG87-67	213㎡	同 長吉長原東1丁目	長吉中学校増築	徳井久之	1987年12月4日～12月26日	7-1
92	NG84-75	10㎡	同 長吉長原東2丁目	下水工事	黒田重一	1985年2月1日	7-1
93	NG83-65	30㎡	同 長吉出戸8丁目	関西電力管線新設工事	本原克司・徳井久之・田中清美・京崎隆・森政・横山洋・黒田重一・伊藤純	1984年2月6日～2月25日	7-2
94	NG84-86	55㎡	同 長吉出戸8丁目、長吉六反2丁目	関西電力管線新設工事	黒田重一	1985年2月26日～4月16日	7-2
95	NG85-17	85㎡	同 長吉出戸8丁目	大阪市土木局カルバート建設	高井健二	1985年6月17日～7月23日	7-2
96	NG80-1	30㎡	同 長吉出戸8丁目	大阪府下水管渠築造工事(神品1)	京崎隆	1980年4月21日～5月12日	7-2
97	NG84-9	120㎡	同 長吉出戸8丁目	下水工事	木久	1984年4月23日～7月6日	7-2
98	NG80-2	17㎡	同 長吉出戸8丁目31	八尾～富田林間同軸ケーブル方式工事(土木)	京崎隆	1980年6月2日～7月17日	7-2
99	NG84-18	153㎡	同 長吉出戸8丁目	下水工事	本原克司	1984年6月25日～8月7日	7-2
100	NG88-6	50㎡	同 長吉六反1丁目	(仮)ビーバーハウスによる建設工事	本原克司・加茂史	1988年4月19日～4月28日	7-3
101	NG95-77	100㎡	同 長吉六反1丁目	大阪府教育委員会によるクワッドバータ建設	寺田隆	1995年2月7日～3月17日	7-3
102	NG84-49	25㎡	同 長吉六反2丁目	地中送電線工事	横山洋	1984年10月24日～11月6日	7-3
103	NG84-4	213㎡	同 長吉六反9丁目	下水工事	田中清美	1984年4月23日～6月4日	7-3
104	NG93-77	60㎡	同 長吉六反5丁目	空港旅客路改修工事	京崎隆	1994年1月10日～1月27日	7-3

(註) 下水工事に伴うNG81-3・4・5・6次調査、NG84-4・5・6・18・34・46・74・75次調査、NG87-2・8次調査についてはそれぞれ一括して委託しているが、各調査地が離れているため、個別の調査として扱った。

第Ⅱ章 南・西南地区の調査

第1節 NG18次およびその周辺の調査

1) 調査地と周辺の概要

本節ではNG18・83-38・88-40・88-56・89-12次調査を報告する(図4)。当地は一ヶ塚古墳(長原85号墳)をはじめとして、古墳がたくさん見つかったことで知られている。

NG18次調査は長吉小学校分校(現川辺小学校)建設に伴って行われた第2期目の調査である。第1期目のNG13次調査では、手違いにより重機掘削で包含層がすべて除去され、十分な調査をすることができなかったが、埴輪が多く出土したことから古墳群の存在が予想された。第2期目のNG18次調査では、図8のような15個所のトレンチを工事の進捗状況にあわせて調査した。その結果、古墳9基(長原71～79号墳)、飛鳥～奈良時代の溝、平安時代の井戸といった遺構が検出された。

NG83-38次調査地は旧東除川の流路内に位置し、川廃絶後は溜池として利用されていたようである。池の埋土や川砂を除去すると、調査地の西側が包含層が良好に残っていることが明らかになった。精査の結果、須恵器大型甕を主体部にもつ造出し付方墳(長原87号墳)が検出され、馬形・人物形・鶏形などの形象埴輪が出土した。

NG88-40次調査地は川辺小学校の西側に当り、大和川に架かる明治橋架替え工事に伴う擁壁工事を行うに当たって、調査が実施された。長原6層までの地層や長原12B層は残っていたものの、存在が予想された古墳は検出されなかった。

NG88-56次調査地は川辺小学校の北東に位置する。試掘調査で古墳の墳丘が良好に残っていることが確認されたため、本調査に至った。調査の結果、須恵器の大甕を主体部とする方墳(長原180号墳)が検出された。

NG89-12次調査地は川辺北公園内に位置し、試掘調査でGL-2.7～2.9mに長原6Ai層と思われる地層が良好に残っていることが明らかになった。本調査では長原6Ai層準の水田を良好な状態で検出



図4 NG18次などの調査地位置図

することができた。

2) 調査の結果

i) 層序

表6 NG88-40次層序表

層序	長層序	岩相	層厚 (cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	1	赤褐色シルト質砂	10	作土				近・現代
2	1	暗灰色シルト質砂	10	作土				江戸時代
3	2	灰オリーブ色砂質シルト	10	作土				江戸時代
4	2	灰オリーブ色砂質シルト	10~15	作土				江戸時代
5	3	灰オリーブ色細粒砂混りシルト	10	作土				室町時代
6	3	灰オリーブ色細粒砂混りシルト	10	作土				室町時代
7	3	灰オリーブ色細粒砂混りシルト	<10	作土				室町時代
8	4B	灰褐色砂混りシルト	15	作土				鎌倉時代
9	4B	オリーブ褐色砂質シルト	10~15	作土				鎌倉時代
10	4B	にぶい褐色細粒砂混りシルト	10~15	作土				鎌倉時代
11	4B	明褐色細粒砂混りシルト	10	作土				鎌倉時代
12	4B	褐色砂質シルト	20	作土				鎌倉時代
13	5A	灰白色粗粒砂	20	未成				奈良時代
14	5B	灰白色シルト混り粗粒砂	20~30	未成				奈良時代
15	6Ai	明褐色砂質粘土	10	作土				室町時代
16	12B	灰色砂質粘土	<10	未成				室町時代
17	12B	灰~暗灰色粘土	<10	未成				室町時代
18	12B	灰白色粘土質シルト	20					室町時代
19	12B	灰色シルト	10	未成				室町時代
20	13A	緑灰色砂質シルト	20					室町時代
21	13B	緑灰色粘土	30					室町時代
22	13B	緑灰色シルト質粘土	>30					室町時代
23	14	明緑灰色粘土質シルト	20					室町時代
24	14	黄褐色シルト混り粗粒砂	20					室町時代
25	14	暗赤褐色粗粒砂~礫	>20					室町時代

表7 NG88-56次層序表

層序	長層序	岩相	層厚 (cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	1	黒灰色砂礫混りシルト	20	作土				近・現代
2	2	褐色シルト混り砂礫	30~50	未成				江戸時代
3	2	灰黄褐色シルト質細粒砂	30	未成				江戸時代
4	4A	灰黄褐色砂礫	20	未成				室町時代
5	4B	灰褐色砂礫混りシルト	20	作土				室町時代
6	5	灰~灰褐色砂礫	40	未成				奈良時代
7	6Ai	灰褐色砂礫混りシルト	20~30	作土				室町時代
8	7	黒褐色~赤褐色粘土質シルト	10					室町時代
9	13	灰~暗灰色粘土質シルト	>20					室町時代

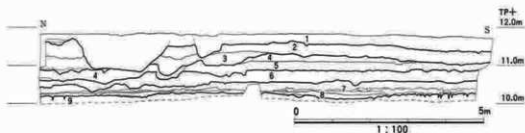


図5 NG88-56次東壁断面図

NG88-40次調査地では長原13層や14層上面が南側に低くなることから、南側で長原6層や12B層が残っていた(図6・表6)。長原12B層に該当すると思われる第16・17・19層では火山灰が検出された。

NG88-56次調査では古墳の墳丘や周溝に係わる埋土以外はすべて重機で除去したため、層序は断面観察のみによる(図5・表7)。長原5層は厚さ40cmあまりで、それによって埋められる長原6A層上面には畦畔が残っていた。

ii) 遺構と遺物

a. 縄文時代の遺構と遺物

NG88-40次調査地において、長原12B層内で流路NR1201・1202、土壌SK1201が検出された(図6)。

東西方向の流路NR1201は灰白色砂の水成層で埋まっていた。底付近でサヌカイト製のスクレイパー1が出土した。

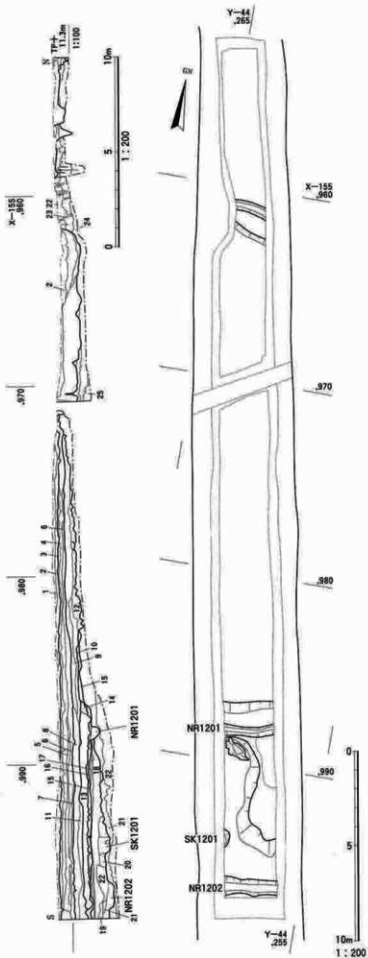
1は長さ10.9cm、幅7.5cm、厚さ2.45cmの方形に近い形状である(図7)。自然面を残す大型の剥片を利用し、打点側を背・腹面の両方から調整して、刃部を作りだしている。

b. 古墳時代の遺構と遺物

NG18次調査

本調査では古墳が9基(長原71~79号墳)検出された(図8・図版1上)。いずれも上部が削平されており、主体部が残っているものはなかった。

長原71号墳：A区で検出した方墳で、長原72号墳と周溝を共有してい



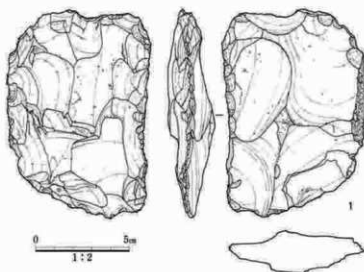


図7 NG88-40次出土スケレイバー

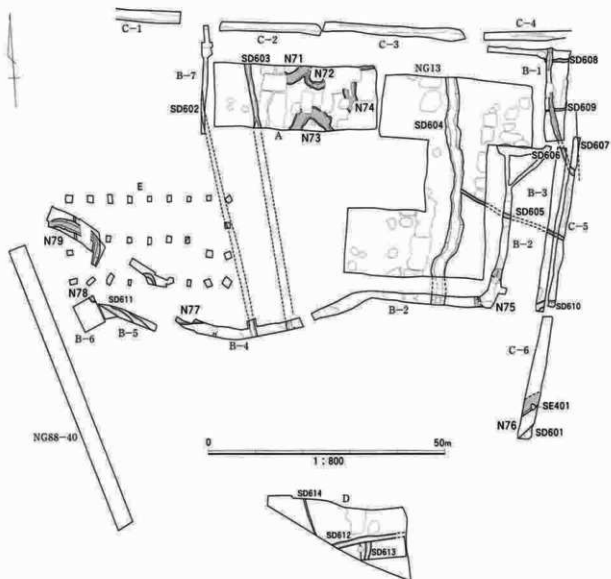


図8 NG18次調査地における古墳と古代の溝の分布

るが、切合い関係は確認することができなかった。北側の調査地外まで広がることから、規模は不明である。4方向にスカシのある須恵器高杯の脚部2が出土した(図9)。

長原72号墳：東西3m、南北3m以上の墳丘をもつ方墳である。周溝からタテハケが施される円筒埴輪の口縁部3が出土した(図9)。

長原73号墳：東西5m以上の墳丘をもつ方墳である。周溝から須恵器杯身6・7、杯蓋4・5、把手付碗8、壺9・10が出土した(図9)。4～8はTK208型式に該当すると思われる。9は体部に凹線と櫛描波状文が巡る。

長原74号墳：東西4m以上、南北7m以上の墳丘をもつ方墳である。周溝は深さ0.10～0.15mあり、黑色粘土が堆積していた。図版1中のように周溝から須恵器杯蓋11・12、高杯14～17、同蓋13、甕18、壺19が出土した(図9)。14・16は有蓋高杯で、15・16の脚部にはスカシ孔はない。これらの

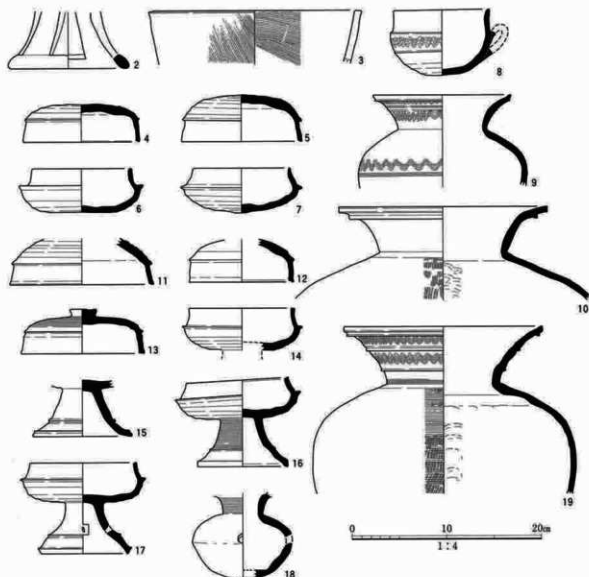


図9 NG18次長原71～74号墳出土遺物
71号墳(2)、72号墳(3)、73号墳(4～10)、74号墳(11～19)

須恵器はTK208型式に該当すると思われる。

長原75号墳：B-2区の南東隅で検出した古墳で、墳丘の一边が6m以上ある方墳と思われる。高まりが残っていたのみで、周溝は残っておらず、出土遺物もなかった。

長原76号墳：C-6区の南端で検出した。墳丘の残りが比較的良かったことから調査終了後、砂で埋め戻して保存されていたが、1994年度の区画整理事業で道路予定地となったため再調査(NG94-39次)された[大阪市文化財協会1999e：pp.85-92]。それによると、墳丘の盛土は約0.2m残存し、周溝幅は約1.5m、深さ0.1mである(図10)。

出土した円筒埴輪・朝顔形埴輪は図11のようになる。すべて窯室焼成で、調整はタテハケのみのものと断続的(B種)ヨコハケ・連続的(C種)ヨコハケがある。長原古墳群の2期に位置づけられる。詳細は前掲の文献を参照されたい。なお、NG94-39次調査では周溝から平行タキが施された韓式系軟質土器も出土している。

長原77号墳：B-4区の西端で周溝の一部が検出された。北側のE区の調査では墳丘が検出されていないことから、南側にあると思われる。周溝は深さ0.3mあまりあり、須恵器甕39や埴輪が出土した。埴輪には円筒40・朝顔形41・鳥形42・草摺形43の各種がある(図12)。40は二次調整にヨコハケが用いられ、残存部に線刻が見られる。42は頭部が欠損し、残存高は32cmである。羽は貼付けと線刻によって表現されている。後述するNG88-40次の51の鳥形埴輪や長原87号墳の63の鶏形埴輪に施されているような脚の表現は見られない。

長原78号墳：B-6区の北端で周溝の一部が検出された。この残存部が古墳のどの位置になるのかは不明である。

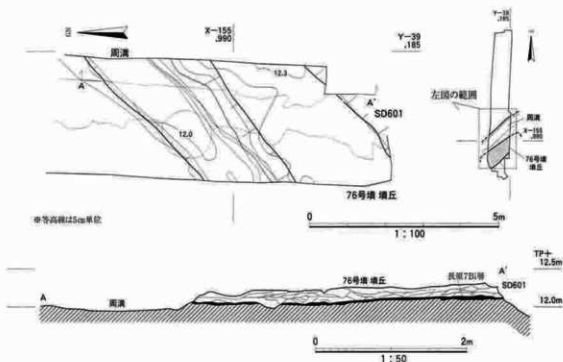


図10 NG18次長原76号墳実測図([大阪市文化財協会1999e]の図55を再トレース)

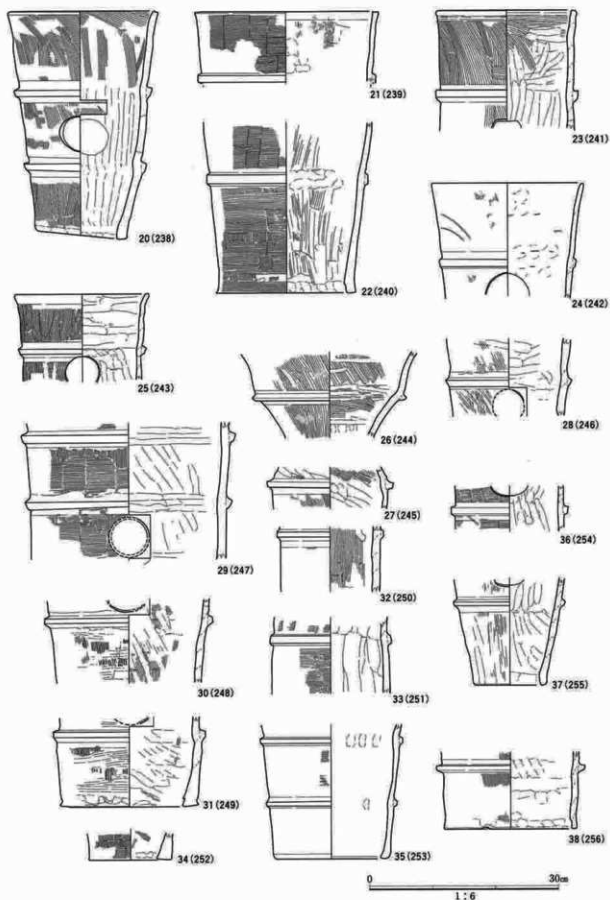


図11 NG18次長原76号墳出土土埴輪(〔大阪市文化財協会1999e〕の図56を再トレース。括弧内は旧番号)

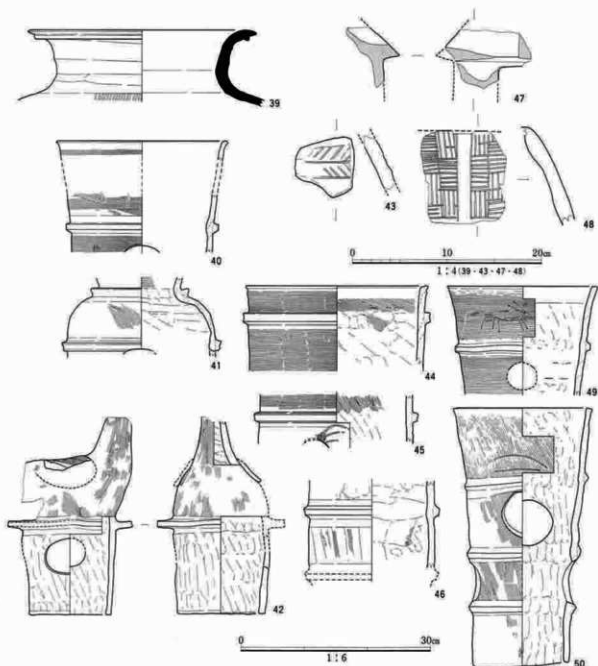


図12 NG18次長原77・79号墳およびC-5区出土遺物
77号墳(39~43)、79号墳(44~48)、C-5区(49・50)

長原79号墳：E区の西で検出された一辺9mの方墳である。周溝は幅1.5~2.0m、深さ0.3mあり、埋土の上層は灰白色シルト、下層は黒褐色粘土であった。周溝から円筒埴輪44~46や家形埴輪47・48が出土した(図12)。44・45はB種ヨコハケが施されている。47にはベンガラが残り、48には網代の表現が見られる。

このほか遊離資料であるが、円筒埴輪49・50を報告する(図12)。49は連続的なヨコハケが施され、その後にシカと思われる動物の線刻画が描かれている。50は完形に復元でき、最上段には線刻が施される。

NG88-40次調査

前述の長原78・79号墳に近接していることから、古墳が存在することが予想されたが、調査地内では検出されなかった。埴輪片が中・近世の地層に多く含まれることから、おそらくこの時期の開発で破壊されたものと思われる。本調査では、遊離資料であるが図13のような鳥形埴輪51が良好な状況で出土した。

51は現存高30.0cm、前後幅29.5cm、左右幅21.8cm、円筒部高11.5cm、同底部径16.1cmある(図

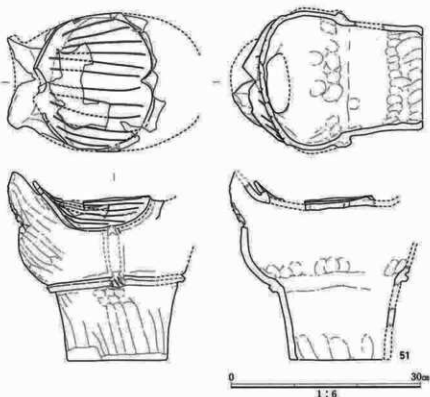


図13 NG88-40次出土鳥形埴輪

13)。頭部を欠くため、鶏か水鳥かは判断できない。全体は明橙色を呈し、窖窯焼成である。鳥の形態はやや扁平な球状の胴部に尾、羽、脚を貼付けている。胴部は粘土を積み上げ、最後に天頂部を頭から尾にかけて少しづつ充填している。尾は馬蹄形に突出し、胴部に接する内側に長径10.2cmの孔を開けている。羽の先端は三角形に突出している。表面は頭部から尾部へ左右6本ずつの線刻を施し、羽毛を表現している。脚は両側の羽の下端から粘土紐を貼りつけ、タガの上で線刻し、爪を表現している。稚拙な表現のため、ミズカキの有無は不明である。調整は表・裏面とも全面ナデで、内面では円筒下部・鳥の胴体下部で粗く、指頭圧痕が明瞭に残っている。

NG83-38次調査

長原87号墳：造出しを有する方墳である(図14・図版2上)。墳丘は北辺の長さ12.0m、高さ1.0mあり、造出しは幅3.0m、長さ2.0m、高さ0.65mある。墳丘は河道で大きく破壊されていたものの、造出し部分には埴輪の列が残っており(図版2中)、西辺部分では須恵器大甕を転用した主体部が検出された(図15・図版2下)。

墳丘は長原7Bi層の上に、黄灰～灰色粘土や黒色粘土質シルトを墳丘中央部から外側に向って盛土されていた。造出しは長原7Bi層が除去された部分に、墳丘本体が築造された後に盛土されていた。

主体部の掘形は東西0.90m、南北0.75mの楕円形を呈し、深さは0.45mある。棺身には須恵器大甕57を用い、口縁部を東に向けて埋置してあった。口縁部には土師器鍋56を底部から挿入して、周囲の隙間に円筒埴輪の破片を詰め込んでから、灰白色粘土で目貼りをして閉塞していた。棺内には有機物を含む黒色粘土が堆積していたが、人骨や副葬品は見つからなかった。



写真1 NG83-38次長原87号墳鶏形埴輪(63)出土状況

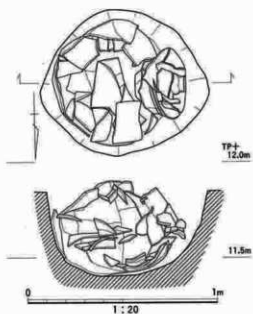


図15 NG83-38次長原87号墳主体部実測図

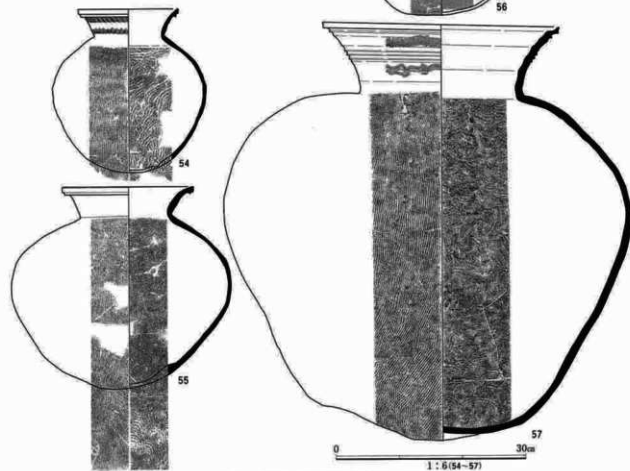
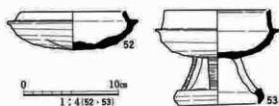


図16 NG83-38次長原87号墳出土遺物

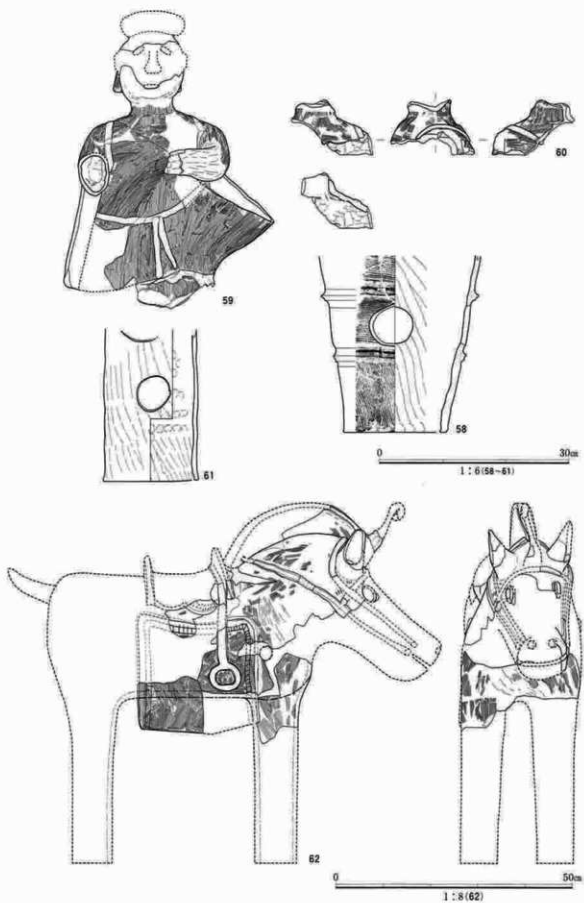


图17 NG83-38次長原87号墳出土埴輪(1)

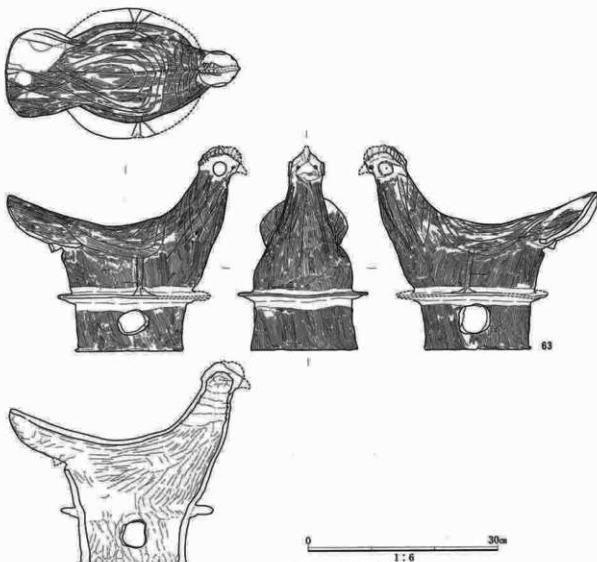


図18 NG83-38次長原87号墳出土埴輪(2)

56は棺の蓋に用いられていた土師器鍋である(図16)。内外面ともハケ調整で仕上げられる。須恵器は主体部に用いられた大甕57に加え、杯身52、高杯53、甕54・55がある(図16)。52は周溝から出土した。底部が丸いことからMT15型式と判断でき、ほかの遺物より新しい。53は造出しで出土した。脚部に3方向の方形スカシが施される。TK23型式に属する。54・55は造出しの埴輪列の中で埋置されていたものである。54の内面には車輪文当て具痕が残っている。57は器高65cm、口径37cm、最大径60cmある。

また、埴輪には円筒・蓋・馬形・人物形・鶏形・草摺形があり、円筒・馬形・人物形・鶏形埴輪を図示した(図17・18)。58は円筒埴輪で、最下段はタテハケのみであるが、それより上はヨコハケが施される。59・60は人物形埴輪である。59は上半身のみが残存している巫女形埴輪で、[田中清美1998]で紹介されている。「烏田髻」のような髪形をし、丸顔である。意須比^{イヌヒ}という衣を右肩から垂らし、櫛^{カミ}をかけ、腰紐で結び留めている。左腕を前方にのばし、何かを捧げもっているかのようである。60は肩の部分で、櫛が斜めに架かった表現がされている。59と同様に巫女形埴輪の一部と思われる。61は形象埴輪の脚台で、出土状況から59に伴うものと推定される。器表はナデで仕上げられる。

円形のスカシが3箇所に残っていて、うち2つは対の位置にある。62は馬形埴輪で、顔の部分と脚部、胴部下半が欠損する。いわゆる飾り馬であり、鞍や障泥・輪鍔・面繫・手柄の表現がある。63は鶏形埴輪で、雄鶏をほぼ実大で作っている。粘土で全体を成形した後、鶏冠や目は粘土を貼りつけて、羽・脚はヘラ状の工具による線刻で表現されている。鶏の下には鋤をはさんで短い脚台が作られている。

(寺井)

NG88-56次調査

長原180号墳：調査箇所のはほぼ中央部で検出された。古墳の東部については調査範囲外であるため明らかでない。墳丘は後世の水田耕作によって階段状に抉り取られていたが、旧状を比較的良く留めていた。墳丘は基底部で、東西5.8m、南北6.0mあり、ほぼ正方形を呈する(図19左・図版3上)。残存する墳丘は高さが周溝の底から約0.6mあり、古墳時代の旧地表(長原7B層)をベースに、灰・褐

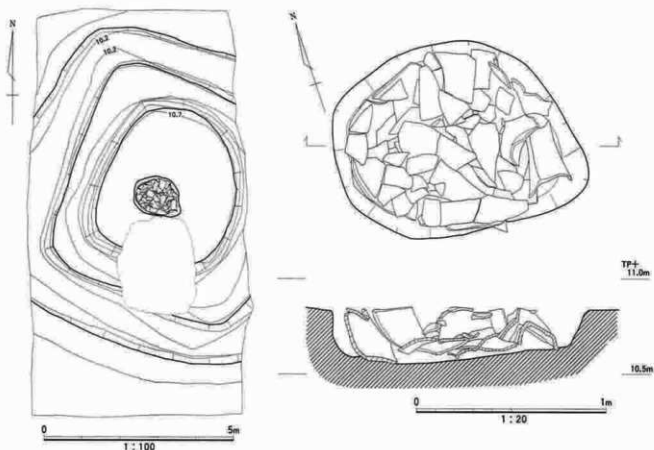


図19 NG88-56次長原180号墳平面図および主体部実測図

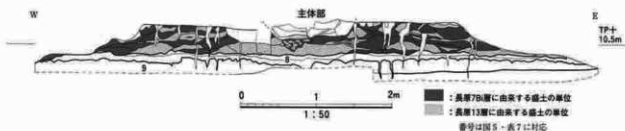


図20 NG88-56次長原180号墳墳丘断面図

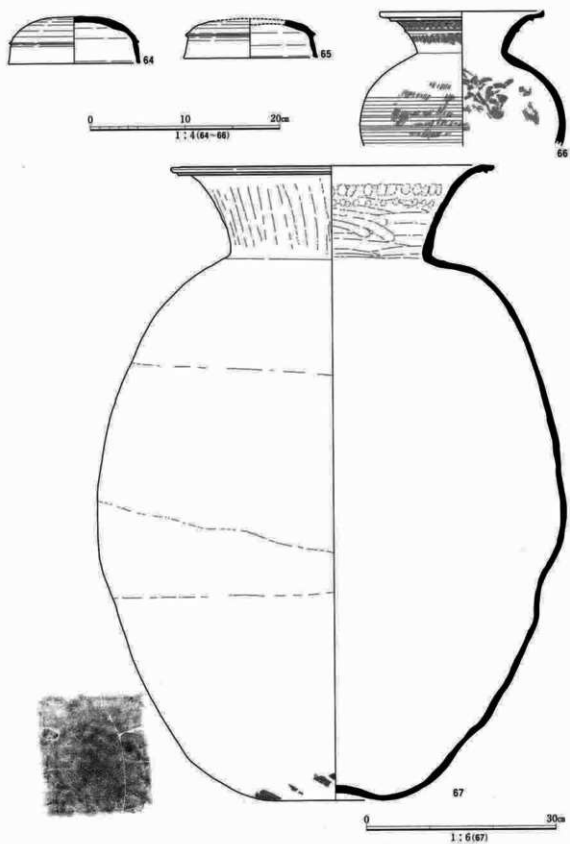


图21 NG88-56次長原180号墳出土遺物

灰色粘土質シルト(長原13層)および黒色粘土質シルト(長原7Bi層)を外側から中央に向かって盛り上げて築成している(図20)。

周溝は各辺とも中央部が深く、コーナーで浅くなっており、その幅は墳丘の北西部で0.9m、南西部は1.4mを測る。東周溝については調査範囲外に広がるため明らかでないが、1m前後であろう。周溝内には黒色粘土・粘質シルトが堆積しており、北周溝の東部でON46段階とみられる須恵器広口壺66が出土した(図21)。体部の下半部を欠損しているが、口径約17cmあり、頸部には2条の突帯と柳指波状文が巡る。体部の外面は細筋の平行タタキの後、粗いカキメ調整を施している。内面には細い同心円状の当て具の圧痕が残る。

主体部は須恵器大型甕67を転用した土器棺で、墳丘のほぼ中央部に位置しており、一部を長原4B層準の水田で攪乱されていたが、残存状況は比較的良好であった(図19右・図版3下)。棺の主軸方向はほぼ東西であり、東に口縁部が向く。土器棺内には人骨や装身具などの副葬品は認められなかったが、棺内には外部から転落した状態で、須恵器杯蓋64・65が出土した(図21)。

大型甕67の口径は約48cm、器高約100cmあり、最大径は体部の中程にあるが、全体に焼け歪んでいる。体部は長胴で、底部の中央は大きく凹んでおり、細かい斜格子タタキが残る。口縁端部の直下に1条の突帯があり、口頸部の内外面の調整はユビオサエおよびナデである。TK216型式に属するものと思われる。

棺内から出土した須恵器杯蓋の口径は前者が13.2cm、後者が13.8cmあり、天井部は前者が後者より丸い。ともに天井部の2/3以上をヘラケズリ調整しており、TK208型式に属するものであろう。

以上から本古墳は長原2期に属する。

(田中)

c. 飛鳥～奈良時代の遺構

NG18次調査(図8)

SD601・607:SD601はC-6区で検出されたものである。NG94-39次で再調査され、その内容がSD601としてすでに報告されている[大阪市文化財協会1999e:pp.85-92]。長原76号墳の墳丘を切り、少なくとも幅2.5m以上、深さ1.0m以上ある。埋土は長原6Aii層に相当する砂礫層で埋まっていたことから、掘削は長原6Bi層準と思われる。この溝はNG94-47次調査のSD601に続き[大阪市文化財協会1999e:pp.93-96]、C-5区のSD607に続くと思われる。

SD602・603:SD602は幅0.6m、深さ0.7m、SD603は幅1.0m、深さ0.8mの溝である(図版1下)。これらは北からやや西に振る方向に平行に延びる。

SD604・605:SD604は幅3.0m、深さ1.0mあり、ほぼ南北方向に延びる。SD605は東側でSD604に接続する細い溝である。

SD606～608:SD606は幅0.65m、深さ0.7mの南北方向に延びる。SD608・609はいずれも東西方向に延びる溝で、SD606に切られていることから、先行して存在したことがわかる。

このほかSD610～614も検出範囲が狭く、詳細はわからなかったが、古代の溝である。

以上のSD601～614は長原6Bi層準で機能していたと思われ、近隣ではこれらと一連の溝も見つかっている(図22)。

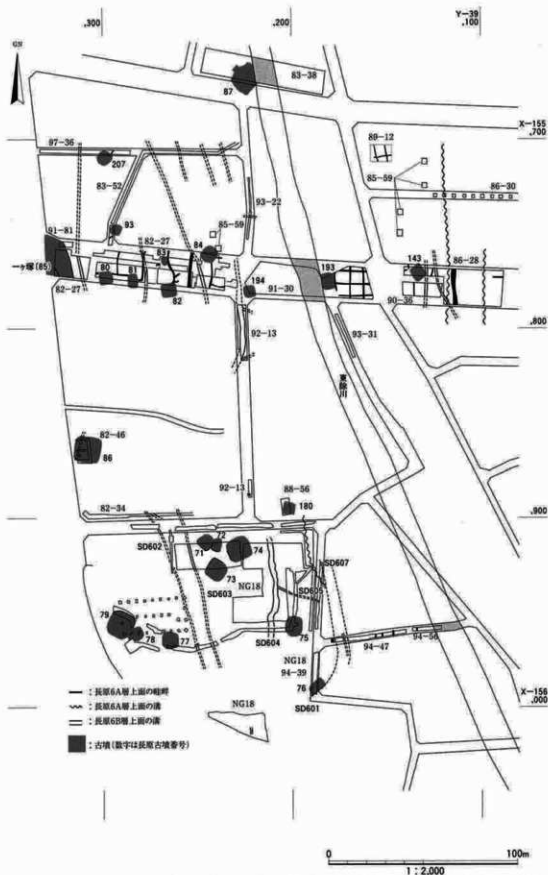


図22 長吉川辺1丁目一帯の古墳と飛鳥～奈良時代の溝の分布 ([大阪市文化財協会1999e] の図63に加筆)

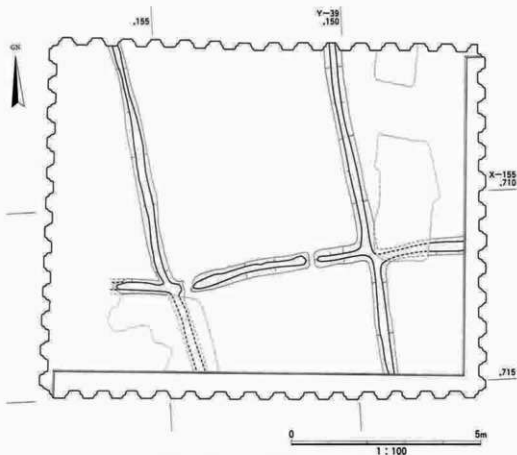


図23 NG89-12次奈良時代水田平面図

NG89-12次調査

長原6A1層上面で6筆分の水田が検出された(図23・図版4上)。1筆を完全に検出したものではなく、正確な規模はわからないが、調査区北中央で検出されたものは東西5.5m、南北6.5m以上ある。畦畔は食い違って交わり、水口は中央東西のものに2箇所で見られた。水田面には顕著な高低差は認められないが、周辺の調査成果から、基本的にはこの水田は南と東の方向に低くなっているものと思われる。また、断面の観察で、作土中に下層の偽礫が多く混じることや、畦畔が脆弱な状態であったことが窺えたことから、この水田があまり耕起されないうちに砂礫層によって埋没したのであろう。

d. 平安時代の遺構と遺物

NG18次調査地のC-6区で井戸SE401が検出された(図24)。この井戸はNG94-39次で再調査され、その報告の際にすでにその内容が明らかにされているが[大阪市文化財協会1999e: pp.85-92]、ここではそれに基づいて記述を行った。

この井戸は素掘りで、直径は1.05~1.25m、深さ1.5mあり、深さ0.7mよりも下位の部分では直径が小さく、2段掘りになっている。よって、曲物などの井戸側が存在した可能性もある。埋土の上層は灰黄褐色砂礫とシルトの互層で、下層は暗褐色粘土層で、一部に水成の砂礫層が介在する。

出土遺物には土師器皿68-74、寛75、羽釜76、黒色土器碗77・78、瓦器碗79・80、白磁碗81に加え、須恵器甕の体部を再利用した風字硯82がある(図25)。68-73は小皿で、口径は9~10cm程度で

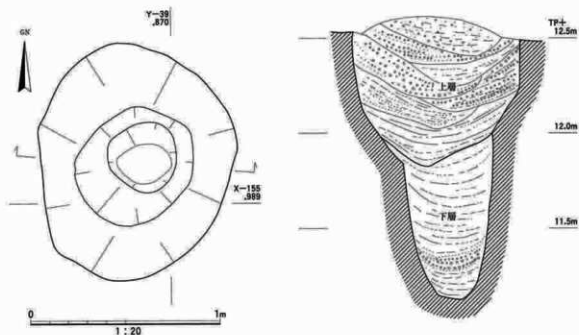


図24 NG18次SE401実測図

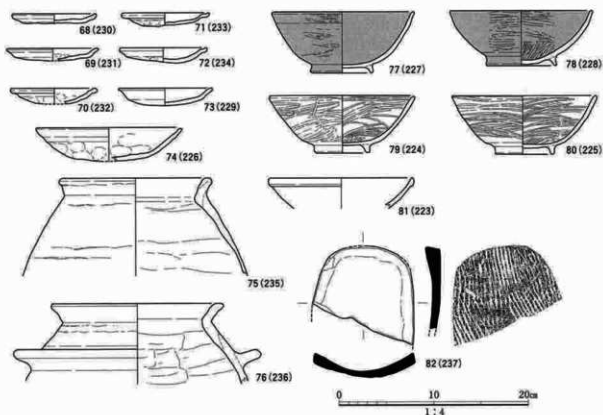


図25 NG18次SE401出土遺物(括弧内は[大阪市文化財協会1999e]の番号)

ある。69・73は口縁部を外反させ、68は軽く内側につまむ。70～72は「ㄇ」字状口縁をもつ。74は中型の皿で、口縁部外面に2段のヨコナデが施される。75は口縁部が短く分厚いが、体部は薄く作られている。76は口縁端部に面をもち、鈿は分厚く、上向きに作られている。外面に粘土紐の接合痕が見られ、体部の内面はヘラケズリで仕上げられる。

77は器表の磨減が進んでいるが、ていねいなヘラミガキが施された痕跡が残る。78は77よりも若干器高が低く、瓦器に近い焼成である。内外面にヘラミガキが密に施される。79・80は高台が高く、内外面のヘラミガキがていねいに施され、80は底部外面にもヘラミガキが施される。81は玉縁の口縁を有する。82は側面に硯を製作する際の摩痕があり、内面に墨の痕跡が残る。

以上の遺物は平安時代Ⅳ期古段階のものであろう。

3) まとめ

本節では古墳11基をはじめ、飛鳥時代の溝、平安時代の井戸を報告した。

長原古墳群では後世の削平のため、主体部が残っている古墳はほとんどないが、本節では大型の須恵器甕を主体部にする長原87・180号墳を報告することができた。現段階では長原古墳群で須恵器甕を主体部にしたのはこの2基だけである。また、長原87号墳の造出しでは埴輪列が良好に残っていて、その中に須恵器甕が2体横向きにして据えられていた。埴輪列の中に須恵器を据えた例は長原131号墳でも確認されているが[大阪市文化財協会1993a: pp.158-178]、これがどういった意味があるのか今後検討する必要がある。

飛鳥時代後半(長原6B層準)になると古墳を避けるようにして水路が掘られ、墳丘に接続する畦畔が延びる。後述する長吉川辺2丁目(同章第2節)や長吉長原4丁目(同章第3節)でも同様に古墳を避けて水田開発が進められている。ただ、長原76号墳はこの段階の溝SD601に一部を破壊されていることから、古墳が築造されて200年あまりで墳丘の破壊が始まっていたことになる。

(寺井)

第2節 NG83-66次およびその周辺の調査

1) 調査地と周辺の概要

本節ではNG21・24・83-17・83-66・84-28・84-46次調査の報告を行う(図26)。この中で前3者の調査は全体もしくは一部が長吉川辺3丁目にあり、厳密には本報告の東南地区に属するが、本節の核となるNG83-66次調査地に近接するためにここで報告することにした。

調査地の近隣では古墳や奈良時代の水田が見つかることが多い。NG83-66次調査地の北側で行われた区画整理事業の調査(NG81-2次)では方墳15基や奈良時代の水田、平安時代の火葬遺構などが見つかっている[大阪市文化財協会1989]。また、NG88-19次調査では長原179号墳が検出され、木棺直葬の主体部から鉄刀が出土した[岡村勝行・清水和明1990]。

NG21・24次調査は下水工事に伴う調査である。いずれも20㎡前後の小さな調査であったが、NG21次調査では奈良時代の水田が、NG24次調査では平安時代の掘立柱建物、奈良時代の水田に加え、長原39号墳が検出された。

NG83-17次調査は配水管設置のために、中央環状線を横断するトレンチが設定された。道路と交わる部分は工事立会で済ませ、歩道部分は本調査を行った。その結果西側のトレンチでは長原44号墳の一部が検出された。

NG83-66次調査は川辺会館建設に先立って行われた。調査の結果、平安時代の掘立柱建物や奈良時代の水田が検出された。

NG84-28・46次調査は下水管敷設に伴う調査である。46次調査では2箇所の堅坑が掘削され、堅坑のひとつで長原120号墳の周溝が検出された。

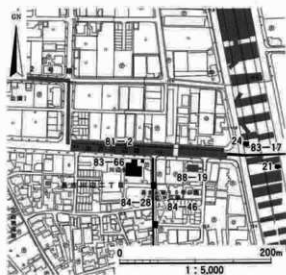


図26 NG83-66次などの調査地位置図

2) 調査の結果

i) 層序

図27はNG83-66次調査の南壁断面図で、表8はその観察表である。第0～4a層は重機で掘削したため、断面のみでの観察である。第4c層は第4b層よりも砂礫が優勢で、基底面で平安時代の掘立柱建物、溝を検出した。第8層は長原13A層に相当すると思われる。当調査地では出土遺物はないが、北側のNG81-2次調査では当層から旧石器時代のサヌカイトフレイクが出土した[大阪市文化財協会1989: p.27]。

表8 NG83-66次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(m)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
0	0	現代盛土	30					近・現代
1	1	現代作土	20					
2	2	緑灰色砂礫混り中～細粒砂	15					江戸時代
3	3	緑灰色砂礫	15	水底				室町時代
4a	4A	灰黄色砂礫	40	水底				
4b	4B	灰褐色砂礫混りシルト	10	作土		↓耕作溝		鎌倉時代
4c	4C	灰褐色細礫混りシルト～細礫	15	作土		▼SD401・SA402～404		平安時代
5a	5A	黄灰色微粒砂	50	水底				奈良時代
5b	5B	緑灰色細礫混りシルト	10	水底				
6a	6A1	灰色粘土	15	作土		→水田畦畔		
7	7	黒灰色粘土質シルト	10					奈良時代
8	13A	灰白色粘土質シルト						旧石器時代

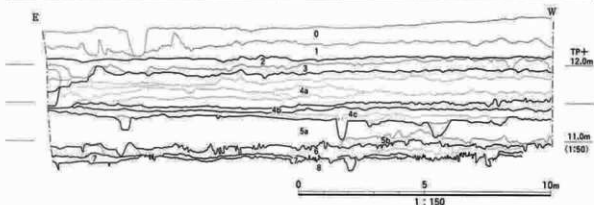


図27 NG83-66次南壁断面図

ii) 遺構と遺物

a. 古墳時代の遺構

NG24次調査

長原39号墳：古墳の南辺の一部が検出された(図28左)。上位の長原6A1層準の水田に削られたため、残存している盛土の厚さは0.1m以下である。周溝にはオリブ黒色粘土が堆積し、ヨコハケを施した竈窯焼成の埴輪片が数点出土した。

当調査地に北接して大阪文化財センターが調査した62トレンチがあり、古墳の続きが検出されてい

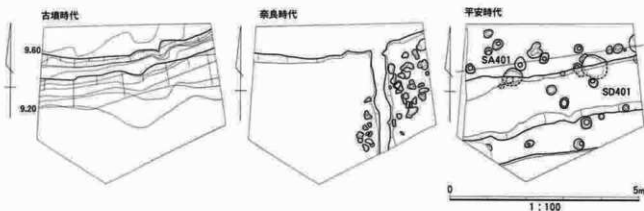


図28 NG24次古墳～平安時代遺構配置図

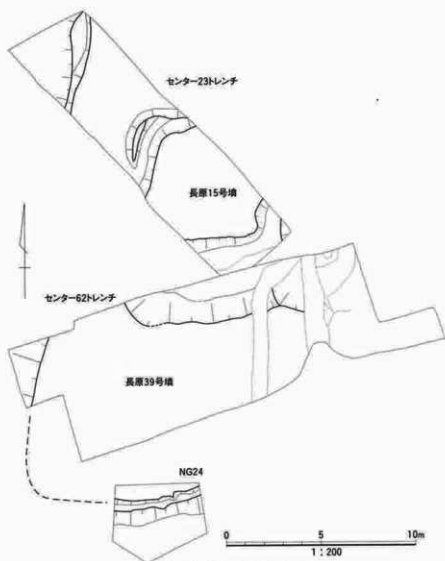


図29 長原15・39号墳平面図

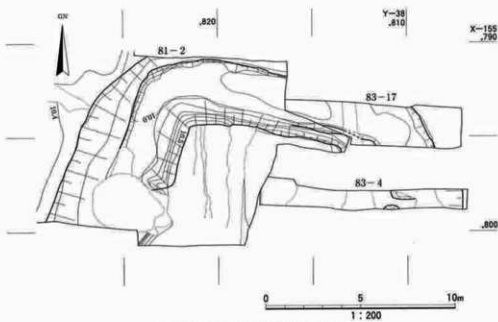


図30 NG83-17次長原44号墳平面図

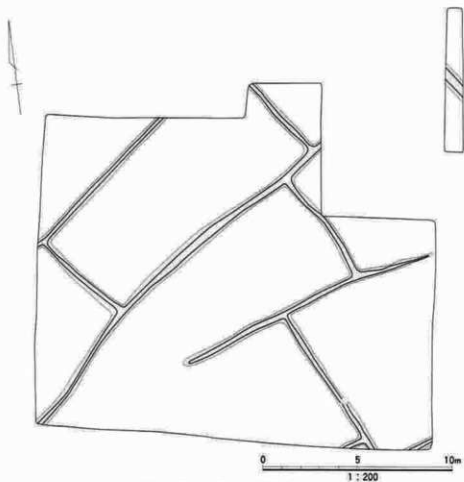


図31 NG83-66次奈良時代水田平面図

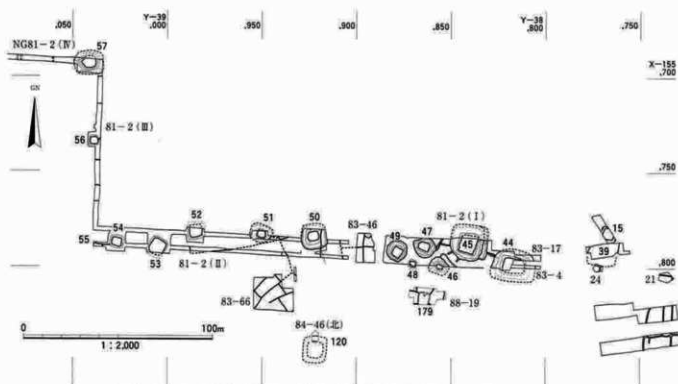


図32 NG83-66次周辺古墳および畦畔分布図([大阪市文化財協会1989]の図59に加筆)

る[大阪文化財センター1978:p.48]。これから東西15m、南北8mの墳丘をもつと推定される(図29)。

NG83-17次調査

長原44号墳：古墳の周溝の北東隅が検出された(図30)。同一の古墳はNG81-2次調査やNG83-4次調査でも検出されていて、すでに[大阪市文化財協会1989:pp.30-37]で報告されている。それによると、墳丘東西幅は基底部で11.8m、周溝も含めると21.6mの規模になる。南半分は未調査のため、南北の長さはわからない。周溝からは出土した円筒埴輪はいずれも無黒斑である。B種ヨコハケが施されたものが多いが、一部タテハケのみのものもある。

NG84-46次調査

長原120号墳：北側の堅坑で、幅約2m、深さ0.1mの周溝が検出された(図32)。南側に墳丘があったと想定される。

b. 奈良時代の遺構

NG21・24次調査

NG21次調査ではほぼ正南北・正東西の畦畔が検出された(図33)。また、NG24次調査では長原39号墳に取り付く畦畔が検出された(図28中)。いずれも長原6A層上面検出遺構である。

NG83-66次調査

第6A層上面で畦畔を伴う水田跡が検出された(図31・図版4中)。畦畔は上端0.15~0.20m、下端0.40~0.50mで、高さ0.05~0.10mの断面台形を呈する。南西-北東方向のものと南東-北西方向のものが「T」字状に結合し、十字に交わるものはない。水田の一筆当りの面積は約80㎡である。

c. 平安時代の遺構

NG24次調査

溝と多数の柱穴、溝が検出された(図28右)。

SA401：東西方向に延びる溝で、柱間隔は2.0mである。柱穴の掘形は円形で直径0.25m、柱痕跡は0.1mある。柱穴から緑釉陶器碗の底部が出土した。

SD401：SA401の南側ではほぼ平行して延びる溝で、幅1.2m、深さ0.2mある。SA401と直接前後関係を示すものは見つからなかったが、多数の柱穴を切って掘られていることから、SA401より後出する可能性が高い。なお、時期を決定できるような遺物は出土していない。

NG83-66次調査

長原4C層基底面で、総柱の掘立柱建物・溝が検出された(図34)。

SB401：桁行3間(6.7m)、梁間2間(4.5m)の総柱の掘立柱建物である(図版4下)。柱穴は直径0.2m未満の円形で、柱痕跡はわからなかった。

SA402：SB401の東6.5mのところ検出された溝である。方向はSB401の梁間と平行する。柱穴

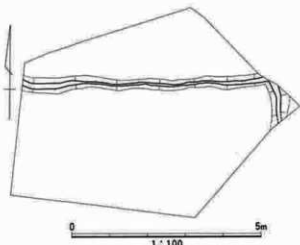


図33 NG21次奈良時代水田平面図

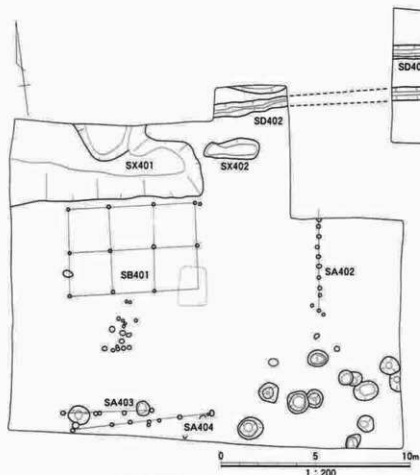


図34 NG83-66次平安時代遺構配置図

は直径約0.2mで、柱間は0.5m前後である。

SA403・404：調査地の南側で検出された東西方向の溝である。SA404の方が東で北に振れていて、近接しているため、同時存在はしないと思われる。南側に延びて建物になる可能性も残る。

このほか、SX401・402は深さが0.1m以下の浅い窪みで、SD402・403は幅0.5m、深さ0.2mの平行して延びる溝である。また、調査地の南東には群集した土壌群が分布する。

以上の遺構について、遺物が少ないため詳細な時期はわからない。

3) まとめ

以上の調査では古墳3基(長原39・44・120号墳)、奈良時代の水田、平安時代の集落跡が検出された。当地は長原塚ノ本古墳の南西部に当り、小古墳が多く分布することで知られている。

奈良時代の水田(長原6Ai層準)については近隣でも見つかっている。畦畔の方向は一定ではなく、古墳に接続するものも多い。長原6Ai層上面の標高が南西が高く、北東が低い傾向にあり、畦畔の方向も地形に規制されたものと思われる。

平安時代の集落については、NG83-66次調査地の約150m東で方形区画を伴う建物群が見つかり、その時期は平安時代Ⅲ～Ⅳ期古段階に当る[大阪文化財センター1978]。NG83-66次やNG24次調査で検出された建物群もこの時期に該当するものと思われる。

(寺井)

第3節 NG92-92次およびその周辺の調査

1) 調査地と周辺の概要

本節では長吉長原4丁目で行われたNG83-11・86-66・87-70・89-69・92-45・92-73・92-92・94-67次調査を報告する(図35)。当地区の東側には塚ノ本古墳(長原1号墳)があり[大阪文化財センター1978、長原遺跡調査会1978]、それ以外にも小方墳が多く見つかったことで知られている。

NG83-11次調査は関西電力による埋設管設置に伴う調査で、区画整理事業に伴うNG82-19次調査地に平行する[大阪市文化財協会1990]。NG82-19次調査では古墳が5基検出されたが、本調査では特に顕著な遺構は見つからなかった。

NG86-66次調査は中央環状線沿いの下水管渠築工事に伴って行われた。A～Qの17箇所ある人孔部分については平面的な調査を行い、管路部分については立会調査の上で、遺構が確認された場

合のみ本調査に切り替えることにした。調査の結果、小方墳が5基(長原155～159号墳)検出された。

NG87-70次調査は試掘の結果、地層が良好に残っていることが明らかになった。近隣で古墳が多く検出されていることから、当地でも古墳が見つかることが予想され、本調査が実施された。本調査の結果、古墳は検出されなかったが、飛鳥～奈良時代の水田が検出された。

NG89-69次調査は東西方向のトレンチを南北2本設定した。北側のトレンチの東端で古墳を検出し、事業者・大阪市教育委員会文化財保護課と協議をした結果、調査期間を延長して、東側を拡張した。その結果、一辺約7mの墳丘をもつ方墳(長原182号墳)が明らかになった。

NG92-45次調査は試掘で地層が良好に残っていたことから、東西方向のトレンチを南北2本設定して、調査が行われた。調査の結果、奈良時代の水田が検出された。

NG92-73次調査は試掘で地層が良好に残っていたことから、東西方向のトレンチを南北2本設定して、調査が行われた。調査の結果、飛鳥～奈良時代の水田が2面検出された。また、落込みに長原9～12層が残っていたことから、石器遺物を確認する調査も行われたが、石器は出土しなかった。

NG92-92次調査は2件のマンション建設に伴って、同時に行われた調査である。それぞれの工事敷地内に2本ずつ計4本のトレンチを設定した。調査の結果、平安時代の建物跡、奈良時代の水田に加え、長原200号墳が検出された。長原200号墳は木棺直葬の主体部が残っており、鉄剣(または刀)



図35 NG92-92次などの調査地位位置図

表9 NG92-45次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
0・1	0・1		100	盛土・作土				近・現代
2	2	灰オリーブ～暗オリーブ色 砂礫混り砂質シルト	10	作土				江戸時代
3	2～3	オリーブ黄～暗オリーブ色 砂礫混りシルト	15	作土				室町時代
4	3～4	黄褐～暗オリーブ色 シルト混り砂礫	15	作土		▼1 耕作溝		
5	5	にぶい黄～灰オリーブ色 細粒砂～砂礫	50	水成層		←水田畦畔	土師器・須恵器・ヤマトイロ片	奈良時代
6a	6Ai	オリーブ灰～暗オリーブ色 シルト混り中粒砂～砂混りシルト	20	作土			土師器・須恵器	
6b	6AII	オリーブ灰～緑灰色～中粒砂	25	水成層		←水田畦畔		
6c	6Bi	オリーブ灰～オリーブ黒色 シルト質粘土	25	作土				飛鳥時代
7	7Ai	オリーブ黒～黒褐色粘土質 シルト～シルト質粘土	20	作土				
8	9～12	灰オリーブ～緑黄色シルト～粘土	10	古土壌	火山灰を含む			縄文時代
9	13	灰～緑灰色粘土	>50					旧石器時代

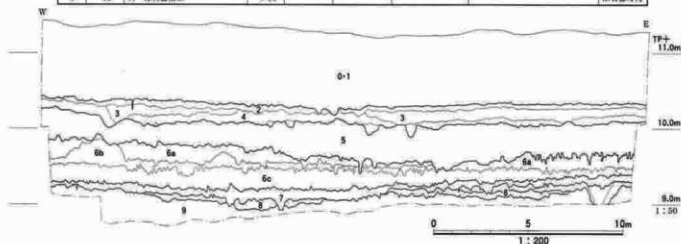


図36 NG92-45次南区南壁断面図

や供献土器が出土した。この成果についてはすでに[高橋工1993]で紹介されている。

NG94-67次調査はNG92-45次調査地の南東に位置する。調査期間と工事深度の関係で長原4B層まで重機掘削し、長原4C層基底面しか調査することができなかったが、平安時代中期の井戸や多数の柱穴が検出された。なお、この調査で出土した緑釉の花文陶器は[久保和士1995]ですでに紹介されている。

2) 調査の結果

i) 層序

本節で扱う調査地はいずれも地層が良好に残っていた。ここではもっとも北で行われたNG92-45次調査の南区南壁の断面図(図36・表9)と、もっとも南側で行われたNG89-69次調査の北区北壁の断面図を示す(図37・表10)。

ii) 遺構と遺物

表10 NG89-69次層序表

層序	低層層序	岩相	層厚(m)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
0-1	0-1		60	礫土・作土				近・現代
2	2	灰黄～黄褐色シルト混り細砂	45	作土				江戸時代
3	3-4B	灰黄～黄褐色シルト混り細粒砂	20-40	作土				鎌倉・室町
4	4C	にぶい黄～灰黄褐色砂混りシルト	20	作土		↓稲刈の痕跡 ▼土蔵・溝・ビット	土陶器・黒色土器・平瓦	平安時代
5	5	黄褐色細～粗粒砂	≦15	水成				奈良時代
6a	6Ai	灰黄褐色～黒褐色シルト	≦10	作土				
6b	6Aii	灰黄褐色～黒褐色シルト	≦5	水成層				
6c	6Bi	灰黄褐色～黒褐色シルト	≦10	作土		←永田結時 ▼SX701		
7	7Ai	黒褐色砂質シルト～シルト	≦10					飛鳥時代
8	7Bi	第9・10層に由来する偽礫	10	古墳盛土				古墳時代
9	7Bi	黒色粘土質シルト	10					
10	13	オリーブ灰色砂混りシルト	>25					旧石器時代

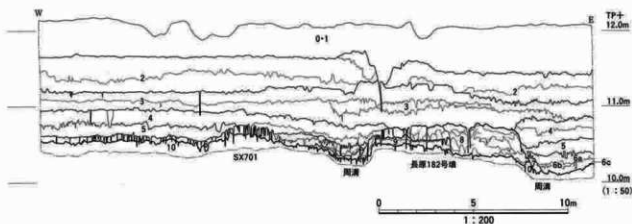


図37 NG89-69次北区北壁断面図

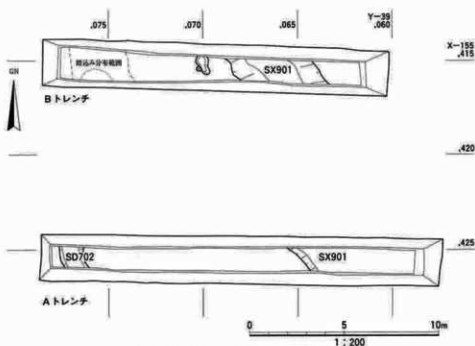


図38 NG92-73次SX901平面図

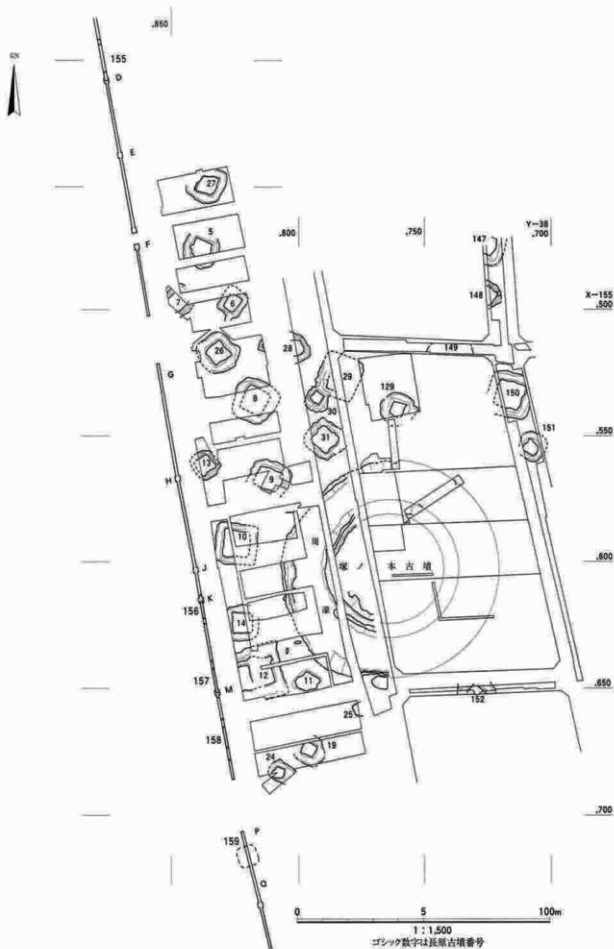


図39 NG86-66次長原155～159号墳とその周辺の古墳

a. 縄文時代の遺構

NG92-73次調査で長原9～12層で埋まる南北方向の窪みSX901を検出した(図38)。北区の幅は約3.5m、深さ0.1mで、南区では深さ0.2mあり、東側の肩は検出されなかった。石器遺物の確認調査を行ったが、出土しなかった。

b. 古墳時代の遺構と遺物

NG86-66次調査

5基の古墳が検出された(図39)。いずれも幅0.5m程度の細いトレンチであるため、墳丘規模などで不明な点が多い。

長原155号墳：墳丘の南北長が10.0m、周溝を含めると16.0mある。周溝の深さは0.3m、墳丘の残存高は周溝高から0.7mあり、盛土の厚さは0.3mである。方墳と思われる。円筒埴輪とともに馬形埴輪と思われる破片も出土した。

長原156号墳：周溝を含めた確認長が13.0m、周溝幅3.0mあり、方墳と思われる。周溝の深さは0.3m、墳丘の高さは周溝基底面から0.6mで、盛土は0.1m残っていた。

長原157号墳：周溝を含む確認長が15.0m、周溝幅5.0mあり、方墳と思われる。墳丘盛土は0.28m残っていた。

長原158号墳：墳丘の南北長が9.5m、北側の周溝幅が3.5m、南側が5.2mある。墳丘の高さは周溝基底面から0.4mで、盛土は0.15m残っていた。川西編年Ⅳ期に比定される円筒埴輪が数点出土した。

長原159号墳：調査地の南端で検出した古墳である。トレンチ内では北側が大きく掘乱されており、南側の周溝の一部と墳丘を確認したに留まる。

NG89-69次調査

長原182号墳(図41・図版5下)：墳丘が一辺約7m、周溝幅は西周溝で約2mある方墳である。東周溝は長原6層準の水田に削られており、幅はわからない。墳丘の盛土は西半分では旧地表である長原7Bi層の上面に、長原7Bi層の偽礫、続いて長原

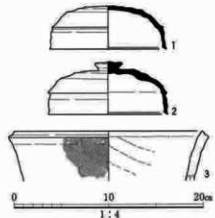


図40 NG89-69次長原182号墳出土遺物

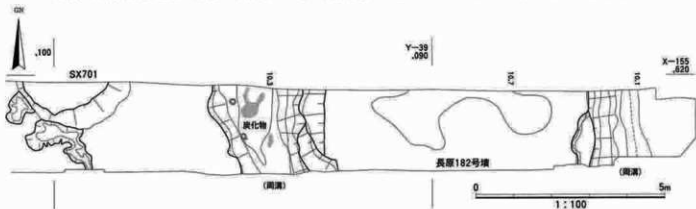


図41 NG89-69次南トレンチ古墳時代遺構平面図

13層の偽磔が盛られているが、東半分では一度長原7Bi層を掘って、地表を下げ、それから盛土が行われていた(図37)。おそらく東半分は墳丘の西半分の盛土を行うために掘られ、そののち西半分に継ぎ足すようにして東半分が造られたのであろう。

遺物は周溝から須恵器杯蓋1・高杯蓋2、墳丘上からは円筒埴輪の口縁部3が出土した(図40)。1は口径12.0cm、器高4.7cmあり、TK23型式に該当する。3は外面にタテハケが施される。

SX701(図41)：長原182号墳の西約6mの地点で検出された。長原7Bi層(図37の第9層)が削り残されてできた高まりである。盛土も周溝もないが、長原6層準で破壊された古墳の可能性はある。

NG92-92次調査

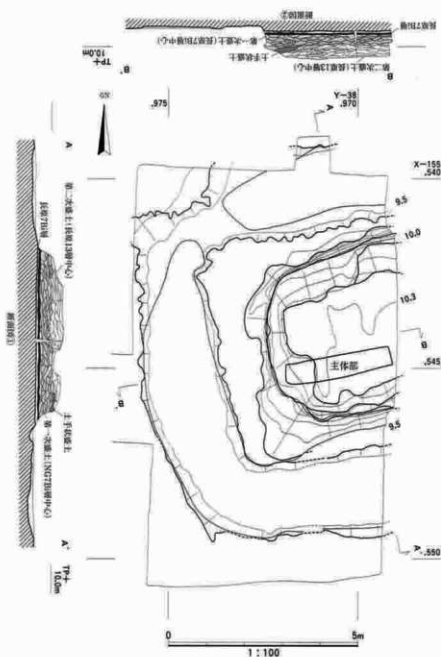


図42 NG92-92次長原200号墳実測図

長原200号墳：4区東部で検出された方墳である(図42、図版6上・中)。墳丘規模は西辺を参考にするると一辺6.3mあり、幅1.4~2.5m、深さ約0.1mの周溝が巡る。墳丘は若干の変形を受けていると考えられるが、保存状態はおおむね良好で、墳丘の高さは0.9mある。また墳頂部に木棺を直葬した埋葬施設1基を確認した。

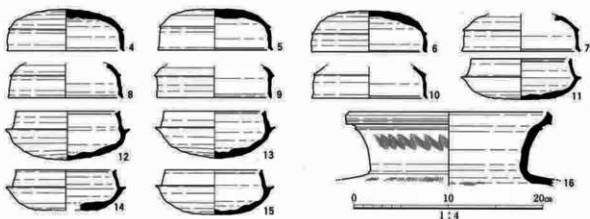
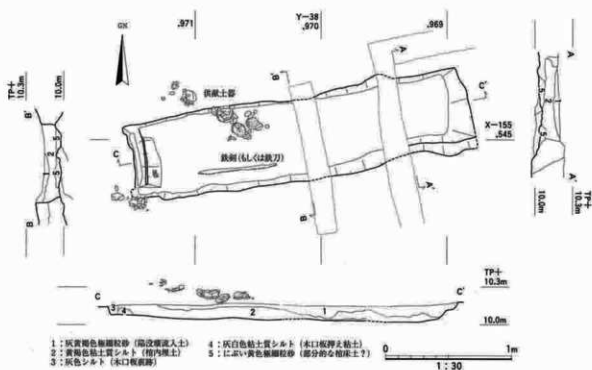
墳丘の断制り調査の結果、盛土は厚さ65cmほどが遺存しており、大きく2回に分けて盛られていた。下部の盛土の厚さは25~35cmほどで、東西断面でみると中央部がやや低くなっており、おもに長原7Bi層を盛り上げている(第一次盛土)。上部の盛土の厚さは最大で35cm道



写真2 長原200号墳主体部鉄剣(鉄刀)出土状況



写真3 長原200号墳主体部上須恵器出土状況



存しており、おもに長原13層を盛り上げている(第二次盛土)。また第一次盛土上面の周縁部には、平面隅丸方形に、幅約50cm、高さ20cmで土手状に小規模な盛土を行っていた。これは第二次盛土の崩落を防ぐ土留めの機能を果していた可能性がある。また、墳丘東側の第一次盛土上面と第二次盛土中から土師器片が出土し、墳丘を構築する過程で何らかの祭祀が行われた可能性がある。

木棺痕跡の規模は、中央部での長さが2.72m、幅は0.6m弱で、深さは0.12~0.13mである(図43・図版6下)。長軸は東西方向で座標西より10°南に振り、またその位置は墳丘の中央から約1m南へずれている。断面では、底面は平坦で凹みはなく、箱形木棺で、長側板が底板上に立てられる形態であったことがわかる。西端部では、棺材が立ち腐ってシルトに置き換わった個所があり、小口付近の

構造が復元できた。長側板の痕跡は小口板の外方へ突出し、長側板で小口板を挟む形態であることがわかる。細い溝状に検出された棺材の痕跡から、長側板・小口板の厚さはいずれも5cm程度であったと想定される。小口板の内側には灰白色シルトを盛った高まりがあり、これによって小口板を内側から押えていたと考えられる。この灰白色シルトの下からは長軸方向に木目をもつ底板材の残片が出土し、このことから灰白色シルトは底板の上に置かれたといえる。鉄釘・錠などの棺材を固定する金具は出土しなかった。東端部では崩落の際の土層の乱れから小口部の構造はわからなかった。

木棺を埋葬するための墓壇は平・断面の精査でも発見できなかった。木棺痕跡の横断断面の観察によると木棺底部は、第一次盛土上面に少々偽磔を介して接しており、同盛土終了後に木棺を設置し、第二次盛土で覆ったものとみてよい。

木棺内南西部では、底面に接して鉄剣(または刀)一振りが出土した

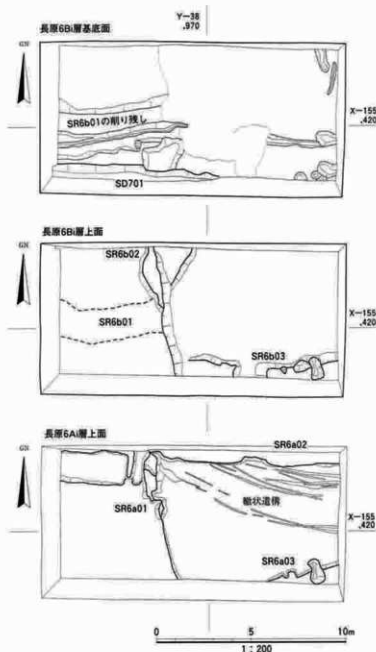


図45 NG87-70次飛鳥-奈良時代遺構配置図

(写真2)。ほかに副葬品はない。朱またはベンガラもなく、使用されていなかったようである。底面はほぼ平坦であり、棺の幅の広狭もないことから埋葬頭位は不明であるが、鉄剣の位置からみて西頭位であろうか。木棺内の埋土は黄褐色粘土質シルトで、墳丘盛土が薄汚れた感じのもので、層厚8cm前後を測る。この層は木棺の腐朽によって棺蓋上の盛土が落下したものと考えられる。このことから、木棺は墳頂からさほど深からぬところに設置されたものと考えられる。

墳頂部の埋葬施設上には、ほぼその輪郭にそって灰黄褐色極細粒砂が分布し、この層からは須恵器杯身11～15、杯蓋4～10や壺片がまとまって出土した(図43・44、写真3)。この層は墳丘・木棺内埋土とは明確に分離できることから、木棺が腐朽、陥没してできた壙内に堆積し、須恵器は木棺直上の盛土上に置かれていたと考えられる。出土した杯はおおむねTK23型式に該当する。なお、主体部から出土した鉄剣(または刀)は残存状況がきわめて悪く、実測はできなかった。

周溝は全体に遺存状況が芳しくなく、埋土も上位層の水田耕土とほとんど区別がつかなかった。須恵器壺16(図44)をはじめ、少量の須恵器・土師器が出土したが、上位層から踏込まれたものもあるようである。埴輪片はごく少量が出土したが、墳丘に樹立されていたとするには少なすぎ、当初からなかったと思われる。古墳築造当初の周溝の深さは、墳丘盛土下に保存されていた長原7Bi層の厚さが7～8cmなので、20cm弱であったものと考えられる。

c. 飛鳥～奈良時代の遺構と遺物

NG87-70次調査

長原6Bi層基底面で、東西方向に延びる溝SD701が検出された(図45上・写真4)。南肩がわからないので幅はわからないが、深さは0.3m以上ある。埋土は褐灰色粘土で、長原7Ai層準の遺構に位置づけられる。

長原6Bi層上面では畦畔SR6b02と堤状の盛土SR6b03が検出された(図45中・図版5上、註1)。また、長原6Bi層基底面で東西方向の高まりが検出され、長原6Bi層準の耕作による削り残しと考え、



写真4 NG87-70次SD701



写真5 NG89-69次SR6b04

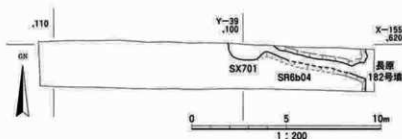


図46 NG89-69次飛鳥時代水田平面図

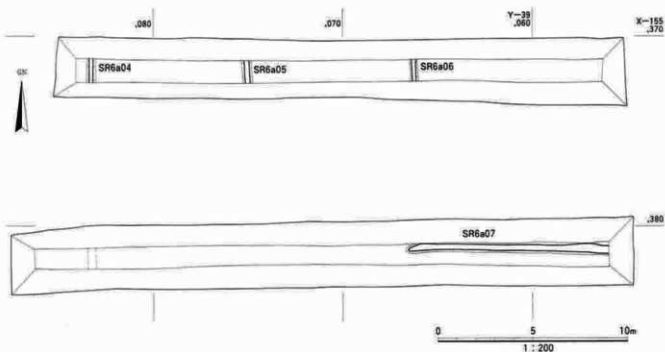


図47 NG92-45次奈良時代水田平面図

SR6b01と命名した。SR6b01は基底部の幅が1.4～1.6mあり、本来はSR6b02に繋がっていたと思われるが、上面が残っていないことから長原6Ai層準の耕作で削られたのであろう。SR6b03は幅1.4m以上、高さ0.5mあり、灰色粘土と砂で構築されていた。南側の状況はわからないが、両側に堤を設けた水路の一部ではないかと思われる。

長原6Ai層上面で畦畔SR6a01・6a02および堤状の盛土SR6a03が検出された(図45下・図版5中)。SR6a01は調査地北壁に沿って延び、SR6a02はこれに直交する方向に延びる。これらの畦畔で区切られる南東側の水田上面には轍の痕跡と思われる細い溝がゆるい弧を描くように残っていた。SR6a03はSR6b03が残ったもので、長原6Ai層準のものではない。この段階には機能していなかったと思われる。

NG89-69次調査

長原6Bi層上面で長原182号墳とSX701の間に取り付く畦畔SR6b04が検出された(図46・写真5)。



写真6 NG92-73次SR6a11



写真7 NG92-92次1区SR501墳出土状況

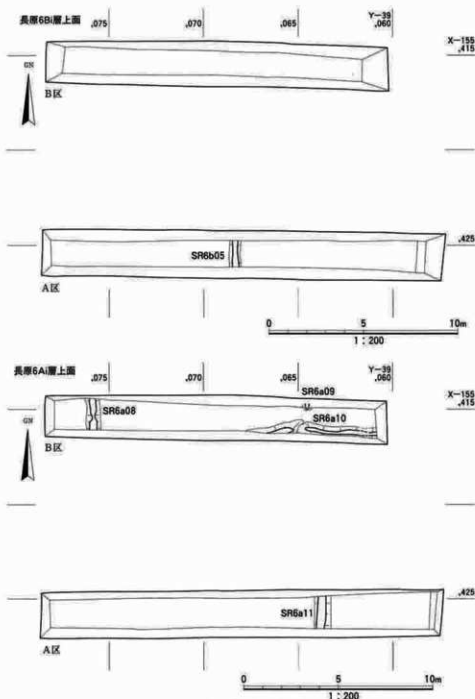


図48 NG92-73次飛鳥～奈良時代水田平面図

東で南に10°ほど振っており、幅0.5m、高さは0.06m以下である。なお、長原6Ai層上面は長原5層準の洪水によって削られていて、畦畔は検出されなかった。

NG92-45次調査

長原6Bi層上面では水田畦畔が検出されたが、長原6Ai層準の耕作で削られ、残りが悪かったため、図示していない。また、長原6Ai層上面では南北方向の畦畔SR6a04～6a06、東西方向のSR6a07が検出された(図47・図版8上)。幅0.4～0.5m、高さ0.1mで、いずれも延びる方向はほぼ正方位である。SR6a04～6a06の間隔は8.3～8.7mあり、畦畔を境に西側の水田面が東側より数cm高い作りになって

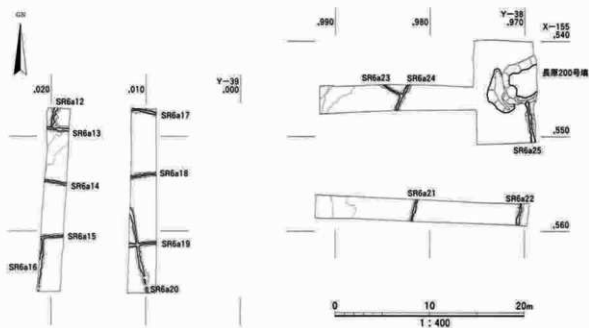


図49 NG92-92次奈良時代水田平面図

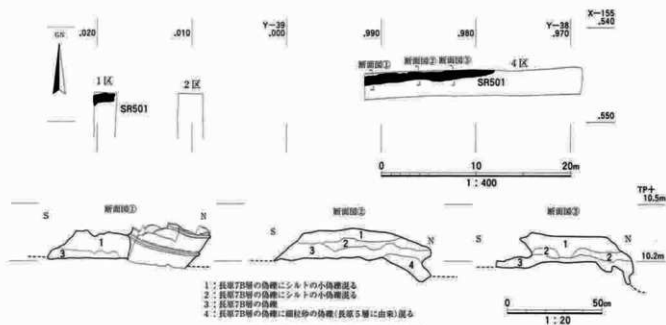


図50 NG92-92次SR501実測図

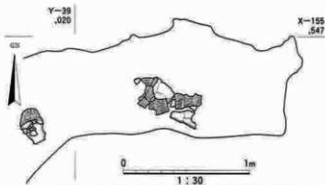


図51 NG92-92次1区SR501内埴輸出土状況

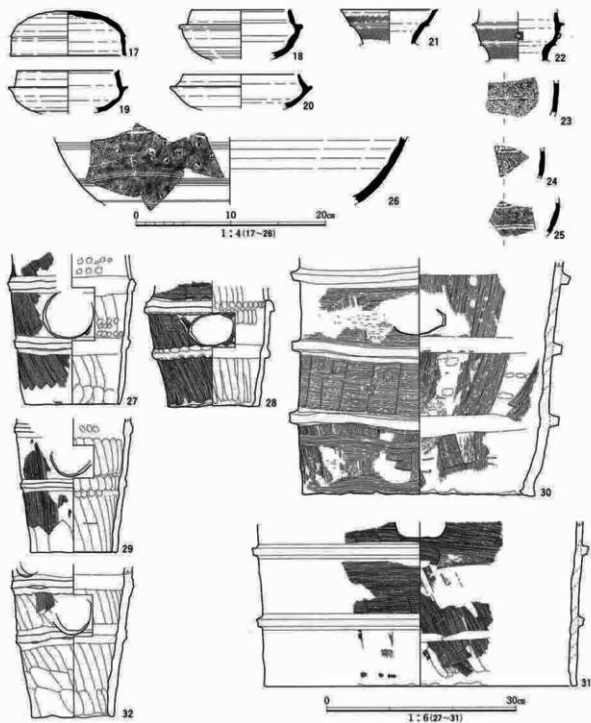


図52 SR501および長原6Ai層出土遺物
SR501(17~31)、長原6Ai層(32)

いる。

NG92-73次調査

長原6Bi層上面で畦畔SR6b05が検出された(図48上)。幅0.5m、高さ0.05mである。この畦畔を境にして西側の水田面が東側より数cm高くなっている。

また、長原6Ai層上面でも水田畦畔が検出された(図48下・写真6)。SR6a08・6a11は幅0.8m、高さ0.05m以下である。東西方向の畦畔SR6a10は水口が存在する。水田面は畦畔を境に北東が低く、

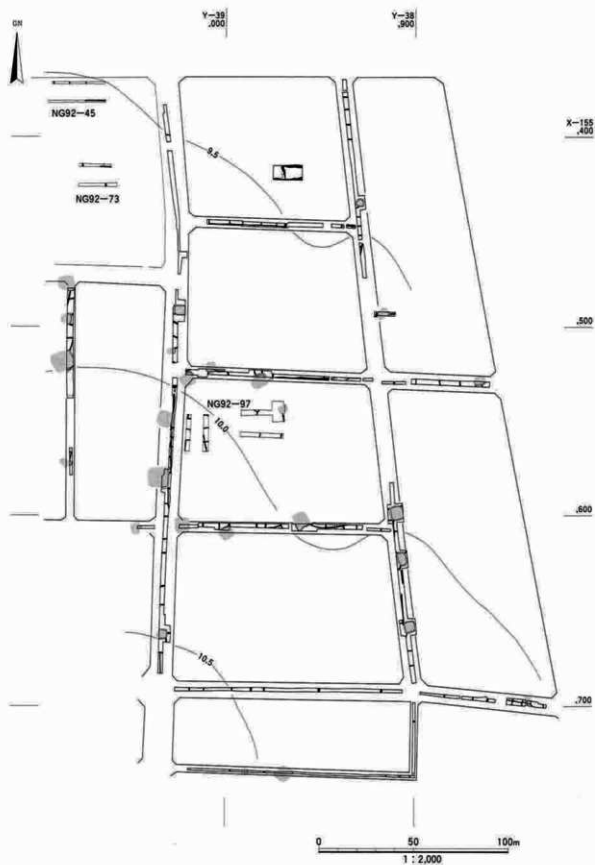


図53 長吉長原4丁目一帯の奈良時代水田〔大阪市文化財協会1993a〕の図168を一部改変

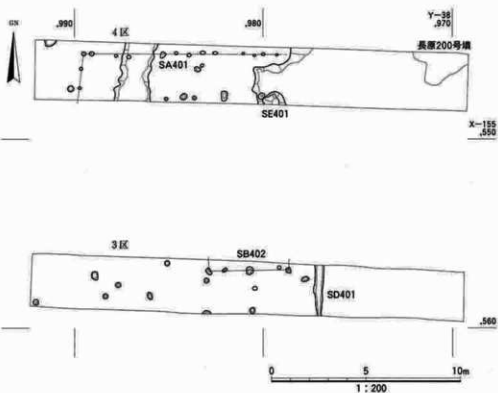
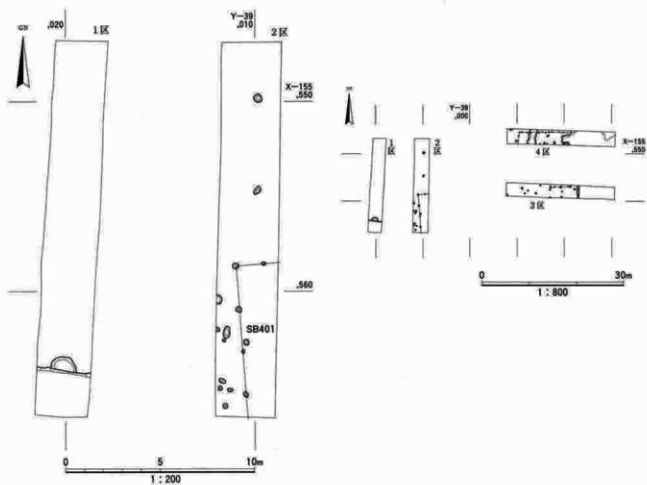


図54 NG92-92次平安時代遺構配置図

南西が高くなっている。

NG92-92次調査

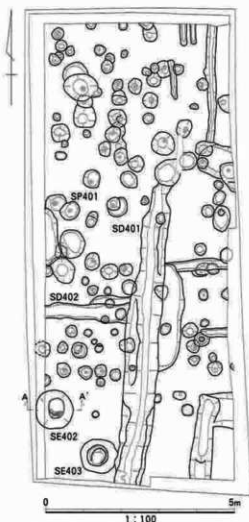
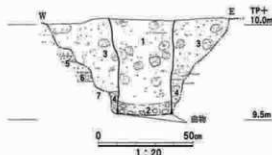


図55 NG94-67次平安時代遺構配置図
(網掛けは柱痕跡を示す)



- 1: 角礫を多く含む暗灰色粗粒砂質シルト
- 2: 角礫を多く含む暗灰色粗粒砂
- 3: 角礫を含む黄褐色シルト質粗粒砂
- 4: 緑灰色～オリーブ黒色粗粒砂層下粘土質シルト
- 5: 黄褐色粗粒砂～粗粒砂 (長原5A層)
- 6: 緑灰色粗粒砂 (長原5B層)
- 7: オリーブ黒色粘土質シルト (長原6A層)

図56 NG94-67次SE402断面図

水田畦畔が検出された(図49・図版7上)。畦畔の幅は0.3～0.5m、高さは最大で0.2mある。北約20mに位置するNG84-48次調査地では幅0.6～0.8mある大畦畔が検出されていることから[大阪市文化財協会1992c]、当調査地のもは小畦畔である。なお、いずれの畦畔も正方位ではない。SR6a25は長原200号墳の墳丘に取り付いていた。

また、1・4区において長原5層途中面で幅1.0m前後、高さ0.15mの畦状遺構SR501が検出された(図50・51、写真7)。この遺構は長原5層の砂礫層が一旦堆積した後に、長原7Bi層に由来する偽礫で盛土されている。盛土内には埴輪や須恵器が多く含まれていることから(図版7中)、近隣の古墳を破壊して盛土を築いたのであろう。また、この遺構は長原5層準の洪水で被災した後の水田復興のための大畦畔、もしくは洪水の流路を遮断するための築堤などが考えられるが、いずれにしても引き続き起こった洪水によってその役目を果たさずして埋没したのであろう。

盛土内からは須恵器杯身18・20、杯蓋17、壺21、筒形器台22、高杯形器台26や円筒埴輪27・31が出土した(図52)。須恵器23・25は細片で、凹線や線刻の格子文などが施されていて、高杯形器台の一部かもしれない。埴輪はすべて寄窯焼成で、30・31は大型品である。また、32は長原6Ai層から出土した(図52)。

e. 平安時代の遺構と遺物

NG92-92次調査

長原4層基底面で掘立柱建物・櫓・井戸が検出された(図54)。

SB401: 2区南部で検出された掘立柱建物で、梁行2間以上(柱間1.5m)、桁行3間以上(柱間2.3m)である。個々の掘形は円形で、直径は0.2～0.3m程度である。

SB402: 3区で検出された掘立柱建物で、梁行2間

分(柱間2.2m)のみが調査区内にかかった(図版7下)。

SA401: 4区で検出された槽で、東西8.3m以上、南北2m以上を検出した。個々の直径は0.1~0.15mほどで、掘形が削平されているか、杭を打込んだものと考えられる。

SE401: 4区南壁際で検出された井戸で、深さ約0.7mである。曲物を井戸側として用いており、最下段の1段だけが遺存していた。

以上の遺構のほかにもビット・溝などが検出された。これらの遺構から出土する土器は、土師器・須恵器・黒色土器で瓦器を含まない。このことから本調査地は平安時代の集落の一部に当たると考えられる。

NG94-67次調査

長原4C層基底面で井戸や溝、多数の柱穴が検出された(図55・図版8中)。柱穴の多くは柱痕跡が残っているものであったが、柱の組合せはわからなかった。井戸は2基検出した。直径は0.4~0.5mで、SE402の底には曲物の一部が残っていた(図56・図版8下)。SE403もSE402と規模がほぼ同じであることから、本来は曲物の井戸側があった可能性が高い。

SD401は幅0.9m、深さ0.2mあり、北側ほど次第に浅くなり、調査地中央やや北でなくなる。SD402はSD401に接続するが、埋土が共通することから同時に存在していたことがわかる。

出土遺物には緑釉陶器碗33・土師器杯A34・黒色土器A類碗35・同B類碗36がある(図57)。33は重機掘削中に出土したものである。高台径は6.3cmあり、見込みに花文を削り出している。そのつくりから9世紀後半に平安京周辺の窯で焼かれたと考えられる[久保和士1995]。34は長原4C層から出土したもので、外面には横方向のヘラミガキが施される。平城宮土器Vに位置づけられ、長原5層から遊離したものと思われる。35・36はSP401の掘形から出土した(写真8)。35は内面に細かいハケメが残り、外面はユビオサエとナデで仕上げる。36は全面にヘラミガキを施している。これらは平安時代Ⅲ期古段階に位置づけられる。



写真8 NG94-67次SP401遺物出土状況

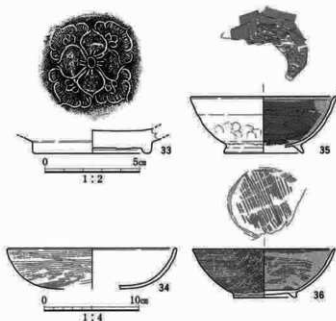


図57 NG94-67次出土遺物

重機掘削中(33)、長原4C層(34)、SP401(35・36)

3) まとめ

古墳時代の本地域は古墳群で占められる、本節で報告した長原155・159・182・200号墳のように、一辺が10m以下の方墳が多く、時期のわかるものの多くは長原3期に属する。また、長原200号墳は主体部が残っている希有な例である。

飛鳥〜奈良時代になると本地域一帯は水田になる。図53は長原6Ai層上面の水田の広がりを示したものである。この地域は南東が高く、北西が緩やかに低くなる地形を呈する。畦畔は古墳が多く分布する地域(X-155,500以南)では、正方位をとり、かつ連続的に延びるものは見られない。古墳の高まりを残しながら、開発が進められたことがわかる。一方、古墳が希薄になる地域(X-155,500以北)ではほとんどの畦畔が正方位に延びるようになる。

長原5層準の洪水後、当地にはしばらく人が住んだ痕跡は見られないが、11世紀前半頃(平安時代Ⅲ期)になると長原遺跡一帯で建物遺構などが見られるようになる。本節で報告したNG92-92次や94-67次はこの時期の集落関係の遺構になる。(寺井)

註)

- (1) 本節で報告対象の長吉長原4丁目一帯では長原6Bi・6Ai層準の両方で多くの畦畔を検出した。遺構番号の煩雑さを避けるため本節に限って、長原6Bi層準なら上2桁を6b、長原6Ai層準なら6aを冠し、下2桁には各層準での通し番号を振った。

第4節 NG86-62および93-91次調査

1) 調査地と周辺の概要

本節では長原遺跡西地区のNG86-62および瓜破遺跡東南地区のNG93-91次調査を報告する(図58)。当地域は「馬池谷」の西側で、飛鳥時代の掘立柱建物群が多く見つかったことで知られている[大阪市文化財協会2001b: pp.74-80]。

NG86-62次調査は城東貨物線を横断する下水管渠施設(シールド工法)に伴う堅坑部分の調査である。貨物線の東側(発進坑)と西側(到達坑)にそれぞれ36㎡、9㎡のトレンチを設定して調査を行った。その結果、東側のトレンチでは大きく攪乱されて、包含層の残りは悪く、西側のトレンチでは長原2~4層の作土層を確認したが、顕著な遺構は検出されなかった。

NG93-91次調査は、試掘調査(NG93-79次)で遺構が見つかったために実施された。本調査では、中世~現代の包含層を確認し、中世の溝などを検出した。

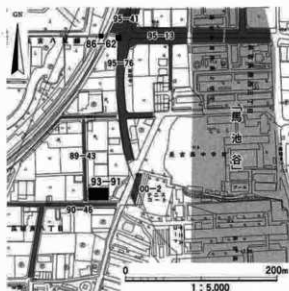


図58 NG86-62および93-91次調査地位置図

表11 NG93-91次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
0	0	現代表土	90					近・現代
1	1	現代作土	10	作土				
2	2	暗オリーブ褐色砂質シルト	5	作土		▼SK201-SK201-202	泥付磁器・陶器	江戸時代
3	3	にぶい黄褐色砂質シルト	10	作土			瓦器・土師器・須恵器	室町時代
4	4	黄褐色粘土質シルト	10	作土		▼SP401-SD401-403	土師器	鎌倉時代
5	14	黄褐色シルト~粘土						旧石器時代

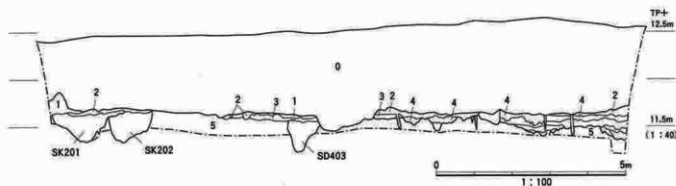


図59 NG93-91次北壁断面図

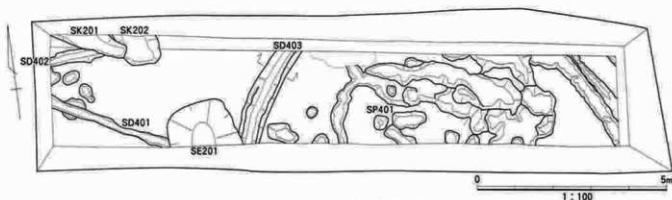


図60 NG93-91次遺構配置図

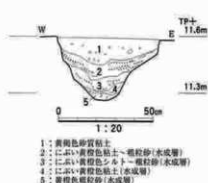


図61 NG93-91次SD403断面図

2) 調査の結果

i) 層序

NG93-91次調査地の北壁で地層を確認した(図59・表11)。長原2～4層は合計しても厚さ20cm程度である。東側の地山が低くなるのは、当地が小丘陵の東斜面に位置するためである。

ii) 遺構と遺物

NG86-62次の西側トレンチでは長原2～4層準の耕作溝が3面で見つかった。いずれも東西方向であった。

NG93-91次調査では、長原2～4層基底面で中世以前の柱穴、中世の溝、近世の井戸・土壌といった遺構が検出された(図60)。

SP401: 一辺0.3～0.4mの隅丸方形を呈し、深さが0.2mある柱穴である。柱痕跡は直径0.1mあまりで、柱が抜取られた痕跡があった。ほかに組合う柱穴がなく、時期も不明である。

SD401: 幅0.2m、深さ0.1mの溝である。埋土は明黄褐色の砂質シルトで非水成層である。遺物は出土していないが、中世のものと思われる。

SD402: 幅0.3m、深さ0.2mの溝である。水流の痕跡はない。中世のものと思われる。

SD403: 幅0.5m、深さ0.3mの溝である。埋土には水流の痕跡があり、遺物には少量の瓦器・土師器が含まれていた(図61)。

SE201: 東西1.9m、南北1.2m以上の隅丸方形を呈し、深さは0.5mある。埋戻されており、近世磁器や瓦が出土した。

SK201・202: 調査地の北西隅で検出した浅い土壌である。SK201から近世磁器の破片が出土した。

3) まとめ

近隣では飛鳥時代の掘立柱建物が多く見つかったが、本節の調査では検出されなかった。中世の溝SD403は水流の痕跡があったことから、灌漑用の溝と思われる。なお、100m北東のNG97-49次調査では平安時代Ⅲ期古段階の灌漑遺構が見つかり、[大阪市文化財協会2001b: pp.58-64]、この時期以降、馬池谷の西側の瓜破台地上は耕作地として利用されていたと思われる。(寺井)

第三章 西地区の調査

第1節 NG84-25次およびその周辺の調査

1) 調査地と周辺の概要

本節では長吉長原西1丁目のNG84-25・86-59・90-66次、および長吉長原1丁目のNG86-91・89-36次調査を報告する(図62)。NG86-91・89-36次調査は本来なら長原遺跡中央地区に含まれるが、NG84-25次調査地に近接していることから本節で報告することにした。

NG84-25次調査は地下鉄出戸駅前の再開発ビルに伴って行われた8,600㎡の大規模な調査である。まず、北側のA区が着手され、そこが終了してから南側のB区の調査が行われた。調査の結果、A区では造出しを有する方墳2基を含む7基の古墳(長原113~119号墳)が、B区では掘立柱建物・溝・井戸などの古墳時代中~後期の集落遺構が多数検出された。B区の調査終了に伴い、1985年5月12日には現地説明会が行われた。

NG86-59次調査は出戸駅前再開発ビルの北側正面に、出戸駅の出入口を建設する工事に伴って行われた。小面積の調査であるため顕著な遺構は見つからなかったが、須恵器や埴輪片が出土した。写真9は長原4B層準の耕作溝である。

NG86-91次調査地は長居公園通の南に位置し、NG84-25次A区の北東に当たる。工事深度はGL-1.9mであったが、それ以下で古墳が検出されたため、その部分だけGL-1.9mよりも深く調査した。調査の結果、主体部を2基有する方墳(長原166号墳)が検出され、主体部からはミニチュアの鉄製農具や金環などの副葬品が出土した。この成果の一部は[高井健司1987b・1988・1989]ですでに報告されている。

NG89-36次調査地はNG84-25次B区の道路

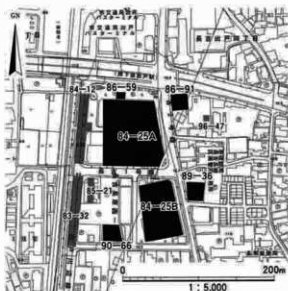


図62 NG84-25次などの調査地位置図



写真9 NG86-59次長原4B層準の耕作溝

表12 NG84-25次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	0-3			● 礫土・作土				縄文～現代
2	3-4A	灰白～灰色砂層	>50	作土・水成		→鳥島		鎌倉時代
3	4B	明褐色シルト	10	作土		→畦畔		
4	4B	明褐色粘土質シルト	30	作土				
5	5	黄褐色～中粒砂	10	水成		→畦畔		
6	6A	灰～黄灰色細粒砂質シルト	10	作土				奈良時代
7	7B	黒褐色～黒色シルト層	5～10			▼固定柱建物など		古墳時代
8	13						石器	旧石器時代

表13 NG86-91次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	1	オリーブ黒色細粒砂～シルト		作土				現代
2	2	灰オリーブ色細粒砂～シルト	20	作土		→耕作溝 ▼SK401・402、SD401		江戸時代
3	4B	明褐色細粒砂	30	水成		→農物の足跡		鎌倉時代
4	4B	灰白色シルト	20					
5	5	灰白色中～細粒砂	20	水成		→畦畔		奈良時代
6	6A	灰白色粘土質シルト	30	作土				
7	7A	黄灰色粘土	20			→長原166号溝		飛鳥時代
8	7B	黄灰色シルト	10					古墳時代
9	13	灰白色粘土						旧石器時代

表14 NG89-36次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
0	0	現代礫土	50	礫土				現代
1	1	現代作土	10	作土				
2	2	緑褐色～灰白色砂礫混り粘土質シルト	10	作土				江戸時代
4a	4A	灰色砂礫	<5	水成				鎌倉時代
4b	4B	灰色砂礫混りシルト質粘土	25	作土		↓耕作溝		
5	5	淡黄色砂礫	60	水成		→畦畔		
6a	6A	褐色粘土	20	作土				奈良時代
6b	6A or 6B	褐色砂礫混り粘土	10	作土				
6c	6B	褐色砂礫	薄	水成				
7a	7A	褐色砂礫混り粘土	15	作土		↓鳥島岡・雑路		飛鳥時代
7b	7B	褐色砂礫混りシルト	10			▼溝・土壇		古墳時代
8	13	淡黄色粘土質シルト						旧石器時代

を挟んで東隣に位置する。調査の結果、鎌倉時代の井戸・溝・土壇、飛鳥～奈良時代の耕作関係遺構、古墳時代中期の集落関係遺構が検出された。

NG90-66次調査地はNG84-25次B区の西側に位置する。敷地内に南北に3本のトレンチを入れて調査を行った。調査の結果、古墳～平安時代初頭の遺構が検出された。

2) 調査の結果

i) 層序

NG84-25次調査地は全体的に北側が緩やかに下がる地形である(図63・表12)。第2層は上部が長原3層、下部が長原4A層に相当すると思われるが、重機で掘削したため、境界を十分観察できなかった。上面では砂を盛り上げて、鳥島を作っている。

NG84-25次A区の東側に位置するNG86-91次調査地では現代作土の下で作土とそれを覆う水成

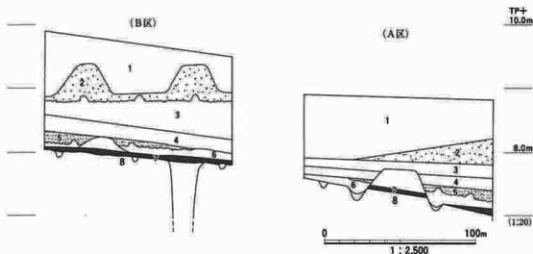


図63 NG84-25次層序模式図

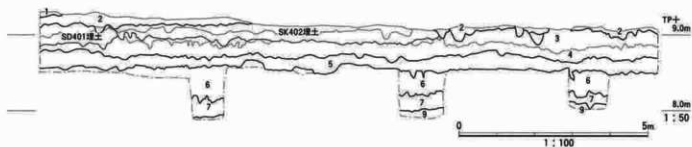


図64 NG86-91次南壁断面図

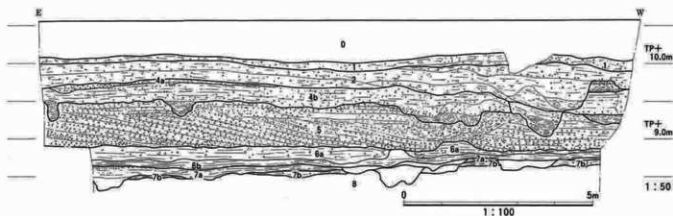


図65 NG89-36次南壁断面図

層が確認された(図64・表13)。古墳の盛土は後述するように長原2層(図64の第2層)を除去した時点で確認された。盛土の直下には長原7Bi層の暗色帯が残っていた。

NG84-25次B区の東側に位置するNG89-36次調査地では現代から長原7Bi層までの各層が良好に残っていた(図65・表14)。第6b層は長原6Ai層準で耕作された際に生じた加工時形成層の可能性がある一方で、長原6Bi層の可能性も残す。第6c層は水成の薄層で、長原6Bii層と判断した。

ii) 遺構と遺物

a. 旧石器時代の遺物

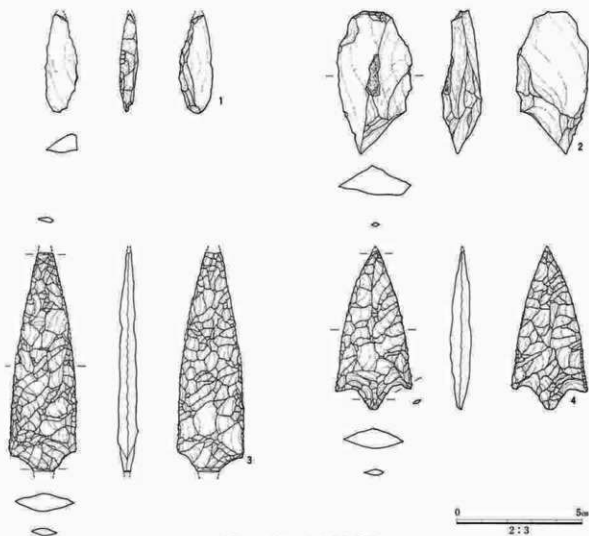


図66 NG84-25次出土石器
長原6A層基底面(1・3)、長原13層(2・4)

NG84-25次調査では長原13層から石器が出土し、ナイフ形石器1、横長剥片2、有茎尖頭器3・4を図化した(図66)。いずれもサヌカイト製である。1・3は長原6A層と長原13層の境界で、2・4は長原13層から出土した。1は横長剥片を素材とし、打面側に細部調整を施している。3は先端と基部が欠損していて、残存長は8.7cm、4は先端がわずかに欠損していて、全長は6.2cmである。3・4はいずれも側縁に微細な細部調整が施されている。

なお、当調査では遊離資料であるが、石鏃や石庖丁といった縄文~弥生時代の石器が多く出土した。

b. 古墳時代の遺構と遺物

NG84-25次A区

古墳7基と2条の平行する溝が検出された(図67・図版9上)。

古墳はいずれも墳丘の盛土は厚さ数cmしか残っていなかった。これらの古墳は現地説明会資料などで1~7号墳と公表されてきたが、それぞれ本節の長原113~119号墳に該当する。

長原113号墳(図68・図版10上)：北側に造出しを有する方墳である。墳丘は東西12m、南北14mあり、周溝の幅は約3mである。また、造出しは幅4m、長さ3mである。

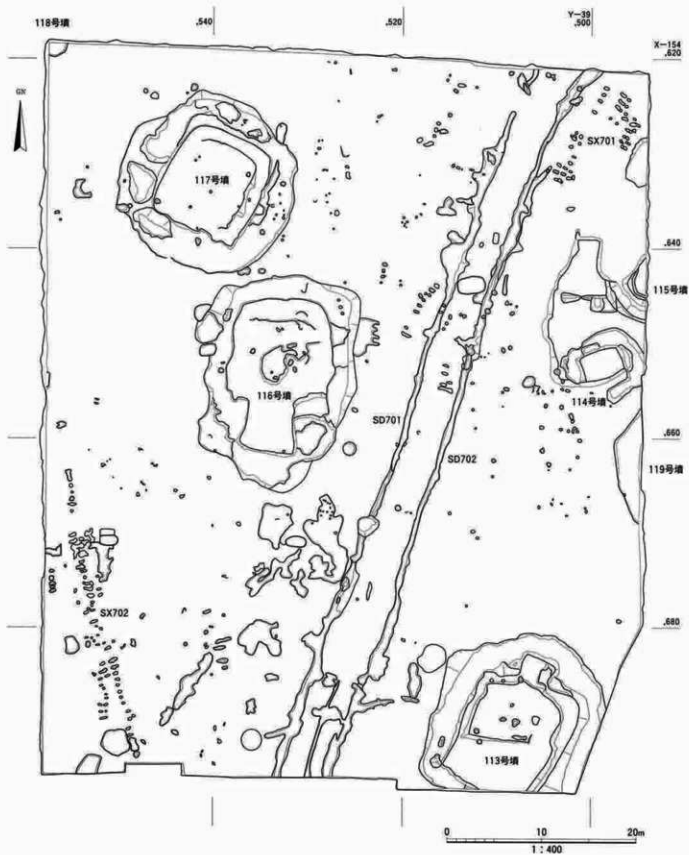


图67 NG84—25次A区古墳時代遺構配置図

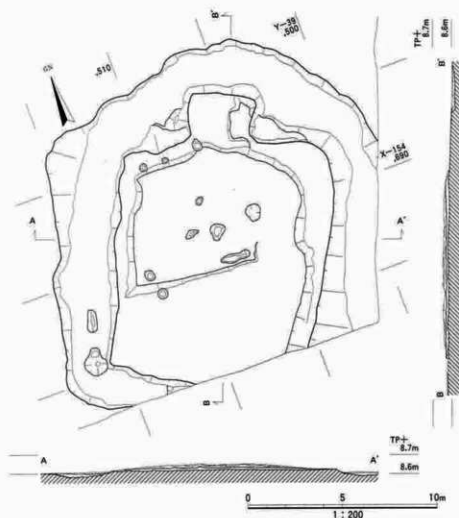


図68 NG84-25次A区長原113号墳実測図

造出しの東側付け根付近から鉄刀18が出土した。また、周溝からは須恵器や円筒・朝顔・家形・衣蓋・人物・馬形埴輪が出土し、須恵器杯身26~28、杯蓋19・20、壺5~7、円筒埴輪8・9、衣蓋形埴輪の立飾り10、人物形埴輪11、馬形埴輪12~17、鉄刀18を図示した(図69・70)。

須恵器杯および蓋は天井部に丸みがあり、裾近くまで回転ヘラケズリが及び、口縁端部は凹む。TK

23型式に属する。5は口径19.5cm、器高31.8cmあり、体部は平行(擬格子)タタキで整形された後、カキメが施される。6は台付壺である。体部上半にカキメを施し、底部を平行(擬格子)タタキで整形した後、脚部を接合している。口縁部は稜で文様帯がつくられ、波状文が施される。また、脚部は2条一組の稜で文様帯がつくられ、その間に波状文を施し、三角形のスカシが穿たれる。7は口径22.8cm、残存高33cmあり、口縁部には櫛描波状文が施される。体部外

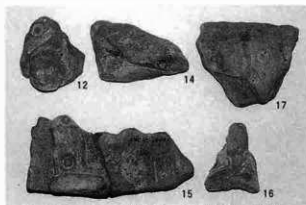


写真10 NG84-25次長原113号墳出土馬形埴輪

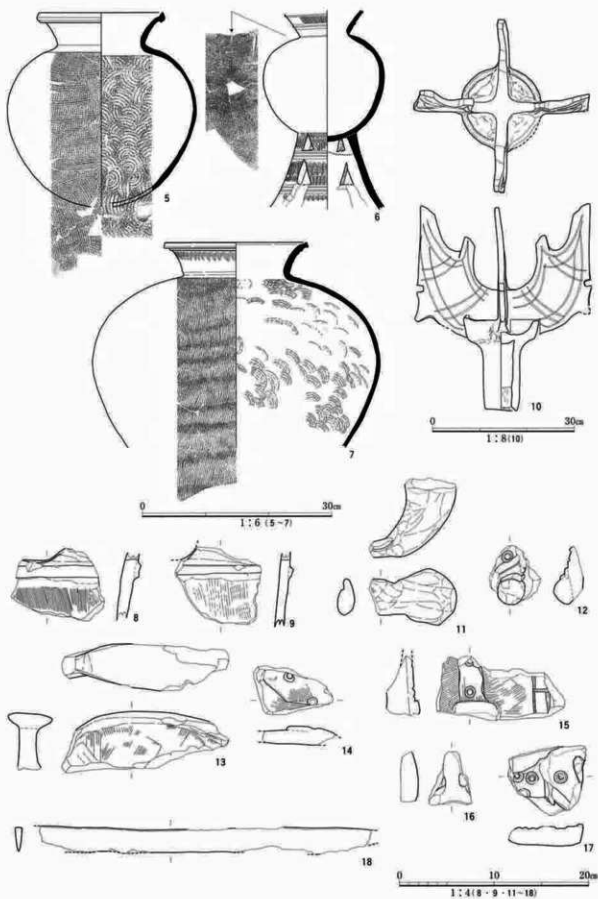


图69 NG84-25次A区长原113号墳出土遺物

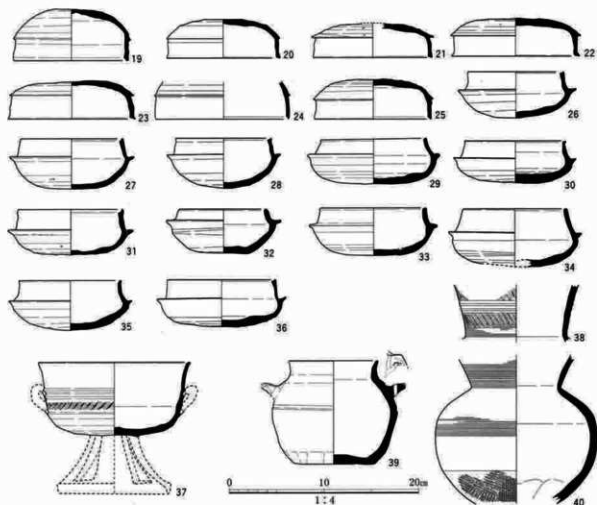


図70 NG84-25次A区古墳出土遺物

113号墳(19・20・26～28)、114号墳(29～31)、115号墳(21～23・32～35)、114・115号墳上(37)、116号墳(24・38)、117号墳(25・36・39・40)

面には平行タタキが施され、内面は同心円の当て具痕跡をナデ消している。なお、この甕の破片の一部は、約30m北西の長原116号墳からも出土した。

8・9はタテハケ調整が外面に見られる。10はほぼ完形に残る衣蓋形埴輪の立飾りである。内側と外側にひとつずつ鯨飾りが付き、外形に沿って2条の線刻を施した後、その内側を2条の線刻で3分している。11は人物埴輪の腕の部分である。

12～17は馬形埴輪の破片で、12以外は遊離資料であるが、本古墳に伴う可能性が高いため、ここに掲載した(写真10)。13は蟹で断面がT字形を呈する。12は鈴、14は障泥、15・16は鐙の表現がある。17は雲珠を突帯と竹管文で表現しており、中央に円孔がある。

鉄刀18は残存長35.0cm、幅2.8cmある。腐食が進行しているために細部の観察が困難であるが、切先は図の右側、刃部は下側にあったと思われる。断面は残存状況から判断した推定である。

以上の遺物から本古墳は長原3期に位置づけられる。

長原114号墳：一辺が4.5～5mの方墳で、周溝の幅は2mである。周溝から須恵器杯身29～31が出土した(図70)。29は口縁端部が丸く仕上げられ、ON46段階のものであろう。また、30・31は

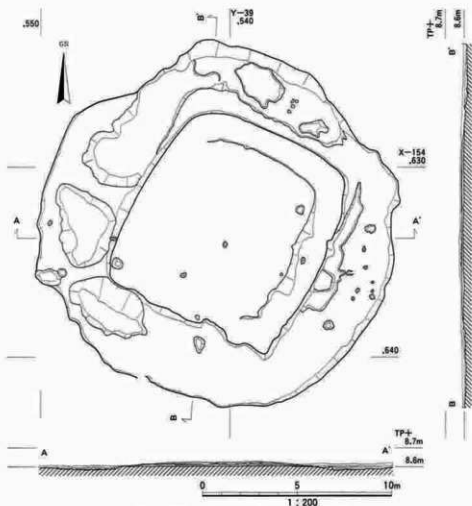


図72 NG84-25次A区長原117号墳実測図

長原118・119号墳：調査地に周溝しかかかっていないため、詳細は不明である。

SD701・702：上記の古墳群の中を通り抜ける平行した2条の溝である(図67)。溝の間隔は5mあり、道路側溝の可能性がある。

なお、調査地の南西部や北東部で東西方向の短い溝が南北に並んでいる個所(SX701・702)がある(図67)。調査時には検討されていないが、後述するNG89-36次調査のSX703のような道路状遺構であった可能性がある(図93左)。

NG86-91次調査

現代盛土・旧耕土を除去し、排水用側溝を掘削した時点で、調査区北西隅に古墳(長原166号墳)の存在することが判明した(図73・図版13上)。調査が進むにつれ、墳丘の遺存状態が良好でかつ、主体部に副葬された鉄器・須恵器の一部が調査区外へ続くことから、調査範囲を南・西側へ拡張した。

墳丘はその上部が後世の水田耕作等によって削られ、元の形状を正確に留めていないが、周溝内の埋土を取り除くと、墳丘の辺およびコーナーが明瞭に検出できた。墳形は方墳と考えられ、一辺の長さは7m以上である墳丘の外側には幅約3m、深さ0.2~0.3mの周溝が巡るが、コーナー部分の形状は墳丘基底部はどシャープでなく、隅丸である。墳丘の高さは上面が削られているため不明であるが、

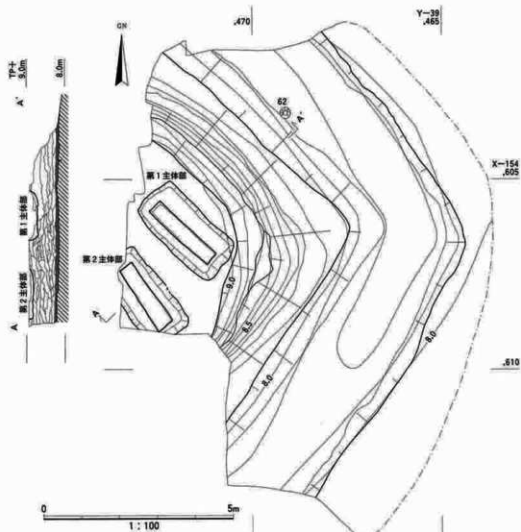


图73 NG86-91次長原166号墳実測図

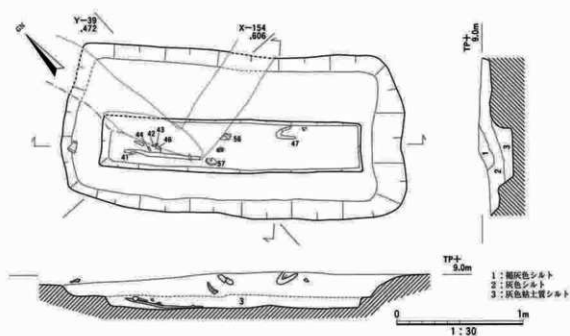


图74 NG86-91次長原166号墳第1主体部実測図

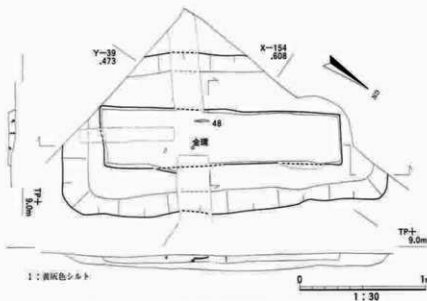


図75 NG86-91次長原166号墳第2主体部実測図

不整形な長方形を呈する(図74・図版13中)。墓壇内を慎重に掘下げるとU字形鉄先47・須恵器片が出土し、約0.1m程度の深さで棺の痕跡を確認した。U字形鉄先は棺外副葬であり、棺の腐朽で陥没したために出土状況が斜めに傾いていたと思われる。

棺の大きさは長さ約2.1m、幅約0.4mを測る。検出できた棺痕跡は、断面の観察からほぼ棺底と考えられ、棺内からは鉄製の斧41~43、手鎌44、鋤先45、不明鉄製品46、剣が出土した(図76・写真11)。

41は長さ2.9cm、刃部幅1.5cm、袋部幅0.7cmである。袋部の内側の長径は0.4cmしかないにもかかわらず、木質が残っていることから、本来は柄が挿入されていたと思われる。42は長さ3.0cm、刃部幅2.1cm、袋部幅0.9cmである。袋部には木質の痕跡はないが、袋部内面は滑らかな面を有することから本来は柄が挿入されていた可能性がある。以上の2点については明瞭な刃は作りだされておらず、普

通の袋状鉄斧よりもきわめて小さいことから、非実用品であったと考えられる。

43は長さ4.8cm、復元刃部幅2.0cm、袋部幅1.0cmである。袋部内面には木質が残っていることから、柄が挿入されていたと思われる。腐食が進んでいるため刃部が作りだされているかどうかはわからなかったが、大きさから実用品であった可能性も残される[関川尚功1987]。

44は刃部は残っておらず、幅3.6cm、残存長1.8cmで、袋部に木質が残る。ミニチュアの鋤先の可能性も残る。45は幅3.2cm、長さ2.9cmあり、袋部に木質が残る。非常に小さいため、非実用であっ

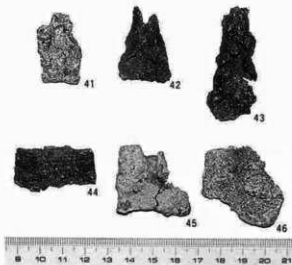


写真11 長原166号墳第1主体部出土鉄製品

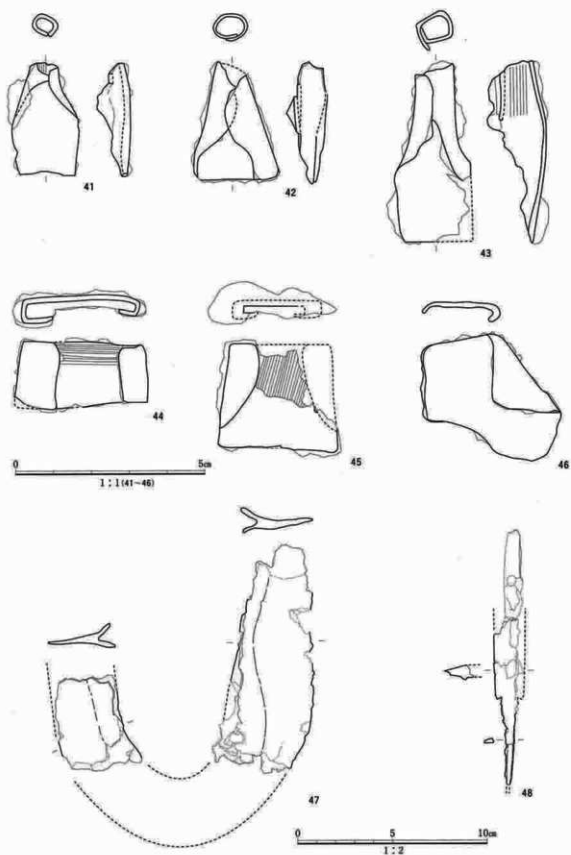


图76 NG86-91次長原166号墳出土鉄製品
第1主体部(41~47)、第2主体部(48)



写真12 長原166号墳第2主体部金環出土状況

たと思われる。

46は折返しのある鉄製品で、曲刃鎌の柄を挿入する部分の可能性がある。

鉄剣は出土時には長さ60cmあまりあったが、残存状況がきわめて悪かったため、取り上げることができなかった。

U字形鉄先47は出土時はほぼ完形であったが、腐食が進んでいたためうまく取り上げることができなかった。本来は長さ15cm、幅13cm程度の大

きさで、きれいなU字形を呈するものであった。内縁に着柄溝があり、断面Y字形を呈する。

第2主体部は第1主体部の南西に平行して存在する(図75)。墓竈の一部は調査区外に出ているが、長さ約2.5m、幅1.3mある。棺の痕跡は墓竈のほぼ中央に位置し、長さ1.8m、幅0.4～0.5mである。棺内のほぼ中央からは金環(写真12)・鉄鎌48がそれぞれ1点ずつ出土した。

48は残存長11.5cm、推定元幅2.0cm、最大厚0.8cmあり、切先と茎尻は残っていない(図76)。逆刺があり、逆刺の下は筥被と思われる膨らみがあり、茎に続く。出土状況から図のように復元した。

以上の2基の主体部は、検出された墳丘上面の端に位置する。墳丘の中心が確定できないため推定の域を出ないが、中心となるべき主体部が調査区外に存在する可能性がある。なお、主体部から人骨・歯が見つからなかったため、頭位方向は不明である。

古墳に伴う土器と考えられるものは、墳丘上面・主体部上・墳丘斜面および周溝から出土した。そのほとんどが須恵器で、若干の埴輪片と韓式系土器の鍋62が含まれる(図77)。

第1主体部直上の窪みからは須恵器筒形器台の口縁部56および脚部57が出土した。56は口径16.3cm、頸部径5.2cmある。2条と1条の稜で文様帯が作られ、櫛描波状文が施される。壺の可能性もあるが、頸部の締まりがきついため、前述のとおり筒形器台の口縁部と考えた。57は2条の稜で文様帯が区分され、波状文が施される。また、下から2段目には長方形の、3段目には円形のスカシが施される。残存部分が少ないので断定はできないが、長方形スカシと円形スカシはそれぞれ交互に8方向に存在したと思われる。脚部から約8cmの高さのところさらに内傾することから、これより上の部分は脚部の付根が括れて円筒部に移行するであろう。56と57について胎土や焼成が類似することから同一個体の可能性もある。

第2主体部直上からは須恵器壺53が出土した。口頸部は稜によって3分され、櫛描波状文が施される。肩部は凹線で文様帯が分けられ、肩部に櫛描列点文、それ以下の文様帯に櫛描波状文が施される。

墳丘上からは須恵器杯50・同蓋49が出土した。49は天井部に手持ちのヘラケズリを施した後に、ナデが施される。50の底部は回転ヘラケズリである。いずれも口縁端部は丸く仕上げられる。

周溝からは様々な器種の須恵器や韓式系土器が出土した。

須恵器杯52・同蓋51はいずれも底部・天井部が手持ちヘラケズリである。

54は壺の口縁部である。外面はヨコナデで仕上げられる前に縦方向の平行タキが施されている。

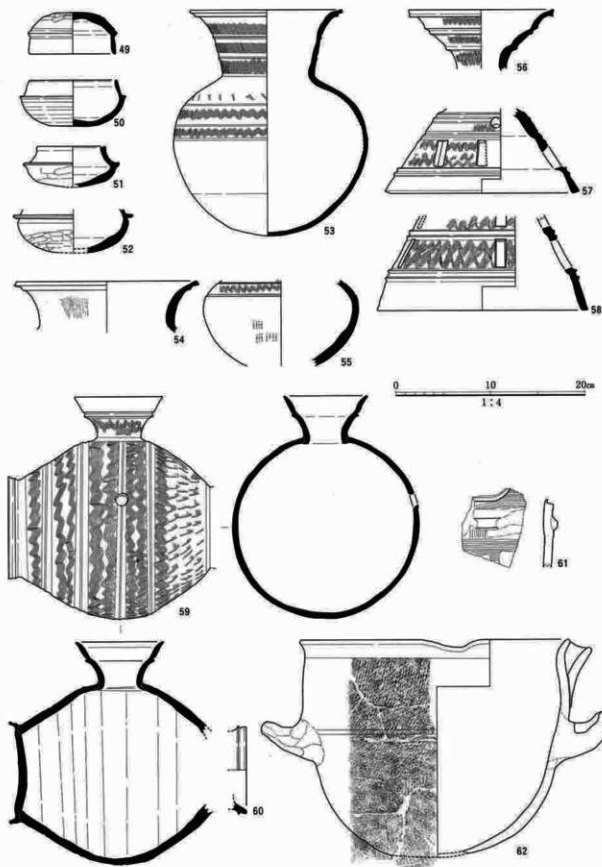


图77 NG86—91次長原166号墳出土須恵器

第1主体部直上(49・50)、第2主体部直上(53)。周溝(51・52・54・62)

周溝内ではこれ以外に外面に縦方向の平行タタキが施され、内面は強いナデで仕上げられる壺・甕の破片が多数出土したが、復元できなかったため図化しなかった。

55は壺の体部で、甕の可能性もある。肩部に凹線が2条施され、その間に櫛描波状文が施される。体部下半はヨコナデで仕上げられているが、部分的に縦方向の平行タタキの痕跡が見られる。

58は器台の脚部である。脚径が22.2cmあり、脚裾から直立に近い角度で立ち上がり、内傾して伸びる。2条の稜によって文様帯が区分され、波状文が施された後、5方向に方形スカシが施される。

59はほぼ完形に復元できる樽形甕である。体部については図の向って右側の方が器壁が厚く、内面にユビオサエが多く残る。外面には櫛描波状文が施された後、2条の凹線で区切って文様帯がつくられている。波状文については切合いが確認できる箇所はすべて右側が左側に切られている。また、波状文が施されていない右側には櫛描列点文が施される。この櫛描列点文は波状文を切っていて、列点文同士では切合いのわかる箇所はすべて左側が右側に切られる。また、右側を下にした場合、列点文は時計回りの方向に施されている。なお、左側は胴部の擬口縁を含めて覆うように円板が接合され、縁には稜をもつ。口縁部は中央を円形に切り取って接合されていて、頸部のナデは体部の波状文や凹線を切っている。二重口縁で、波状文が施されている。以上のことから、まず、図の右側を下にして中彫らみの円筒形の体部が成形され、波状文・凹線が施された後、倒立させて列点文が施されたことが推定される。そして、体部の一連の成形・施文が終わってから口縁部が取り付けられていることがわかる。

60も樽形甕の左右いずれかの端である。色調や焼成が59と異なるため、本古墳には少なくとも2個体の樽形甕が供献されていたことがわかる。

円筒埴輪61はヨコハケで仕上げられて、窖窯焼成である。内面にはベンガラと思われる赤色顔料が付着する。川西福年のⅣ期のものである。なお、この古墳から出た埴輪は非常に少なく、61自体は本古墳に本来伴っていなかった可能性が高い。

韓式系土器鍋62は周溝で口縁部が下を向いて、つぶれた状態で出土した(図版13下)。短い口縁部をもち、正面には片口がある。体部には粗い縄文タタキが施される。体部に1条の凹線を巡らせた後、挿入によって把手を付けている。器壁は厚いところで1cm近くあり、砂粒を多く含む。

周溝内出土の須恵器には転落状況を示すものや、墳丘上のものと接合する例もある。墳丘斜面出土のものもあわせて、多くはもと墳丘上にあつたと推定できる。

以上の土器のうち、須恵器はTK73型式もしくはTK216型式に当るものである。したがって本墳の築造時期は5世紀中頃と考えて大過なからう。

NG84—25次B区

掘立柱建物・堅穴遺構・井戸・溝・土壌などの遺構が多数検出された(図78・図版9下)。

まず、調査時に認定することができた掘立柱建物は16棟ある(図79・80、表15)。16棟中12棟が竪柱建物で、非常に高い割合を示す。SB702がもっとも大きく、掘形の直径が0.8m前後、柱痕跡の直径が0.2～0.3mある(図版11上)。柱穴からの出土遺物は細片が多いが、SB703の柱穴からは完形近くに復元できる土師器高杯63が出土した(図81)。

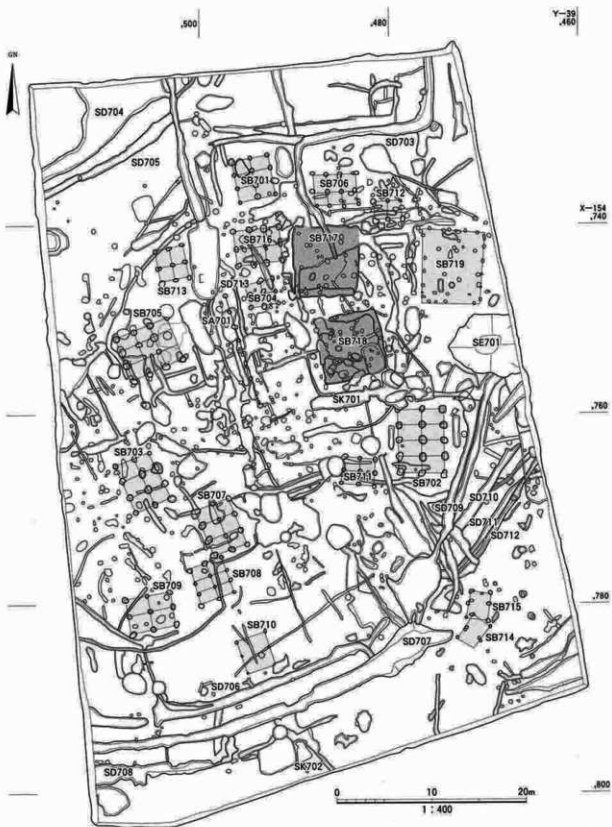


图78 NG84-25次B区古墳時代遺構配置図

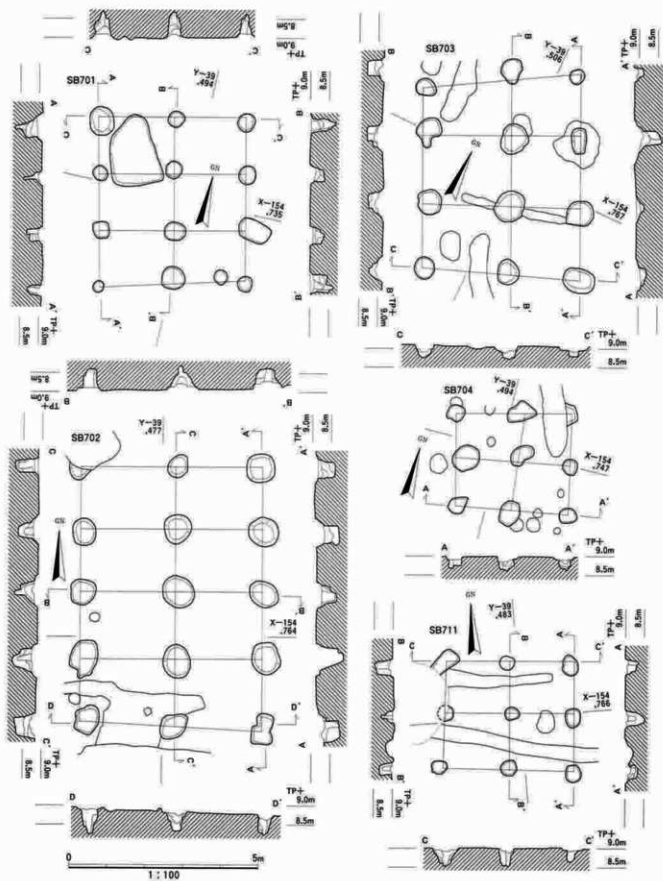


图79 NG84-25次B区掘立柱建物实测图(1)

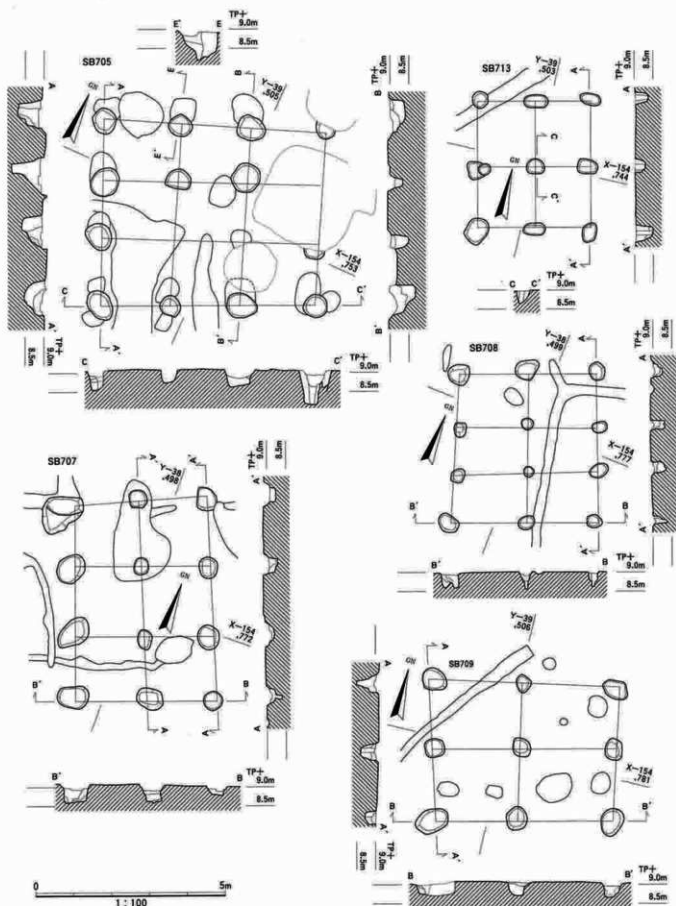


图80 NG84-25次B区掘立柱建物实测图(2)

表15 NG84-25次B区掘立柱建物一覧

遺跡番号	構造	桁行(間)	端間(間)	柱長(m)	梁長(m)	面積(m ²)
SB701	総柱	3	2	4.2	4.0	16.8
SB702	総柱	4	2	7.0	4.8	33.6
SB703	総柱	3	2	5.3	3.8	20.1
SB704	総柱	2	2	3.0	2.7	8.1
SB705	総柱	3	3	5.6	4.6	25.7
SB706	総柱	3	2	4.5	3.4	15.3
SB707	総柱	3	2	5.2	3.5	18.2
SB708	総柱	3	2	4.0	3.8	15.2
SB709	総柱	2	2	4.5	4.0	18.0
SB710	側柱	2	1	3.4	3.0	10.2
SB711	総柱	2	2	3.5	2.8	9.8
SB712	側柱	2	1	3.0	2.0	6.0
SB713	総柱	2	2	3.4	2.8	9.5
SB714	側柱	2	1	3.0	2.0	6.0
SB715	側柱	2	1	3.0	2.2	6.6
SB716	総柱	3	2	4.8	3.5	16.8

SB717・718は調査時は認識できなかったが、方形に窪んでいるため、堅穴住居の可能性はある。

SB717は南北7.4m、東西7.0m、SB718は一辺7.0mである。いずれも主柱穴は確認されていない。

SB719は直径0.2m前後、深さ0.3~0.4mの柱穴が約1m間隔で並び、大きさは南北7.2m、東西6.2mある。何らかの建物の可能性はあるが、調査時に建物として認識されていなかったため、断面などの記録はない。ただ、[花田勝弘2002：p.255]で指摘されているように、大壁建物になる可能性がある。

このほか、柱穴は多数検出された。SA701のようにまっすぐ並ぶものは槽になる可能性がある。

溝は多数検出された。この中でSD706~712は平行して弧状に延び、建物群の南側を画する溝の可能性が高い(図版11中)。

また、SD703~705についても、これらの溝の北側で遺構が希薄になることから、北を画する溝であったと考えられる。このほか、L字状に曲がったり、まっすぐ延びたりする溝が数多くあるが、ほかの遺構とともに密集して検出されたため、性格はわからない。出土遺物にはSD704から須恵器高杯71、SD705から須恵器杯身67、SD707から須恵器杯身68・製埴土器74、SD709から須恵器高杯蓋69が出土した(図81)。74は碗形を呈し、紀伊産と考えられる[高橋工1994]。

土壌は円形や楕円形などさまざまな形状のものが多数検出された。SB702の北側にあるSK701はいくつもの土壌が重なって一つになったものである。部分的に炭や焼土がたくさん含まれていた。SK702は調査地の一番南にある土壌で、須恵器杯身66・有蓋高杯72が出土した(図81)。

井戸SE701はSB719の南側で検出された(図82・図版11下)。上端は直径約6mの不整円形で、深さは約4mある。井戸の埋土からは多量の土師器・須恵器・木製品が出土し、土師器壺75・76、甕77

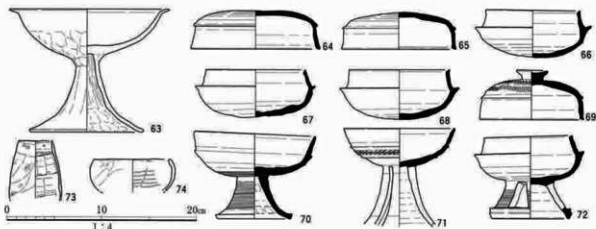


図81 NG84-25次B区古墳時代出土遺物

SB703(63)、SK702(66・72)、SD709(69)、SD704(71)、SD705(67)、SD707(68・74)、長原7B墳(64・65・70・73)

～87、須恵器壺88・89、榎材90、扉材91を图示した(図83・84)。

75・76は体部の割に口縁部が長いという点で壺としたが、共存している甕に形態に近い。78は他の甕に比べ、口縁部が短く、ハケも粗いが、器面が荒れているため細部の調整は観察できない。79～87は同じような形態を呈する。この中で81～85は内面にヘラケズリが施されるが、それ以外はハケが、一部はハケのちユビオサエが施されている。

88・89は同じような形をした須恵器壺である。89の体部については、上半に平行(擬格子)タタキを施してから、カキメ調整を行った後、底部に平行(擬格子)タタキが施される。内

面は体部上半から最大径にかけて同心円の当て具痕跡があり、底部のユビオサエが当て具痕跡を切っている。このユビオサエは底部タタキの際に付いたと思われる。(寺井)

90は全長140.5cm、幅15～16cmの板材で、片面のほぼ中央に突起(全長81.5cm、幅3.5cm)を造出し、断面はT字型を呈する。この突起の長手方向両端にはそれぞれ枘穴があるが、形状が異なる。片方は突起の幅と同じ大きさの平面長方形の枘穴(13cm×2.8cm、深さ2.3cm)が突起の端に接して貫通せずに開けられ、もう片方は突起端部上面中央に長さ10.5cm、幅1.5cm、深さ1.5cmの枘穴が貫通せずに穿たれる。またそれら枘穴に接するように、突起の片側に直径4.5～5.5cmの軸吊穴2つが内法間隔61.4cmで開けられており、いずれも貫通している。軸吊穴は突起に食い込んでおり、その部分は直線となっている。板全体の厚みは突起の両側で異なり、軸吊穴のあるほうで2cm(端部)、反対側では突起から材端部に向かって徐々に薄くなり、端部で3.5cmである。突起の板からの立ち上がりは、軸吊穴のあるほうで2.4cm、反対側が1.0cmである。この材は扉の榎材と考えられる[宮本長二郎1996：pp.363～366]。両開きの扉を吊りこみ、扉左右に方立が取り付けかたちであろう。問題はその方立の仕口が左右で異なることであるが、その理由についてはよくわからない。突起上面に枘穴がある形式が元来のもので、もう一方は破損などによってその部分を新たに造り替えた可能性が考えられる。また、通

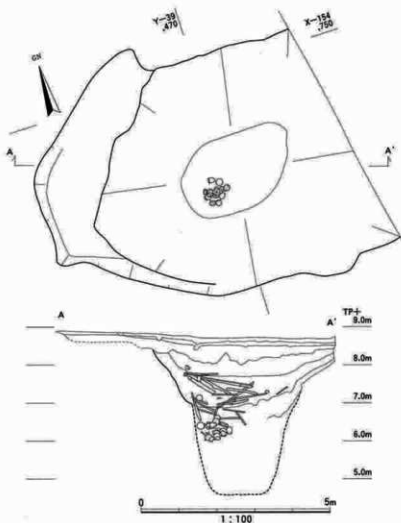


図82 NG84-25次B区SE701実測図

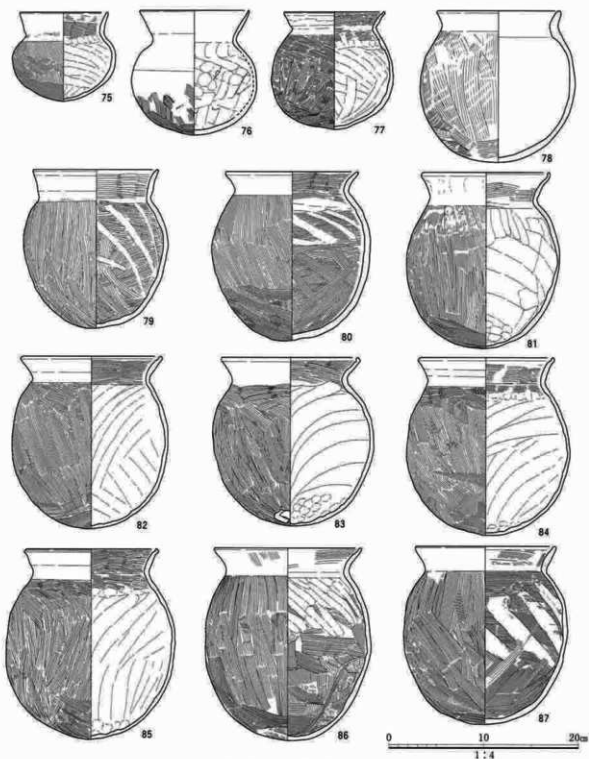


図83 NG84-25次B区SE701出土土師器

常の匣材では材の両端に欠込仕口のある例が多いが、この材にはない。かわりに材の長辺片側両端部を斜めに、もう片側を円弧状に削いており、これが壁や柱などの取付きにかかわる仕事になる可能性があるが、詳細は不明である。

91は匣材である。残存長66.5cm、幅34.3~34.7cmの一本からなる匣材で、一方に扉軸を造り出す。扉の厚さは軸側が2.3cm、端部が1.2cmである。扉軸の長さは7.3cm、軸径は根元側で長径3cm、短径

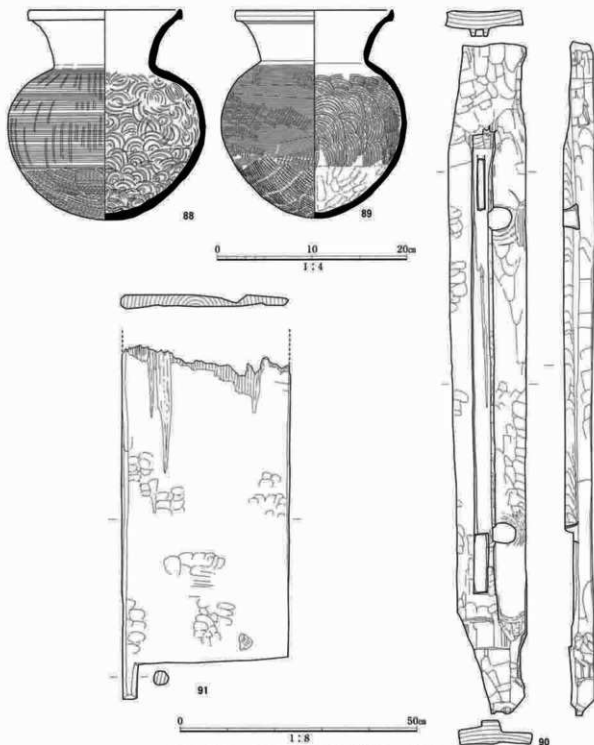


図84 NG84-25次B区SE701出土須恵器・木製品

2.5cmの楕円形である。門受けなどは造り出さない[松岡良憲1997]。扉の幅は完存しており、両開きであったとすると、軸径を除いた全幅は約62～63cmとなり、上記の柳材90の軸吊穴内法寸法とほぼ合致する。この点から、両材は同一の建物に用いられた可能性が高いと考えられる。(李)

また、長原7Bi層からは須恵器杯蓋64・65、無蓋高杯70、製塩土器73が出土した(図81)。64・65はTK208型式で、集落域の時期の上限を示すものと思われる。73は大阪湾岸系のものである。

NG89-36次調査

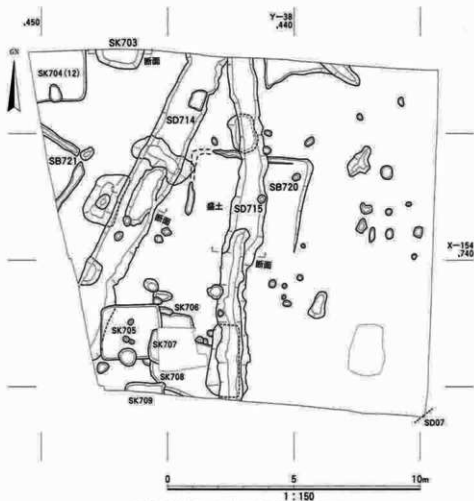


図85 NG89-36次古墳時代遺構配置図

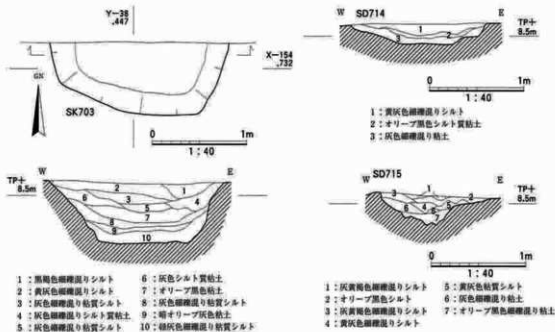


図86 NG89-36次古墳時代遺構断面図

竪穴住居・溝・土壌が検出された(図85・図版14上)。

SB720：東西4.2m、南北3.5m以上の竪穴住居と思われる遺構である。北側と西側には周壁溝が残っていたが、柱穴や炉・竈といった施設は見つからなかった。中央をSD713に切られている。

SB721：幅が0.2m程度、深さは0.1m未満の溝が直交する方向に延びていることから、竪穴住居の周壁溝の可能性を考えた。これらの溝で囲われた範囲で、0.5m四方で40点あまりの白玉が集中して出土した地点があった。

SD714・715：SD714は幅1.7m、深さ0.2mの南西―北東方向に、SD715は幅1.3m、深さ0.2mの南北方向に延びる(図86)。SD714はSD715に切られることから、SD714が先行する。SD715からTK23型式に該当する須恵器有蓋高杯93が出土した(図87)。なお、SD714はNG84―25次B区のSD709

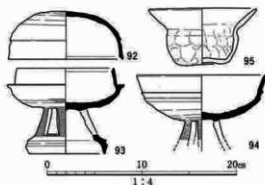


図87 NG89-36次出土遺物
SK705(92)、SD715(93)、長原7B層(95)、長原7A層(94)

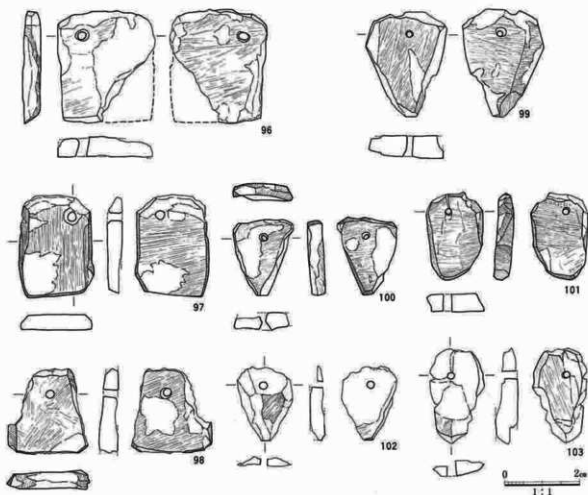


図88 NG89-36次出土滑石製品実測図(1)

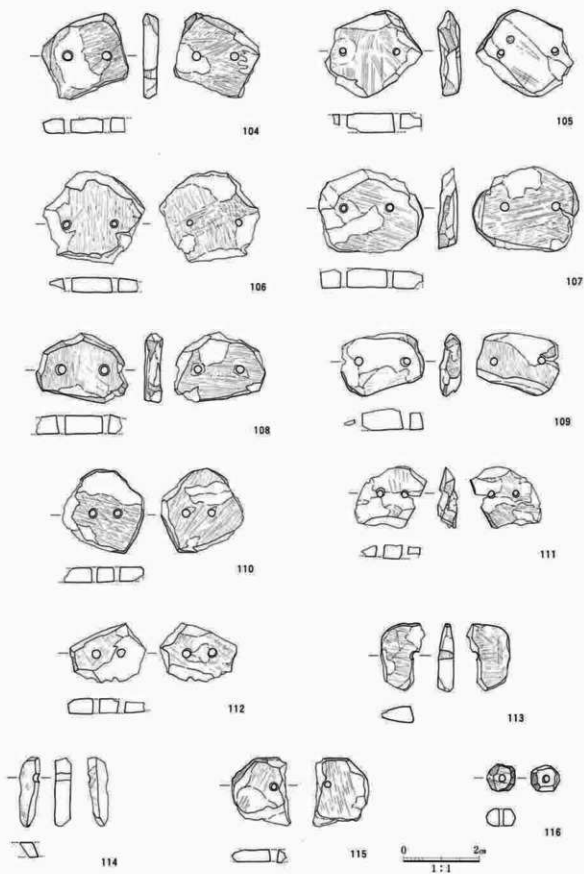


图89 NG89-36次出土滑石製品実測図(2)

～712と方向が等しく、SD715についてもこれより東側で遺構が少ないことから、いずれも集落を区画する溝と考えられる。

SK703：調査地北西部で検出され、北側は調査地外に拡がる(図86)。深さは0.6mある。

SK704～709：いずれも方形の浅い土坑である。SK705からTK23型式に該当する須恵器杯蓋92が出土した(図87)。

なお、このほか長原7B層から土師器壺95、長原7Ai層からはTK47型式に該当する須恵器無蓋高杯94が出土した(図87)。95は完形で、口縁部が大きく広がり、体部にはユビオサエが明瞭に残る。

本調査地で注目されるのは滑石製品の多さである。斧形3点(96～98)、剣形5点(99～103)、双孔円板12点(104～115)、白玉105点(116など)あり、114については剣・斧形の可能性もある(図88・89)。剣形・斧形および双孔円板についてはいずれも長原7Ai層から出土したものであるが、表裏両面を一定方向に研磨し、側面は縦方向に面取りしていることから、当調査地で出土しているTK23もしくは47型式に併行する時期のものと思われる。白玉は前述のとおり、SB721など古墳時代中期の遺構や包含層から多く出土した。直径が0.4～0.6cm、厚さが0.2～0.4cmあり、大きさにばらつきがある(図90)。

NG90—66次調査

A区中央で土坑SK710が検出された(図94)。南北5m、東西2m以上の不整形で、深さは0.2mある。TK47もしくはMT15型式の須恵器片が出土した。

c. 飛鳥～奈良時代の遺構と遺物

NG84—25次A区

長原5層に覆われていたため、長原6Ai層準の水田および畦畔が良好な状態で検出された(図91、図版12上・中)。畦畔は幅0.4～0.6m、高さ0.1mあり、基本的に正方位に延び、古墳に接続する部分だけ不規則になる。水田面は南東が高く、北西が低い。

NG84—25次B区

長原5層が残っていたのが東端のみであったため、水田もこの範囲でしか検出されなかった。また、調査地南東部の畦畔に区画された中に盛土遺構SX601が存在する(図91・図版12下)。

SX601は直径約5m、高さ0.4mあり、黄褐色細粒砂やシルトの偽礫で構成される。盛土中から土師器壺118・片口鉢119が出土した(図95)。118の外面はユビオサエで仕上げられる。119は内面に放射状の暗文が施されているが、全体的に器面が荒れているために暗文の構成や外面の調整はわからない。119については飛鳥Ⅲに属すると思われる、当遺構の年代も7世紀後半に位置づけられる。

NG86—91次調査

直交する2条の畦畔SR601・602が検出された(図92)。SR601は長原166号墳の墳丘コーナーに取り付き、2箇所にも水口が付く。それぞれの畦畔は幅0.8m、高さ0.1mである。

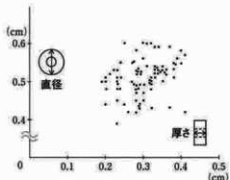


図90 NG89—36次出土白玉計測値

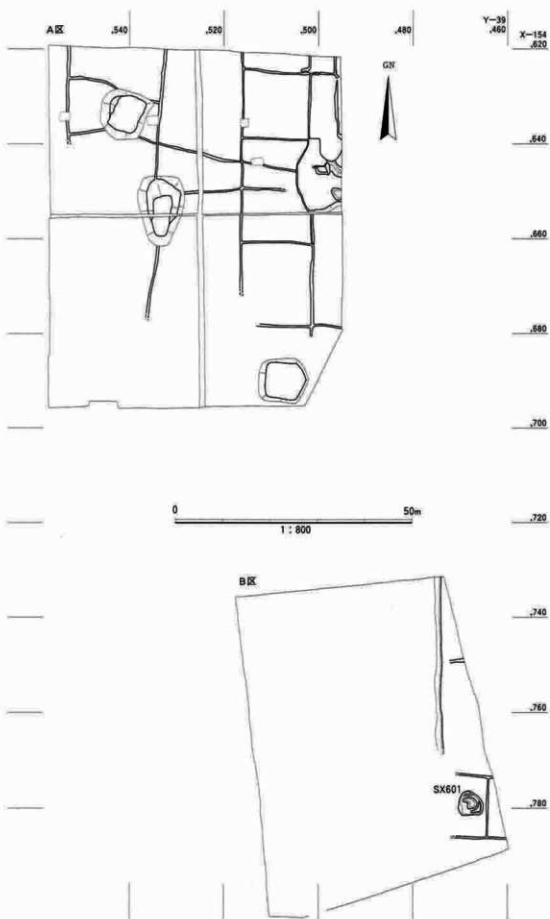


图91 NG84-25次奈食時代水田平面图

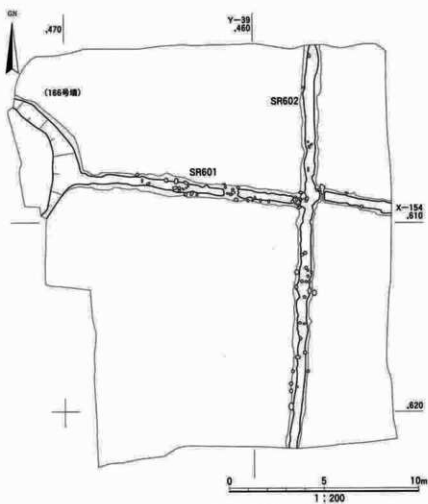


図92 NG86-91次奈良時代水田平面図

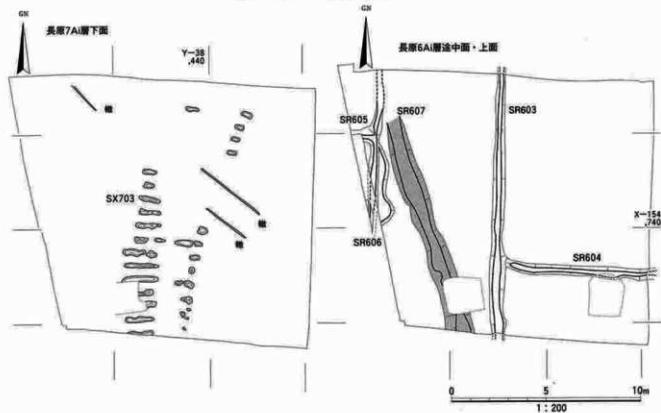


図93 NG89-36次飛鳥・奈良時代遺構配置図

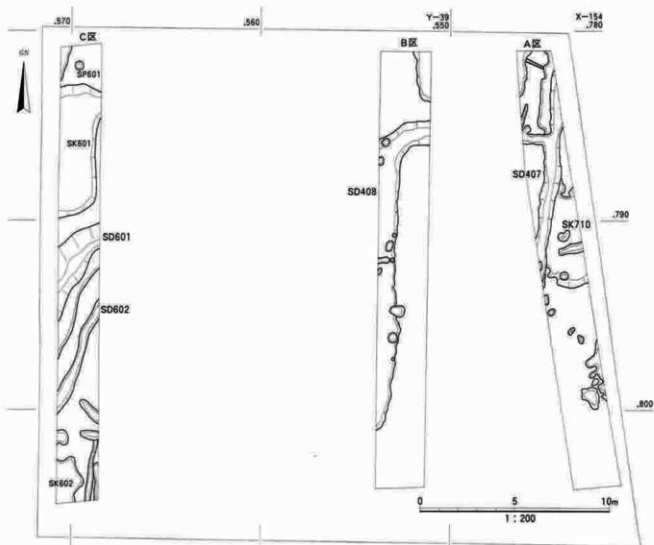


图94 NG90-66次遺構配置図

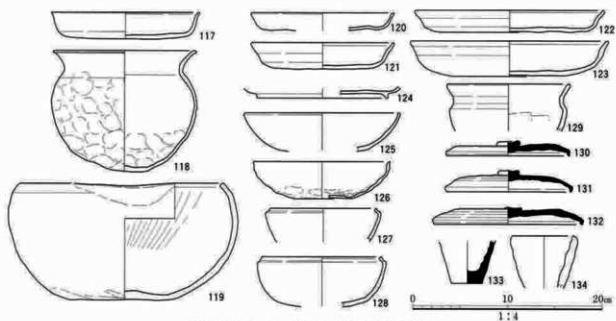


图95 NG84-25・89-36・90-66次出土遺物

NG84-25次SX601(118・119)、NG89-36次長原5層(117)、NG90-66次SD601(120~134)

NG89-36次調査

長原7Ai層下面で短い溝群SX703と車輪の轍が検出された(図93左・図版14中)。前者は東西方向の溝が縦一列に平行して並んでいるため、調査時は畝跡と考えられた。ただ、一定の幅で短い溝が並んでいることから、[京嶋覚2001b]で指摘されているような道路状遺構の可能性もある。

轍は長原7Ai層を切っていて、南東-北西方向に延びる。2条の轍の間隔は1.5mである。

長原6Ai層途中面では畦畔SR603~606が検出された(図93右)。いずれもほぼ正方位に延びる。これらは長原6Ai層の削り残しであり、長原6Ai層準と理解できる。

また、長原6Ai層上面では上記の畦畔とは方向が異なる畦畔SR607が検出された。この畦畔は長原6Ai層上に盛土して作られていることから、長原6Ai層準で水田が作り直されたことを示していると思われる。

なお、本調査地の長原5層からは土師器杯A117が出土した(図95)。117は口縁端部が内側に肥厚し、内面に暗文は見られない。平城宮土器Vに位置づけられる。

NG90-66次調査

C区で奈良時代の溝SD601・602、土壌SK601・602、柱穴SP601が検出された(図94)。

SD601は南西-北東方向に延びる溝で、幅約2m、深さ0.3mある。埋土下層は水成堆積である。

出土遺物には土師器杯A120・121、皿A122・123、皿B124、椀125・126、鉢127・128、壺129、須恵器杯B蓋130~132、壺133、製塩土器134がある(図95)。120~123は口縁端部が弱く外反し、端部が内側に弱く肥厚する。いずれも暗文はない。130~132は全体的に器高が低く、口縁端部が外反しない。133の底部には糸切り痕が残る。これらの遺物はおおむね平城宮土器VIに位置づけられる。

d. 鎌倉時代の遺構と遺物

NG84-25次B区

長原4B層を作土とする水田が検出された(図96)。畦畔は東西方向、もしくは南北方向に延びる。東半は削平が進んでいて、畦畔の残りが悪かった。

NG89-36次調査

長原4B層(図65の第4b層)下面で溝SD401~406、同層基底面で井戸SE401、土壌SK401~403が検出された(図97)。

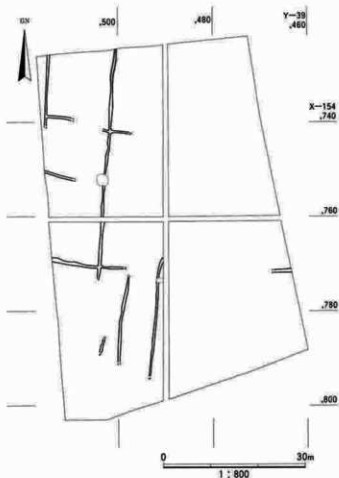


図96 NG84-25次B区鎌倉時代水田平面図

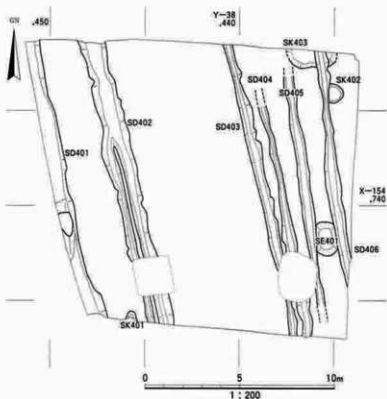


図97 NG89-36次鎌倉時代遺構配置図

SD401～406は幅0.5～0.8mあるが、深さは0.1m未満である。北から約15°西に振った方向に延びる。耕作関係のものであろう。

SE401は掘形が直径0.9m程度で、底に曲物が2段残っていた(図98)。深さは約0.7mで、当地の長原5層の下面よりやや下のレベルになる。

土壌SK401～403はいずれも深さ0.1m程度の浅いものである。

NG90-66次調査

A区ではほぼ南北方向に延びる溝SD407が検出された(図94・図版14下)。SD407には、SD408が直交して取付く。

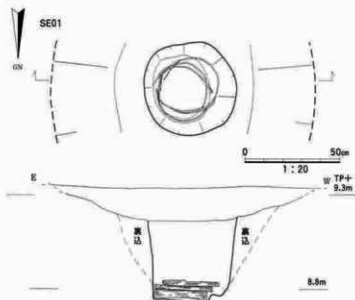


図98 NG89-36次SE401実測図

3) まとめ

本節で報告した地域は、古墳群と集落域が接する地域に当る(図99)。古墳は本節で報告した8基のほかに、110～112・197号墳も存在する[大阪市文化財協会1992c: pp.77～90]。もっとも古い須恵器を出す古墳は、TK73もしくは216型式の166号墳であるが、その南東に位置するNG96-47次調査地のSX01についても同じ時期の須恵器がまともに出土していることから古墳の可能性が残される[大阪市文化財協会

1999f]。そして、これに続いてON46段階の114・115号墳、TK208型式の100・113号墳、TK23型式の111号墳が登場する。また、110・111号墳では円筒埴輪に加え、朝顔・衣蓋・家・馬などの形象埴輪が伴っており、113号墳と共通する。

長原166号墳においては、長原古墳群では珍しく主体部が2基検出された。主体部には金環や鉄剣・ミニチュアの鉄製農工具が副葬されており、被葬者の階層を推定する手掛りとなろう。

集落域では計21棟の掘立柱建物・堅穴住居が検出された。大体TK208型式以降の須恵器が多いこ

とから、古墳の造営と集落の営みに重なる時期があることがわかる。なお、集落域ではTK10型式の須恵器がもっとも新しく、6世紀中頃に断絶する。これは長原遺跡の「西ムラ」の終焉の時期でもある。

(寺井)

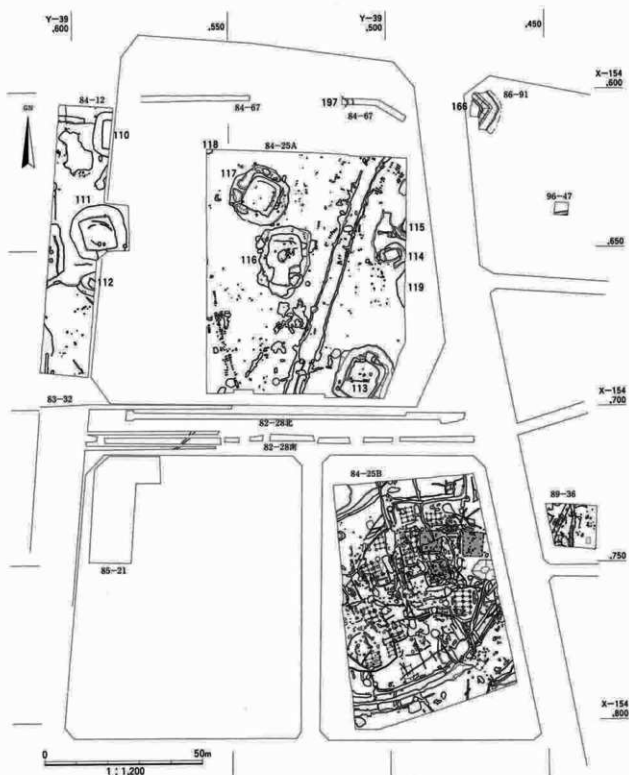


図99 NG84-25調査地周辺の古墳時代遺構配置図

第2節 NG91-70次およびその周辺の調査

1) 調査地と周辺の概要

本節では長吉長原西2丁目の東側に所在するNG89-15・91-70・93-14・93-80次調査を報告する(図100)。この一帯は1983年度や1985年度の土地区画整理事業に伴って多くの調査が実施されており、古墳時代中期や平安時代の集落跡が検出されている。

NG89-15次調査は当初は南北2m、東西40mのトレンチを2本設定して行っていたが、調査開始後まもなく、平安時代後期の掘立柱建物や区画溝が検出され、トレンチを拡張し、平面的な把握に努めた。その結果、畠作を想定しうような遺構も検出され、屋敷地内の土地利用を知るうえで良好な資料を得ることができた。

NG91-70次調査は試掘調査(NG91-38次)で遺構が検出され、調査に至った。予算の都合上、工事対象地全体の調査ができず、4本のトレンチを設定して調査が行われることとなった。その結果、古墳時代中期の集落関係遺構が検出された。

NG93-14次調査はマンション建設に先立って行われた。現代盛土を除去すると長原13層が露出し、古墳時代中期の掘立柱建物や溝が検出された。

NG93-80次調査は建物の基礎杭が打たれる部分に2本のトレンチを南北方向に設定して行われた(図114)。上記3調査とは異なって、地山が低くなり、長原2～7Bi層までの各層が残っていて、古墳時代の掘立柱建物や室町時代の東西方向の溝が検出された。



図100 NG91-70次などの調査地位置図

2) 調査の結果

i) 層序

当地区では、NG93-80次調査地以外の調査で現地表から浅いレベルで長原13層が検出された。NG93-80次調査地で標高が低いのは、「馬池谷」から延びた小さい谷が当地にかかっているためと思われる。図101・表16ではNG93-80次調査地の層序を示した。

ii) 遺構と遺物

a. 古墳時代の遺構と遺物

NG89-15次調査

SD701：北東-南西方向に延びる溝である(図102)。最大幅0.8mあり、方向的にNG83-53次調査

表16 NG93-80次層序表

層序	柱状層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	0	現代盛土	100					現代
2	2	オリブ灰色中礫細粒砂～細粒砂	20					江戸時代
3a	3	灰白色細粒砂	10	水成				室町時代
3b	3	灰黄色中～粗粒砂	10	水成				
3c	3	にぶい黄色含細礫シルト質細粒砂	10	作土		→水田・SD301	須恵器・土師器・瓦・瓦質土器	
3d	3	灰黄褐色含細礫細粒砂質シルト	10～20	作土				
4a	4A	暗い灰黄色細粒砂～細粒砂	10	水成				鎌倉時代
4b	4B	灰色含砂礫粘土	60					
4c	4C	灰オリブ色細粒砂～細粒砂	15	作土			土師器・原色土器	平安時代
5	5	灰オリブ色細粒砂～細粒砂	5	水成				奈良時代
6	6	暗灰黄色シルト質粘土	15	作土		▼SD601		
7	7B	灰黄褐色粘土質シルト	10			▼SB702-703, SK709		古墳時代
8	13	オリブ灰～灰白色粘土						旧石器時代

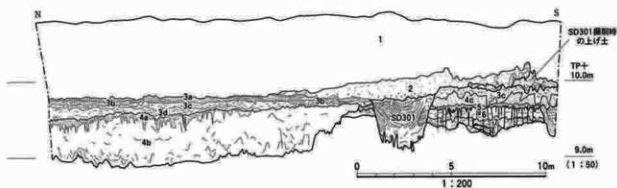


図101 NG93-80次2区東壁断面図

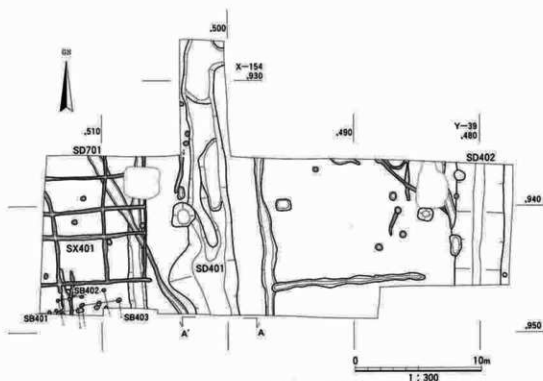


図102 NG89-15次古墳～鎌倉時代遺構配置図

地で古墳時代中期のSK37に切られる溝(註1)に繋がると思われる[大阪市文化財協会1992b]。

NG91-70次調査

長原4層基底面で土壌や井戸といった遺構が多数検出された(図103)。

SK701: I区壁際に検出されたため、全容は明らかでないが、直径2.1m、深さは0.15mほどの土壌で、埋土は灰色シルトである。須恵器把手付碗27が出土した(図104)。

SK702: 攪乱に当たっているため、全容はわからないが、東西約2.5m、深さ約0.1mで灰色シルトが埋土である。須恵器杯身25・把手付碗26が出土した(図104)。

SK703: IV区で検出され、拡張して全体を把握した。東西約5m、南北約4mで、中央部を長原2層下面の溝によって攪乱されており、もっとも深い部分で0.05mしかなく、遺存状況もよくなかった。埋土は黒色極細粒砂-シルトで、少量ではあるが焼土・炭を含んでいた。この落込み内では柱穴などは検出されなかった。土器の組合せや埋土の状況なども、同一調査地内にあるNG83-70次調査のSK39と類似している[大阪市文化財協会1992b: pp.80-86]。これらの土壌は埋土・土器の組成・住居跡に似た平面形態などの共通点があるが、その機能については明らかでない。

出土遺物には土師器甕5・8、甔9、須恵器杯身13・14、杯蓋10・12、有蓋高杯20・22、同蓋15・19、無蓋高杯23・24がある(図104)。5は口縁端部が上に面をもち、体部が張ることから、布留式の系譜を引くものである。10・14は口縁端部に面をもつ。10は天井部に丸みをもつことから、有蓋高

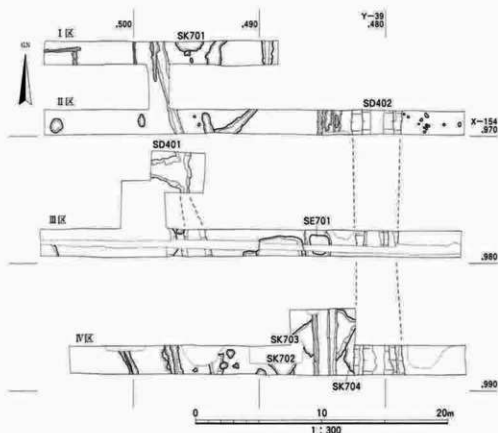


図103 NG91-70次古墳-平安時代遺構配置図

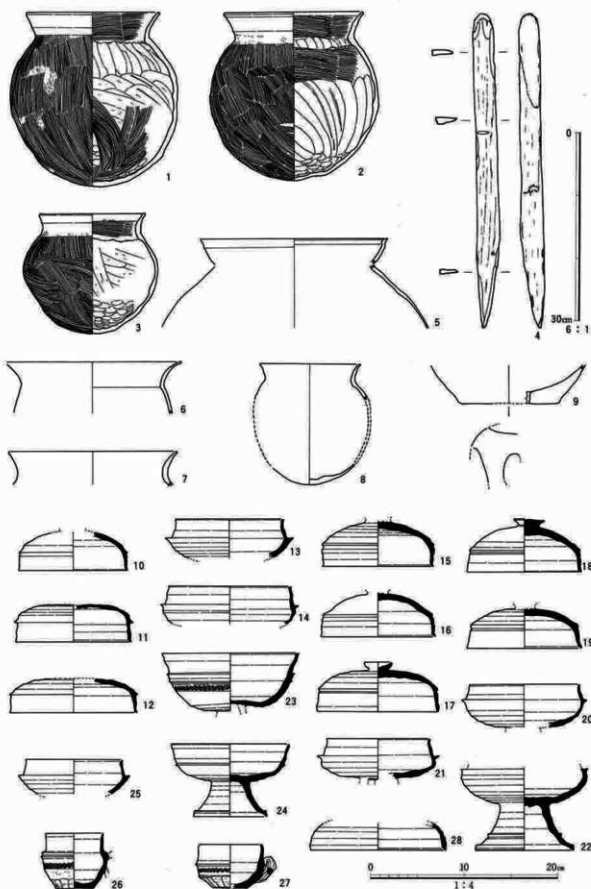


图104 NG91-70次出土遗物

SE701(1~4)、SK701(27)、SK702(25·26)、SK703(5~24)、SK704(28)

杯の蓋の可能性を残す。20・21には杯底部にスカシが穿たれた跡が残っているが、22～24にはない。これらの須恵器はON46段階の良好な一括資料である。

SE701：Ⅲ区の長原2層下面の溝の基底面で検出された(図105・図版15上)。直径1.65mある素掘りの井戸で、検出面より1.9mまで掘り下げたがそれ以上は危険と判断して掘削を断念した。検土杖を用いた探査によると深さは、検出面から約2.3mである。埋土はおおまかに上下2層に分けられた。下層は長原13～15層の偽礫で埋戻された層である。上層はラミナが顕著であることから自然に堆積した層である。しかし、上層の中にも長原13層に由来する大きな偽礫が含まれていることから、水漬きの状態で埋戻されたか、あるいは掘形の崩落があったものと考えられる。また、下層の上方からは完形の土師器甕1～3と剣形木製品4が出土した(図104)。1～3は体部外面を全面ハケで仕上げている。4は先端を尖らせて加工されている。

その他、SK704などでは6世紀に下る須恵器杯蓋28が出土した(図104)。本調査地の南側にあるNG85-16次のSD52[大阪市文化財協会1993a：pp.103-111]やNG86-41次のSE01[大阪市文化財協会1993b：pp.43-46]も同時期の遺構である。

NG93-14次調査

現代作土基底面で掘立柱建物や溝などが検出された(図106・図版15下)。

SB701：調査地中央部で検出された小型の掘立柱建物で、梁

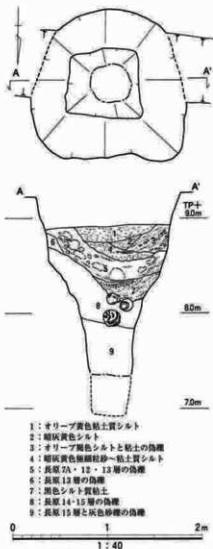


図105 NG91-70次SE701実測図

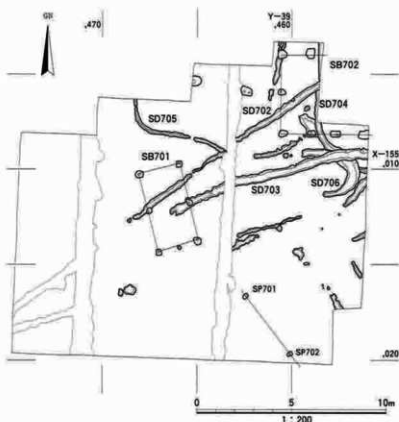


図106 NG93-14次古墳時代遺構配置図

行は2間(2.15m)、桁行は2間(4.25m)である。柱穴は一辺0.8m前後の隅丸方形で、深さは約0.2m、柱痕跡の直径は0.1mほどである。長軸の方位は北で西へ14°振る。

SB702:調査地北西隅で検出された掘立柱建物で、梁行は2間(4.2m)、桁行は3間(4.5m)以上である。柱穴は一辺0.5m程度で、深さ約0.4~0.5m、柱痕跡は0.1~0.15mほどである。長軸の方位はほぼ正東西である。

SD702:幅0.3m、深さ0.1mで、にぶい黄色極細粒砂を埋土とする。NG83-70次調査のSD37と一連のものである[大阪市文化財協会1992b:p.75]。

SD703:幅0.5m、深さ0.1mで、灰黄色極細粒砂を埋土とする。底面は凹凸が激しい。埋土や切合いからみてこの溝は溝群の中でもっとも新しい。

SD704:幅0.3m、深さ0.1mで、灰黄色粘土質極細粒砂を埋土とする。SD703に切られるが、本来は東に延びていたと思われる。

SD705:幅0.2m、深さ0.05mで、灰色極細粒砂を埋土とする。

SD706:幅0.8m、深さ0.15mで、灰黄色極細粒砂を埋土とし、馬蹄形の平面形態を有する。性格は不明である。

SP701・702:一辺0.3m、深さ0.35mの掘形をもつ柱穴で、NG85-16調査で検出されたSB03[大阪市文化財協会1993a:p.61]に柱筋がほぼ一致する(図115)。両者は一連の遺構である可能性があり、一連であればSB03は槽の可能性もある。

NG93-80次調査

西区の中央で掘立柱建物、南端で土壌が検出された(図107)。

SB703・704:いずれも掘立柱建物である。SB703は北東-南西方向に延び、2間(2.2m)×1間(1.1m)以上の規模である。SB704は北からやや西に振った方向に延び、南北2間(2.2m)以上、東西2間(2.0m)以上の規模である。

SK705:深さ0.2m程度の浅い窪みで、調査区外に広がる。焼土

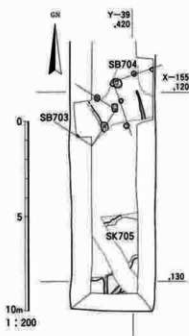


図107 NG93-80次古墳時代遺構配置図

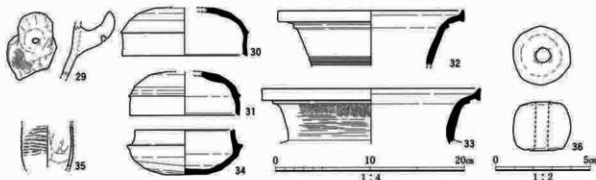


図108 NG93-80次出土遺物

SK705(29~33)、長原7B1層(34・35)、SD601(36)

や炭、スサを含む焼土塊とともに須恵器・土師器が出土し、土師器把手29、須恵器杯蓋30・31、甕32・33を図示した(図108)。

また、東区の南端では炭化物のラミナが数層にわたって堆積している部分があった。ここから須恵器杯身34、製塩土器35が出土した(図108)。34は底部が丸みを帯び、口縁部の端面はいまいな面をもつ。35は外面に横方向の平行タタキ、内面に縦方向のナデを施す。色調は暗灰色で、1mm大の砂粒を多く含む。

b. 飛鳥～奈良時代の遺構と遺物

NG93-80次調査

西区の長原6層基底面で溝SD601が検出された(図109・図版16上)。上端の幅1.2m、深さ0.7mのV字溝である。溝は、下層に細礫～極粗粒砂の水成層が薄く堆積したのち、ラミナの発達した粘土層で徐々に埋没し、最後に偽礫を多く含む埋土で埋められている。出土遺物はSK705を掘削した際に混入したと考えられるものがほとんどであり、遺構の明確な時期を決めることができなかったが、検出面や埋土から長原7A層準、もしくは6B層準と思われる。

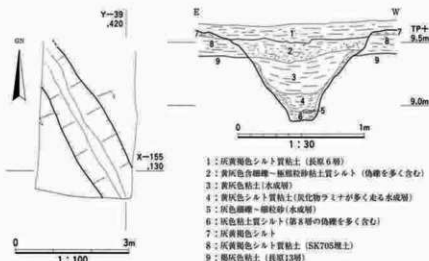


図109 NG93-80次西区SD601実測図

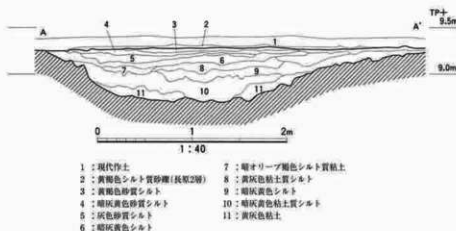


図110 NG89-15次SD401断面図

この溝の北側の延長上にはNG85-16次のSD32がある。もし、同一の溝であるならば、少なくとも45mにわたって延びることになる。

36はSD601下層から出土した須恵質の土製品である(図108)。最大径3.1cm、高さ2.5cmの上下の角がとれた円柱状のものであり、中央に径0.7cmの孔

がある。重さは31.16gである。土鍾の一種と思われる。

c. 平安～鎌倉時代の遺構と遺物

NG89-15・91-70次調査

区画溝や掘立柱建物、畠状遺構などの遺構が検出された(図

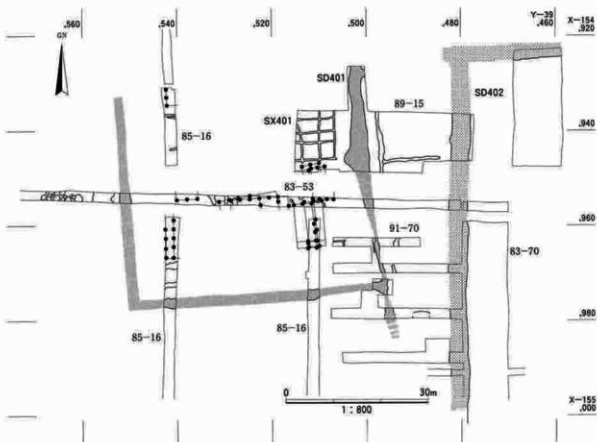


図111 NG89-15・91-70次調査地とその周辺の平安時代遺情配置図（〔大阪市文化財協会1993a〕の図92に加筆）

102・111、図版16中）。

SD401：両調査で検出された溝である（図110・111、図版16下）。NG83-53・85-16次調査でも一連の溝が検出され、53m四方の屋敷地を区画する溝と考えられる〔大阪市文化財協会1993a：p.129〕。この溝はNG89-15次調査地でもっとも残りがよく、幅3m、深さ0.6mあり、断面は逆台形を呈する。NG91-70次調査では既往の調査からⅡ・Ⅲ区で区画溝の隅が検出されると予想され、精査した結果、 $X=-154,972.9\text{m}$ 、 $Y=-39,496.3\text{m}$ の地点でやや西に鋭角に屈曲するのを確認できた。同Ⅲ区では南へも延びているのが確認されたが、Ⅳ区では検出されず、これ以南に延びないと考えられる。

出土遺物にはNG89-15次調査の黒色土器A類碗37・瓦器碗38がある（図113）。38は口縁端部内面に沈線が巡り、内外面ともに細かいヘラミガキが施されている。楠葉型の11世紀後半に位置づけられる。なお、NG83-53・85-16次

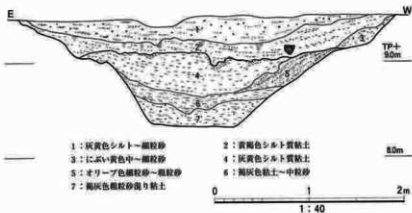


図112 NG91-70次SD402断面

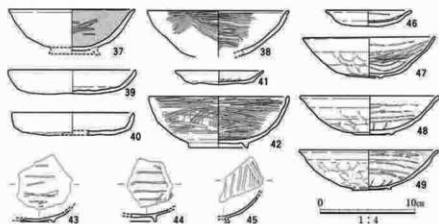


図113 NG89-15・91-70・93-80次平安～鎌倉時代出土遺物
89-15次SD401(37・38)、91-70次SD402(39～45)、93-80次SX402(46～49)

調査では灰釉陶器碗や黒色土器B類碗などの遺物が出土した。

SD402：両調査地で検出された南北方向の溝である(図111・112、図版15中)。

NG83-70・85-1次調査でも一連の溝が検出され、[大阪市文化財協会1992b：pp.129-136]

では坪境溝として報告されている。幅4 m、深さ1.4 mあり、断面は整った逆台形で、二段掘りになる部分もある。埋土はおおまかに2層に分かれ、上層の堆積物は砂質、下層は粘土質で、ともにラミナが観察できるが、下層の方がより顕著である。両層の堆積の間には時間的な間隙があったらしく、下層上面で足跡が検出された。NG91-70次調査では下層から土師器皿40、瓦器碗42・44・45、上層から土師器皿39、瓦器皿41・碗43が出土した(図113)。下層出土の瓦器はすべて外面に磨きが施さ

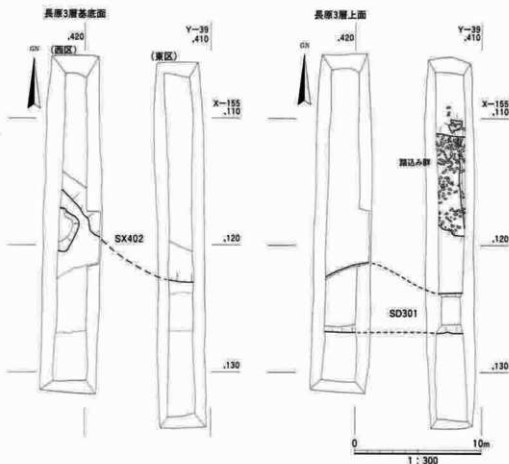


図114 NG93-80次鎌倉～室町時代遺構配置図

れていることからⅡ-2期に当り、12世紀中頃に位置づけられる。また、上層の出土遺物は13世紀初葉のものと思われる。

SB401~403: NG89-15次調査地の南西隅で検出された、いずれも北面が検出された東西2間の掘立柱建物である(図102)。南側のNG83-53次調査でも柱穴が検出されているが、建物としてつながらないため、どのような平面形態になるかは不明である。

SD401: SB401~403の北側で検出された、溝で格子状に区切られた遺構である(図102)。溝は幅0.2~0.3m、深さ0.05mある。それぞれの溝には切合いがなく、建物群にまで延びていないことから、畝の区画溝と思われる。

NG93-80次調査

SD402: 長原3層(図101の第3c層)基底面で検出された落込みで、深さは0.6m程度ある(図114左)。埋土は水成の粘土層であるが、ラミナが著しく変形している。瓦器皿46、碗47~49が出土した(図113)。ミガキが疎で、高台が退化していることから、Ⅲ-3期で13世紀前半に位置づけられる。

d. 室町時代の遺構

NG93-80次調査の長原3層(図101の第3c層)上面で、踏込みの残る水田面と東西方向の溝SD301が検出された(図114右)。SD301は幅3~5m、深さ0.6mある。南側に分布する客土はこの溝を掘り上げた際の排土と思われる。

なお、この溝はNG85-1次調査で検出された東西方向の坪境溝より200m南に当り、条里推定地割線上からややはずれることから、坪境の溝ではなく、灌漑用の水路と思われる。

3) まとめ

当地域は古墳時代長原遺跡の「西ムラ」に当り、近隣の調査も進展していることから全容が明らかになりつつある。今回報告対象の調査では掘立柱建物・井戸・土壇・溝が検出され、近隣では堅穴住居もある(図115)。

出土遺物は須恵器型式というON46段階からTK10型式までであることから、5世紀後半から6世紀中頃の時期幅があり、これは「西ムラ」の存続時期と一致する。

平安時代中期には方形区画溝SD401を有する屋敷地が登場する。区画は約53m四方の約2.5段の正方形になると推定される[大阪市文化財協会1992b: pp.132-136]。区画内には畝と考えられる遺構や掘立柱建物があり、NG83-53次調査ではトリベと思われる土師質小碗が、火災を被った建物の柱穴から出土している。溝の埋土から11世紀後半の瓦器38が出土していることから(図113)、この時期には廃絶していたと思われる。

上記の屋敷地の廃絶後には正方位の溝SD402が掘削される。この溝はNG92-2次出土の木簡(第IV章第2節)の成果を基にすると、長原里の25坪と26坪を画することになる。(寺井)

註)

(1)[大阪市文化財協会1992b]の図103では、図示されているが遺構名はついていない。

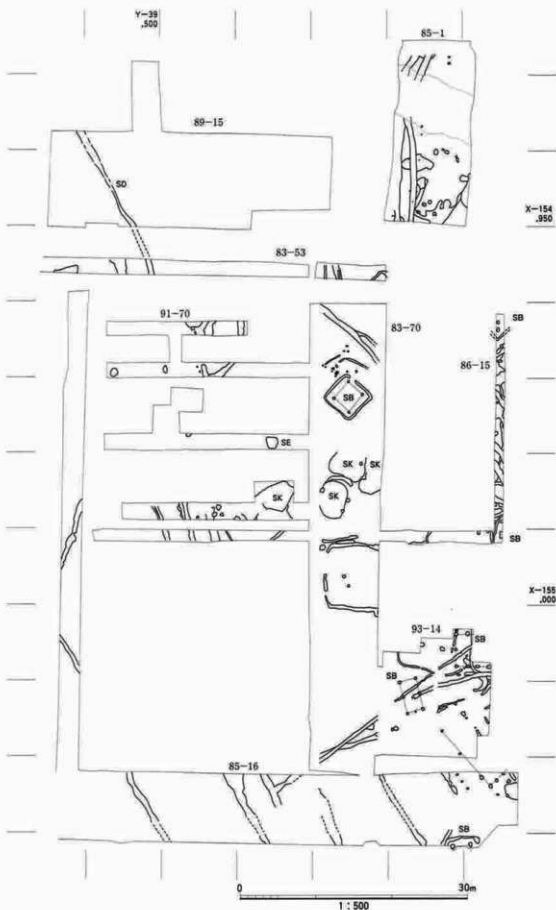


図115 調査地周辺の古墳時代遺構配置図

第3節 NG92-95および93-26次調査

1) 調査地と周辺の概要

本節では長吉長原西2丁目の西側に所在するNG92-95・93-26次調査を報告する(図116)。

NG92-95次調査は[岡村勝行1993]で紹介された調査である。掘立柱建物が多数検出された。

NG93-26次調査地は前述のNG92-95次調査地の東隣に位置する。長原7Bi層がきわめて良好に残っていて、古墳時代中期の竪穴住居や井戸など多くの遺構が検出された。



図116 NG92-95・93-26次調査地位置図

2) 調査の結果

i) 層序

NG92-95次調査地では長原3層を除去すると、長原13層が露出し、古墳時代の遺構が現れた。NG

93-26次調査地では、長原2～3層を除去すると長原7Bi層が検出された。この地域の長原2～3層は厚さ0.1～0.2m程度である。

ii) 遺構と遺物

NG92-95次調査

長原3層基底面で古墳時代中期の掘立柱建物・溝・柱穴・溝といった遺構が検出された(図117・図版17上)。柱穴は組合うものも含め約200基が検出され、個所が4個所に集中する。これらの群を北からA～D群と呼称し、遺構の説明を行う。

A群では溝3条に加え、柱穴は約60基検出され、掘立柱建物5棟、溝1条が検出された(図118)。

SB701: 2間以上(3.5m)×2間以上(3.3m)の総柱建物である。柱掘形は0.4m×0.5mの隅丸長方形が主体で、柱痕跡は直径0.1～0.15mである。SB702と平行するが、1.5mと近接し、柱掘形の長辺の向きが異なる。

SB702: 2間以上(3.7m)×2間以上(3.0m)の総柱建物である。隅柱が深い特徴を考えると、3間以上ある可能性が大きい。柱掘形は大きいもので一辺0.7mだが、0.4m×0.5mの隅丸長方形が一般的である。柱痕跡は0.13m前後である。

SB703: 2間(3.5m)×3間(3.0m)の隅柱建物である(図版17中)。柱掘形は0.4m×0.5mの隅丸長方形で、柱痕跡は0.1～0.15mで、0.13m前後が多い。SB701の柱穴を切る。

SB704: 2間(2.7m)×2間(3.6m)の隅柱建物である。柱掘形が0.2m×0.3mの小型の隅丸長方形が主体となることが特徴的である。柱痕跡は0.1～0.13mで、0.1mが多い。

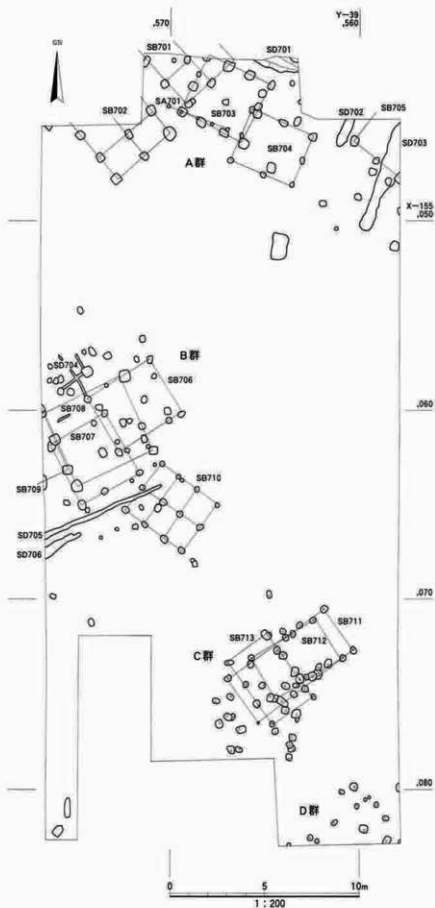


図117 NG92-95次遺構配置図

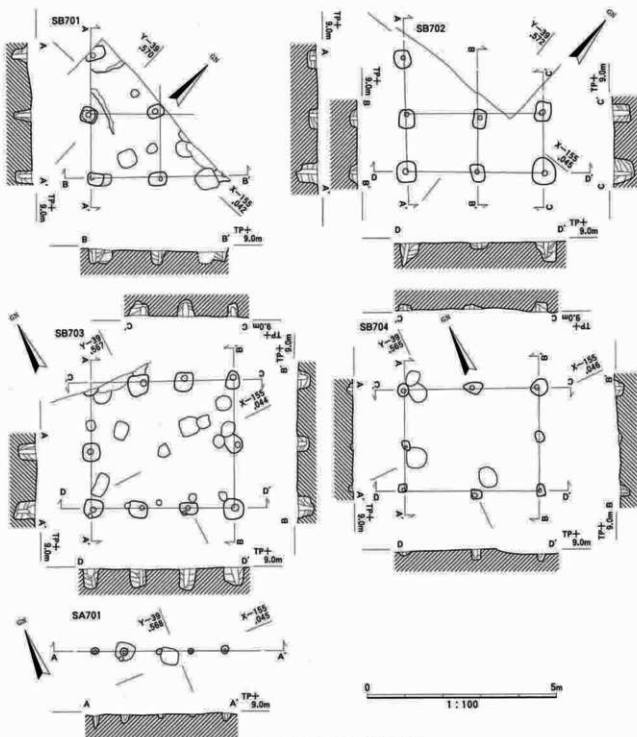


図118 NG92-95次A群遺構実測図

SB705 2間(3.0m)分の柱列が検出され、建物は調査区北東側に延びるとされる。柱掘形は0.5m×0.4mの隅丸方形で、柱痕跡は直径0.15mである。

SA701：4間(3.4m)分の柱列が検出された。柱掘形は0.15～0.2mの円形で、柱痕跡は0.05～0.07mである。SB703を切り、SB704と方向軸が近い。

SD701：調査区北端で検出された東西方向の幅1.0m、深さ約0.2mの溝である。TK23もしくは47型式と思われる須恵器甕の破片がまとめて出土した。建物群を区画する溝の可能性がある。

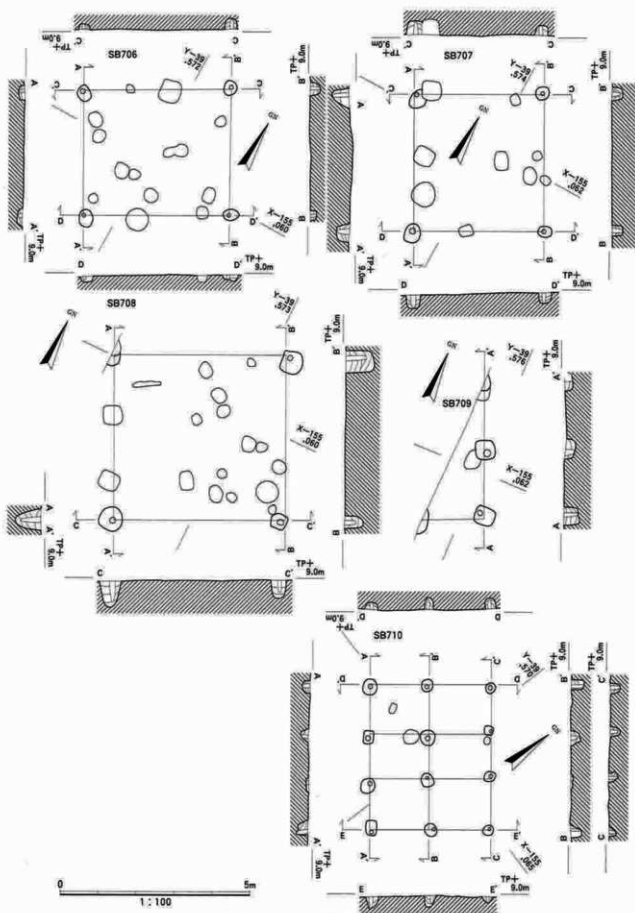


圖119 NG92—95次B群遺構實測圖

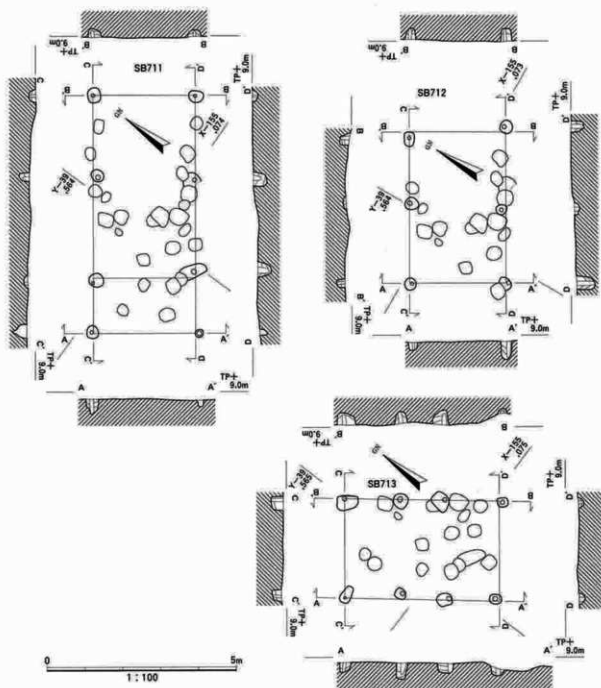


図120 NG92-95次C群遺構実測図

SD702・703：調査区北東端で検出された幅0.5m、深さ約0.05～0.1mの浅い溝である。底面は凹凸が著しい。

B群では柱穴約70基、溝3条が検出され、建物5棟分が復元された(図119)。

SB706：1間(3.9m)×1間(3.3m)の建物で、柱掘形は0.4m×0.5mの歪な円形～隅丸方形を呈する。柱痕跡は直径0.1～0.12mあった。竪穴住居の柱穴であった可能性も残る。

SB707：1間(3.4m)×1間(3.6m)の建物で、柱掘形は0.4m×0.5mの歪な円形である。柱痕跡は直径0.1～0.15mである。竪穴住居の柱穴であった可能性も残る。

SB708：1間(4.5m)×1間(4.5m)の建物である。柱掘形は0.6m×0.6mの隅丸方形で、深さが0.6

～0.7mあり、他の柱穴に比べて深いことが特徴である。また、柱痕跡は直径0.13～0.15mである。堅穴住居の柱穴であった可能性も残る。

SB709：2間(3.5m)以上×1間以上の建物で、調査区西側に延びる。柱掘形は0.5m×0.5mの隅丸方形で、柱痕跡は直径0.15mある。

SB710：2間(3.2m)×3間(3.9m)の総柱建物である。柱掘形は隅丸方形で、0.3m×0.4mとほかの建物と比べると小型である。柱痕跡は直径0.1m前後である。

SD704: 柱穴をつなぐ幅0.1~0.2m、深さ0.05mの小さな溝で、性格は不明である。

SD705: B地域の柱群の南で検出された幅0.2~0.3m、深さ0.15mの溝で、西側の調査地外に延びる。TK23もしくは47型式の須恵器が出土した。建物を区画する溝の可能性がある。

SD706：B群の南で検出された幅0.3～0.4m、深さ0.1mの溝である。西側の調査地外に延びる。
SD705と同様に建物を区画する溝の可能性はある。

C群では約60基の柱穴が検出された。A・B群より、さらに密集度が高く、柱の組合せがわかりにくかった。北東-南西方向の二筋に、柱が密集する傾向が窺え、このうちのいくつかを組み合い、建物長軸の柱列となると考えられるが、その場合に短軸幅が2.7mと広すぎる問題がある。やや大胆に復元せざるを得ない(図120・図版17下)。

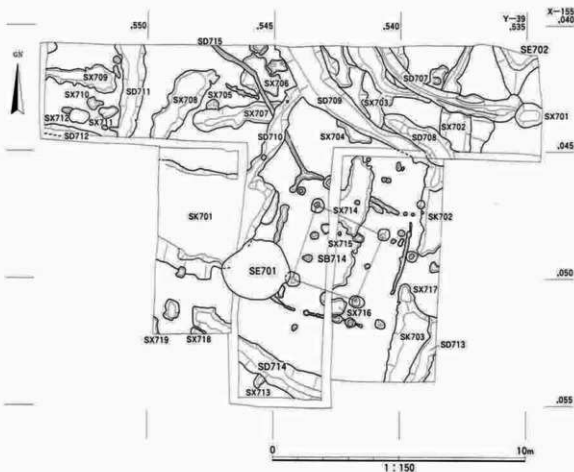


图121 NG93-26次遺構配置図

SB711: 1間(2.7m)×3間(6.3m)の側柱建物である。柱掘形は歪な円形で、直径0.3~0.5mが主体である。柱痕跡は直径0.08~0.12mである。南西側の柱間が小さく、庇の可能性もある。

SB712: 1間(2.6m)×2間(4.1m)の側柱建物である。柱掘形は歪な円形あるいは隅丸方形で、直径0.3~0.4mが主体である。柱痕跡は直径0.1~0.12mである。

SB713: 1間(2.7m)×3間(4.1m)の建物である。柱掘形は隅丸方形で、一辺0.2m~0.5mあり、柱痕跡は直径0.1~0.13mある。SB711・712と異なり、北西-南東方向を軸とする。

D群では柱穴15基が検出されたが、組合せははっきりしなかった。

以上のように掘立柱建物を中心に遺構を報告したが、柱穴の重複が激しいことから、少なくとも同じ群内で建物の建替えが頻繁に行われたことがわかる。建物の向きについては地形に影響され、北西-南東方向もしくはこれに直交する向きのものが多い。

NG93-26次調査

古墳時代中期から後期の堅穴住居SB714、井戸SE701・702、溝SD707~715、土庫SK701~703、竈みSX701~719が検出された(図121)。以下では、主要な遺構について説明する。

SB714: 一辺5m程度の4本柱の堅穴住居である(図版18上)。周壁溝とその北西のコーナーから北西にのびる排水溝SD715をもつ(図版18中)。柱穴には明確に柱痕跡が残っていて、抜取りが確認できたものもあった。SE701に切られることから5世紀後半頃に位置づけられる。

このほかいくつか柱穴が検出された。柱痕跡が残ったものが多く、本来、堅穴住居や掘立柱建物を構成していたものと思われるが、復元できなかった。

SE701: 直径2.5m前後、深さ1.2mの素掘りの井戸である(図版18上)。堀土は上中下の3層に分けたが、大きくみると、上・中層は埋戻し土、下層は自然堆積層である(図122)。

出土遺物は多量の土師器・須恵器がある。土師器には椀1・2、把手3、高杯4~6、甕7~15がある(図123)。3は把手付碗の把手であろうか。4・5はいずれも杯部が碗形を呈するものである。12は二重口縁の甕である。15は外面を粗いタテハケ、内面をヘラケズリで仕上げる。

須恵器には杯身21~29、杯蓋16~20、把手付碗30、高杯32・33、同蓋31、甕34、壺35、甕36、筒形器台37がある(図124)。上層と中層で杯を比較すると、中層がTK23型式でおさまるのに対し、上層はMT15型式の29が含まれ、若干の時期差が見

られる。37は筒部の上下に鐙状の束帯を巡らせ、2条の稜によって4分割し、カキメの後、櫛描波状文が施され、4方向に長方形のスカシを穿つ。スカート状に広がる脚部も2条の稜で区分され、カキメの後、櫛描波状文が施されている。

SE702: 深さ0.5mの素掘りの井戸である。堆積状況から周囲から土砂が流入して自然に埋没したと判断した。出土遺物には土師器甕38・39、壺40、須恵器杯身43、杯蓋41・42、有蓋高杯44があ

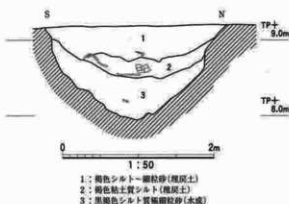


図122 NG93-26次SE701断面図

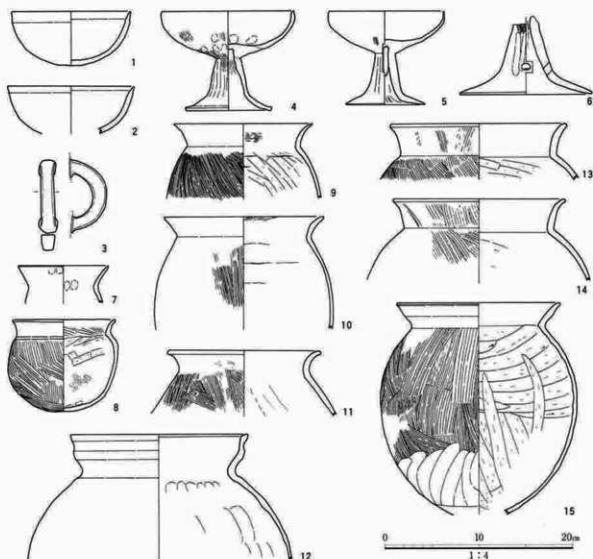


図123 NG93-26次SE701出土遺物

る(図124)。41は焼け歪んでいる。43はTK208型式に位置付けられる。

SK701：東西4m以上、南北4m、深さ0.2mの土壌である。北東にSD709が取付く。北側の肩の部分に須恵器甕の底部が出土していることから、もともと須恵器甕が据えてあった可能性がある。

この土壌からは多量の土師器・須恵器が出土した。土師器には碗45、高杯46～48、壺49～51、甕52～54、甌55がある(図125)。53・54は長胴甕で53には不安定な平底がつく。55は底部が破損しているが、中心に1つとその周囲に3つの蒸気孔を配するものと思われる。

須恵器には杯身65～81、杯蓋56～64、有蓋高杯84・85、同蓋82・83、甌86～88、壺89・90、高杯形器台91がある(図126)。これらはTK23型式に位置づけられる。

また、この土壌の上層からも土師器甕92、壺93、甌94、須恵器杯身107～118、杯蓋95～106、有蓋高杯120、同蓋119、甕121が出土した(図127)。

SK702・703：位置的にSB714に平行して並ぶ土壌である。周壁溝と近接するため、竪穴住居の土手の存在を想定すると、これらの土壌は共存しないと考える。SK703から須恵器甌122が出土した(図

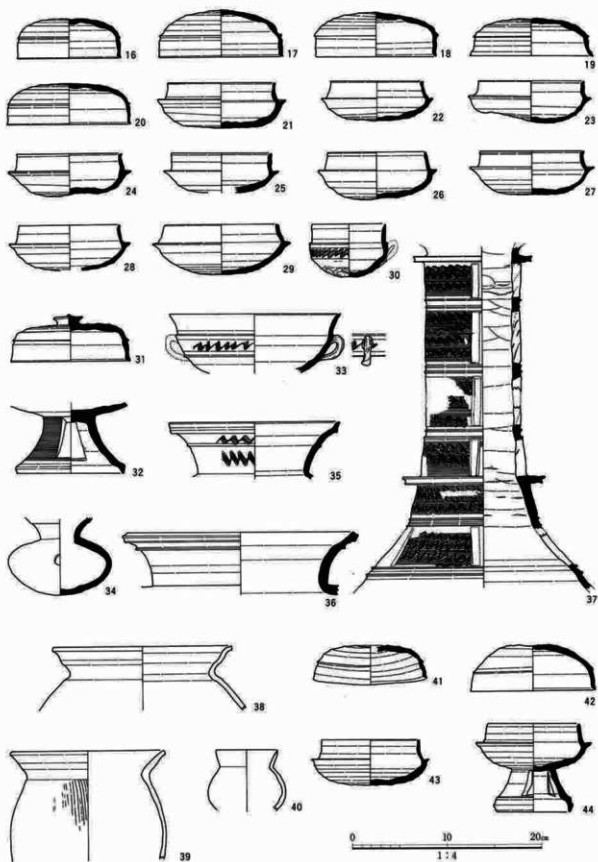


图124 NG93-26次SE701·702出土遺物
SE701(16~37)、SE702(38~44)

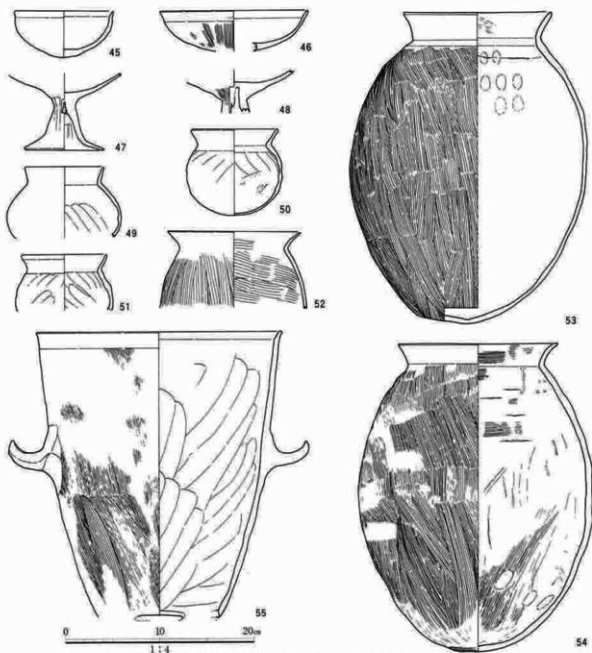


図125 NG93-26次SK701出土遺物(1)

127)。

SD707：幅0.7m、深さ0.2mの弧状に延びる溝である。出土遺物には須恵器杯身165～168、杯蓋164、壺169・170、双孔円板233がある(図129・131)。165～167はTK23もしくは47型式、164・168はMT15型式である。233は一方の面で途中で穿孔が終わっている。

SD708：幅0.9m、深さ0.2mの溝である。出土遺物には土師器甕171、須恵器杯身173、杯蓋172、把手付碗174、無蓋高杯175、壺176がある(図129)。172・173はTK23型式である。175は脚の4方向に円孔が施される。176は底部に平行タタキメが残る。

SD709：幅1.4m、深さ0.2mの溝である(図版18中・下)。出土遺物には土師器高杯177、甕178～182、須恵器杯身186～192、杯蓋183～185、有蓋高杯194、同蓋193、壺195、双孔円板234がある(図

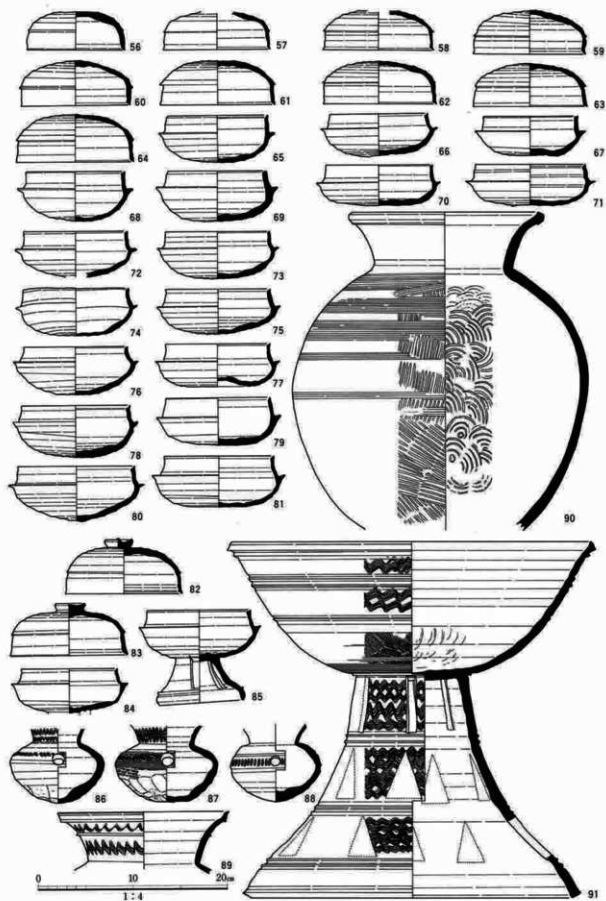


图126 NG93-26次SK701出土遗物(2)

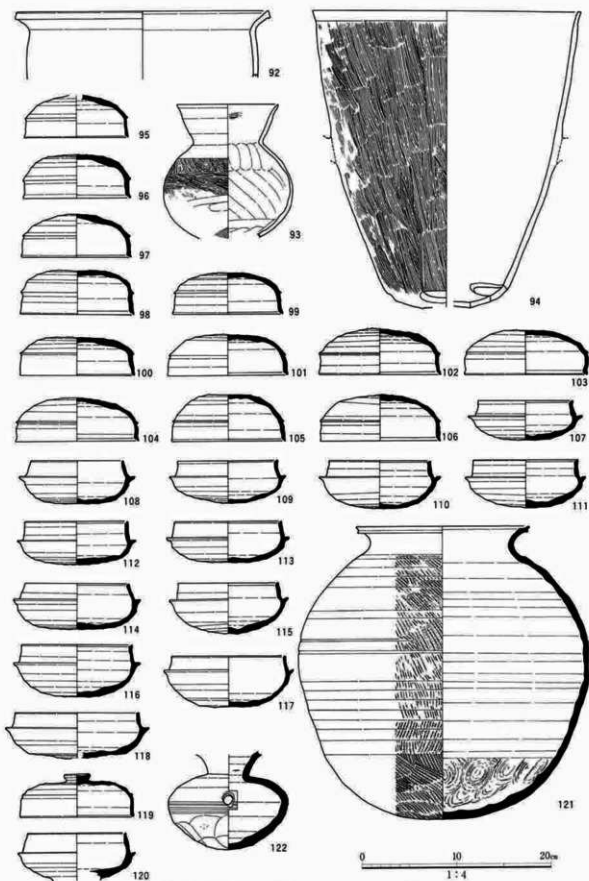


图127 NG93-26次SK701上層・SK703出土遺物
SK701上層(92~121)、SK703(122)

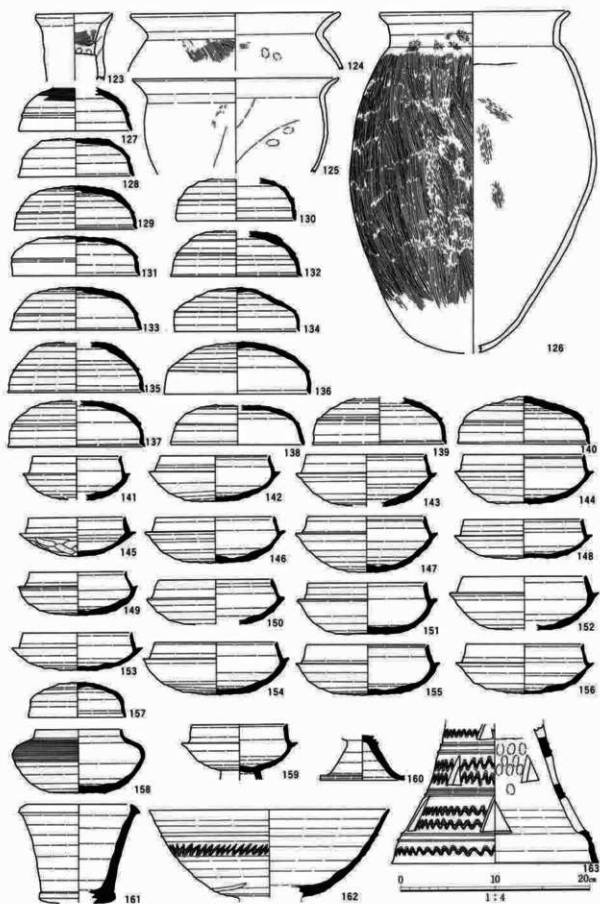


图128 NG93-26次SD714出土遺物

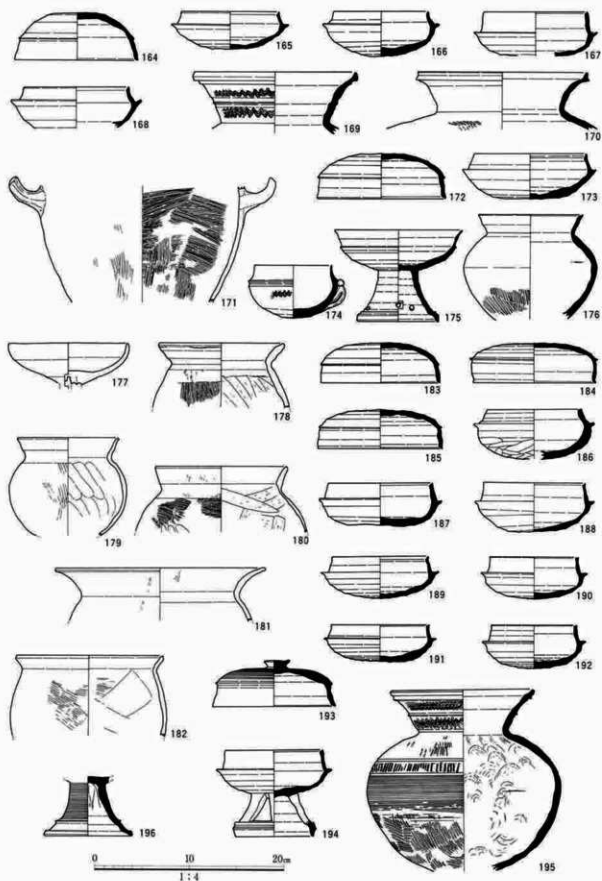


图129 NG93-26次SD707~709·711出土遺物
SD707(164~170)、SD708(171~176)、SD709(177~195)、SD711(196)

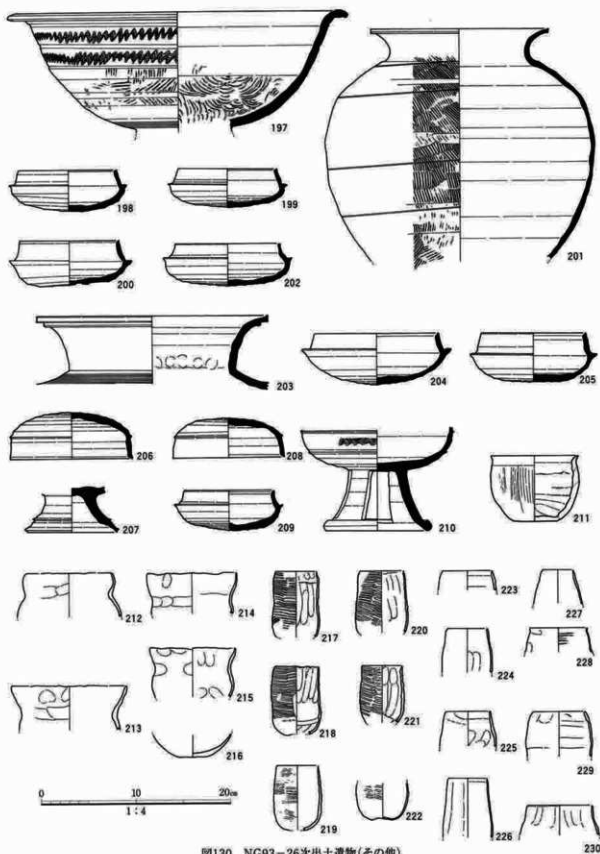


図130 NG93-26次出土遺物(その他)

SD710(197)、SD713(198~201)、SX702(202・203)、SX706(204)、SX708(205・228)、SX709(206)、SX707(207)、SX714(208~210)、SX715(211)、SE701(216・218・219・229・230)、SK701上層(212~215・224・225)、SK701(220~223)、SD710(227)、長原7層(217・226)

129・131)。186は底部に手持ちのヘラケズリが施されており、TK73型式に該当するものであるが、それ以外の杯はTK23もしくは47型式でおさまる。195は体部上半に凹線を施し、櫛描列点文で埋めている。

SD710：幅0.7m、深さ0.2mの溝である。須恵器高杯形器台197が出土した(図130)。杯底部にはタキメが残り、内面には同心円の当て具痕が残る。

SD711：幅0.8m、深さ0.1mの南北に延びる溝である。須恵器高杯196が出土した(図129)。脚部にはカキメが施される。

SD713：幅0.7m、深さ0.2mの溝である。須恵器杯身198～200、甕201が出土した(図130)。これらの須恵器はTK23型式に該当する。

SD714：幅1.0m、深さ0.3mの溝である。下層は自然堆積で、上層は地山の偽礫を多く含み、埋め戻されたものとみられる。この溝からは大量の土師器・須恵器が出土した。中には口径の大きなものの中に中・小型の須恵器を入れ子にした状態で投棄されているものもあった。この溝の上層はSE701の上層と同時期であり、長原西ムラの終焉を示す事象として興味深い。

出土遺物には多量の土師器・須恵器がある(図128)。土師器には壺123、甕124～126がある。123は内面に接合痕を残し、ハケが施されている。126は長胴甕で口縁端部は丸くおさまる。外面は10条/cm程度の細かいタテハケが施され、内面もハケが施されていたと思われるが、器面が荒れているためわからない。

須恵器には杯身141～156、杯蓋127～140、有蓋高杯159、高杯脚部160、捏ね鉢161、壺158、同蓋157、高杯形器台162・163がある。杯はおおむねMT15型式に位置づけられる。

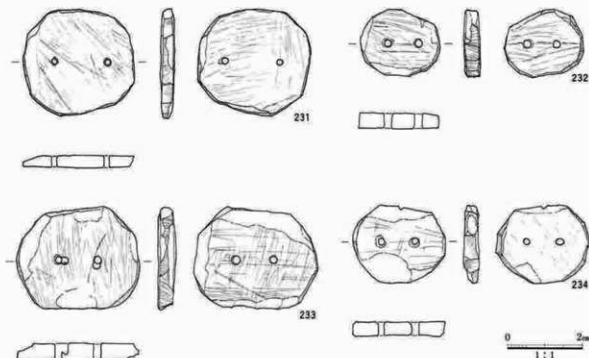


図131 NG93-26次出土双孔円板
SD707(233)、SD709(234)、SD715(231・232)

SD715：堅穴住居SB714から延びる幅0.2m、深さ0.1mの溝である。滑石製双孔円板231・232が出土した(図131)。

このほか、SX702から須恵器杯身202・甕203、SX706から須恵器杯身204、SX708から須恵器杯身205、SX709から須恵器杯蓋206、SX707から須恵器高杯脚部207、SX714から須恵器杯身209・杯蓋208・高杯210、SX715から軟質平底深鉢211が出土した(図130)。ここから出た須恵器は古いものでTK23型式、新しいものでMT15型式である。211は外面にタテハケが施され、内面には接合痕が残る。

なお、本調査では製塩土器が多量に出土した(図130)。212～216は黄褐～褐灰色を呈し、胎土に粗粒砂や細礫を含む。217～222は外面に平行タタキが施され、褐色を呈する備讃瀬戸系である。223～



図132 NG92-95・93-26次および近隣古墳時代遺構配置図

230は灰白色を呈する大阪湾岸系のものである。

3) まとめ

本節では古墳時代中～後期の集落関係の遺構の報告を行った。

NG92-95次調査では多数の柱穴が検出され、13棟の掘立柱建物を認定することができた。この中で総柱建物は3棟あり、全体が検出されたSB710で2間(3.2m)×3間(3.9m)と長原遺跡では標準的な大きさといえる。側柱建物についても、面積が10m²前後と標準的かやや小さめである。また、1間×1間のSB706～708については柱間隔が広いことから、上部が削平された柱穴だけが残った竪穴住居であった可能性が高い。これらはA～D群の柱穴が密集する地点に分布することから、大体10m程度の間隔を空けて、同時存在したのは3棟前後であったと推測される。

NG93-26次調査では須恵器型式というTK23型式からMT15型式の時期の遺構が密集して検出され、遺物も多量に出土した。特に、井戸や土坑・溝には埋め戻しが確認され、土師器・須恵器が大量に投棄されていた。

近隣では東隣のNG85-16次調査[大阪市文化財協会1993a]や北隣のNG83-53次調査[大阪市文化財協会1992b]などが行われており、同様に集落関係の遺構が多数検出されている(図132)。本節の成果も含めて総合すると、溝によって区切られた数棟の掘立柱建物・竪穴住居が基本単位として抽出でき、それに井戸が伴っている姿が窺える。ただ、須恵器型式というMT15型式の頃に井戸や土坑が埋められており、その際に大量の土器が投棄されている。これは「馬池谷」東側の古墳時代集落(「西ムラ」)が終息に向っていることを示しているものと思われる。

(寺井)

第IV章 中央地区の調査

第1節 NG89-25次およびその周辺の調査

1) 調査地と周辺の概要

本節では長吉長原3丁目で行われたNG20②・89-5・89-25・92-79・95-29次調査を報告する(図133)。これらの調査地の西側の街区ではNG85-23次調査において、片袖の横穴式石室をもつ長原7ノ坪古墳が調査されている[高井健司1986・1987a]。

NG20②次調査は下水管敷設工事に伴って行われた夜間の調査で、長原38号墳が検出された。

NG89-5・92-79次調査地は中央環状線に面する。前者の調査では長原7Ai層から鉄製のヤスが出土しており、[上野裕子・鈴木京子1989]で紹介されている。

NG95-29次調査はマンション建設に伴って行われた。長原13層上面まで掘削したが、平安時代と思われる井戸以外、顕著な遺構は見つからなかった。

NG89-25次調査地は上記の調査地と同じ街区の南西に位置する。調査の結果、古墳時代の掘立柱建物や竪穴住居など多くの遺構が検出され、1989年8月20日に現地説明会を実施した(写真13)。この調査の成果についてはすでに[佐藤隆1989]や[高橋工・佐藤1991]で公表されている。



図133 NG89-25次などの調査地位置図



写真13 NG89-25次現地説明会風景

2) 調査の結果

i) 層序

NG89-5次次調査では現代作土が除去されると、長原4A層に該当する砂礫層が露出した。さらに、当地では長原4～7層に加え、薄層ではあるものの長原9C層や12層が残っていた(図134・表17)。

表17 NG89-5 次層序表

層序	長層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	0	現代盛土	60	盛土				近・現代
2	1	現代作土	15	作土				
3	1	現代作土	10	作土				
4	4A	にぶい黄色中粒砂	15	水成				
5	4B	灰オリーブ色砂質シルト	15	作土				鎌倉時代
6	4B	黄灰色中粒砂混りシルト	15	作土				
7	4C	褐灰色粗粒砂混りシルト	10					
8	5A	灰オリーブ色砂礫・細粒砂	35	水成				
9	5B	緑灰色シルト・浅黄色細粒砂	5	水成		→水田畦畔		平安時代 奈良時代
10	6A1	緑灰色シルト	30	作土				
11	6A11	オリーブ灰色細粒砂	5	水成		→畦畔痕跡		
12	6B1	暗オリーブ灰色粘土質シルト	20	作土				
13	6B1	暗オリーブ灰色粘土質シルト	20	作土				飛鳥時代
14	6B1	暗赤灰色シルト	10					
15	7A1	黒褐色シルト質粘土	10	作土		▼SD901	鉄製ヤス	
16	9C	黄灰色粘土質シルト	<5				石蔵	
17	9C	灰色シルト	<5					縄文時代
18	12	褐灰色中粒砂混りシルト	5					
19	13	明黄色シルト			上面に乾痕			
20	14	緑灰色粘土			上面に乾痕			

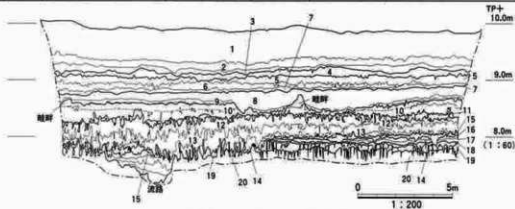


図134 NG89-5 次東壁断面図

表18 NG89-25次層序表

層序	長層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
0	0	現代盛土および現代作土	130	盛土・作土				近・現代
1	4B	灰オリーブ色シルト	20	作土				
2	5	明黄褐色砂礫・細粒砂	50	水成		→SR604~608		鎌倉時代
3	6A1	オリーブ黒色粘土質シルト	30	作土		→SR601~603		
4	6B1	暗オリーブ砂質シルト	20	作土		▼SB701~707, 5A 708, SB701~709		飛鳥時代
5	13	明黄褐色シルト	>20					

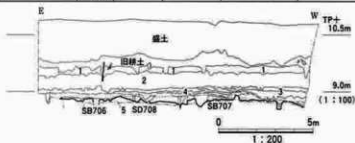


図135 NG89-25次南壁断面図

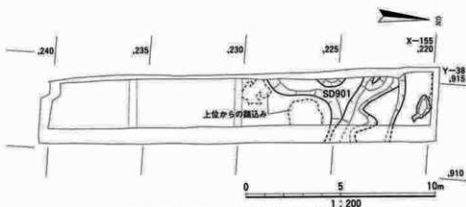


図136 NG89-5次縄文時代遺構配置図

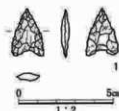


図137 NG89-5次
出土石鏃

NG89-25次調査でも現代作土が除去されると、長原4A層に該当する砂礫層が露出した。そして、この層以下には長原6Ai・6Bi層が残っていて、長原6Bi層基底面では古墳時代中期の掘立柱建物や竪穴住居・溝といった遺構が見つかった(図135・表18)。

ii) 遺構と遺物

a. 縄文～古墳時代の遺構と遺物

NG89-5次調査では長原7Ai層(第15層)基底面で溝SD901が検出された(図136)。幅4.5m、深さ0.5～0.6mあり、西肩はさらに幅が広がっている。埋土の最下層はにぶい黄褐色砂礫で、上部ほど細粒化する。出土遺物がなく、時期は不明であるが、長原12層準～7B層準のものと考えておきたい。上位の窪みに長原7Ai層が垂れ込んでいることから、最終的には飛鳥時代まで窪みが残っていたことになる。

また、当調査の長原9C層(第16層)から凹基式の石鏃1が出土した(図137)。

b. 古墳時代の遺構と遺物

NG20②次調査

長原38号墳：古墳の盛土と周溝が検出されたが、夜間の調査であったため、十分な記録ができなかった。位置は図146の通りである。周溝から須恵器壺・甕が出土した。

NG89-25次調査

4棟の掘立柱建物SB701～704、3棟の竪穴住居SB705～707、1列の溝、およびそれらに伴うとみられる溝などが検出された(図138・図版19上)。

掘立柱建物はいずれも総柱建物で、柱穴には長原13層の偽礫が含まれる。

SB701：桁行3間(5.4m)、梁間2間(4.2m)ある。柱の間隔は桁行で約1.8m、梁間で約2.1mと梁間の方がやや広い。柱穴は不整形で、側柱の柱穴が大きく、直径0.7～0.9m、東柱のものは小さく、直径0.4～0.5mある。柱痕跡の直径は確認できるもので0.17mほどである。ほとんどが建物が廃絶したときに抜き取られたようであるが、柱材が残っていたものもある。柱穴から出土した遺物は少ないが、土師器壺や須恵器杯がある。甕片は後述する竪穴住居SB706で出土した破片と接合した。

SB702：2間×1間以上で、西側は調査区外に広がる。規模や柱穴の並び方がSB701と類似しているため、同様の建物であった可能性がある。

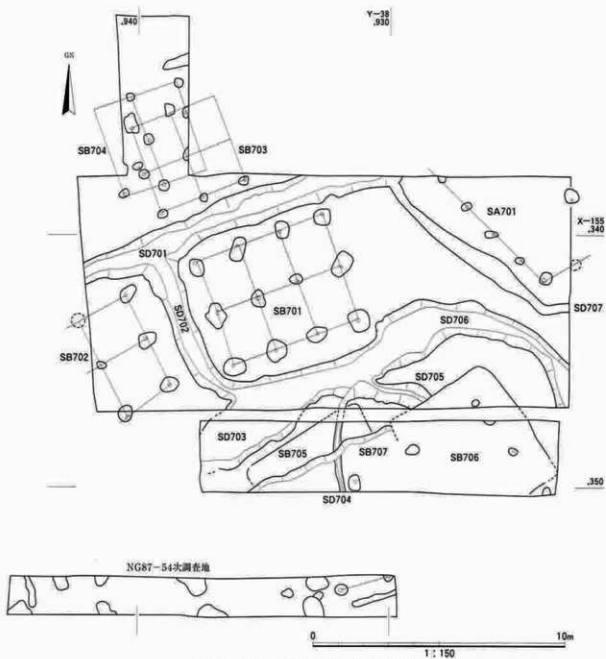


図138 NG89-25次古墳時代遺構配置図



写真14 NG89-25次SB705-707



写真15 NG89-25次SD702出土馬雷

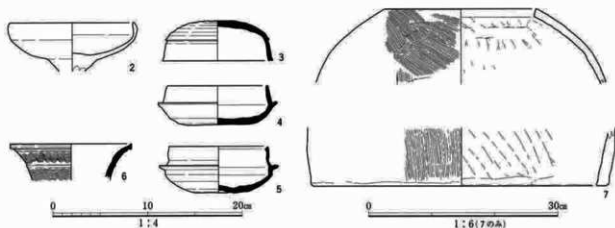


図139 NG89-25次古墳時代遺構出土遺物

SD701(2~6)、SB706(7)

SB703・704：いずれも桁行2間、梁間2間、規模はおおよそ3.7m×3.3mである。同様の建物が建替えられたのであろう。柱穴は直径0.4~0.5mの不整円形で、柱痕跡の直径は約0.1mである。柱穴には遺物はなかったが、SB703の柱穴を覆っていたSD701の埋土からTK23もしくはTK47型式の須恵器杯が出土した。

SB705~707：調査区南部で堅穴住居が3棟が重なり合って検出された(写真14)。お互いの切合いや後述する溝との切合いから、SB705→706→707という順に建替えられたと考えられる。3棟とも周壁溝はない。柱穴がよくわからない部分もあったが、4本柱であったと思われる。

SB705は一辺の長さが約5.3mの方形または長方形で、かなり上が削られているため、床面は残っていない。SB706は5.2m×4.8mの方形に近い長方形で、地面を大まかに掘り窪めた後に底の凸凹に土を入れてならし、床をつくっている。SB707は比較的大きく、一辺が6m以上ある。南隣のNG87-54次調査で検出された柱穴、盛土はそれぞれ、SB707の柱穴、床をつくった埋土になると考えられる。

SB706・707の北東辺中央には炭や焼土が認められた。SB706からは土師器の甕7(図139)・甕の破片が出土しており、この種のセットが用いられていたと考えられる。このほか須恵器蓋杯・高杯・甕、土師器高杯・甕などが出土している。須恵器杯蓋・高杯は、TK23もしくはTK47型式に当たる(註1)。

SA701：調査区北東部でほぼ等間隔に並んだ杭の列が検出され、櫓と考えられる。北西-南東へ延び、調査区東端で北東へ曲がっている。間隔は1.3~1.5mあり、杭穴は直径0.3~0.5mの不整円形を呈する。杭は角材を用いており、先を削って尖らせている。埋土からは時期がわかるような遺物は出土していない。

SD701~707：調査区北北部のSD701・707のほかは、南半部に集中している。幅は0.2~2.0mとさまざまで、深さは0.15~0.2mある。SD702は南半部でSD703と合流するが、切合いははっきりしない。同様にSD703~706についてもよくわからない。しかし、溝の位置から考えると、SD701・702は掘立柱建物に、SD703~706は堅穴住居に伴うと思われる。SB705に伴うと思われるSD705がSB706に切られ、SB706に伴うとみられるSD704がSB705を切り、SB707に切られていることは、堅穴住居の先後関係を考える上で手がかりとなる。出土遺物には土師器・須恵器・馬歯があり、須恵器はTK

23～TK47型式に当たる(図139)。馬歯はSD702・703から出土し、SD702のものは下顎骨の一部が残る(写真15)。

SD707はSA701に沿って掘られ、やはり調査区東端で曲がっており、この溝に伴うと思われる。SD701との切合いはよくわからない。

c. 飛鳥～奈良時代の遺構と遺物

NG89-25次調査

長原6Bi層基底面で溝2条が検出された(図140)。同一面で前述の古墳時代の遺構も検出したが、これらはいずれも古墳時代の遺構を切り、埋土が灰黄褐色粘土質シルトであることから、長原7Ai層準の遺構と考えた。また、この段階では下位のSD701の窪みが残っていた。

SD708：幅0.6～1.0m、深さ0.1～0.2mある。2条の溝が重なった状態で検出されたのは、掘り直しが行われたためと思われる。

SD709：幅0.2m、深さ0.05m以下で、SD708と直交する方向に延びる。耕作の際にできた犁跡の可能性もある。

長原6Bi層上面では南北2条(SR601・602)、東西1条(SR603)の畦畔が検出された(図141上)。長原6Ai層準の耕作で上面が削平され、畦畔は痕跡を残している程度である。畦畔の幅は0.3～0.5mで、SR601・602の間隔は4m前後である。畦畔が交叉する部分には水口は見られない。

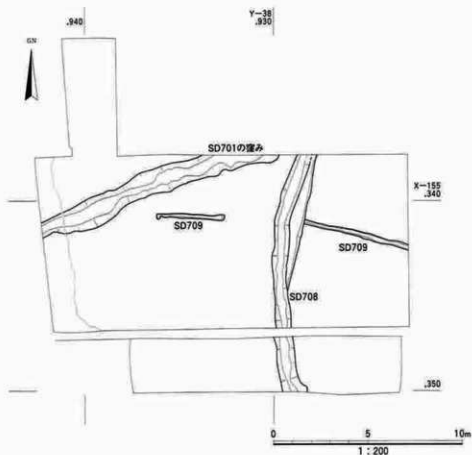


図140 NG89-25次飛鳥時代遺構配置図

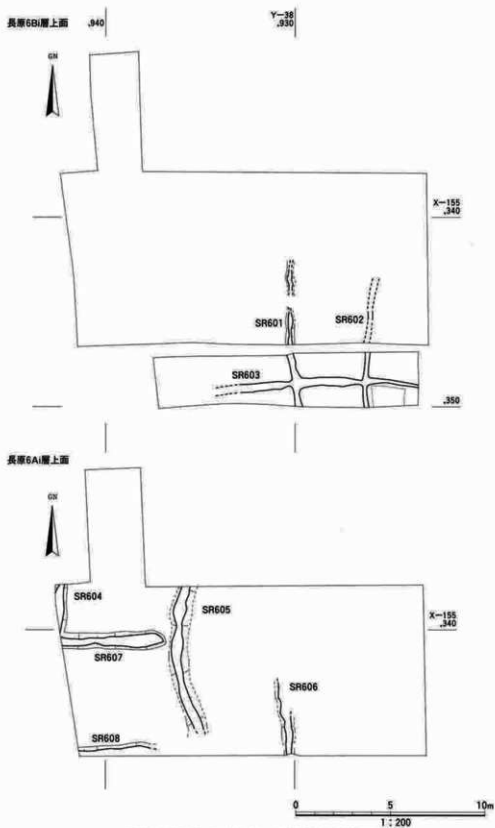


图141 NG89-25次飛鳥～奈良時代水田平面图

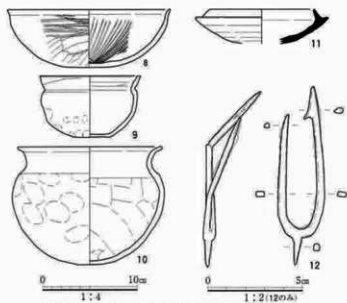


図142 NG89-5・25次飛鳥～奈良時代出土遺物
NG89-5次(8・10～12)、NG89-25次(9)



写真16 NG89-5次出土鉄製ヤス

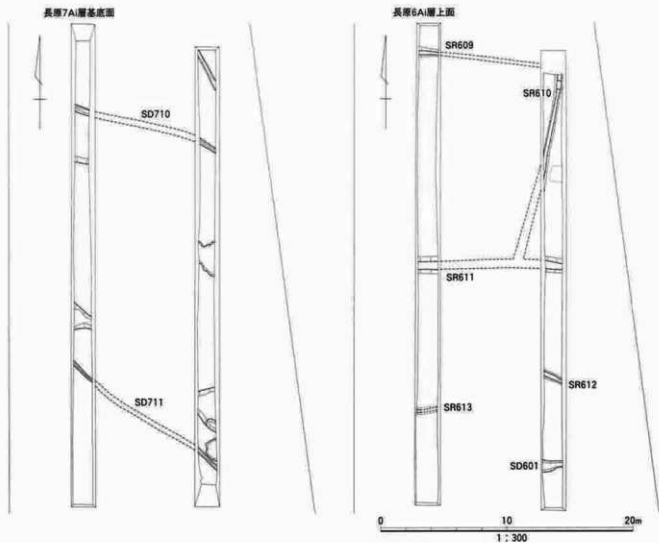


図143 NG92-79次飛鳥～奈良時代遺構配置図

長原6Ai層上面では南北方向3条(SR604～606)と東西方向2条(SR607・608)の畦畔が検出された(図141下)。畦畔の高さは0.1～0.15m、幅0.8～1.0mあり、畦畔間の距離は5.5～6.3mである。SR607がSR605にT字状に接続する部分に水口がある。

この水田を覆う長原5層からは土師器甕9が出土した(図142)。

NG89-5次調査

長原7Ai層(図135・表17の第15層)から、飛鳥Ⅱに位置づけられる土師器杯C8、須恵器杯11に加え、鉄製ヤス12が出土した(図142)。12は全長9.4cmのU字形を呈する二股のヤスである(写真16)。2つの先端のうち、片方には逆刺が残っている(註2)。また、土師器甕10は長原5層から出土した(図142)。

NG92-79次調査

長原7Ai層基底面では、南東-北西方向の溝SD710・711が検出された(図143左)。いずれも幅0.1～0.15m、深さ0.15m程度で、北西方向に水が流れた跡が観察することができた。

長原6Ai層上面では、水田畦畔SR609～613、溝SD601が検出された(図143左)。SR609～611は方向から図のように復元されると思われるが、SR612・613についてはわからない。SD601は東西方向の浅い溝で、西側のトレンチでは検出されていない。

d. 平安～鎌倉時代の遺構

NG89-25次調査

長原4B層下面で南北方向の溝が数条検出された(図144)。耕作に係わるものと思われる。なお、西約10mの地点に位置するNG86-60②次調査では平安時代の建物跡が見つかっているが[大阪市文化

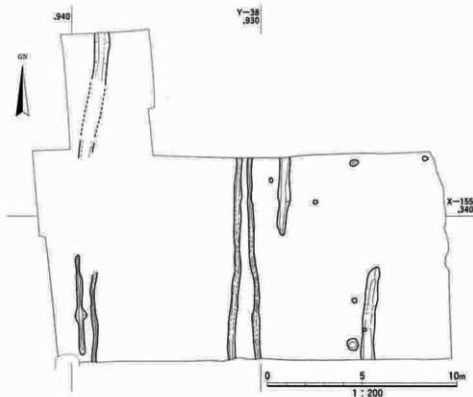


図144 NG89-25次鎌倉時代遺構配置図

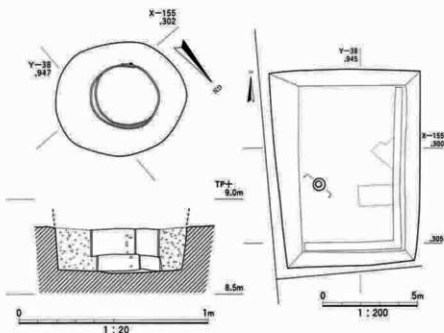


図145 NG95-29次SE401実測図とその位置



写真17 NG95-29次SE401

財協会1993b：pp.59-111]、本調査では柱穴は検出されなかった。

NG95-29次調査

井戸SE401が検出した(図145・写真17)。この井戸は長原5層を掘り抜き、掘形が長径0.7m、短径0.6mの楕円形を呈し、曲物を転用した井戸側を有する。時期決定できるような遺物は出土しなかった

が、近隣で平安時代の集落が見つかったことから、平安時代に属する可能性がある。

3) まとめ

本節では長古長原3丁目における3件の調査成果を報告した。まず、NG89-25次調査で古墳時代の建物群を検出したことが挙げられる。この建物群は総柱の掘立柱建物と竪穴住居の方位がほぼ等しいこと、出土遺物の時期が5世紀末と限られることから、建物群は

ほぼ同時存在したと考えていいであろう。また、北東で接するNG85-77次や86-36次調査ではこれらの建物群を画すると思われる溝が検出され、さらに東側の中央環状線一帯では、長原古墳群3期(須恵器型式のTK23・47型式)に該当する長原2-4、35-38、155号墳がある。よって、溝で区画される建物群に小さな古墳群が近接した姿が想定できる(図146)。

また、NG89-25次調査地の西約100mに位置するNG93-76次調査では、建物跡は見つからなかったものの、5世紀末の溝・土壇などが検出され、滑石製白玉が50点以上出土した[大阪市文化財協会1999c：pp.121-140]。特に溝SD701は東西方向に弧状に延び、北側に存在する集落を画するものと思われる。また、北東約50mには長原古墳群3期の88・89・153・154号墳のまとまりがあり、建物群と小さな古墳群がセットで存在する。なお、NG93-76次調査に西接するNG94-19・20次調査では長原7A層が残っていたため、後世の大規模な削平は考えにくいにもかかわらず、古墳時代の遺構は希薄であった[大阪市文化財協会1999e：pp.109-125]。

以上から小古墳群と溝で区画された建物群で構成される単位の存在が想定できる。また、時期はい

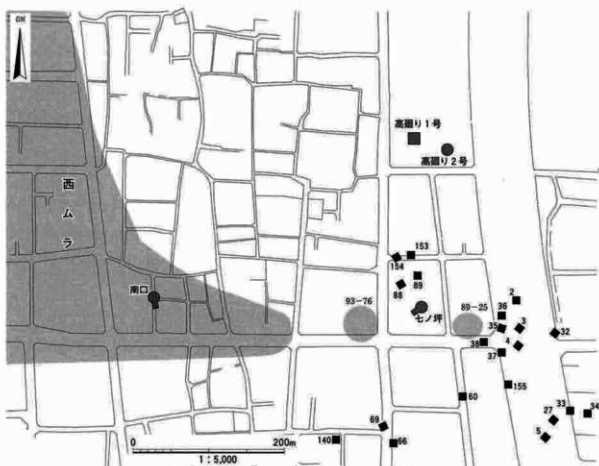


図146 西ムラ・長原古墳群とNG89-25次調査地の関係

ずれも長原古墳群という3期に位置づけられ、長原「西ムラ」がもっとも拡大する時期にも当ることから、集落が希薄だったところに点的に居住地がつくられたことが想定される。

ただ、これらの点的な単位は長くは続かず、6世紀前半には少なくとも廃絶している。この廃絶の契機として考えられるのが、七ノ坪古墳(130号墳)や南口古墳(181号墳)といった長原古墳群4期の古墳の築造であり、長原「西ムラ」も範囲を縮小する傾向にある。(寺井)

註)

- (1) [大阪市文化財協会1994: pp.23-28]では本調査地の南側のNG87-54次調査で検出されたSP01・02と、SB706・707の柱穴が一連の掘立柱建物SB701として報告されているが、方向に無理があることから、本節では調査時の見解通り別の遺構として扱っている。
- (2) [上野・鈴木1989]では全長を12cmと書いているが、本節の報告文のとおり、全長9.4cmが正しい数値である。

第2節 NG92-2次およびその周辺の調査

1) 調査地と周辺の概要

本節では長吉長原1丁目に所在するNG83-36・89-13・90-13・92-2・95-2次調査と、長吉長原2丁目で下水工事に伴って行われたNG83-10・12次および86-79・87-2次調査を報告する(図147)。この地域は広範囲ではあるものの、調査数は少なく不明な点が多い。

NG83-10・12次および84-27次調査は下水工事に伴って行われた。これらの調査ではGL-4 m (TP+6.6m)まで掘削し、長原5～7層を確認することができた。NG83-36次調査は送電線用の鉄塔建設に先立って行われた。4 m四方のトレンチを4つ設定して調査を進めた結果、長原6A層準の水田畦畔が検出された。以上3調査については規模が小さく、特に顕著な遺構は見つからなかった。

NG86-79・87-2次調査は大阪中央環状線の西沿いで行われた。いずれも人孔部分を調査し、そ



図147 NG92-2次などの調査位置図

の他の部分は立会調査を行った。いずれの調査でも古代の水田が見つかった。

NG89-13次調査地は旧東除川の南岸に当たり、水田遺構の存在が予想された。調査は諸般の事情で、GL-1.2mまでを重機により掘削し、それ以深をすべて人力で掘下げた。その結果、長原5層準の土壌と思われる掘込みや、奈良時代の水田などを検出した。

NG90-13次調査はマンション建設に先立って行われた。当地は旧東除川の川筋に当り、GL-1.5～2mにわたって堆積する砂礫層を、堤状の構築物がないかどうか確認しながら重機で除去し、本調査を行った。調査の結果、奈良時代の水田などを検出した。

NG92-2次調査は長原総合病院内の建設工事に伴って実施された。調査の結果、鎌倉時代や奈良時代の水田や平安時代の井戸が検出された。井戸からは治暦2(1066)年の紀年が記された土地争議

表19 NG92-2次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
0	0	現代盛土	100					近・現代
1	1	黒褐色シルト質細粒砂	10~20	現代作土				
2	2	暗灰黄色シルト質細粒砂	10	作土				江戸時代
3	3	オリーブ灰色含礫シルト質中粒砂	10~20	作土				室町時代
4a	4Bi	黄褐色含礫シルト質細粒砂	20	作土		▼SD401~403, SX401		鎌倉時代
4b	4Biii	暗灰黄色含礫シルト質細粒砂	15	作土		▼SE401~403, SD404		
5a	5A	オリーブ黄色無礫砂	15~30	水成				奈良時代
5b	5B	緑灰色シルト質無礫砂	15~30	水成				
6a	6Ai	明オリーブ灰色含礫細粒砂質シルト	10	作土		←水田畦畔		
6b	6Aii	灰色粘土	10	水成				
6c	6Bi	黄灰色含礫砂シルト質粘土	10	作土		←水田畦畔		鎌倉時代
7	7Bi	黒褐色含礫細粒砂シルト質粘土	10	褐色帯		▼SD701~707		古墳時代
8	8	灰オリーブ色中粒砂-細粒砂質シルト	5					縄文時代
9	12	灰黄色中粒砂質シルト	10					
10	13	灰白色中-細粒砂質シルト	>10					旧石器時代

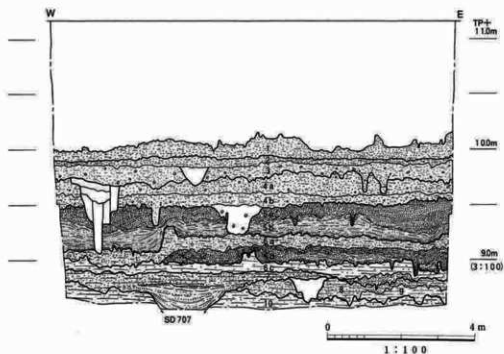


図148 NG92-2次北壁断面図

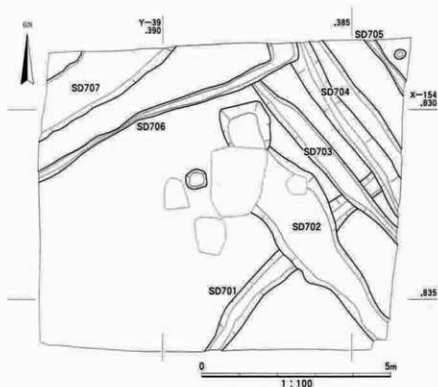


図149 NG92-2次古墳時代遺構配置図

に係わる木簡が出土し、[清水和明・鳥居信子1996]で資料紹介が行われている。

NG95-2次調査は工事の掘削深度がGL-1.2mまでであったため、長原5層上面までの調査であったが、調査の結果、鎌倉時代の水溜遺構を検出した。

2) 調査の結果

i) 層序

図148はNG92-2次調査地の北壁断面図で、層

序表は表19のとおりである。本調査では調査期間が短かったため、現代盛土・長原3層と長原6層を重機で掘削した。断面観察では長原6Ai層上面や6Bi層上面で水田畦畔を確認した。

ii) 遺構と遺物

a. 古墳時代の遺構

NG92-2次調査では長原7Bi層(図148の第7層)基底面において、溝SD701~707が検出された(図149)。SD704やSD707は深さが0.2~0.3mで、SD704は西側が1段深くなる。これ以外の溝の深さは0.1m程度である。SD702~705は北西-南東方向に平行に延びる。これらは出土遺物から5世紀後半ごろの溝と思われる。

b. 飛鳥~奈良時代の遺構

NG89-13次調査

長原6Ai層基底面で東西方向の溝SD601、同層上面で水田畦畔SR601・602が検出された(図152)。SD601は幅約4m、深さ0.8mの逆台形の断面を有し、長原6Bi層を切る。埋土に偽礫が多く含まれることから、人為的に埋め戻されたと考えられる(図150)。SR601は西でやや北に振る方向であるが、SR602はほぼ正東西方向である。これらの間隔は17.5mである。

また、断面観察で長原5層の堆積途中に掘られた土坑SK501が確認された(図151)。平面形態は不明であるが、南北の長さは約6mで、深さは0.2mである。埋土中からは炭片とともに土師器甕や鍋などの破片がまとまった出土した。これは長原5層準の洪水に中断があり、一時期地表面が形成されて人間の活動があったことを示すものである。このような洪水の合間の人間活動の痕跡はNG92-92次調査地の畦畔遺構SR501や(第二章第3節)、NG96-14・41次調査地の足跡や鋤跡でも窺える[大



図150 NG89-13次SD601断面図

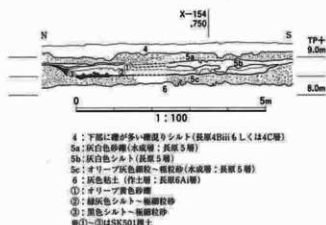


図151 NG89-13次SK501断面図

阪市文化財協会2001a: p.139]。

NG90-13次調査

長原6Ai層基底面で溝SD602、同層上面で水田畦畔SR603・

604が検出された(図153)。

SD602は幅約10m、深さ2mにおよぶ(図版22上)。埋土は3層に細分でき、下部は極粗粒砂を中心とする砂層である。中部・上部は炭化物を多量に含む粘質の強いシルトであるが、両者の境に踏込み状のラミナの変形が認められる。また、流路を北西方向に延長すると出戸池がある。

出土遺物には土師器高杯1・甕2と須恵器杯3がある(図154・写真18)。1は杯部があまり広がらない形態である。杯底部に接合痕が明瞭に残り、全面ユビオサエが残る。2は体部下半にハケメが残り、上半はユビオサエやナデで仕上げられる。これらは飛鳥時代前半のものであろう。3は口縁端部にあいまいな面をもち、ヘラケズリは底部の1/2にしか及んでいない。TK10型式に属する。

NG92-2次調査

断面観察で長原6Ai層(図148の第6a層)上面で長原6Bi層(同第6c層)上面で水田畦畔が確認された(図148)。長原6Ai層上面では畦畔を境にして北西隅が0.2m低くなっていた。

NG86-79・87-2次調査

長原6Bi層準の水田とそれに伴う畦畔SR605～609が検出しされた(図155)。ここで検出された畦畔はNG86-109・87-35次調査地[大阪市文化財協会1992a]や、大阪文化財センターによる城山(そ

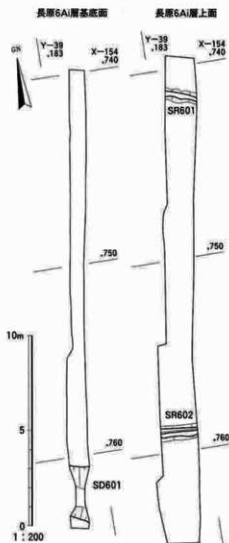


図152 NG89-13次遺構配置図

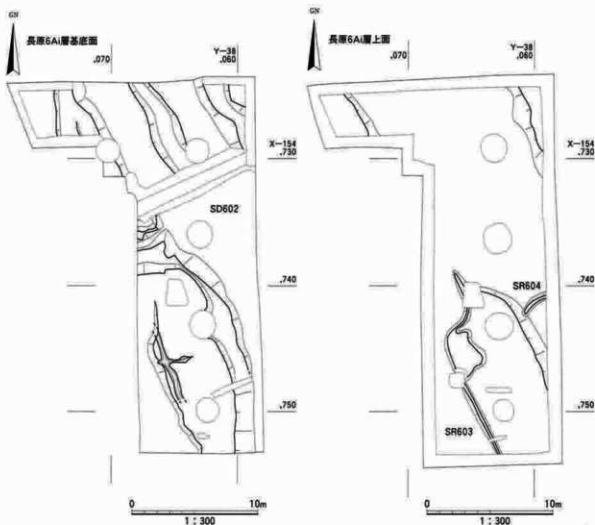


図153 NG90-13次飛鳥～奈良時代遺構配置図

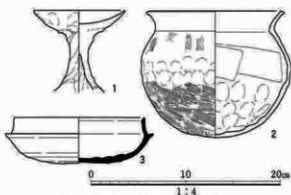


図154 NG90-13次SD602出土遺物



写真18 NG90-13次(2)出土状況

の3)調査地[大阪文化財センター1986c]で検出された水田畦畔と連続するものと思われる(図155)。

c. 平安時代の遺構と遺物

NG92-2次調査では、長原4Biii層(図148の第4b層)基底面でSE401～403の3基の井戸のほか、溝SD401や多数の柱穴が確認された(図156)。

SD401：南北方向の溝で、幅1.1m、深さ約0.2mである。埋土の最下部に水成堆積物が認められた。

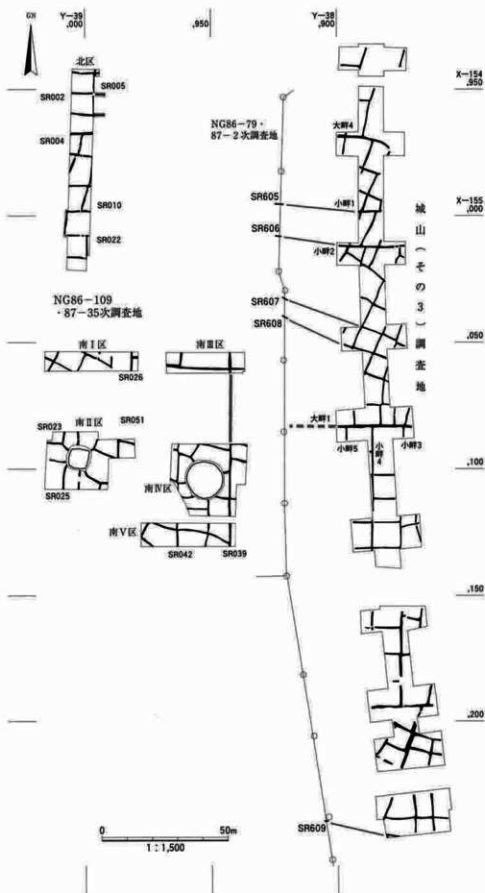


図155 NG86-13・87-2次調査地および周辺の水田

南側はSE401によって壊されている。さらにその南側では検出されなかった。

3基の井戸はほぼ東西に一直線に並んでいる。しかも、廃絶したときの埋戻し土は同時のものである(図157)。したがって、3基の井戸が同時に使用されたと考えられる。

SE401は3基の井戸の中央に位置する。現存する深さ約170cmで、底に直径約40cmの曲物を2段据えて水溜としていた。下段の曲物は高さ24cm、上段は11cmである。水溜の周囲には曲物を固定した埋戻し土が確認できるが、曲物の中とその上位は、水成堆積物の暗オリーブ色細粒砂質シルトである。よって、水溜はもともとこの高さまでで、その上は素掘りになっていたと考えられる。この水成堆積

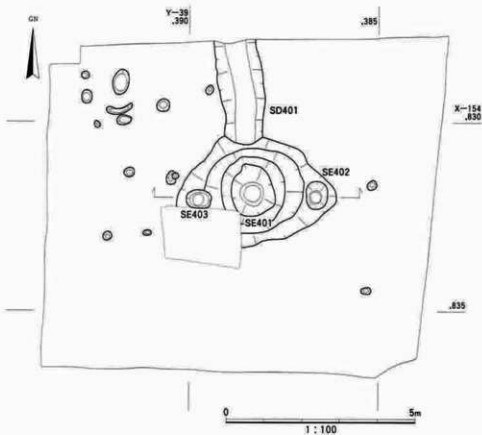


図156 NG92-2次SE401~403・SD401平面図

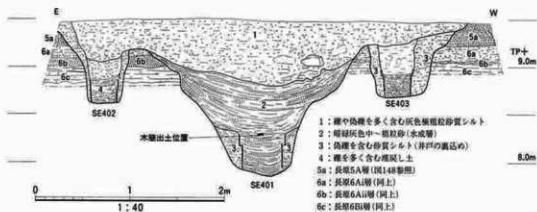


図157 NG92-2次SE401~403断面図

物の中からは、水溜の最上部で「治暦二(1066)年六月廿一日」銘の木簡4、素掘りの部分で木製鉢5が出土した。いずれも井戸が廃絶した後に廃棄されたものである。

一方、SE401の両脇に設置されたSE402・403は、現存する深さ約0.9mで、どちらもほぼ同じ深さに作られている。SE402の底には直径30cmの曲物が3段以上確認されたが、上段は腐植が著しく、数cmの高さが遺存するのみであった。しかし、掘形の埋戻し土は深さ60cmが確認され、本来の水溜は同程度の深さと推定される。曲物の内部は水成堆積物で埋まっており、その中位に土師器小皿6が正置されていた。

SE403もSE402とほぼ同じ構造に作られている。底で確認された曲物は、直径30cmのものが2段であったが、やはり、本来の水溜は60cm以上であったと推定される。また、曲物の内部に溜った水成堆積物の中位に、土師器小皿7が正置されていたこともSE402と同じである。2枚の土師器小皿は、井戸の廃絶にともなう行われた祭祀に関連して埋納されたものと考えられる。

SE401の曲物の内部からは、木簡4と木製鉢5に加え、小片であるが土師器小皿、黒色土器B類碗などが出土した(図158・159)。木簡4は全長35.2cm、最大幅6.1cmで、頭部は円頭状に整形している。下端から1.0cmと10.3cmの位置に、0.7cmの間隔で2個ずつの小孔が穿孔されている。隣合う小孔の間には紐ずれによると思われる痕跡があることから、棒のようなものに括り付けていたと考えられる。文字は片面にのみ全部で92字が記載され、裏面には刀でつけたような細かい傷が無数についていた。5は内側を削り貫いてから轆轤によって整形した挽物の鉢で、柁目材を横木取りして作っている。口縁部の直径は22.6cmで、焼けて歪んだ点を除けばほぼ正円であり、内外面とも轆轤回転でていねいに削られてい

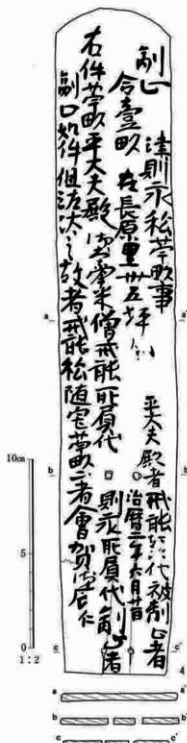


図158 NG92-2次SE401出土木簡

制止 津則永私芋畝事

合壹畝 在長原里卅五坪□

平大夫殿者戒能□代被制止者

治暦二年六月廿一日

右件芋畝平大夫殿御出舉米僧戒能所負代

則永所負代制止者

制止如件但注汰之故者戒能私隨宅芋畝二者會賀御□仁

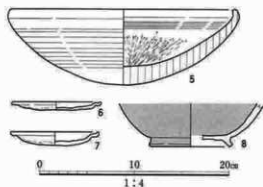


図159 NG92-2次SE401~403出土遺物
SE401(5)、SE402(6)、SE403(7・8)

3基の井戸を同時に埋め戻した土からは、土師器皿、碗、羽釜、黒色土器A類碗、B類碗、I期の瓦器碗、須恵器、瓦などの破片が出土した。

これらの出土遺物から3基の井戸に時期差は認められず、また、6・7が平安時代Ⅳ期古段階に位置づけられることから、瓦器が出現した直後の11世紀後半頃の年代が想定される。その年代はSE401で

る。また、内面には不定方向の刃物傷が多数残っている。

SE402の曲物の内部からは「て」字状口縁の土師器小皿6、皿の破片、掘形からは須恵器の破片が出土した(図159)。SE403の曲物の内部からは、「て」字状口縁の土師器小皿7、黒色土器B類鉢8に加え、黒色土器A類碗、B類碗、瓦器碗などの破片が出土した。瓦器碗は実測できなかったため図示していないが、内外面にていねいなヘラミガキが施されるものである。

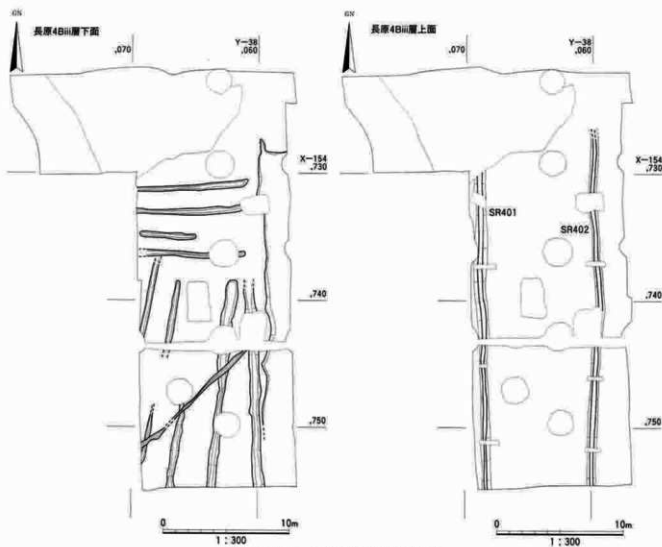


図160 NG90-13次鎌倉時代遺構配置図

出土した木簡の年代と整合する。

d. 鎌倉時代の遺構

NG90-13次調査

長原4Biii層(もしくは長原4C層)上面で南北に平行して延びる畦畔SR401・402が検出された(図160右)。幅0.6~0.8mで、それぞれの間隔は8.5mある。この作土の下面では東西および南北方向の耕作溝が検出された(図160左)。

NG92-2次調査

長原4Bi層(図148の第4a層)基底面で溝SD402~404、浅い落込みSK401が検出された(図161)。溝はいずれも東でやや北に振った方向に平行に延び、深さ0.2m前後で、埋土に水成堆積物は認められなかった。13世紀前半に位置づけられる瓦器椀や土師器が出土した。

SK401は長径が4mを越える不定形の土坑で、深さは0.2m程度である。13世紀前半ごろの瓦器片とともに土師器・瓦の破片が多量に出土した。

NG95-2次調査

長原4Bi層基底面で溝・土坑が検出された(図162上・図版22中)。

SD405: 幅約0.7m、深さ0.2mの溝である。ほぼ直角に曲る。

SD406: 幅約0.7m、深さ0.2mの溝である。SK402に取付いている。

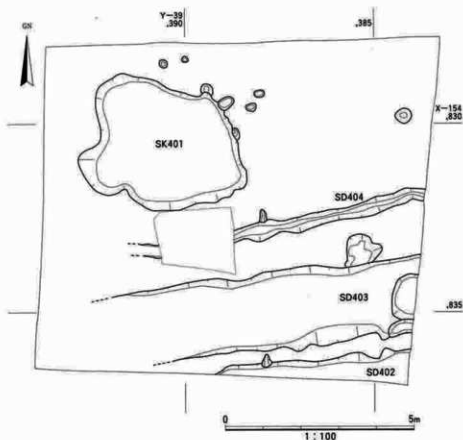


図161 NG92-2次鎌倉時代遺構配置図

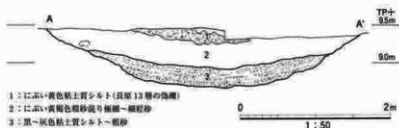
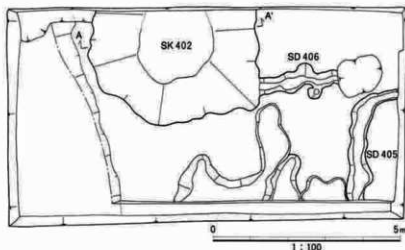


図162 NG95-2 2次鎌倉時代遺構配置図およびSK402断面図

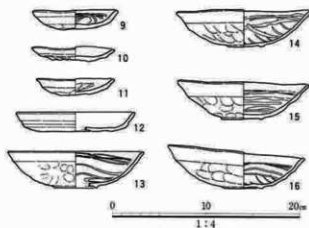


図163 NG95-2 2次SK402出土遺物

SK402: 南北4.6m、東西3m以上、深さ0.75mある。全体は検出されなかったが、平面形はほぼ円形を呈するものと考えられる。埋土は3層に分層できた(図162下・図版22下)。3層はラミナが顕著にみられ、水漬きの状態であったようである。現状では、本層内の水準で若干の湧水がある。この層からは遺物はほとんど出土しなかった。2層はラミナこそ見られないものの、明らかに埋戻したという形跡もない。土器の出土状態がほぼ水平であることから、土砂が少しずつ流入して堆積したものと考えられる。1層

は地山の偽層を含み、埋戻された土である。2層からは土師器皿12、瓦器皿9～11、椀13～16が出土した(図163)。13～16は器高が低く、高台が退化したもので、Ⅲ-3期に該当し、13世紀前半に位置づけられる[尾上実ほか1995]。

この遺構は下層の堆積状況から水を溜めるためのものと考えられる。近隣は耕作地であり、灌漑用に蓄えたのであろう。

3) まとめ

本節では長吉長原1丁目(以下、「同地区」と略称)で行われた調査を報告した。広域にもかかわらず、調査数が少ないのは主要幹線沿いでしか調査が行われていないためである。逆にこれが同地区の中央部において、古い村落の名残を残すことになり、地下に埋没している東除川の流れの方向も現存する道路から窺うことができる。

古墳時代の遺構については本節での報告は少なかったが、同地区の南東では高廻り古墳群が見つっており、さらに南側では長原古墳群の南群が広がる。また、同地区西側に当るNG92-2次調査では

古墳時代の遺構が断片的に見つかっているが、これは長原古墳時代集落の「西ムラ」の一部であろう。現在、同地区中央部の調査が進んでいないため、集落域がいつな形に復元されているが、未調査地域の調査が進めば新たな展望が見えることであろう。

飛鳥～鎌倉時代については水田や耕作関係の遺構が検出された。同地区が飛鳥時代以降大規模に水田化されたことを窺わせるが、NG92-2次調査で見つかった平安時代の井戸のように、居住地は散在していたのであろう。



図164 木簡出土位置と推定条里

ここで、本節の調査成果でもっとも特筆される、NG92-2次調査地の井戸SE401から出土した木簡を取り上げたい。この重要性についてはすでに[清水・鳥居1996]で指摘されていて、その内容を整理すると以下のようになる。

まず、「治暦二年」という紀年が記されていることから、正確な年代が明らかである。加えて、これまで11世紀後半頃に想定されていた平安時代Ⅳ期古段階の土師器と共存していることから、これまでの年代観をさらに裏付けることができた。

第2に、「長原」という地名が記されていたということである。長原の地名が文献に登場するのは、今までは「平安遺文」の保延3(1137)年「河内國長原字先生君」が最古のものであったことから、1066年の段階でこの辺りが「長原」と呼ばれていたことがわかる。また、「長原里卅五坪」と記されていたことから、条里制という丹北郡七条五里である当地が「長原里」の35坪に当ることも明らかになった(図164)(註1)。

第3に、在地豪族津氏の一員である則永と、僧侶の戒能、中央貴族の一人と思われる平大夫の3人が土地を巡って争っている様子が窺える。冒頭に「制止」という文字が大きく書かれていることから、何らかの行動を禁止することを告示する「制札」に該当するものである。その「制止」の内容は、「平大夫殿」によって「津則永」が芋(からむし=繊維の原料になる商品作物)を作っていた「長原里卅五坪」の「壹畝」の使用を禁ずるというものである。

なお、「制止」の理由については複雑な事情が考えられるものの、以下の説が考えられる。

a)「津則永」が「平大夫」に債務のある僧侶「戒能」に負債したことに起因して、「平大夫」が「津則永」

の畠(「壹畝」)を差し押さえた。

b)「平大夫」は「戒能」に債権を持っていたが、担保がすでに「會賀御□(厨もしくは庄か?)」に差し押さえられていたため、「會賀御□」に負債のあった「津則永」の畠を差し押さえた。

c) 同一の「苧畝」に対し、「戒能」と「津則永」がそれぞれ別件の負債を担保としたため、「戒能」の債権者である「平大夫」が、「津則永」の行った担保設定を無効とした。

ただ、この木簡に登場する人物が記された文献はないため、現状ではこれ以上の結論を出すのは困難である(註2)。(寺井)

註)

(1) [京嶋1999・2001a]では、この木簡の末尾の「會賀御□」に着目している。「會賀」は『日本書紀』や『延喜式』では「衛我」や「恵我」などとして登場する、「長原」よりも古い地名で、以前は「長原」は「會賀」に含まれていたと考えている。また、「會賀」の次に登場する「御」は天皇に関わる単語に付けられる接頭語で、別の文献では「會賀」が牧であったということが記されている。以上のことから、「長原里」はかつては広大な皇室領として認識されていた會賀御牧の範囲に含まれていたが、11世紀以降は西琳寺や醍醐寺などの莊園も設定されるようになり、土地争いが起こりやすい環境にあったことを推定している。

(2) 近年、佐々木恵介氏が中世の制札の原型を考えるのにこの木簡を取り上げている[佐々木恵介2004]。それによると、制札とは禁制を不特定多数に告知するために木札に書いて掲示したもので、もっとも古い例としては文治元(1185)年の北条時政制札(八尾市玉祖神社所蔵)が挙げられている。中世のものが整然と書かれているのに対し、長原遺跡出土の木簡は「制止」と書きだされているものの、内容が錯綜している。ただ、立て札によって命令を示したという点で、制札につながる可能性を示唆している。

第V章 北地区の調査

第1節 NG93-37次およびその周辺の調査

1) 調査地と周辺の概要

本節ではNG85-79・87-43・93-37次調査を報告する(図165)。

NG85-79次調査地は大阪中央環状線に長居公園通が突き当たる角の北西に位置する。南約100mの地点には地下鉄谷町線延長工事の31工区がある。工事の掘削深度がGL-3.2m(≒TP+7.3m)であったため、中世の面までしか平面調査ができなかったが、施工業者と協議して、3個所で深掘を行い、

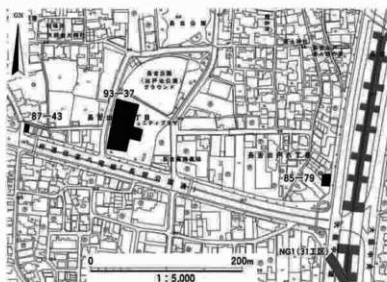


図165 NG93-37次などの調査地位置図

い、弥生時代の包含層や長原13層の上位の地層で、火山ガラスを含む褐色～灰黄褐色シルト層が確認された。

NG87-43次調査地はNG93-37次調査地の西約100mの地点に位置し、南側は長居公園通(敷津長吉線)に面する。17㎡という小規模な調査であったが、室町時代の掘立柱建物が検出された。

NG93-37次調査地は旧出戸池の埋立地に当る。さらに当地は旧東除川が東に折れ、再び北流する曲角の地点であったと考えられている。1993年2～3月に2個所で試掘調査が実施され(NG92-90・95次)、古墳1基(199号墳)と縄文時代の包含層を確認したため、本調査を実施するに到った。調査の結果、さらに古墳5基(長原201～205号墳)が発見され、1993年11月13日に現地説明会が実施された(写真19)。



写真19 NG93-37次現地説明会風景

2) 調査の結果

i) 層序

表20 NG87-43次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	1	現代作土	20	作土				近・現代
2	2	暗灰黄色シルト	20				江戸時代以降の遺物	江戸時代
3	2-3	灰白色シルト	5					
4	3	浅黄色細～粗粒砂	60	水成			瓦質土器・瓦・土師器	室町時代
5	3	灰色シルト	20			▼SB301	瓦質胡堂・瓦彫板・瓦	
6	4	灰白色細粒砂～シルト	>30					

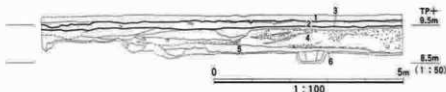


図166 NG87-43次南壁断面図

表21 NG93-37次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物・含有物	時代
1	6	黄灰色シルト質粘土	20～30	作土				奈良時代
2	7A	灰色粘土	20～30	作土			土師器杯C7	飛鳥時代
3	9～12	黒色粘土～シルト質粘土	20				土壌化した横大路火山灰	縄文時代
4	12D	暗灰黄色細粒砂質シルト	20				横大路火山灰	
5	12D	暗オリーブ色細粒砂質シルト	20					
6	13A	灰オリーブ色細粒砂質シルト						新石器時代

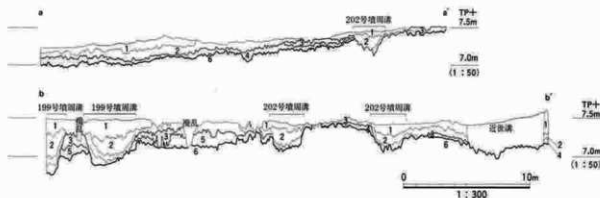


図167 NG93-37次断面図

NG87-43次調査では15世紀までの地層を確認することができた(図166・表20)。第3層は東側で第4層に切り込み厚くなる。第4層はラミナが発達した水成層である。

NG93-37次調査では長原6層より上位の地層は削平されていて、それ以下の地層が残っていた(図167・表21)。断面の位置は図168に示した。

長原7A層と想定される第2層からは土師器杯C7が出土した(図171)。7は内面に放射状の暗文があり、径高指数は30で、飛鳥Ⅱに位置づけられる。また、第4層からは横大路火山灰が検出されたことから、長原12D層と思われる。

ii) 遺構と遺物

a. 縄文時代以前の遺構と遺物

NG93-37次調査地では、第3層を埋土とするピットと土壌が検出された(図168)。調査区中央付

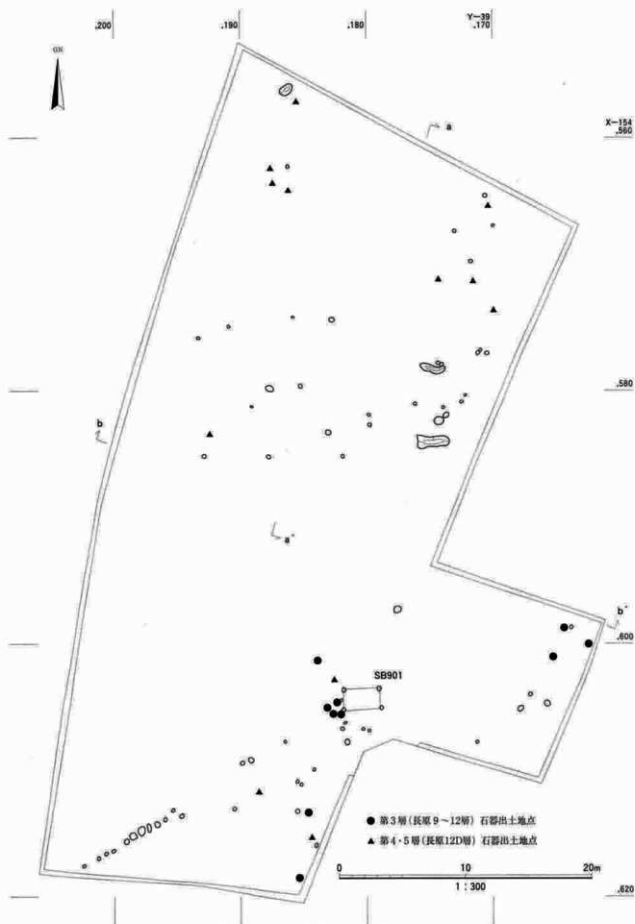


图168 NG93-37次縄文時代遺構配置図

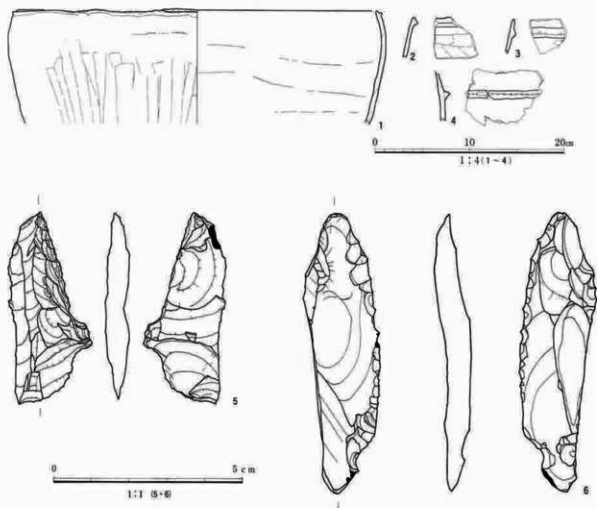


図169 NG93-37次縄文時代出土遺物

近(長原201号墳墳丘の下位層)の4つのピットは方形をなし、住居の柱穴の可能性がある(SB901)。ピットは直径0.2~0.3m、深さ0.1~0.3mのものであり、土壌は長軸2.5m、短軸1.0m、深さ0.3mの楕円形である。

これら遺構の中からの遺物はなかったが、包含層から縄文時代晩期長原式の深鉢1~4や石器が出土した(図169)。1は口縁端部に低い突帯があり、刻み目が施されている。外面には縦方向のケズリが施され、内面には接合痕が明瞭に残る。2は口縁端部の外側に突帯が付き、刻み目はない。3は口縁端部からやや下がったところに突帯が付き、刻み目が施される。4は体部で、刻み目突帯が巡る。

石器は石鏃5点、楔形石器1点、細部調整のある剥片1点、剥片と思われるもの4点が出土し、楔形石器5、細部調整のある剥片6を図示した。5は2段階の加撃が確認される楔の本体である。最初の加撃は、図の横方向から行われており、左図の右側縁に一連の打撃痕が認められることから、打縁と考えられる。その結果、右図にみられる打瘤が凹み、リングが大きく屈曲したネガティブな剥離面が生じている。その後、打縁の位置を90°変えて加撃し、左図の左側縁では上からの截断面が生じ、また、右図の下では下からの剥離面が生じている。図の上端を打縁、下端を刃縁として楔に使用したものと考えられる。

6は搔器と思われ、底面のある板状の石核から剥離した横長の剥片を素材としているとみられる。背面・腹面とも、剥片の打面側から二次剥離が行われた後に、剥片縁に細部調整剥離を施して、刃部としている。また、細部調整の段階で、下部の両側縁には挟り状の剥離が行われ基部を作っている。剥片縁側の挟りは両面から、打面側の挟りは背面側から剥離が行われている。二次剥離の剥離角は比較的浅く、薄い剥片が剥離されている。背面の二次剥離は左図左外方から打撃されたと思われるが、同図上部左にあった割れ傷を起点に副次的に剥離したと考えられる。剥片縁に当る側縁(右図右側縁)は2箇所折れている。中央から下端にある折れは、二次剥離後、細部調整前に折れている。上部の折れは二次剥離の時から、細部調整前に折れている。

この石器は製作工程や風化度から、縄文時代の古い段階か後期旧石器時代後半に属するものと思われる。

第4層を埋土とするピットと土壌は、南端と中央より北に集中する。南端で並ぶピットは、直径は0.1~0.5m、深さは0.1~0.2mである。遺物はなかった。中央より北にあるピットは小さく浅いものであるが、深鉢の底部が1点出土している。また土壌は調査区北端にあり、直径1.0m、深さ0.6mで、遺物はなかった。包含層から石器が14点(石鏃10点、剥片4点)出土した。

第5層を埋土とするピット、土壌はなかった。

なお、第3~5層出土石器はすべてサヌカイト製で、石鏃は凹基式石鏃である。

b. 古墳時代の遺構と遺物

方墳が6基検出された(図170・図版23上)。以下、各古墳について概要を記す。

長原199号墳：試掘(NG92-90次)で検出され

た。古墳の規模は、周溝の内側で6.0m×9.0m、周溝の幅3.0m、深さ0.6mである。第13Ai層に由来する偽鏃を多く含む盛土は数cm残っていたが、主体部は検出されなかった。

遺物は、周溝の南辺から須恵器有蓋高杯の蓋10・11、無蓋高杯12、壺13が、周溝の西辺から土師器小型丸底壺8・長胴壺9が出土した(図171・写真20)。須恵器はTK73型式に該当することから、古墳の時期は5世紀中頃で、長原2期に位置づけられる。



写真20 NG93-37次長原199号墳周溝遺物出土状況

長原201号墳：長原199号墳の西に隣接し、近世溝や攪乱に切られる。古墳の規模は、周溝の内側で7.0m×7.0m、周溝の幅3.0m、深さ0.3mである。盛土と主体部は残っていなかった。周溝に転落した状態で土師器高杯の脚部14が出土し、周溝から円筒埴輪片が多数、朝顔形埴輪片と須恵器片が数点出土した(図171)。この円筒埴輪には弧状のヘラ記号をもつ16・17や、シカのような線刻をもつ18がある。また、19~21についてはB種ヨコハケが施されている。これらの埴輪は直径約20~25cmで、調整も焼成も雑多であるが、いずれも窯窯焼成で、ヨコハケがみられる。これらの埴輪から、この古

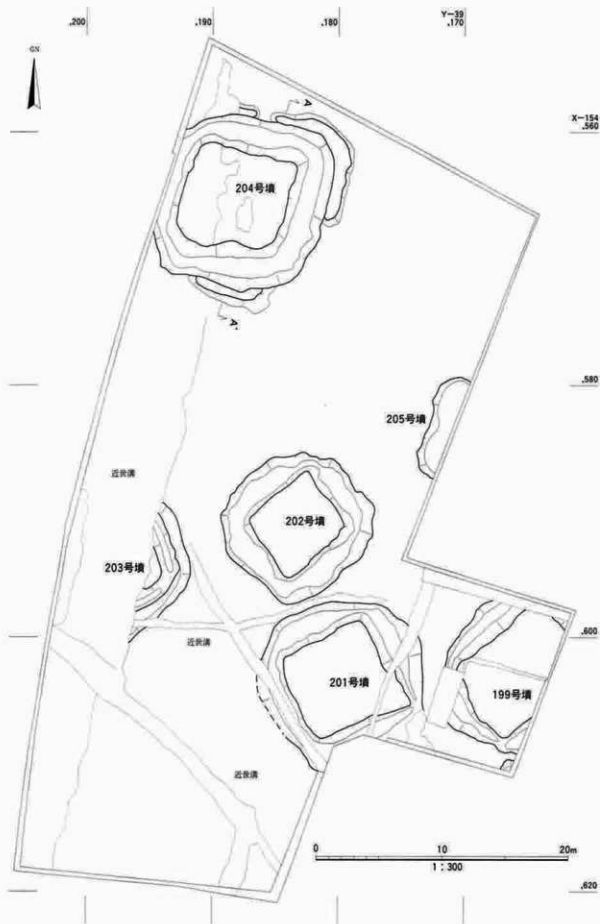


图170 NG93-37次古墳分布図

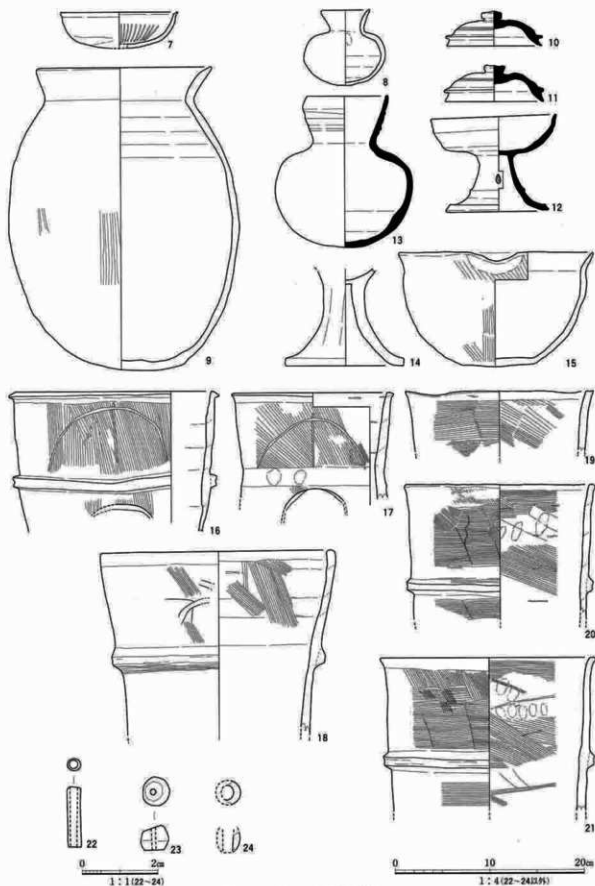


图171 NG93-37次出土遺物

長原7A層(7)、長原199号墳(8~13)、201号墳(14・16~24)、202号墳(15)

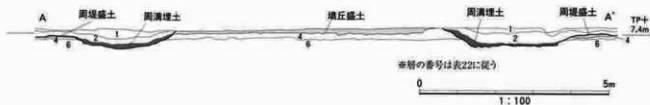


図172 NG93-37次長原204号墳横断面図



写真21 NG93-37次長原204号墳周堤断面

墳は長原2期に位置づけられる。

なお、墳丘上の擾乱の土の中から、瓦・埴輪とともにガラス製小玉2点、滑石製管玉1点が出土した(図171)。22は直径0.5cmの完形で、濃い青色を呈する。23は土を水洗選別して見つけたものである。24は半分に割れていて、直径0.4cm、長さ1.6cmで、孔の直径は0.2cmある。いずれも濃い青緑色を呈する。

長原202号墳：長原201号墳の北西に隣接する。古墳の規模は、周溝の内側で6.0m×6.0m、

周溝の幅3.0m、深さ0.3mである。盛土はすべて削平されていて、主体部も残っていない。周溝内からの遺物は、須恵器甕の破片が多く、円筒埴輪と朝顔形埴輪が破片で少量出土した。また、土師器片口鉢15が出土した(図171)。

長原203号墳：調査区中央やや西寄りに位置する(図版23中)。墳丘と周溝の中央を近世溝に削られていたため、古墳のコーナーが検出されたにすぎないが、周溝の内側で6.0m×6.0mと復元できた。周溝から須恵器の破片が少量出土した。

長原204号墳：調査区北西隅に位置する。擾乱により、周溝・墳丘ともに一部削られていた。古墳の規模は、周溝の内側で8.0m×8.0m、周溝の幅3.0m、深さ0.5mである。周溝の外側に周堤が残る部分があり、幅1.0m、盛土の厚さは最大で0.1mである(図172・写真21)。墳丘の盛土は0.10～0.15m残存していたが、主体部は残っていなかった。遺物は、周溝内から高杯などの土師器片や須恵器の甕片が少量出土した。

長原205号墳：調査区東辺で周溝のコーナーが検出された。調査区外へ延びるため、平面プランは

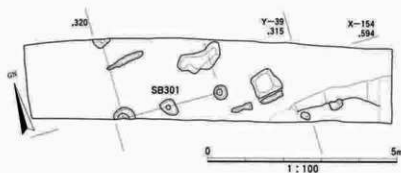


図173 NG87-43次室町時代遺構配置図

わからなかったが、方墳と考えられる。周溝には黒褐色シルト質粘土が堆積していたが、遺物は出土しなかった。

c. 室町時代の遺構

NG87-43次調査では、長原3層に相当する第5層基底面で掘立柱建物などの遺構が検

出された(図173・図版23下)。

SB301：桁行1間(2.2m)以上、梁行2間(2.6m)の正方位に延びる掘立柱建物である。南西隅の柱穴からは15世紀頃の瓦質羽釜の破片が出土した。

このほか、小溝や土壌などの遺構を検出したが、出土遺物が少量でかつ細片であるため、遺構の性格や詳細な年代は不明である。

3)まとめ

NG93-37次調査で見つかった6基の古墳(長原199・201~205号墳)は長原古墳群の北群を構成する。これまで約30基あまりが検出されているが、調査密度が低いため、今後も未知の地点から発見される可能性が高い。

古墳はいずれも削平を受けているため、主体部は発見されなかったが、長原204号墳では周堤が残っていた。長原で周堤が検出された古墳は長原181号墳(南口古墳)[大阪市文化財協会1995: pp.181-232]、190号墳[久保和士1992]に次いで3例目になる。上記の2古墳は長原古墳群でも大きな部類であるが、一般的な大きさの古墳で周堤が発見されたのは初めてである。

主軸の方向はほかの古墳からやや離れた位置にある長原204号墳だけが正方位に近いが、それ以外はいずれも北西-南東(北東-南西)方向である。また、長原199・201・202号墳はそれぞれ隣接するが周溝を共有しない。

また、古墳墳丘の下などからは縄文時代の遺物が多く出土した。長原式土器についても図化できないような細片が多数ある。当地一帯に当該期の集落があったことを示すものであろう。(寺井)

表22 DD82-1次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(m)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
0	0	現代盛土	50					近・現代
1	1	黒～暗緑灰色砂礫混りシルト	20	現代作土				江戸時代
2a	2	淡灰褐色砂混りシルト	15	水成			陶磁器	
2b	2	褐色砂礫混りシルト	20～50	水成			陶磁器	
2c	3	褐色シルト混り砂礫	15～25	水成			室町時代後半の瓦	室町時代
3	3	暗褐～暗灰色砂礫～砂礫混りシルト	15					鎌倉時代 奈良時代
4	4B	黄色シルト	15					
5	5	青灰色シルト礫礫を含む褐色細粒砂～シルト・暗灰色シルト質粘土	120	水成				
6	6以下	青灰色細礫粒砂～シルト・暗灰色シルト質粘土	140					
7	6以下	黒灰～暗灰色シルト質粘土・明灰色砂混り粘土	50					
8	6以下	灰色砂質粘土	>20					

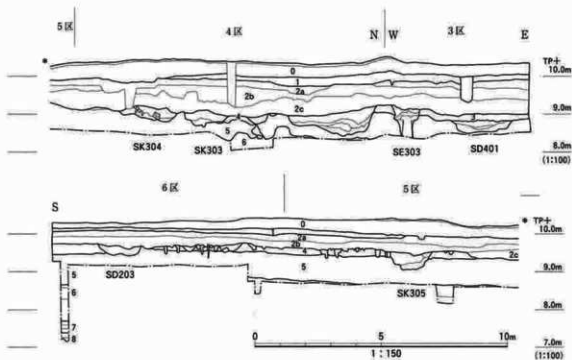


図175 DD82-1次断面図

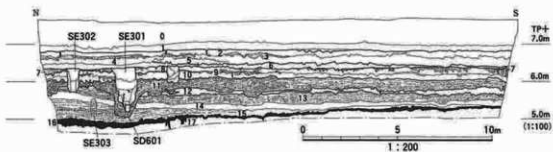


図176 NG91-16次東壁断面図

DD82-1次調査では、長原5層から土師器杯A1、甕2、須恵器壺3が出土した(図179)。1は内面に放射状の暗文が施されている。3の底部には糸切り裏が残る。

表23 NG91-16次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
0	0	現代盛土	60					近・現代
1	1	黒色砂礫混りシルト	20	現代作土				江戸時代
2	2	灰オリーブ色砂礫混りシルト	15	作土				
3	2	灰オリーブ色シルト混り砂礫	15~20	水成		→踏み込み		
4	2	暗オリーブ灰色砂礫混りシルト質粘土	15~25	作土				
5	2	暗灰色黄色含砂礫シルト	20	作土			肥前陶磁	
6	3	暗オリーブ色シルト混り砂礫	5~15	作土				室町時代
7	4A	オリーブ色砂礫・細粒砂	5~20	水成		→踏み込み		
8	4B	灰オリーブ色含細粒砂粘土質シルト	15	作土				鎌倉時代
9	4Bii	にぶい黄色細粒砂	6	水成		→踏み込み・耕作用		
10	4Biii	灰オリーブ色含砂礫粘土質シルト	20	作土				
11	5	灰オリーブ・灰色砂礫	35~50	水成		→SD60i		
12	6A or 6B	暗オリーブ灰色含細粒砂混りシルト	20	作土				
13	6Bii	緑灰色細粒砂・細粒砂質シルト	30	水成				飛鳥時代
14	7A or 7B	暗オリーブ灰色粘土質シルト	20				円筒埴輪	古墳・飛鳥
15	8	暗緑灰色含細粒砂シルト	10~50	水成				弥生時代
16	9~12	黒褐色粘土質シルト	6~20					縄文時代
17	13	オリーブ灰色含砂礫シルト質粘土						旧石器時代

表24 NG88-90次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
0	0	現代盛土	100					近・現代
1	1	現代作土	20	作土				江戸時代
2a	2	オリーブ灰色細粒砂	20					
2b	2	オリーブ灰色シルト質細粒砂	10					
4a	4B	オリーブ褐色シルト質細粒砂	20					
4b	4B	オリーブ褐色シルト質細粒砂	20			▼SE401~408		
5	5	にぶい黄色細粒・細粒砂	60					奈良時代
6a	6	暗緑灰色シルト	20~40					
6b	6	暗緑灰色細粒砂質シルト	20~40					
6c	6	灰オリーブ色細粒・細粒砂	20					
6d	6	暗緑灰色シルト	20~30					
6e	6	暗緑灰色含細粒砂質シルト	20~40					
6f	6	暗緑灰色含細粒砂質シルト	20~40					
7a	7B	黒灰色砂礫混り粘土質シルト	30					
7b	7B	(祭穴住居周壁)						
7c	7B	(祭穴住居周壁)						
8	13	灰黄色シルト質粘土						旧石器時代

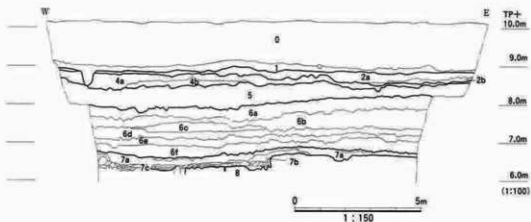


図177 NG88-90次北壁断面図

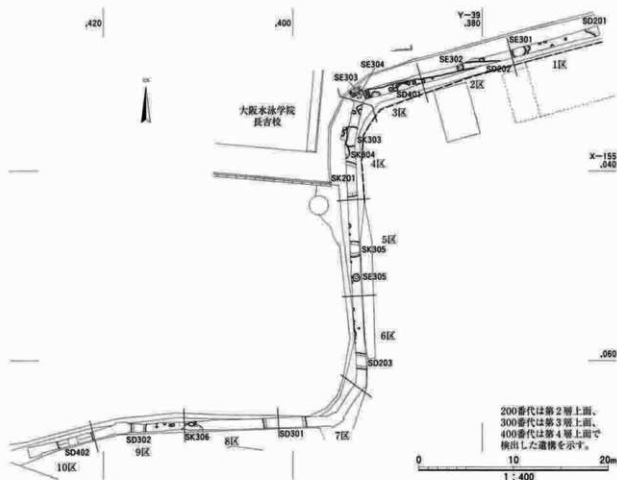


図178 DD82-1次調査地区割および遺構配置図

NG91-16次調査で溝SD601が検出された(図184)。幅0.7~0.8m、深さ0.5~0.7mあり、断面は逆台形を呈する。溝内には第5層と同じ砂礫層が堆積する。底の高低差や砂礫のラミナの方向から、南東から北西に向けて流れていたものとみられ、長原6Ai層準の水田に伴う用排水路と思われる。

b. 鎌倉時代の遺構と遺物

DD82-1次調査

鎌倉~室町時代の井戸・溝・土坑・柱穴が検出された(図178)。

井戸はいずれも直径1mほどの円形掘形で、第4層上面で検出された。

SE301: 最下段に曲物を入れ、その上に木桶を2段以上重ねていた。埋土から室町時代の土師器皿が12枚重なって出土し(図版24上)、4~6を図示した(図179)。

SE303: 木桶を2段以上重ねてつくった井戸である。室町時代の土師器皿7が出土した。

SE302・304・305: 曲物の上に羽釜を3段以上重ねて作った井戸である(図版24中・下)。SE305に利用されていた羽釜10は、口縁部が内傾し、端部が玉縁状に肥厚するもので、13世紀末頃と推定される。ここからは土師器皿8、瓦器碗9も出土している(図179)。9はIV-2型式で、13世紀後半に推定されるものである。

SK303: 4区に位置する幅2m以上のやや大型の土坑で、第4層上面で検出された。15~16世紀初頭に属する瓦質鉢20・21や備前焼擂鉢22~24、土師器羽釜25とともに大量の瓦が出土した(図180)。

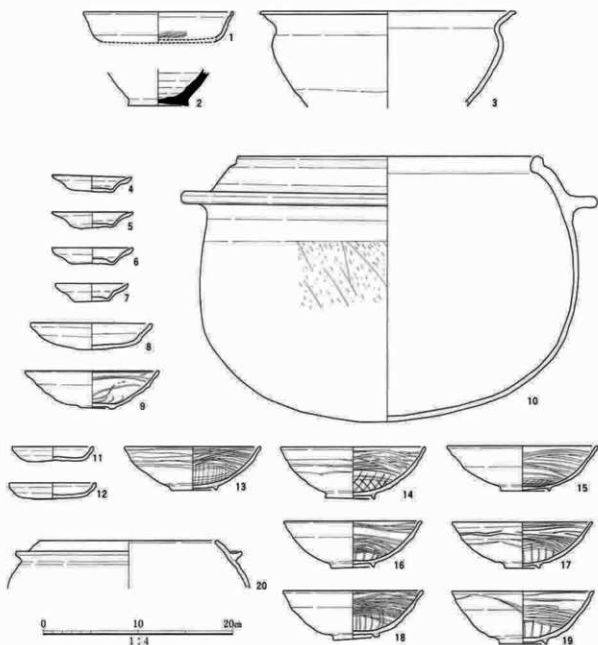


図179 DD82-1 次出土遺物

1～3：第5層、4～6：SE301、7：SE303、8～10：SE305、11～20：SD401

瓦には巴文軒丸瓦26や唐草文軒平瓦27・28、波頭文軒平瓦29がある。

SD401・402：いずれも第5層上面で検出した。幅は2.5～3.7mあり、深さは0.4m程度である。両溝の心心間の距離は約45mである。SD401からは瓦器碗11～19や土師器羽釜20が出土した。瓦器碗はⅡ-2もしくは3に位置づけられ、12世紀第3四半期に推定される。

NG88-90次調査

長原4B層(図176の第4b層)基底面で、井戸8基、土壇1基が検出された(図181・182、図版25中・下)。表25の時期は井戸側に用いられた羽釜の形態を基にし、羽釜がない場合は瓦器などの出土遺物を基に判断した。羽釜の年代については[森島康雄1990]を、瓦器の年代については[尾上実ほか1995]

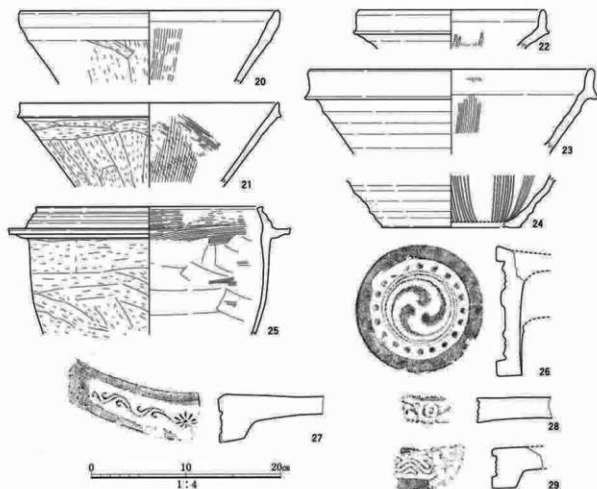


図180 DD82-1 次SK303出土遺物

を参照した。

それぞれの井戸は羽釜や曲物・桶を転用して作られている。出土遺物には土師器皿39～43や瓦器皿44・45、碗46～50、須恵器甕37、常滑焼甕38、青磁碗、平瓦51がある(図183)。瓦器碗は高台の断面が三角形で、ミガキが比較的粗である。本調査地の第4a層から出土した50についても、井戸から出土したものと時期差はなく、Ⅲ-2期と思われる。平瓦は凸面に縄タキが施され、凹面に布目が残る。

NG91-16次調査

第3層基底面で井戸が3基検出された(図184)。いずれも壁面で検出したもので、平面的な把握は十分でない。この中でSE409は直径1.2～1.5m、深さ1.2m以上の楕円形の掘形内に、底を抜いた曲物を数段重ねた後、陶質の井筒を積んでいた(図185・写真22)。井筒内にはオリブ黒色細粒砂質シルトが堆積しており、瓦器碗・土師器小皿・白磁などが出土し

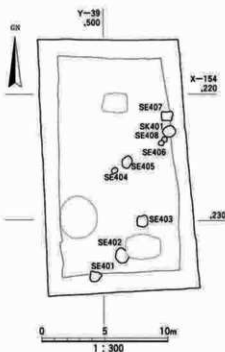


図181 NG88-90次遺構配置図

た。井戸の時期は出土遺物からみて13世紀中頃と思われる。なお、陶質の井筒は直径約46cmで、室町時代以降の瓦製の井筒に比べてやや小型であり、この時期としては類例の少ないものである。

井戸は廃棄時に井筒の上部を抜取った後、灰オリーブ色シルトの偽礫を多量に含む黒色砂礫混りシルトで埋められていた。

3) まとめ

本節報告の調査ではいずれも鎌倉時代の井戸が見つかった。西側には喜連東遺跡の中世集落があり、その集落の東縁に当るのであろう。また、SE402から出土した平瓦51は大型で一般集落で使われるとは考えがたい。地籍図を見ると、調査地は小字「戸ノ本(塔ノ本)」に当り、周辺では「山王」・「寺山」といった寺院に関すると思われる地名が存在することから、当地周辺に寺院が存在した可能性がある。

表25 NG88-90次検出井戸一覧

遺構番号	掘形の平面形	井戸側の構造	おもな出土遺物	時期	備考
SE401	長辺0.8m、短辺0.75mの隅丸方形	羽釜6段	土師器小皿・瓦器椀	13世紀後半	
SE402	長径1.22m、短径1.00mの楕円形	曲物5段	須恵器大甕・瓦器椀・平瓦	13世紀初頃	
SE403	長辺0.85m、短辺0.8mの隅丸方形	曲物1段+桶	須恵器大甕・瓦器椀・瓦片	13世紀初頃	
SE404	長径0.52m、短径0.42mの楕円形	羽釜2段以上	土師器小皿	12世紀後半	上部が削平を受ける
SE405	直径0.80~0.85mの円形	羽釜と推定	土師器小皿	12世紀中葉	井戸側は抜取られ残存せず
SE406	直径0.45mの円形	曲物1段以上	羽釜	12世紀後半	SE408の掘形を切る
SE407	東西0.9m、南北0.65~0.75の長方形	羽釜1段+曲物	土師器小皿・瓦器	13世紀後半	
SE408	長径0.35m以上、短径0.4mの楕円形	羽釜1段+曲物3段以上	土師器小皿・瓦器	12世紀後半	SE406の掘形に切られる

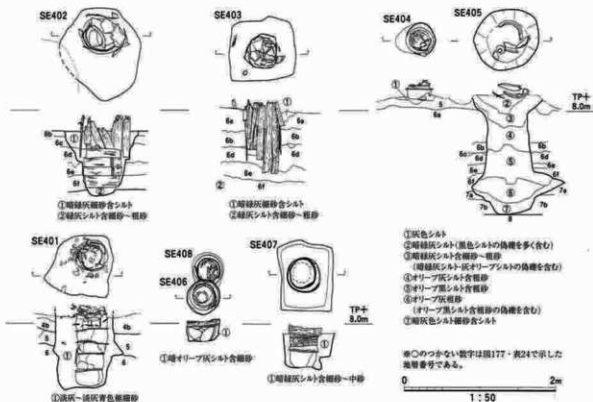


図182 NG88-90次検出井戸実測図

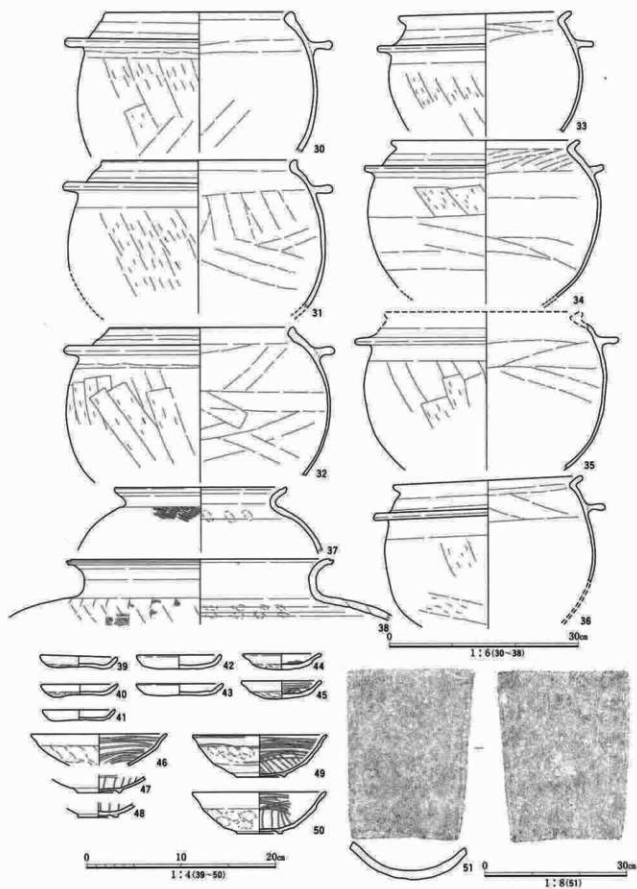


图183 NG88-90次出土遗物

SE401(30~32)、SE402(37·38·44·48·51)、SE403(39~41·45~47)、SE404(33·42·43)、SE405(49)、SE406(34)、SE407(35)、SE408(36)、第4a层(50)

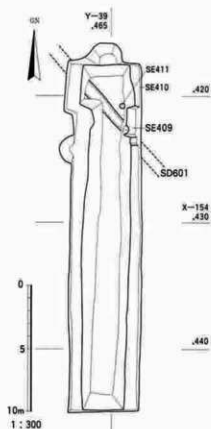


図184 NG91-16次遺構配置図

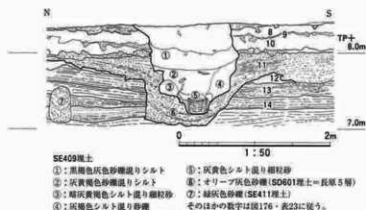


図185 NG91-16次SD601・SE409断面図



写真22 NG91-16次SE409検出状況

また、調査地の南東部には「堂ノ前」・「寺東」・「茶や前」といった門前町と思われる小字名もある。出土遺物とあわせて考えると、調査地周辺には門前町が形成されていたのかもしれない。

(寺井)

第3節 NG84-34次およびその周辺の調査

1) 調査地と周辺の概要

本節ではNG84-34次およびNG23・25次、84-74次調査を報告する(図186)。いずれも下水工事に伴う小規模なトレンチ調査である。なお、NG23・25次調査については長吉出戸7丁目に位置するため、本来なら東北地区に属するが、NG84-34次調査地に近接していることから、本節で報告することにした。

NG84-34次調査地は平野区長吉出戸3丁目に位置する。近接して城山遺跡ANおよびAトレンチがあり[大阪文化財センター1986a]、弥生時代の方形周溝墓や古墳時代中期の小方墳が検出されている。本調査では北から第1～4区を設定し、土留め工事をしてから調査に取りかかった。調査の結果、畿内第IV様式の土器が供献された方形周溝墓が3基検出された。

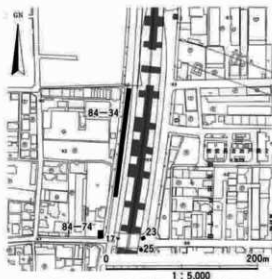


図186 NG84-34次などの調査地位置図

NG23次および25次調査は城山遺跡Aトレンチの南側に位置する。NG23次調査では弥生時代中期の細長い落込みと古墳の周溝が検出された。前者は後述するように方形周溝墓の溝の可能性がある。NG25次調査では古墳や方形周溝墓が検出されなかったが、縄文時代晩期から弥生時代中期の包含層が検出され、当該時期の多数の遺物が出土した。

NG84-74次調査は下水工事に伴うもので、顕著な遺構・遺物は発見されなかった。

2) 調査の結果

i) 層序

NG84-34次1区はGL-4mまで攪乱を受けていたため、地層は失われていたが、第2～4区は地層が良好に残っていた(図189・191・194)。推定される長原層序は註記に記した。いずれの地区でもTP+6.5m前後のレベルで、弥生時代後期から古墳時代前期の黒色シルト質粘土層が検出され、長原7Bii層に比定される。また、方形周溝墓は長原8B層に比定される暗緑灰色シルト層をベースにしている。

ii) 遺構と遺物

a. 弥生時代前期の遺物

NG84-34次4区の長原8B層から畿内第I様式の壺2・甕4が出土し、同区の長原7B層に相当すると思われる地層から壺1、3区の方形周溝墓SX802周溝内から甕3が出土した(図188)。1は口縁部に孔が2つ並び、本来は2孔1対であったと思われる。頸部には沈線が2条巡る。2は壺の肩部で、沈

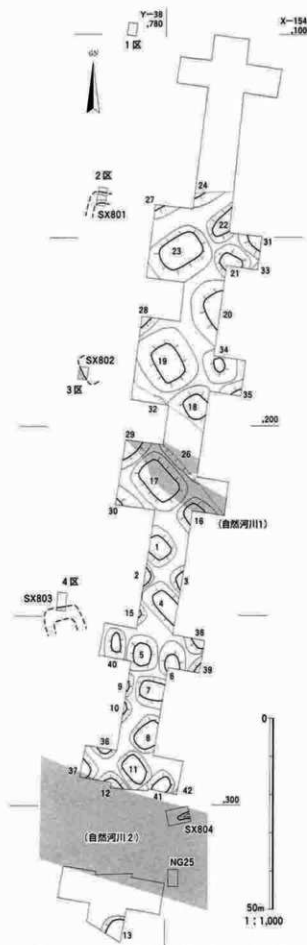


図187 NG84-34調査地周辺の弥生時代の遺構
数字は城山遺跡の方形周溝墓の番号を示す

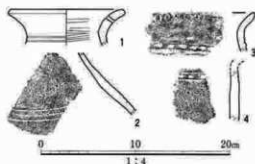


図188 NG84-34次弥生前期土器

線が3条施される。3は短く外反する口縁をもち、口縁端部には刻み目が施される。頸部には沈線とその間に連続刺突文が施される。4も同様の文様が施される。

NG25次調査ではTP+5.7m付近のオリブ黒色粘土層や粗粒砂層から縄文時代晩期から弥生時代中期の土器や石器が出土した。

NG84-34次4区の北約50mや南約50mの地点では弥生時代前期以前に埋没した旧河川(自然河川1・2)が検出されていて[大阪文化財センター1986a]、NG25次調査地も自然河川2の推定範囲に存在する(図187)。また、同区の南東約30mに位置する城山遺跡の5号方形周溝墓の盛土内からも弥生前期の土器が多く出土している。よって、4区やその周辺に弥生時代前期の集落が存在した可能性がある。

b. 弥生時代中期の遺構と遺物

NG84-34次調査

方形周溝墓が3基検出された。

SX801: 2区で方形周溝墓の北東隅が検出された(図189、図版26上・中)。周溝の幅は約2.5mあり、深さは1m強である。盛土は黒色シルトの偽礫を多く含む暗緑灰色砂質シルトからなり、厚さは0.7m強である。周溝は盛土の流土で埋まっており(図189の17~19層)、最終的に長原7Bii層に相当する黒色粘土に覆われる。出土遺物には壺5~10があり(図190)、流土である17A層(図189)から出土していることから、本来

凹線状の凹みがあり、肩部にヘラによる列点が施される。体部外面は上半はナデで、下半は縦方向の粗いヘラミガキである。内面にはヘラケズリが施される。9は外面については8と同じく粗い縦方向のヘラミガキであるが、内面はナデで仕上げられる。口縁部は焼成後に打ち欠かれている。5～7、9は角閃石を含む生駒西麓産の胎土である。10は口縁端部が凹線状に凹み、焼成前に2孔1対の小孔が穿たれる。体部上半にはやや左上がりの粗い平行タタキの後、粗いハケが施され、下半は縦方向のヘラミガキである。体部には煤が付着する。以上の土器について、河内Ⅳ-3様式に相当する。

SX802：3区で方形周溝墓の南西辺が検出された(図191・図版26下)。墳丘の盛土は長原8B層に相

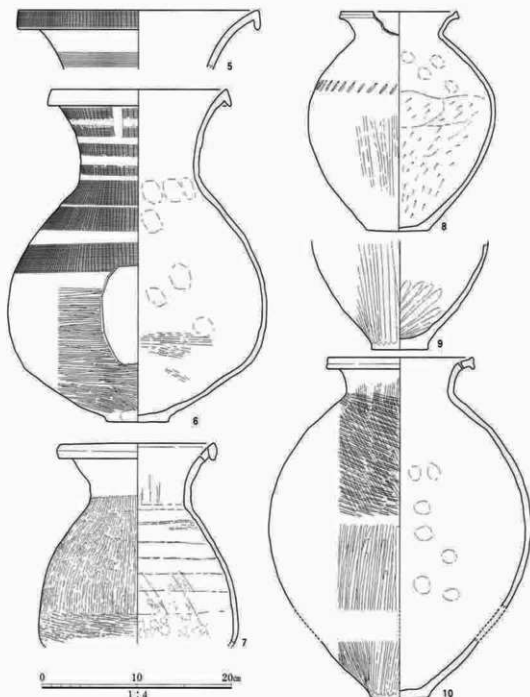


図190 NG84-34次SX801出土遺物

当する暗緑灰色極細粒砂(図191の14層)をベースにして、この地層に由来する礫で盛られていた。周溝の幅は1.5m以上で、墳丘高は周溝底から0.6m以上ある。遺物はSX801と同様に、墳丘の流土から壺11-14、甕15、高杯16・17が出土した(図192・193)。

11は球形に近い体部に、比較的良好な頸部が外反して立上がる。頸部から体部中央にかけて、波状文と直線文が交互に施されている。文様帯間の幅は狭い。外面は体部下半にヘラミガキとナデが施されている。内面はナデを基本とし、頸部にはシボリメが見られ、中央付近に一条のヘラ先による浅い沈線が巡る。12は簾状文が施され、典型的な生胸西麓の胎土を用いており、体部最大径は底部近くまで下がっている。外面は最大径の位置を境にして、ヘラミガキの方向に変化が見られ、このヘラミガキは底部外面にも及んでいる。内面調整も最大径の位置

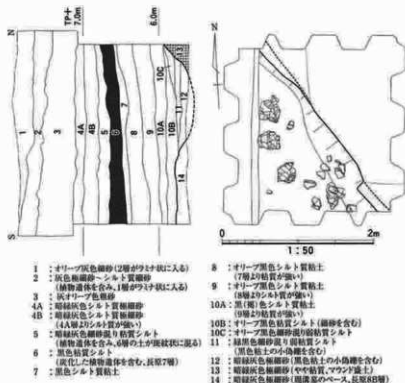


図191 NG84-34次3区断面図およびSX802平面図

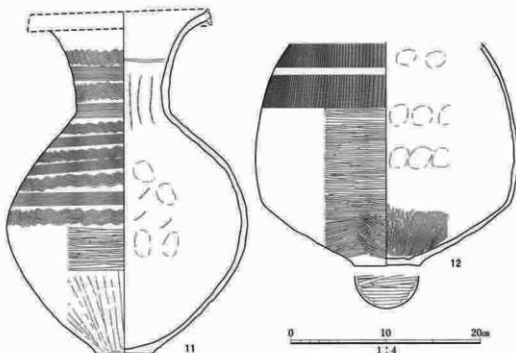


図192 NG84-34次SX802出土遺物(1)

を境にして変化しており、上半はナデ、底部付近は細かいハケが施される。

13は最大径が体部中央付近に位置し、頸部は直立し、口縁部は外反する。口縁部には2孔1対の孔が3方向に穿たれており、端面は外方へ突出する。体部外面は上半にハケメが、下半にヘラミガキが認められる。内面にはハケが施されるが、外面のハケメとは原体を異にしている。体部に焼成後の穿孔が施され、煤が付着している。

14は直立する口縁部の下半に凹線文を巡らせる。体部中央付近に最大径を置く。器面の剥離が進ん

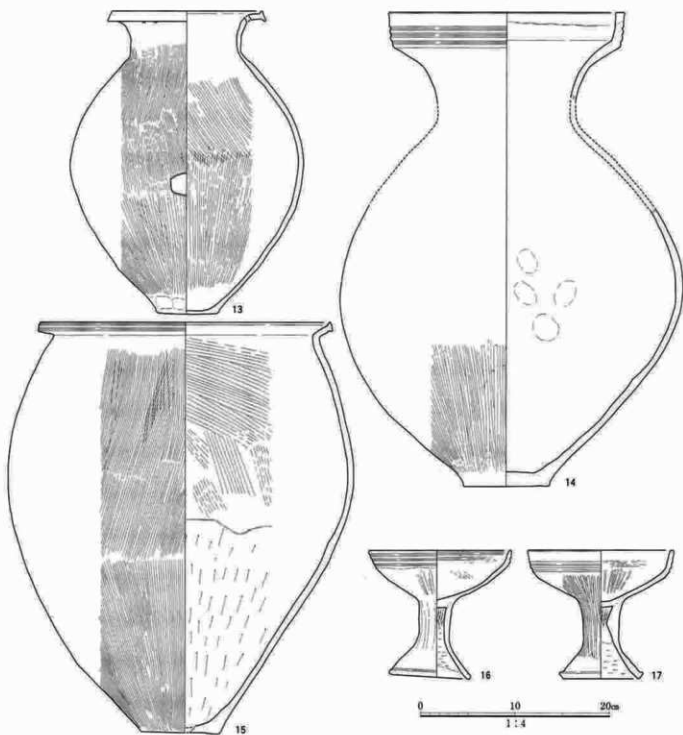


図193 NG84-34次SX802出土遺物(2)

でいるため、調整には不明な点が多いが、外面下半にはヘラミガキ、内面にはユビオサエが認められる。

15は口縁部端面に2条の凹線文を施している。最大径は体部中央よりやや上にあり、口縁径をしのぐ。外面にはハケメ、内面には外面と異なる原体のハケメが認められ、下半はヘラケズリである。

16は口縁直下の内外面に凹線文が巡るが、内面の凹線文は水平ではなく上下に乱れており、また下の一条は全周しない。脚部下端にも凹線文を巡らせており、端部は九く仕上げる。外面にはヘラケズリの後、ナデとヘラミガキが施される。脚部外面には縦方向のナデ及びヨコナデ、内面にはヘラケズリが認められ、シボリメも残っている。17は口縁よりやや下がった位置に凹線文を配している。杯部内面

にはナデの後、ヘラミガキが施される。外面は脚部までヘラミガキで、裾部はヨコナデである。脚部内面はヘラミガキとナデで、シボリメを残している。

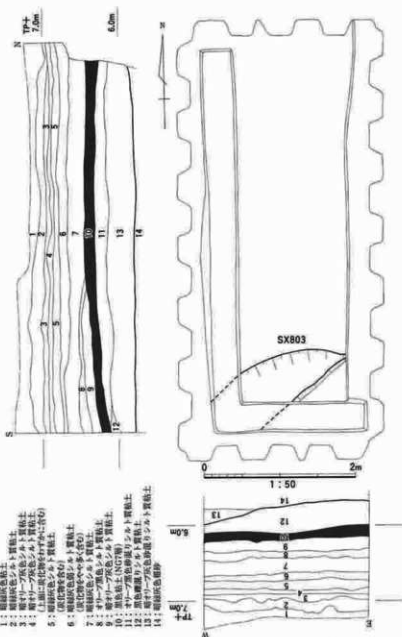


図194 NG84-34次4区断面図およびSX803平面図

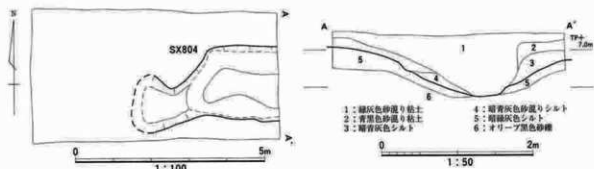


図195 NG23次SX804実測図

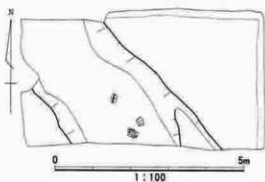


図196 NG23次長原100号墳周溝平面図

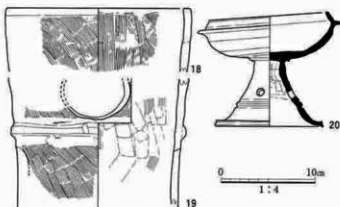


図197 NG23次長原100号墳出土遺物

以上の遺物について、河内Ⅳ-2 様式に相当する。

SX803：4 区の南側で検出した幅 1 m 以上の窪みである（図 194）。南側に墳丘をもつ方形周溝墓の周溝と思われる。

NG23次調査

SX804：幅 2.0 m、深さ 0.7 m の溝状の落込みである（図 195）。位置関係からこの落込みは城山遺跡の 42 号方形周溝墓の南側の周溝になる可能性が高い〔大阪文化財センター 1986a〕。

c. 古墳時代の遺構と遺物

NG23 次調査で長原 100 号墳（城山 7 号墳）の周溝に直交する方向の溝を検出した（図 196・198）。位置関係からみて同一古墳の西側周溝と判断した。隣接する 103 号墳と同規模で一辺 10 m 前後の方墳になると思われる。調査地内では墳丘盛土は検出されなかった。周溝は幅 3.0 m、深さ 0.6 m あり、円筒埴輪 18・19 や TK 216 型式に該当する須恵器有蓋高杯 20 が出土した（図 197）。なお、大阪文化財センター調査地では周溝から土師器高杯・須恵器有蓋高杯蓋に加え、B 種ヨコハケが施される円筒埴輪が出土していることから〔大阪文化財センター 1986a：pp.140～143〕、本古墳は長原 2 期に位置づけられる。

3) まとめ



図198 長原100号墳と周辺の古墳分布
括弧内は城山遺跡の古墳番号を示す

本節で報告した調査はいずれも小規模なトレンチ調査であったが、方形周溝墓や古墳の一部が見つかった。本節で報告した方形周溝墓はいずれも弥生時代中期後葉であるが、墓群自体は中期前葉から続いていて、長原遺跡でもっとも方形周溝墓が集中する。NG23 次調査の長原 100 号墳は長原古墳群の北群を構成するものである。近隣の大阪文化財センター調査地でも須恵器型式という TK 216 型式の頃の古墳が 7 基検出され（図 198）、組合せ式木棺を主体部とする古墳（城山 4 号墳＝長原 105 号墳）も見つかっている。（寺井）

第VI章 東南地区の調査

第1節 NG83-8次およびその周辺の調査

1) 調査地と周辺の概要

本節では長吉川辺3丁目の西端でNG81-12・83-8・86-23・87-72・89-47次調査を報告する(図199)。

NG81-12・83-8次調査地は中央環状線沿いに位置する。前者は4面の遺構面の調査が行われ、飛鳥～奈良時代の水田や平安時代の火葬墓が検出された。後者は敷地内に南北2個所のトレンチを設定して、調査を進めた。その結果、庄内式土器が出土した落込みや飛鳥時代の道路状遺構、飛鳥～鎌倉時代の水田が検出された。

NG86-23・87-72次調査は飛行場幹線下水管暗渠工事に伴った小規模な調査である。前者の調査地は北端がNG80-3次調査地と重なる。奈良

時代の水田や流路などを検出した。NG87-72次調査では長原13層と思われる地層からサヌカイト製フレイクが出土したが、顕著な遺構は見つからなかった。

NG89-47次調査地はNG83-8次調査地の北東に位置する。遺構検出は計5面に及び、特に長原4B層基底面では掘立柱建物や柱穴、溝が密集して検出された。

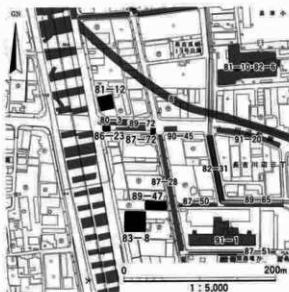


図199 NG83-8次などの調査地位置図

2) 調査の結果

i) 層序

NG83-8次調査地の南区南壁で地層を観察した(図200・表26)。なお、南区では長原5層は見られないが、北区では10cm程度の厚さで残っていた。

ii) 遺構と遺物

a. 旧石器～弥生時代の遺構と遺物

NG83-8次調査

長原9層(図200の第9層)から凹基型石鏃1が出土し、また、遊離資料であるが、後述する畠状遺構の溝や長原8層(図2の第8層)から木葉形石鏃2、剥片石器3・4が出土した(図201)。3・4はいず

表26 NG83-8次層序表

層序	民衆層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	1	現代作土	30	作土				近・現代
2	2	灰褐色砂質シルト	10	作土		▼鳥島		江戸時代
4a	4A	淡灰褐色細粒～粗粒砂	40	水成				鎌倉時代
4b	4B	淡灰褐色土質シルト	10	作土				
4c	4C	灰色砂混り粘土	10	作土				平安時代
5	5	黄褐色砂礫	※	水成		↓礫跡		奈良時代
6a	6A or 6B	黄褐～灰褐色砂混り粘土質シルト	10	作土		▼堀跡		
6b	6B or 7A	細灰褐～灰褐色土混り中粗砂～砂混り粘土	10	作土		↓鳥伏遺構		飛鳥時代
8	8	黄褐色シルト混り中粒砂	10					弥生時代
9	9	淡灰色シルト	10				石礫	縄文時代
13	13	黄色シルト質粘土			花崗			旧石器時代

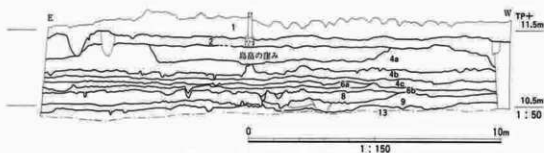


図200 NG83-8次南区南壁断面図

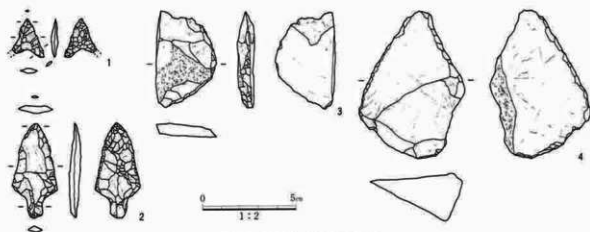


図201 NG83-8次出土石器

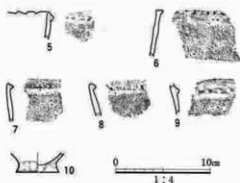
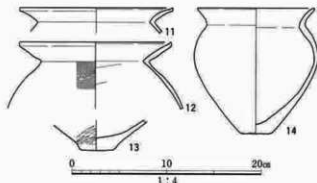


図202 NG83-47次出土縄文時代晩期土器

図203 NG83-8次出土内式期土器
SD701(12), SX701(11・13・14)

れも細部調整が施されており、縄文時代のものであろう。

NG87-72次調査

長原13層と思われる地層の上面でサヌカイト製剥片が出土した。不定形な貝殻状の剥片で、背面や打点付近には原面が残っていた。

NG89-47次調査

長原9B層に相当する地層から縄文時代晩期の土器片が多数出土した(図202)。5は突帯にD字状の刻み目を有し、口縁端部にも刻み目が施されることから滋賀里Ⅳ式の可能性がある。6-10は長原式である。

また、長原8B層下面では溝SD801が検出された(図204)。南東-北西方向に延び、幅1.1m、深さ0.3mある。生駒西麓産の胎土を有する土器片などが出土したのみで、詳細な時期は不明である。

b. 庄内式期の遺構と遺物

NG83-8次調査地の第7層(長原6Biもしくは7Ai層)基底面で溝・落込みが検出された(図205)。

SD701: 南トレンチ南西隅で検出された溝で、幅0.5m、深さ0.2mある。ここから出土した庄内式の甕12は体部外面に細かい平行タタキが施され、内面はヘラケズリが頸部まで施されている(図203)。

SX701: 南トレンチ西端で検出された、南北4.5m、深さ0.6-0.7mの落込みみである(図版27上)。

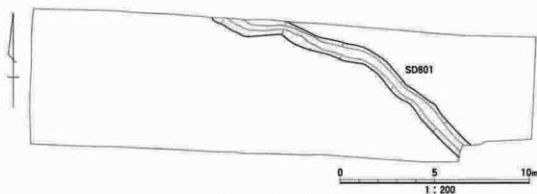


図204 NG89-47次弥生時代遺構配置図

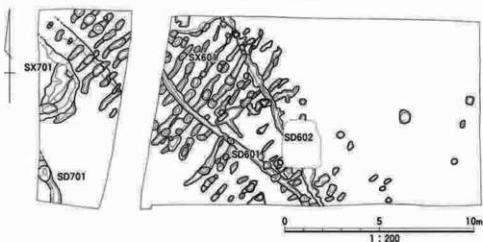


図205 NG83-8次南区庄内式期～飛鳥時代遺構配置図

埋土は長原13層(図200の第13層)の偽礫を含む黒灰色粘土で、人為的に埋められたものと思われる。畿内第Ⅴ様式末の甕13・14や庄内式の甕11が出土した(図203)。14は完形に復元できる平底の甕であるが、器面が荒れており、調整を観察することができなかった。

c. 飛鳥～奈良時代の遺構と遺物

NG83-8次調査

南区の第6b層(長原6Bもしくは7A層)下面で南東-北西方向に延びる2条の溝SD601・602と、それらの溝に直交する方向の短い多数の溝群SX601が検出された(図205・図版27中)。

SD601・602はいずれも幅0.3m前後、深さ0.1mの浅い溝である。SD601はSD602よりも北から西に振った方向に延び、南壁近くで両者が接近するが、切合いはわからなかった。埋土は第6b層に共通する。

SD601・602に直交するSX601の短い溝は深さは一定ではなく、土壌状に深くなる部分もある。埋

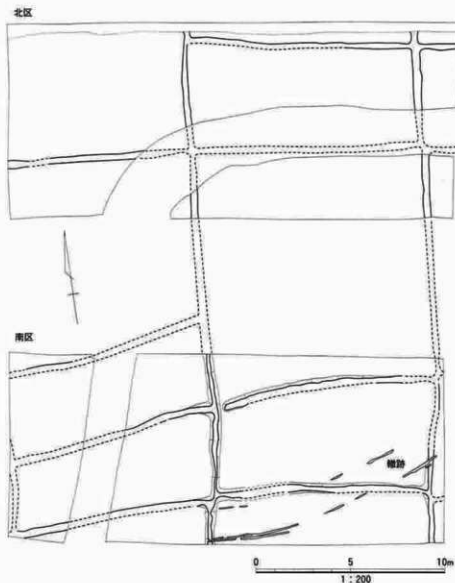


図206 NG83-8次奈良時代水田平面図

土は第6b層にほぼ共通するが、やや汚れた靨がある。調査時は畝間と思われたが、近年では道路という考えもある[京嶋覚2001b]。

第6a層基底面では削り残された畦畔が検出された(図206)。調査時は第6b層上面の畦畔と理解されたが、上位の第6a層が作土層であることから、上面が残るのは困難と考え、前述の通り第6a層が耕作されている段階の畦畔と考えた。畦畔で区切られた水田の一筆は東西11~12m、南北4~5mの東西に長い長方形で、大体50~55m²である。

また、南区では第5層(長原5層)が堆積した轍の跡が検出された(図206)。東西方向でやや弧を描いて延びる。轍が深く食い込んだため残ったと思われる。

NG81-12次調査

長原6Biもしくは7Ai層上面で畦畔が残る水田が検出された(図207左)。T字状に接続し、水口は検出されなかった。

また、長原6Ai層上面でも畦畔が残る水田が検出された(図207右)。一筆全体を検出できていないが、一筆の南北が約5m、東西が7m以上あり、NG83-8次の同時期の水田と同様に一筆が東西に長い長方形になるとと思われる。

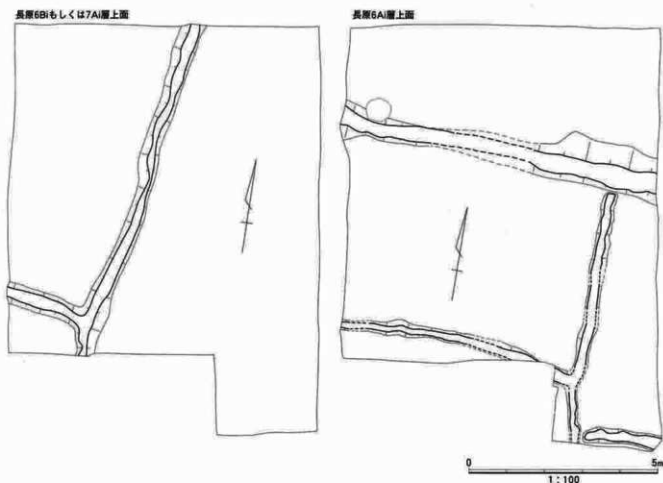


図207 NG81-12次飛鳥~奈良時代水田平面図

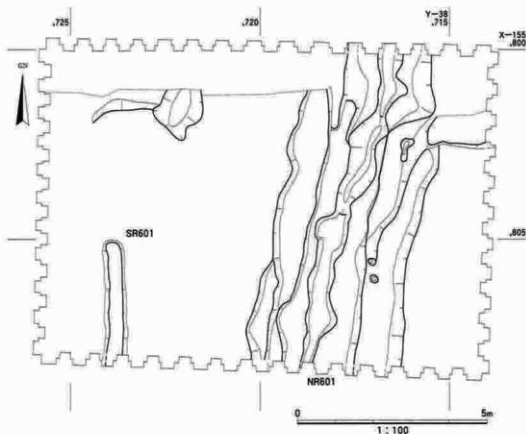


図208 NG86-23次奈良時代遺構配置図

NG86-23次調査

長原6A層上面で水田畦畔SR601と流路NR601が検出された(図208・図版27下)。SR601はNR601と平行する方向に延びることから、これに規制されたものと思われる。

NR601は幅約4m、深さ0.7～1.3mあり、断面はV字状である。底面に凹凸があり、自然流路と思われる。この流路の延長は北側で接するNG80-3次調査に加え、さらに北側のNG8次の流路03A[大阪市文化財協会1982: pp.107-108]や南側の大阪文化財センターの自然流路1・3、さらに流路Cに繋がり[大阪府文化財調査研究センター2000: pp.88-91]、本節で報告したNG81-12・83-8・89-47次調査地では検出されていないことから、長吉川辺2丁目と3丁目の間をやや蛇行しながら流れていたと思われる(図210)。

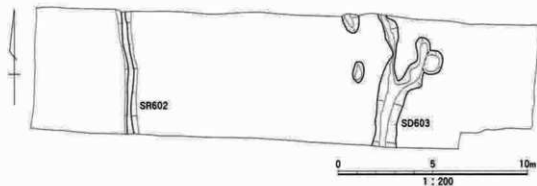


図209 NG89-47次奈良時代遺構配置図

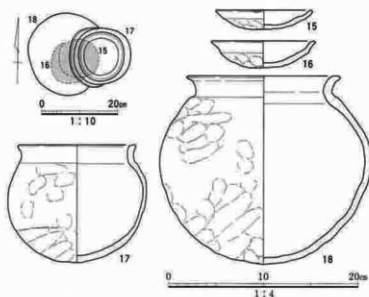


図212 NG81-12次SX401平面図および出土遺物

況を参考にすると、平安時代末から鎌倉時代にかけての建物があり、正方位に近い傾向にあることからSB403がその時期に、SB401・402がそれ以前に位置づけられると思われる。

NG89-47次調査

平安～鎌倉時代の遺構が多数検出された(図213・図版28上)。

SB404：5間×2間の東西棟である。建物は条里地割に規制され、ほぼ真東西方向に柱筋を揃えて建てられている。柱掘形は直径0.5～0.6mの円形または不整円形で、間仕切の柱になると思われる柱穴はやや小さく、直径0.4mを測る。柱間寸法は桁行、梁行ともに2m等間である。隅柱および梁行の掘形内には、石製礎板が据えられていた(図版28中)。石製礎板はいずれも偏平な石を用いている。柱穴からは土師器碗19が出土した(図214)。

SB405：2間×2間以上の南北棟と推定される。ほぼ真南北に柱筋を揃えている。柱掘形は直径0.3m前後で、他の建物よりやや小さい。柱間寸法は桁行2.3～2.6m、梁行1.9～2.2mとばらつきがある。

SB406：東西2間分と南面する庇を確認した。身舎部分の柱穴は、攪乱により上部を削平されていた。掘形は推定直径0.4～0.5mの円形を呈する。庇柱の掘形は直径0.2～0.3mである。柱間寸法は東

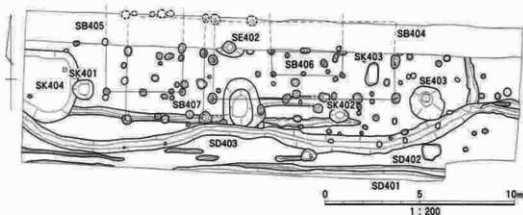


図213 NG89-47次平安～鎌倉時代遺構配置図

SB401：南北2間(5.0m)、東西1間以上で、南側に庇を有する総柱建物である。

SB402：東西方向の梁行が1間(2.4m)、南北方向の桁行が3間(6.7m)の細長い建物である。

SB403：東西および南北がいずれも2間以上ある隅柱建物で、ほぼ正方位である。

以上の建物について切合いもなく、時期を決めることができる遺物も出土していない。ただ、近隣の状

から2.20m、1.75mを測り、庇の出は1.20mである。また、身舎の東南隅柱から1.6m東、西南隅柱から1.2m西に柱穴が認められ、三面庇の建物であった可能性もある。

SB407：3間×2間の南北建物である。柱掘形は直径0.4～0.6mのほぼ円形である。隅柱は深さ0.5mあるが、他の掘形はきわめて浅く、痕跡をわずかに残すものがほとんどである。柱間寸法については、柱筋が揃わず、柱痕跡も確認できないものがあるので不確定ではあるが、桁行は1.7～2.1m、梁行は2.1mとほぼ等間になる。柱穴からは土師器皿20、椀21・22が出土した(図214)。

このほか100基近くの柱穴が検出され、中には根石を有するものもあったが、建物としての組合せはわからなかった。

SE402：転用した曲物を井戸側にもち、掘形は直径0.60m、深さ0.85mある。平安時代Ⅳ古段階に位置づけられる土師器皿23や曲物の底板35が出土した(図214)。

SE403：転用した曲物を井戸側にもち、掘形は直径1.8m、深さ1.6mある。曲物は4段重ねであり、上2段が直径50cm、下2段が30cmある。井戸底から底部外面に「井」字状のヘラ描きのある黒色土器A類椀24が、埋土上層から瓦器椀30が出土した(図214)。24は内面の器面が荒れて暗文の有無は確認できない。29はⅡ-1期に位置づけられ、12世紀前半に属する。

SD401・SD402：調査地南端を東西に走る溝である。両者には切合い関係が見られ、SD402が後出する。埋土は灰黄色粗砂～細砂が主体となる。SD402からは平安時代Ⅲ期古段階に位置づけられる土師器椀29が出土した(図214)。

SD403：これも東西に延びる溝である。断面形はU字状を呈し、幅0.7m、深さ0.2mを測る。この溝の北側で掘立柱建物をはじめ数多くの遺構が分布する。そのため、これが屋敷地を区画する溝のようにも考えられるが、その規模や、建物等の施設にあまりにも近接していることから、屋敷地内にお

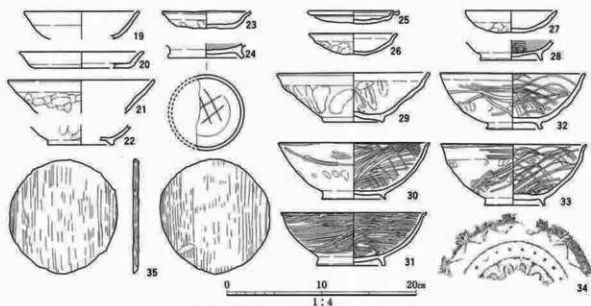


図214 NG89-47次出土平安～鎌倉時代遺物

SB404(19)、SB407(20～22)、SE402(23・35)、SE403(24・30)、SD402(29)、SD403(31)、SK403(32)、SK404(25～28)、長塚4B層(33・34)

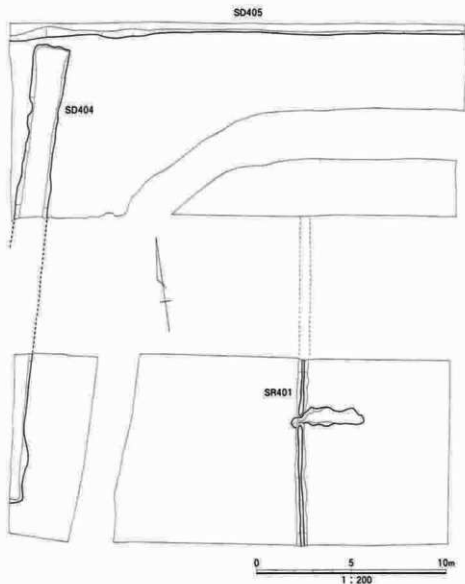


図215 NG83-8次鎌倉時代遺構配置図

ける小区画のようなものと考えらるべきであろう。外面に密なミガキが施される瓦器椀31が出土した。I-2期に位置づけられる。

SK401~403: 隅丸方形のプランを持ち、断面はU字状を呈する。SK403では完形の瓦器椀32が、穿孔されて、口縁部を下にした状態で出土した(図214)。

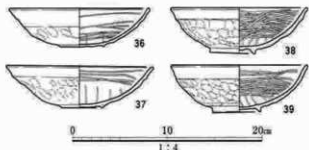


図216 NG83-8・86-23次平安~鎌倉時代出土遺物
NG83-8次SD405(36・37)、NG86-23次SD406(38・39)

SK404: SK401に切られる浅い土壌である。土師器皿25~27、黒色土器A類椀28が出土した(図214)。25は口縁端部のつまみ上げが明瞭で、平安時代Ⅲ期古段階に属する。

このほか、長原4B層からは瓦器椀33や複弁蓮華文軒丸瓦34が出土した(図214)。

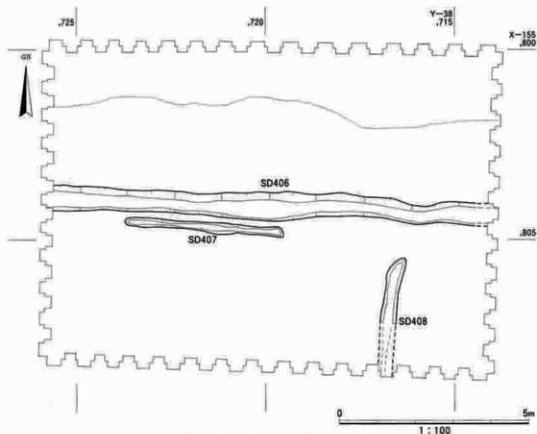


図217 NG86-23次鎌倉時代遺構配置図

NG83-8次調査

長原4B層(第4b層)上面で水田畦畔1条、溝2条が検出された(図215)。

SR401: 南区で検出され、南北方向に延びる。幅0.5m、高さ0.1m未満である。

SD404: 幅1.7m、深さ0.3mあり、底は平坦で断面は逆台形を呈する。長原4A層に相当する第4a層で埋まっている。SD402から0.5mほどの間隔を置いて掘られていて、南側でも途中で止まっていることから、水路ではないことはわかる。

SD405: 幅1.2m以上、深さ0.7m以上ある東西方向の溝である。条里の坪境溝と思われる。Ⅲ-3期に位置づけられる瓦器椀36・37が出土していることから(図216)、遺構の時期は13世紀中頃と想定される。

NG86-23次調査

長原4B層基底面で溝が3条検出された(図217)。この中でSD406は幅0.5~0.7m、深さ0.2~0.3mあり、東西方向に延びる。Ⅱ-3期に位置づけられる瓦器椀38・39が出土していることから(図216)、遺構の時期は12世紀後半と思われる。SD407・408は浅いが、SD406と直交もしくは平行する方向に延びる。

3) まとめ

当地域は近隣で平安~鎌倉時代の建物群が見つかったことで知られている[植木久1983]。長

原遺跡では平安時代末から鎌倉時代にかけて集村化が進み、西隣の大阪文化財センター調査地では方形の区画とそれに囲われる建物群が検出されている[大阪文化財センター1978]。SD402・403やSB403といった、区画溝を有する4棟の掘立柱建物をはじめとする遺構群はちょうどこの時期に該当する。

掘立柱建物はSB404とSB406、SB405とSB407が重複していた。しかし、柱穴どうしの切合いが認められないうえに、出土遺物からも明確な前後関係はつかめなかった。だが、SB404と407はあまりにも近接しており、同時存在の可能性は小さい。SB404は最も規模が大きく、石製礎板を用いていることから母屋と考えられる。SB405はその付属屋だろうか。同様に、庇を備え、石製礎板をもつSB406が母屋、SB407がその付属屋と考えてよければ、前後2時期に分かれることになる。

これ以前で時期が確実にわかるのは火葬墓SX401のみで、平安時代Ⅲ期古段階である。地下鉄谷町線延長工事に伴う調査[大阪市文化財協会1982]や前述の大阪文化財センター調査地では平安時代Ⅲ期の遺物が多く出土していることから、11世紀初頭から散在的に建物が存在し、12世紀に方形区画を有する建物群に発展的に変化したことがわかる[佐藤隆1992]。

(寺井)

第2節 NG91-1次およびその周辺の調査

1) 調査地と周辺の概要

本節ではNG87-85・89-60・91-1・92-5次調査を報告する(図218)。近隣では1987~89年度にかけて区画整理に伴う調査が多く行われ、旧石器-古墳時代の遺構・遺物が検出されている。

NG91-1次調査は2,300㎡を越える調査で、この地域の調査では非常に大きい方になる。調査の結果、古墳4基(長原183~186号墳)や飛鳥時代の溝に加え、前期旧石器時代の調査では長原15層基底面でナウマンゾウの足跡化石、長原16Bi層準で広葉樹を主とする化石林が検出された。当調査では古墳の調査終了後に、一般市民を対象とした現地説明会が行われた。

NG87-85・89-60・92-5次調査は関西電力の変電所建設などに伴う調査である。NG87-85・89-60次調査は40㎡未満の小規模な調査で断片的に遺構を検出したに過ぎなかったが、NG92-5次調査では1000㎡近くを調査することができ、長原198号墳や飛鳥時代の溝に加え、長原16A層上面でナウマンゾウの足跡化石が検出された。

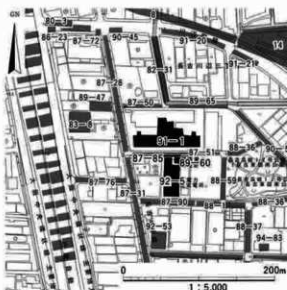


図218 NG91-1次などの調査位置図

2) 調査の結果

i) 層序

NG91-1次および92-5次調査では前期旧石器時代の調査のため、GL-4~5mまで掘削し、地層の観察を行った(図219~222、表27・28)。いずれの調査地でも長原2~7層が薄く、発達していない。前者の調査地は東を古川辺川、西を古長原川に由来する谷筋に挟まれた舌状台地の上に立地する。そのため、中央部分がもっとも高く、東・西側に向って緩やかに落込む。中央部分は場所によっては現代作土直下で長原13層が検出されるところもある。なお、長原13C・14層も確認されているが、断面図に記録されていなかったため、表27や図219・220には掲載していない。

ii) 遺構と遺物

a. 前期旧石器時代の遺構

NG91-1・92-5次では前期旧石器時代のヒトの痕跡を探するため、深掘を行った。その結果、石器や遺構は見つからなかったが、化石林やナウマンゾウの足跡化石など当時の自然環境を推測する材料を得ることができた。

NG91-1次調査

表27 NG91-1次層序表

層序	地層層序	岩相	層厚 (cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	0・1	現代盛土・作土	20~50					近・現代
2	2	にぶい黄褐色砂質シルト	5	作土				江戸時代
3	3	黄褐色砂質シルトへシルト質粗粒砂	5	作土				室町時代
4	4A	黄褐色粗粒砂	※	水成				鎌倉時代
5	4B	灰オリーブ灰色粘土質シルト →オリーブ褐色含砂粘土	5	作土				
6	6	オリーブ褐色粘土	<5	作土		▼古墳・溝		奈良時代
7	8Ci	黄褐色粗粒砂	10	水成				弥生時代
8	8Cii	黄褐色粘土	10	水成			←SD801・802	
9	9A・B	灰黄色粘土→粘土質シルト・ 黒褐色粘土→粘土質シルト	<5					縄文時代
10	9C・10A・B	灰黄色→黄褐色シルト・粗粒砂質シルト	<5					
11	15	オリーブ灰色シルト→粘土 ・オリーブ灰色砂礫	180					巨石器時代
12	15	暗緑灰色砂礫	20	水成			←ナカマツバウの足跡	
13	16A	緑灰色シルト→粗粒砂の互層	120				←灰石林	
14	16B	褐色粘土						

※土壌や溝などの深みにのみ分る

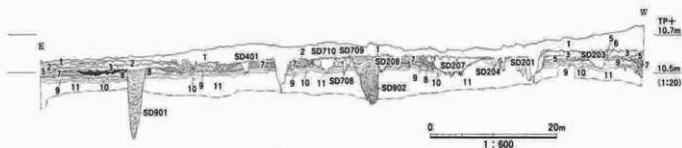


図219 NG91-1次南壁断面図

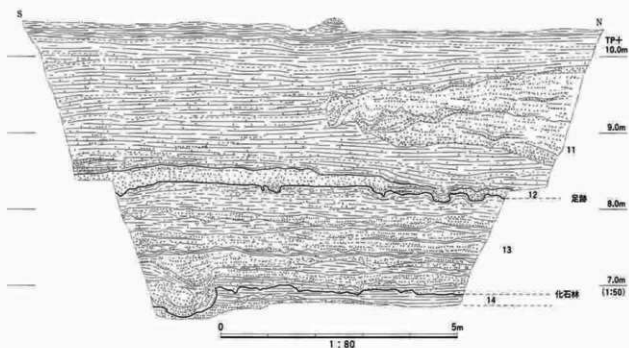


図220 NG91-1次西壁断面図(長原15~16B層)

表28 NG92-5次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	2 or 3	にがい黄褐色中粒砂質シルト	10	作土				江戸～
2	2 or 3	にがい黄色粗粒砂質シルト	<5	作土		▼古墳・溝		室町時代
3	8C	オリーブ褐色粗粒砂	10	水成		→SD803		奈良時代
4	9A-B	暗灰黄色シルト	10					
5	9C-12	灰黄褐色細粒砂質シルト	10					縄文時代
6	12-13A-B	黄褐色粘土質シルト	<5					
7	13C	明黄褐色シルト質粘土	10					旧石器時代
8	15	にがい黄褐色含粗粒砂シルト質粘土	100					
9	15	浅黄色粗粒砂質シルト	60					
10	15	黄褐色細粒～粗粒砂	20～90	水成				
11	16A	緑灰色細粒～粗粒砂	5～10	水成		→ナウマンゾウの足跡		
12	16A	緑灰色粗粒～細粒砂		水成				

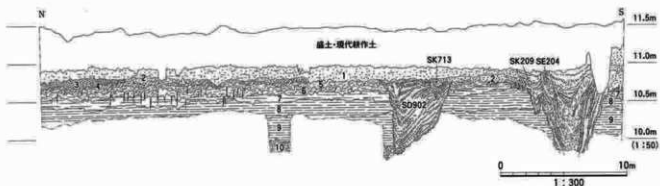


図221 NG92-5次東壁断面図(～長原13C層)

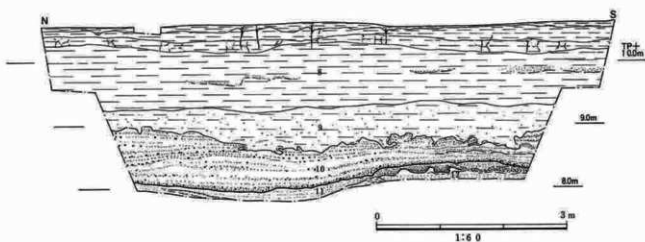


図222 NG92-5次東壁断面図(長原13C～16A層)

長原16Bi層上面では広葉樹を主とする化石林が検出された(図223・図版29上)。本層上にもいくつかの凹みが認められたが、足跡と断定することはできず、人類の足跡および生活痕跡は今回は認められなかった。さらに下方の状況を探るため、部分的な深掘りを行った結果、TP+6.1m付近のシルト質極粗粒砂層およびTP+5.7m付近のシルト質粘土層のそれぞれ上面においてナウマンゾウの足跡状の凹みが検出された。

長原16A層下部からはオニグルミ・エゴノキなど多くの植物遺体が見つかった。また土壌洗浄の際

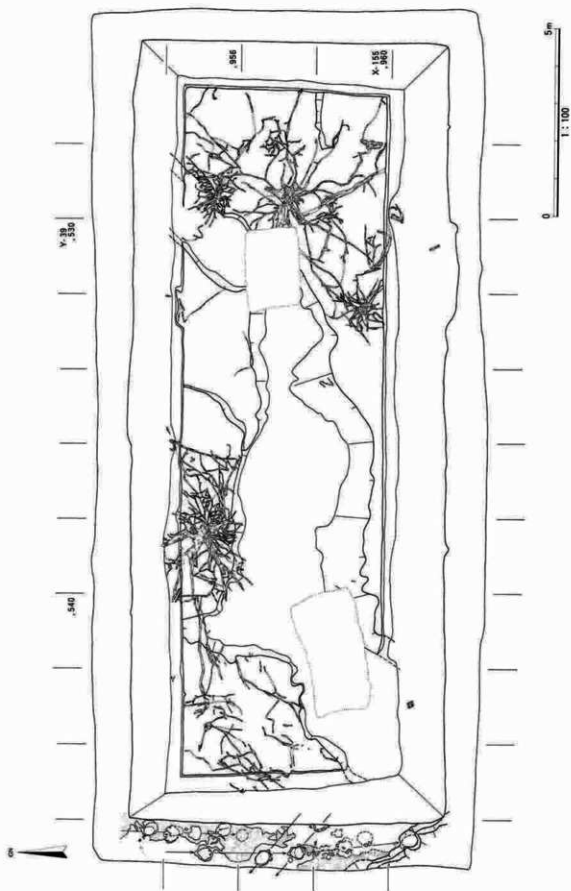


図223 NG91-1 次化石林およびナウマンゾウ足跡化石分布図

にサヌカイト細片が1点見つかった。

長原15層基底面ではナウマンゾウの足跡が検出された。当層準は当初調査予定になかったものである。掘削深度が深いため、途中で一段テラスを設けて掘り下げて化石林の調査にあっていたが、断面精査中に長鼻類の足跡と思われる凹みが確認された。この高さが偶然テラス面に一致したことから、西側のテラス部に限って調査を行った。

足跡は約10個確認された。シルト質細粒砂層の上面、および細礫混り砂の薄層内のラミナ面が支持基体である。前足と後足とが重なって見つかるため、前足部の残りはよくない。前足跡は直径30cm強の円形、後足跡は長軸が35cm前後、短軸が30cm弱の楕円形である。残りのよいものには指の形も認められ、それを追うことによって2列の行跡が確認された。ナウマンゾウと判定したのは後期更新世に本州地域で生息の知られる長鼻類はナウマンゾウだけだからである。この面ではヒトの足跡および遺物は見つからなかった。また、ナウマンゾウの行跡にもヒトに追われたような乱れは認められなかった。

なお、古環境としては河川沿いの水際、あるいは浅い沈水三角州が推定できる。

NG92-5次調査(図224)

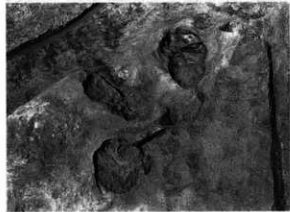
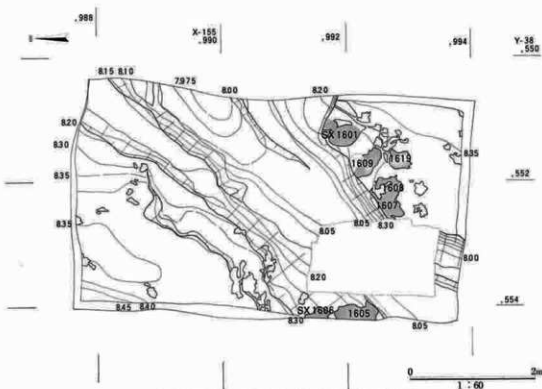


写真23 NG92-5次ナウマンゾウ足跡化石
(SX1601・1609・1619)



調査区の北東寄りで南北9.2m、東西5.5mにわたって調査した。南西から北東へ伸びる自然流路によって、深掘部分の約70%が削平されていた。人間活動にかかわる遺構を見つけることはできなかったものの、ナウマンゾウの足跡化石を数個同定することができた。このうちもっとも支持痕、離脱痕の明瞭なSX1601は、左前足、左後足が重なったもので、開口部は長径60cm、短径34cmの楕円形を呈し、深さは15cm前後である(写真23)。SX1619の開口部は長径35cm、短径30cmであり、後足の大きさをほぼ反映しているものと思われる。足跡が少なく、その行跡は復元できなかった。また、断面観察によって、下位に足跡化石を確認し、長原16層中に足跡化石の見つかる層準が少なくとも2層準存在することが明らかになった。

b. 後期旧石器～縄文時代の遺構と遺物

NG91-1次調査

調査地西部でNR901が検出された(図225)。通例、「古長原川」と呼ばれる谷筋である。本流から南東に膨らんで蛇行する部分と谷筋にいたる斜面がおもに検出され、本流部分は北西隅で確認できたにすぎない。この谷筋はこれまで埋土下層の砂礫が長原9C層の一部であるのか長原10層以下のものか判断できず、形成の時期がはっきりしなかった。今回の調査でも砂礫から時期の判定できる遺物は出土しなかった。この砂礫で埋没した後、長原9A・9B層の黒色の暗色帯が形成される。本層には長原式土器をはじめとする縄文時代晩期の遺物が多く含まれる。その後、分厚い長原8C層の砂礫によってほぼ平坦化されるが、完全に平坦になるのは長原4層の時期である。

蛇行部分には水流によってできた弧状の凹みが多く認められる。蛇行部分の形成要因はまったく自然の状態で単に川筋が蛇行したためと考えることもできるが、断面観察の結果、興味深い事実がわかった。埋土下層の砂層の一部にラミナが波うった部分があること、もっとも岸よりの弧状の窪み内に岸が崩落したような多量の地山偽礫が認められたことである。さらに断割って断面を観察したところ、長原15層内の粘土層に挟まれる細流砂薄層のラミナにも乱れた部分があることがわかった。谷筋がある程度埋まった段階で大きな地震があり、長原15層の細粒砂層でそれ以上の部分が谷筋方向に地滑りを起こした。そのため残った岸側の部分との間に弧状の窪みが生じ、そこに水流が入り込んで蛇行部分が形成された可能性もある。推定の部分も多く可能性のひとつとしておきたい。

調査区南西部には石器の集中した部分が認められた(図225・図版29中)。南は調査区外にあたり、東は島島溝によって失われているため、本来の範囲は不明であるが直径3mほどと思われる。石礫3点を含む約40点のサヌカイト片を現地で確認した。土を持帰り洗浄した結果、さらに多くのサヌカイト片が補集された。出土したサヌカイト片は指の爪以下の大きさのものがほとんどであり、石礫の未製品も含むことから、石礫などの小型品を製作した跡と考えられる。縄文土器片が伴うこと、および石礫の形態から縄文時代のブロックといえる。また直接には当ブロックとは無関係と思われるが、珪質頁岩製と思われる石礫も見つかった。

調査地中央南部では長原9層内から、5cmほどの卵形の礫が直径50cmほどの範囲に11点集中して見つかった。この部分には風倒木の痕跡と思われる凹みがあり、礫はこの中に転がり込んだ状態であった。この部分あるいは付近に礫を使った遺構が存在したようである。

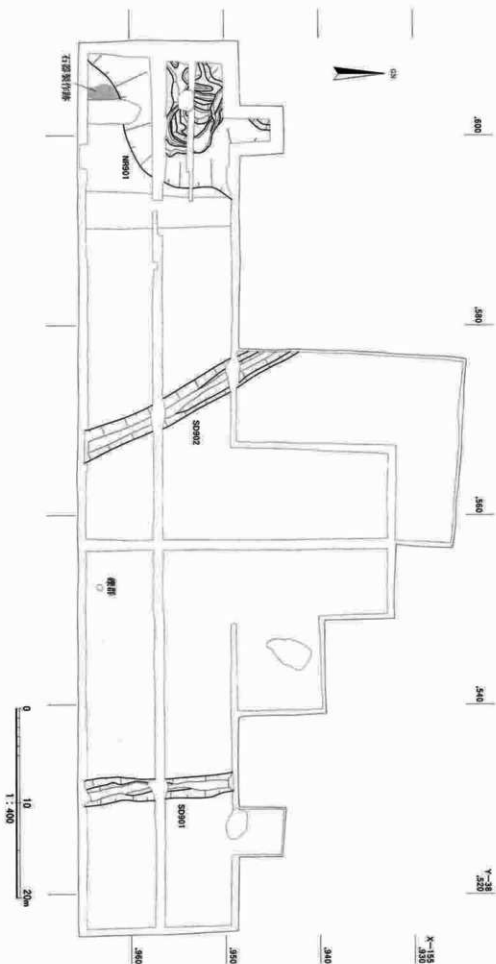


图225 NG91-1 次縄文~弥生時代遺構配置図

その他の遺物は石鏃を中心として調査区全域に散漫に分布する。旧石器も存在したと思われるが、風化の影響を受けて、確実に長原13層としておさえられる層が遺存していないため、断定できるものはない。ただ周辺の調査結果から、この場所は旧石器時代の遺物の分布が希薄な地域なのであろう。

NG92-5次調査

図221の第5層(長原9C~12層)、第6層(12~13A・B層)から石器遺物が計23点出土した。層厚

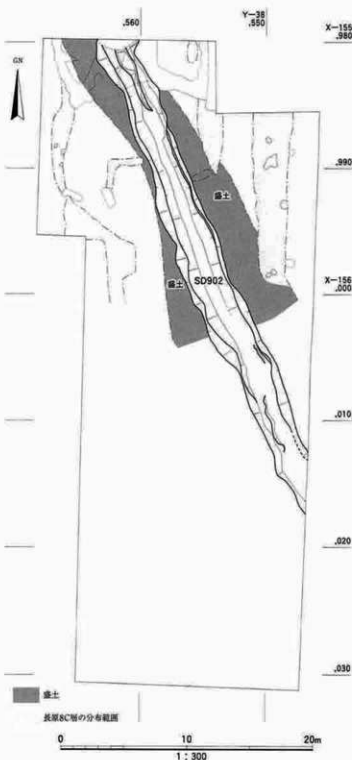


図226 NG92-5次弥生時代遺構配置図

が薄く、上位層の擾乱を受けており、個々の出土層位を特定できないものが多い。内訳は、石鏃10点、有茎尖頭器1点、コア2点、フレイク9点、スクレイパー1点である。図232に示した有茎尖頭器9はチャート製であり、第6層から出土した。サヌカイトフレイクは調査地北端から8点、南端から3点がまとまって出土しており、それぞれに接合関係が認められる。前者の一群は長原13層相当の層準から出土した。

c. 弥生時代の遺構

NG91-1次調査

溝が2条検出された(図225)。

SD901は幅約3m、深さ約1.4mの南北方向の溝、SD902は幅約3m、深さ約1.2mの南東-北西方向の溝である(図版29下)。埋土はいずれも長原8C層の砂で、部分的にシルト・粘土の薄層を介在する。弥生時代前期の水路であり、両側に盛土を行っている。洪水によって盛土が崩れ、外側に広がった部分もあり、本来の盛土幅をつかむのは容易ではないが、断面観察からは5m程度であったと思われる。高さは最高で20cmほど残っていた。遺物は少なく、縄文時代晩期の土器細片とSD901から流木が出土したのみである。この時代のほかの遺物としては石鏃、SD902の西側盛土下からの弥生時代前

期の壺の破片がある。

NG92-5次調査

長原8Cii層上面の調査区北寄りで、南東から北西に延びる水路SD902が検出された(図226・図版31上)。断面はU字形で、幅3.5m前後、深さ0.9~1.2mあり、NG91-1で検出されたものと一連である(図235)。盛土によって土堤を築いており、残りの良いところで、高さ0.2mある。弥生土器の細片が砂層から数点出土したが、この水路の掘削時期を特定できる資料は得ることはできなかった。

d. 古墳時代の遺構と遺物

NG91-1次調査

4基の古墳(長原183~186号墳)が確認された(図227・図版30上)。このうち長原183・184号墳は拡張調査によって全体を確認したものである。4基とも上部が削平を受けており、主体部・盛土は遺

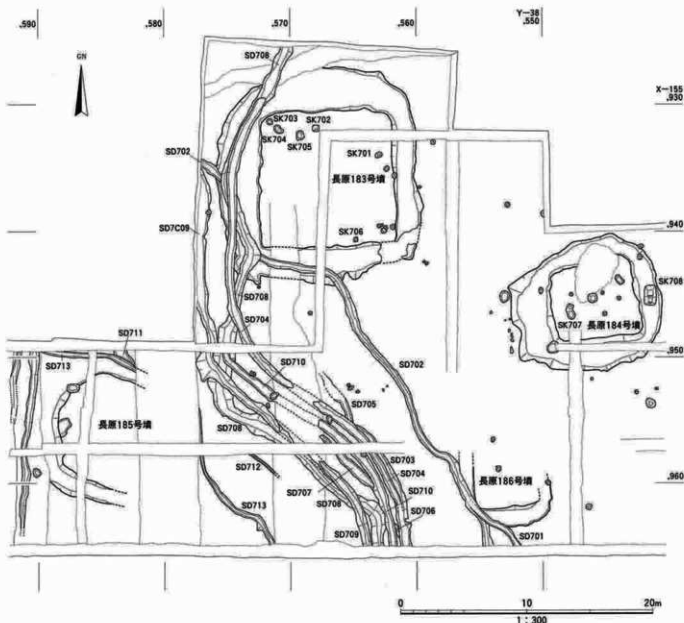


図227 NG91-1次長原183~186号墳配置図

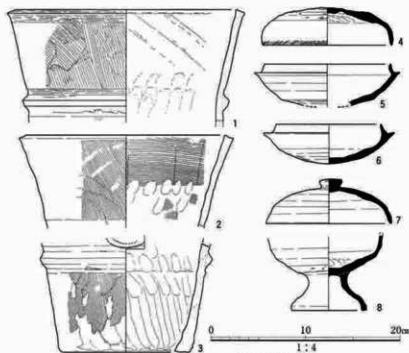


図228 NG91-1次出土遺物
長原183号墳(1～3)、SD708(4～8)

存していなかった。

長原183号墳：調査地北部で検出された方墳である(図版30中)。墳丘部で一辺が10.8m、周溝を含めると17.0m×16.3mである。周溝はコーナー部分で浅く掘られており、底には掘削時の凹凸が見られる。長原古墳群では高廻り1号墳(長原169号墳)などとともに規模の大きな方墳である。周溝および周溝を壊した溝からは円筒埴輪1～3が出土した(図228)。いずれも無黒斑で一次調整のみのもの

がほとんどであるが、二次調整のヨコハケが施されるものもある。口縁部には上向きの孤状線刻を2～3条施したものが多くある。北東コーナー部では須恵器甕が見つかった。粉々の状態で出土しており、意識的に砕かれた可能性が高い。掘形は認められなかった。また、周溝内の土を水洗したものの、鉄器および玉類は確認されなかった。築造時期は5世紀後半～末と考えられる。

長原184号墳：墳丘部で6.3m×6.8m、周溝を含めると10.8m×12.0mの大きさの方墳である(図版30下)。西側の周溝が広く掘られている。周溝底には掘削時の凹凸が顕著に認められる。また南西コーナー部、周溝底には直径0.8mほどの土壌が掘られており、掘削の際に生じたと思われる偽造が周溝底に残っていた。周溝掘削時に同時に掘られたことは明らかであるが、遺物などは出土せず、目的は不明である。周溝内の遺物は須恵器・土師器の細片が見つかっただけである。周溝埋土の土を洗浄したが主体部に伴っていたと思われる遺物は検出できなかった。

長原185号墳：削平によって東側周溝が失われているが、一辺約8mの方墳に復元できる。周溝から埴輪片が出土した。

長原186号墳：調査地南部で検出された。もとは約7mの方墳と思われる。4基のうちでもっとも残りが悪く、周溝の深さも0.1m以下である。遺物は出土しなかった。

NG92-5次調査

方墳1基(長原198号墳)と土器埋納ピット2基が検出された。

長原198号墳：小型の方墳で、周溝の内側で長軸9.7m、短軸8.7mある(図229・図版31中)。主体部は削平されて残っていなかった。周溝は残りの良いところで幅2.8m、深さ0.15mである。周溝からは遺物が少ないが、古墳周溝を切る飛鳥時代の溝SD720・721や近接する土壌SK713からは円筒埴輪10～14が出土しており、これらが本来この古墳に伴っていた可能性が高い(図232)。

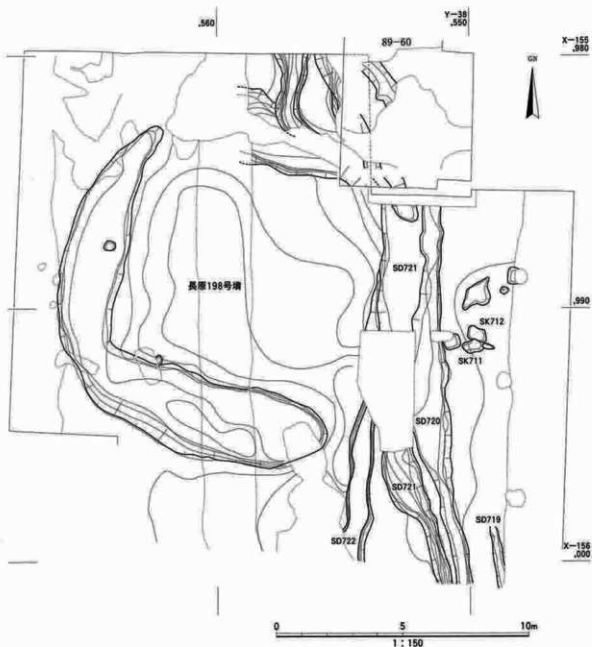


図229 NG92-5 次長原198号墳平面図

SK709：やや歪な隅丸方形の掘形であり、黒色の粘土質シルトで埋め戻されていた。TK10型式の須恵器杯蓋20、口頭部の欠けた壺21が出土した(図232)。遺物は2個体とも倒立した状態で底に置かれていた。

SK710：平面は楕円形であり、長軸0.55m、短軸0.40m、深さ0.15mを測る。木製箱のような容器の痕跡は認められなかった。TK216型式に属する須恵器杯身16・17、杯蓋15、高杯18、把手付碗19が出土した(図232・図版31下)。16は手持ちのヘラケズリが施されている。

SK714：調査区南部の壁際で確認された、深さ0.4mの土坑である。長原198号墳のものとは異なる断面三角形のタガをもった硬質の円筒埴輪の破片が出土している。

e. 飛鳥～奈良時代の遺構と遺物

NG91-1 次調査

SD701～713：調査区中央部に重複して見つかった溝である。これらの溝は古墳の間を縫うようにして南東-北西方向に蛇行しながら掘られている。幅0.5～1.0m、深さ0.2～0.6mである。各溝からは須恵器・土師器・埴輪が出土している。特にSD708からはTK43型式もしくはTK209型式の時期に比定できる須恵器杯身5・6、杯蓋4、高杯8、同蓋7が出土した(図228)。また、長原183号墳の周溝と重なる部分では、183号墳のものと思われる埴輪片が多く見つかった。SD704の最上部からはTK217型式の須恵器杯蓋が出土したことから、これら溝群が機能していた時期はおおむね6世紀後半～7世紀前半とすることができる。

溝底には水成層である砂のラミナが確認でき、水が流れていたことがわかる。機能としては水田に水を導くための用水路が考えられるが、それぞれの溝が同じように曲がり、同じような位置に繰返し掘られていることから、用水路としてだけではなく、何らかの区画も兼ねていた可能性がある。

溝のいくつかは古墳の周溝を壊して掘削されている。また、溝の方向をよく見ると周溝部分は掘削しているものの、埴丘部分は迂回していることがわかる。これは溝の掘削時には古墳がまだある程度の高まりとして残っていたことを示している。長原185・186号墳を古墳と判断した理由のひとつである。用水路として水を流すため、掘削距離は長くなるものの、高まりを避けて低い周溝部分を選んだのであろう。

SD714：調査地の東部で見つかった南北方向の溝である。砂で埋没する弥生時代の水路上に位置する。降雨などの際にこの砂の部分が削られ、溝状の凹みとなったのであろう。須恵器片が出土した。

SD715・716：調査地西部で見つかった。この部分は北西部に落ちる斜面上に位置することから、人為的に掘削されたものではなく、雨水などが流れてきた自然のものであろう。須恵器・土師器・埴輪が出土した。

SD717・718：坪境の溝部分で見つかった。それぞれ幅0.5mの南北方向の溝で平行して延びる。坪境の溝によって上部がかなり削られていることを考慮にいれば、規模はかなり大きくなり、本来は1条で底が2条になった溝の可能性がある。

また、長原183・184号墳の付近では多くの土壌が確認された。これらの中には飛鳥時代の完形の土器を含むものがあり、いわゆる「土器埋納ピット」として把握できる。SK701で土師器小壺、SK702で土師器杯、SK707で土師器杯2点、SK708で土師器杯が見つかった。

SK707：長原184号墳の埴丘部に掘られた、1.15m×0.60mの南北に長い不整形の土壌である。平面および底の形から、北と南の2つの土壌が重なったものように見えるが、断面では切合いが認められなかった。この北側部分の底に土師器の杯2点が正置した状態で置かれていた。

SK708：長原184号墳の東周溝部に掘られた、1.40m×0.65mの南北に長い長方形の土壌である。埋土には地山礫などを多く含み、掘ってすぐに埋め戻されたようである。深さはもっとも深いところで0.9mであり、底が北から南に下がるよう階段状に掘削されている。3段分を確認した。もっとも深くなる南壁の部分はオーバーハングしている。この最深部に土師器の杯が正置した状態で置かれていた。杯内および周辺の土からは多数のウリ類の種子や水草の種子・サンショウが見つかった。出

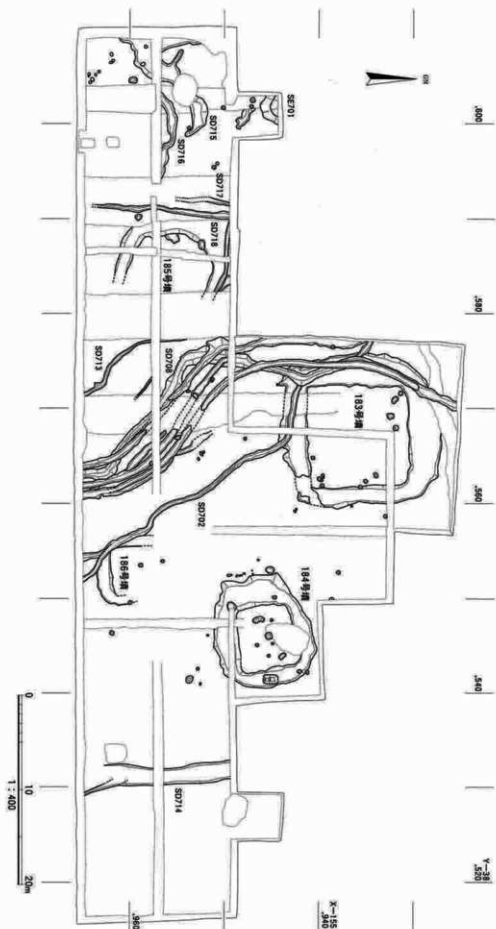


図230 NG91-1次古墳～飛鳥時代遺構配置図

土状況からウリ類を杯内に容れて供えられていたことが明らかである。これまで「土器埋納ピット」は祭祀に関係するものと推定されていたが、今回の発見によってその可能性は強くなったといえよう。土器内(土器の検出されないものは有機質の容器内)に食物を容れて供える行為が行われていたのであろう。水草の種子は周溝の土を水洗した時には確認されなかったので、土壌内のみ、あるいは土壌

を掘るときの地表に存在したと考えられる。もし土壌内のみのものであれば、食物を容れた土器の上に水草をかぶせる行為があったことを意味するかもしれない。地表に存在していたのであれば、当時この付近が水草の生えるような環境にあったことになり、水田であった可能性もある。この地域における当時の土地利用には、層序が残っていないことから不明な部分も多く、その解明は今後の重要な課題のひとつであろう。

SE701: 調査区西部の突出部で検出された。形状から井戸と判断したが、大半が調査区外であるため規模・時期ともに不明である。

NG92-5・87-85・89-60次調査
4条の溝SD719~722、土壌が検出された(図231)。

溝はいずれも南から北に流れ、調査区北方で方向を西に向け、さらに北上する。いずれも古墳周溝を踏襲している。溝の規模については、SD722ではもっとも良く残っているところで、幅1.3m、深さ0.4mである。切合い関係から、SD722→SD721→SD720の順に掘削されたことが判明した。溝からの遺物は古墳に伴うと考えられる須恵器、円筒埴輪のほか、SD722からはTK43型式や209型式に属する須恵器杯31~33、同蓋27~30、SD721からはTK209型式や217型式の須恵器杯身23、杯蓋22、SD720

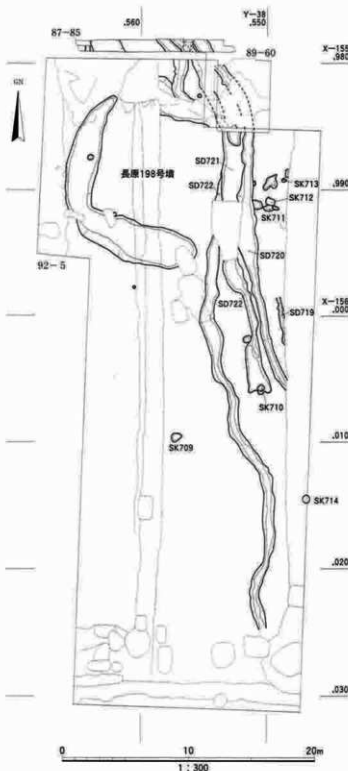


図231 NG92-5・87-85・89-60次古墳～飛鳥時代遺構配置図

からは土師器甕24、須恵器杯身26、杯蓋25が出土した(図232)。24については外面にハケ調整が施され、下彫れの体部を持つことから、飛鳥ⅡもしくはⅢに属すると思われる。

土壌はプランが方形のもの、楕円形でのものなどさまざまである。SK711は意識的に埋め戻されているが、ほかは自然堆積によって埋まっている。いずれも、柱痕跡及び抜き取り穴は認められず、柱穴とは見えない。遺物は全体に少ないが、SK712からは飛鳥Ⅱ～Ⅲの土師器杯Cが出土している。

f. 鎌倉時代以後の遺構と遺物

NG91-1次調査

南北方向の坪境溝・南北方向の島畠・小溝群・土壌などが検出された(図233)。長原4B層準と2・

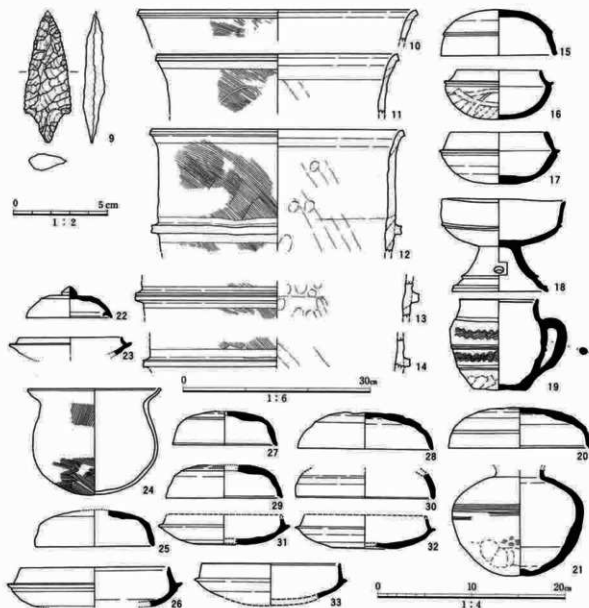


図232 NG92-5・87-85次出土遺物(30-33以外はNG92-5次出土)

長原12-13A・B層(9)、SK709(20・21)、SK710(15-19)、SK713(14)、SD720(10・24-26)、SD721(11-13・22・23)、SD722(27-33)



図233 NG91-1 次鎌倉～江戸時代遺構配置図

3層準のものがある。

SD203・207・208は中央以西に存在する。島畠に伴う溝と考えられる。

SD203は約2.8m、SD207は約7.0m、SD208は約3.8mのそれぞれ幅をもつ。SD207とSD208の間は約5.4mである。SD207には埋土の途中に平坦面があり、この平坦面上に東西方向の畦状高まりが存在していた。溝の底には牛と思われる偶蹄類の足跡が多数認められた。SD208には南側に周りより1mほど深い部分がある。この部分の遺構ベースは弥生時代の水路の埋土である砂層となっている。溝の掘削当時に周囲より柔らかいために深く掘込まれたか、あるいは溝が機能していたときに水によって削られたために深くなった可能性がある。これらの溝は掘込み面および出土遺物から近世のものと思われる。

SD201：調査区西寄りで検出された。坪境の溝である。何度も掘り直しが行われている。掘削当初の時期は把握することはできなかった。護岸のための杭が多数打ち込んである。陶磁器を主体とする近世の遺物が多量に出土した。この溝は区画整理事業施工前まで機能していたものである。

SD204：中央やや西よりで検出された。幅約1m、深さは0.3mほどで、北でやや東に向きを変える。遺物が少なく時期は決めがたいが、長原3層以降のものであろう。鉄製の手斧の刃先が出土した。

SD401：幅約1m、深さ約0.3mの南北溝である。埋土途中に層界面があり、ここに偶蹄類の足跡が検出された。この面で機能していた時期が存在することを示す。長原3層の遺構と考えられる。

SD402：拡張部北端で見つかった。幅は約1.8m、深さは0.4mほどの蛇行しながら東西方向に延びる溝である。埋土は水成層である長原4A層の砂礫である。埴輪・須恵器・瓦器などが出土した。調査区北部に同じく長原4A層で埋没する土壌が多数あり、その中に含まれる瓦器に12世紀後半の時期のものが含まれることから同様の時期と考えられる。

SX401：調査区南西部で検出された。長辺1.4m、短辺0.8mの南北に主軸をもつ隅丸方形の土壌である。深さは0.4mで、北端に0.2mほどのテラス状部分がある。底は平坦に近い。長原3層基底面の遺構で長原4B層を掘込む。埋土は長原4B層以下の大きめの偽礫を多量に含んでおり、掘削後すぐに埋め戻されたことがわかる。これに加えて、底が平坦に近いこと、南北に主軸をもち整然とした形をしていることから、墓の可能性が考えられるが、地層観察用の土手を残しながら慎重に掘下げたにもかかわらず、木棺等の痕跡は認められなかった。遺物は土壌埋め戻し時に紛れ込んだと思われる土師器の小片が出土しただけである。

SX402：SX401の北約1.2mで検出された。主軸はSX401の延長上で長軸約1m、幅は約0.8mとやや方形に近い。埋土はSX401と同じであるがやや浅い。遺物は出土しなかった。

これら土壌と似たものはNG90-5次調査のSK301・302とSK303・304で、報告書では土壌墓と推測されている[大阪市文化財協会1997b：pp.81～85]。そこでは主軸は東西方向であるが、長方形のものと方形に近いものとが隣接し、同じ主軸をとる、長方形のものはテラス部分をもつ、埋土に偽礫を多く含む、といった共通点をもつ。墓と推定されているが、2つセットという関係が多く認められるようになれば、別の機能を推定する必要があるかもしれない。今後の類例の増加に期待する。

SX201は坪境溝の東斜面で検出された。SX402よりやや小振りの方形を呈する土壌である。埋土に

は多くの偽礫を含むが、SX401・402に認められなかった層の偽礫が確認されたことから、少なくとも1層準は新しい遺構であろう。その他の遺構としては小溝群がある。南北方向のものが多く全域にわたって認められる。西側では長原2・3層それぞれの下面で、東側では数枚にわかれる長原2層のそれぞれの下面および長原3層の下面で検出された。特に東側の小溝には底に水成層である薄い砂層が存在することから、畝間として機能していたと考えることができる。

NG92-5次調査

鳥島溝、坪境溝、井戸、土壌が検出された(図234)。長原2層準と3層準の両方がある。

SD301~303: 南北方向に延びる鳥島溝である。このうち、SD302は調査区南端で東に屈曲し、SD301に連なるものと思われる。SD302は全長約49m以上、幅2.1m、深さ0.2mを測る。SD301との間隔は5.4mである。出土遺物の大半は瓦器、土師器の細片であり、国産陶磁器がごく少量含まれる。

土壌は平面形態が隅丸方形あるいは楕円形をなし、長軸を南北にとるSK201~204、あるいは東西に向くSK205・206が、調査区南寄りて検出された。いずれも凹凸なく整然と掘り上げた後、埋戻しており、墓の可能性がある。埋戻す際に遺物が混入しているが、木材の痕跡、供献品はまったく見られなかった。鳥島溝が埋まった後につくられたものがあり、周辺から採集された遺物から、18世紀以降のものであろう。調査区の東北部でも土壌SK207~211が見つっている。SK208・209・211は隅丸方形の掘形であり、底は凹凸がなく、埋土は埋戻しによるという共通性がある。土師器、須恵器の細片が出土している。時期決定は困難であり、下位層準の遺構である可能性もある。

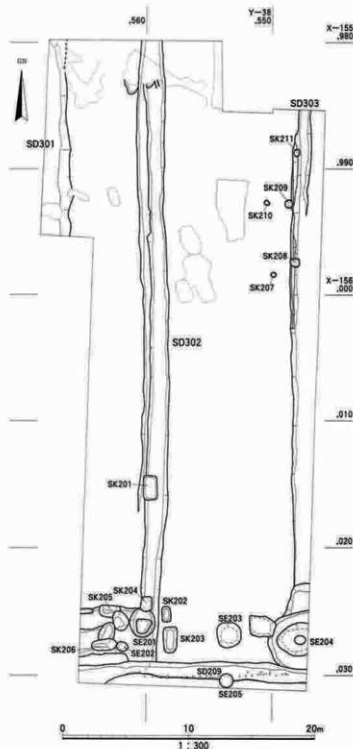


図234 NG92-5次鎌倉~江戸時代遺構配置図

SD209:調査区南端で発見された坪境溝である。出土遺物の大半は近世・近代の国産陶磁器、屋瓦であるが、埋土の下層からは15世紀頃の瓦質羽釜が見つかった。周辺の例と同様、この坪境溝は区画整理事業直前まで踏襲されて、用いられていたものだろう。

井戸は調査区南寄りで5基検出された(SE201~205)。SE204からは縦板材からなる井戸枠が発見された。この井戸とSE203・204の埋戻し土からは18世紀後半の国産陶磁器が発見された。

以上の遺構は、調査区南端の坪境溝の周辺に集中する傾向がある。

3) まとめ

本地区の調査では旧石器～江戸時代までの遺構・遺物を検出することができた。各時期の成果について、以下で順に述べる。

i) 旧石器時代

長原15層基底面や16A層上面で調査が行われた。長原16Bi層では8.6万年前と推定される吾彦火山灰層が含まれていることから[趙哲済2001]、上記の足跡化石はそれより新しいことになる。調査当時は長原遺跡で1・2例目であったが、現在では足跡化石は10箇所近くで見つかり、長原遺跡西地区に当るNG96-76次調査では長原17Biii層からナウマンゾウの臼歯の化石も出土している[大阪市文化財協会2001a: pp.107-126、趙哲済・樽野博幸1997]。ナウマンゾウなどの大型哺乳類はヒトにとっては狩猟対象動物である。今後は、ヒトの痕跡に注意を払わなければならない。

なお、長原13層準から出土した旧石器は近隣調査地に比べ、非常に少ないのが特徴である。上位の地層に削剥されたことも考えられるが、本来どの程度存在したかはわからない。

ii) 縄文～弥生時代

NG91-1次調査では縄文時代の石器ブロックが検出されたが小規模なものであった。

弥生時代の遺構としては南北に延びる2条の水路がある(図235)。特に、SD902はこれまで「川辺2号用水」と呼ばれてきたものである[大阪市文化財協会1995: pp.414-415]。一方、その東側のSD901は「川辺1号用水」である(註1)。いず

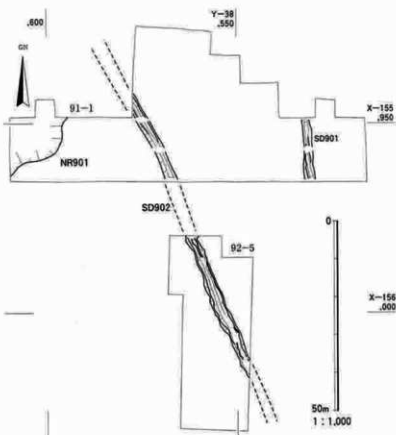


図235 NG91-1・92-5次弥生時代遺構配置図

れの地点でも両側に土手を築いているのが確認されている。また、周辺の調査成果から、この水路は台地の傾斜面を、斜めに切るようにして、400m以上にわたって直線的に伸び、調査地の北西にある谷地形に連なる大規模な水路であることが判明している。これらの水路によって灌漑された水田は未発見であるが、西川辺川から導水して西側の浅い谷(NR901)に存在した水田に水を供給していたのであろう[大庭重信1999]。

iii) 古墳時代以後

古墳は全部で5基検出された。これらの古墳は南から北に張出した低い舌状台地上に築かれており、長原古墳群の中心部が造られた台地とは浅い谷によって隔たっている。この台地上に17基の古墳が確認されたことになり、今後の調査によってさらにその数が増すことを考えれば、長原古墳群の中の南東部の一群としてとらえることができよう。もっとも規模が大きい長原183号墳は現在のところ、台地の先端部、この一群の最も北に位置している。

古墳時代末から飛鳥時代になると、古墳の間を縫うように何条もの水路が南北に延びる。近隣で飛鳥時代の水田自体は見つかっていないものの、水田開発が盛んになってきたことを示すものであろう。

(寺井)

註)

- (1) [大庭1999]では本節のSD901を「川辺2号用水」、SD902を「川辺1号用水」と呼び、[大阪市文化財協会1995]と違であるが、ここでは初出の[大阪市文化財協会1995]に従った。

第3節 NG93-1次およびその周辺の調査

1) 調査地と周辺の概要

本節ではNG89-48・92-27・92-53・92-63・93-1・94-83次調査を報告する(図236)。近隣ではNG82-41次調査などで弥生時代前期にさかのぼる水田が検出されており、河内平野の水稲農耕を考える上でも重要な地点として知られている[大阪市文化財協会1999a]。

NG89-48・93-1次調査は大和川の堤防のすぐ北側に位置する。調査の結果、後期旧石器時代の石器ブロックや弥生時代中期前葉に廃絶する水田、古墳時代の集落関係遺構などが検出された。

NG92-27次調査は試掘調査で縄文時代の地層が認められたため、石器遺物の有無を確認することを目的として、幅1m、長さ15mのトレンチを設定して本調査を行った。調査の結果、後期旧石器～縄文時代の地層は残存していたものの、石器遺物は出土しなかった。

NG92-53・92-63次調査は小規模な調査で、検出した遺構・遺物は少なかった。NG92-63次では坪境溝が検出された。

NG94-83次調査は試掘で後期旧石器～江戸時代の地層が良好に残っていることが確認されたため、建物の基礎の範囲に限って調査が実施されることになった。その結果、庄内式期や古墳時代中期の遺構・遺物に加え、後期旧石器～縄文時代中期の石器ブロックが検出された。

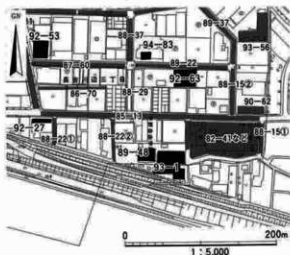


図236 NG93-1次などの調査地位置図

2) 調査の結果

i) 層序

NG93-1次で観察した層序を示す(図237・表29)。長原2～7層はきわめて薄く断片的で、長原8～12層が総じて1m近くの厚さを有する。隣接するNG89-48次調査地でも同様の地層が広がっていた。水田の作土である長原8Cii層(図237の第9層)は調査地の東半に分布する。

ii) 遺構と遺物

a. 旧石器～縄文時代の遺構

NG89-48次調査

調査地南東部で長原13層に相当する地層において、ナイフ形石器2点を含む50点の石器遺物のブロックが検出された(図238・図版32上)。直径約3mの広がりを持ち、最大の高低差が0.3mあることから、擾乱を受けている可能性が高い。石器はいずれもサヌカイト製で、2点のナイフ形石器は典

表29 NG93-1 次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	0	現代堆土	60					近・現代
2	1	暗灰色砂礫混りシルト	10	作土				江戸時代 弥生時代
3	2	オリーブ褐色砂礫混りシルト	<5	作土				
4	3A	浅黄色シルト混り細粒砂	10	水成				
5	3A	灰黄色極細粒砂質シルト	5	水成				
6	3B	灰オリーブ色シルト混り砂礫	20~40			→SK801		
7	3C1	オリーブ色シルト砂礫・灰色細粒砂 混りシルト・浅黄色砂礫	20~60	水成				
8	3CII	明黄褐色極細粒砂質シルト	10~20	水成				縄文時代
9	3CII	灰色粘土質シルト	15~20	作土		→水田跡跡		
10	9A	黄灰〜黒褐色シルト質粘土	5~25	古土壌				
11	9B	黒褐色シルト質粘土〜粘土	10					
12	9C	黄灰色シルト質粘土	5~10					
13	10~12	黄灰色含極細粒砂粘土質シルト	15				サヌカイト剥片・石鏃	旧石器時代
14	13A・B	黄灰色粘土質シルト	20~25				サヌカイト剥片・スクレイパー	
15	13C	灰〜暗灰色シルト質粘土	15					
16	14	灰色シルト質粘土	10~30					
17	15	緑灰色含砂礫粘土質シルト〜粘土	>70					

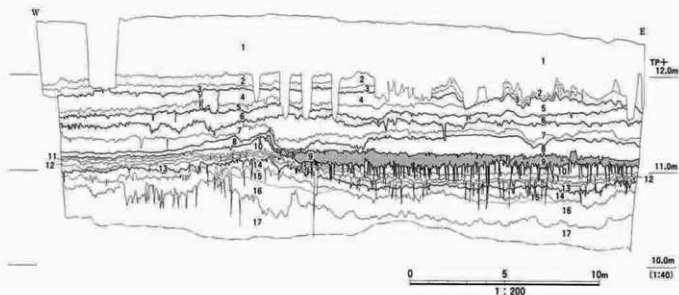


図237 NG93-1 次北壁断面図

型的な国府型ナイフに属するものではないと考えられる。

また、長原9C~12層が凝縮した地層から、縄文土器2点、石鏃4点、サヌカイト剥片4点が出土した。

NG93-1 次調査

旧石器〜縄文時代の石器ブロックが検出され、石器遺物が多く回収された(図239)。

旧石器時代の石器やサヌカイト剥片は、調査区の北西部に集中する傾向にある。図237の第14層(長原13A・B層)上部でサヌカイトフレイクが9点、下部でサヌカイト剥片およびスクレイパーが各1点出土した。これらの石器は小規模ながらブロックを形成していることから、石器製作に伴う遺物と考えられる。

第13層(長原10~12層)の長原12層に相当すると思われる部分から縄文時代前〜後期の石鏃27点、

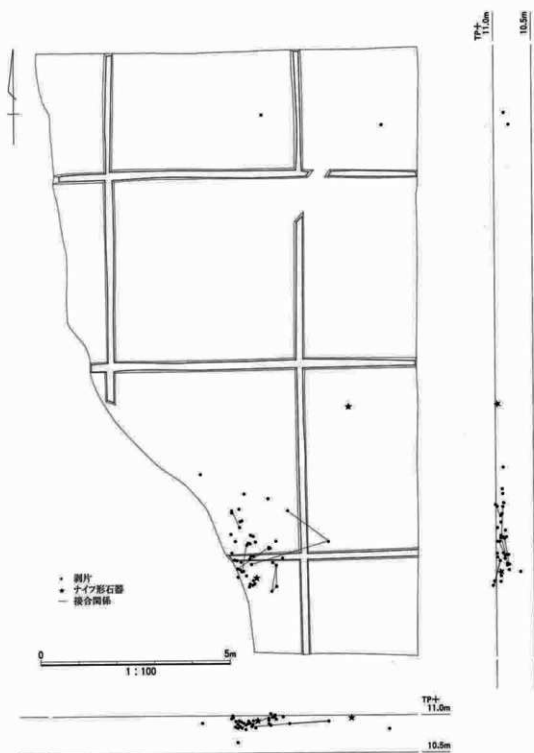


図238 NG89-48次長原13層石器分布図

サヌカイト剥片3点が出土した。石鏃の大半は基部の中央が大きく挟れた細身の凹基式石鏃で、石材はチャート1点以外はすべてサヌカイトであった。

NG94-83次調査

長原13A層に相当する地層から、調査地の東部を中心に直径約4mの範囲から11点のサヌカイト剥片が出土した(図240)。

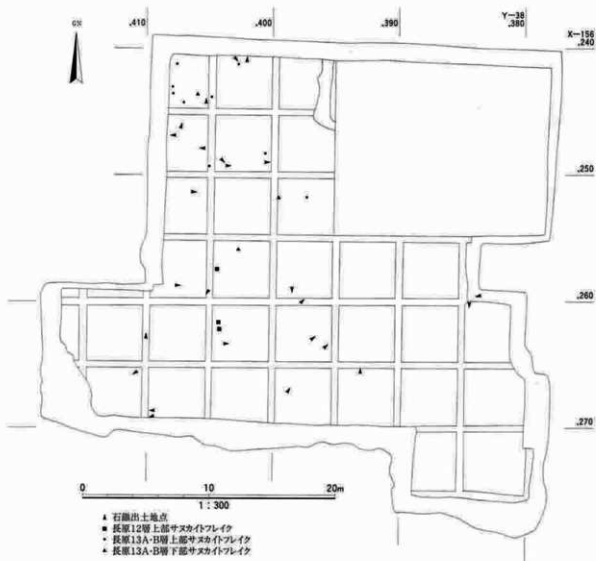


図239 NG93-1 次石器分布図

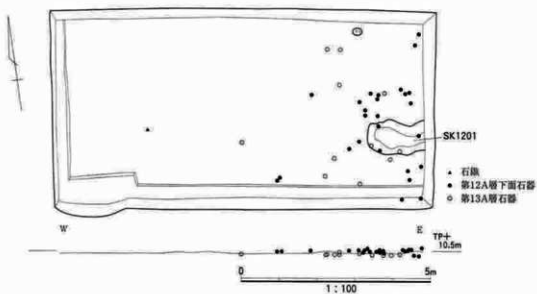


図240 NG94-83次長原13A・12A層石器分布図

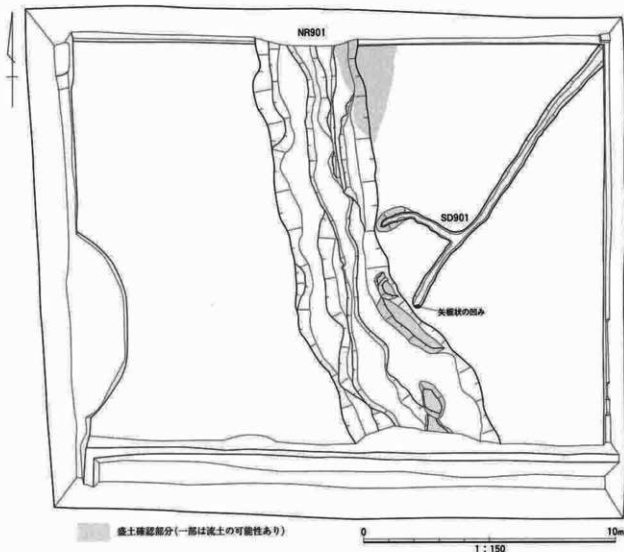


図241 NG89-48次弥生時代遺構配置図

また、調査地の東部の東西4 m、南北5 mの範囲において、長原12A層に相当する地層から、調査時に27点のサヌカイト剥片が出土し、調査後の土壌洗浄では200点以上の剥片やチップを回収した。石核や未製品・製品が見られないことから、短期間の石器製作の痕跡と思われる。なお、この石器ブロックに重なる土壌SK1201からは、比較的大きなサヌカイト剥片が出土し、埋土中には多量のサヌカイトチップが含まれていたことから、石器製作に係わる遺構と思われる。

b. 弥生時代の遺構と遺物

NG89-48・93-1次調査

NR901：両調査地で見つかった(図241・242・245、図版32中・34上)。幅約4 m、深さ約1.6 mあり、長原8Ci・ii層で埋没する流路である。兩岸に長原9A～13層に由来する偽礫が落ち込んでいることから、本来土手があったと思われる。この流路は調査地の北側400 mにわたって見つかった「西川辺川」に該当する[大阪市文化財協会1995：pp.414-415]。

SD901：NG89-48次調査で検出された(図241・図版32中)。幅0.45 m、深さ0.15 mの、平面プランがY字形を呈する溝である。NR901の盛土を切って、南西から北東に流れていることから、北東の



図242 NG93-1次弥生時代遺構配置図

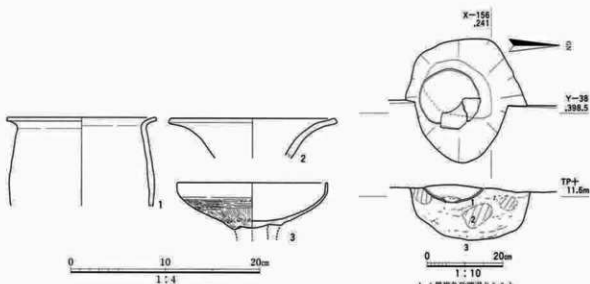


図243 NG93-1次出土弥生土器
水田上面(1・2)、SK801(3)

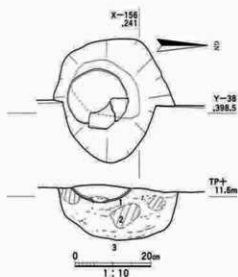


図244 NG93-1次SK801実測図
1:黒褐色砂礫混りシルト
2:におい黄褐色砂礫混りシルト
3:黒褐色砂礫混り砂礫

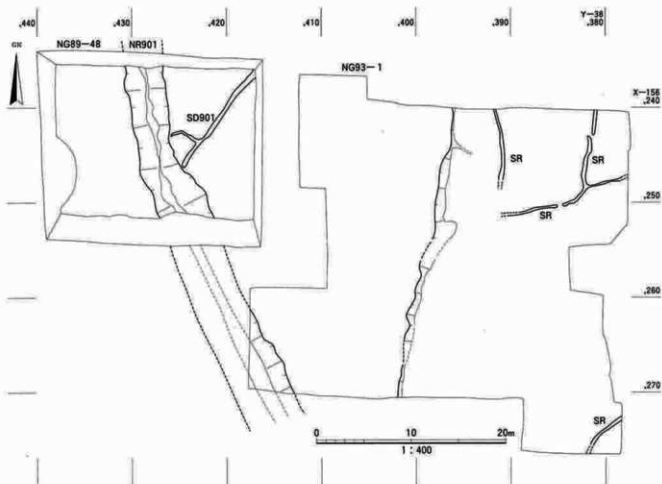


図245 NG89-48・93-1次弥生時代遺構配置図

水田に溝を送る溝と思われる。溝の底には掘削具の跡が無数に残っていた。長原式土器の細片が1点出土した。

水田：NG93-1次調査地の中央以東に広がる(図242、図版33中・下)。水田の西側にはTP+1 1.25~12.0mの微高地があり、水田はこの微高地の東側に広がる緩やかな傾斜面に位置することになる。調査地北東では高さ0.15~0.2m、幅0.2mの畦畔が確認され、そこでは踏込みも多く見



写真24 NG93-1次水田上面弥生土器出土状況

かった。水田は長原8Ci・ii層に覆われている(図版33上)。微高地で長原9A層上面に密着して、弥生時代中期前葉(畿内第Ⅱ様式)に属する甕1や壺2が出土したことから(図243・写真24)、この時期が廃絶の時期と思われる。また、開田の時期については、NG82-41次調査などの成果も踏まえるなら、弥生時代前期中葉と推定されている[大阪市文化財協会1999a：p.34]。なお、1・2は器面の剥離が進んでいて、調整を観察することができなかった。

SK801：長原8B層の上面で検出され、位置は図242に示した(図244・図版34中)。直径0.4m、深

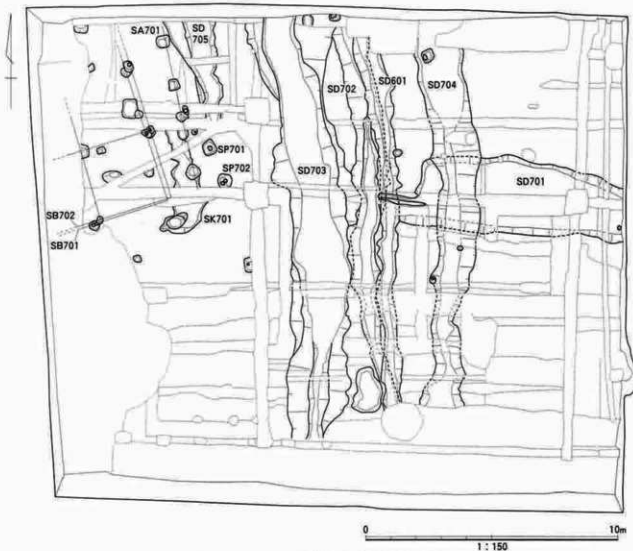


図246 NG89-48次古墳～奈良時代遺構配置図

さ0.15mで、埋土の上部で脚部を打ち欠いた畿内第Ⅳ様式の高杯3が出土した(図243)。3は縦方向のヘラミガキののち、横方向のヘラミガキが施され、口縁部はヨコナデで仕上げられる。

c. 古墳時代の遺構と遺物

NG89-48次調査

掘立柱建物・溝・柱穴・溝が検出された(図246)。

SB701・702：調査地の北西で2棟重なって検出され、SB701の柱穴がSB702に切られている(図版32下)。建物はいずれも東西1間(2.9m)以上、南北2間(5.6m)以上で、SB702には床束と思われる柱穴が検出された。柱穴は直径0.3m程度の不整円形で、柱痕跡の直径は0.15m程度であった。

SA701：SB701・702の東側で検出された。4基の柱穴が約1.8m毎に北からやや西に振った方向に並び、柱穴は直径0.3m程度の不整円形であった。柱痕跡は見つかっていない。

SP701・702：一辺0.5m程度の隅丸方形に近い形態の柱穴で、深さが0.2m、柱痕跡の直径が0.15mある。両者の間隔は約1.8mあるが、建物としてほかに組合う柱穴は見つからなかった。

SD701：幅2.1m、深さ0.25mの東西方向の溝である。SD702・704に切られ、SD703につながる。

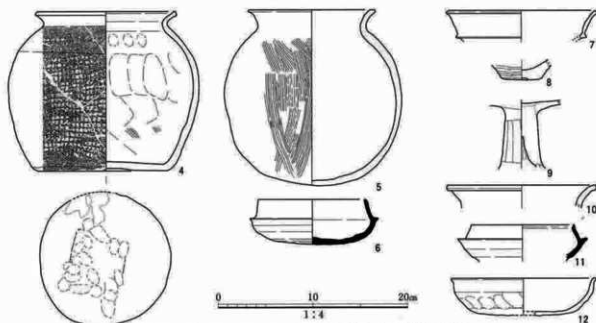


図247 NG89-48・93-1・94-83次古墳-飛鳥時代出土遺物
SD703(4)、SE701(5)、SD707(6)、SD708(7~9)、SD709(10・11)、SD602(12)

底では有機物のラミナを観察することができた。

SD702：SD703・704と同じく南北方向に延びる溝で、幅1.0m、深さ0.2mある。大半をSD601に切られる。

SD703：幅2.5m、深さ1.0mの南北方向に延びる溝である。下部には灰色中～細粒砂の水成層が堆積する。出土遺物には5世紀後半から7世紀初頭までのものが含まれ、この中には韓式系土器平底深鉢4がある(図247・写真25)。4は完形で、頸部が締まることから平底の短頸壺と呼ぶべき形態でもある。外面には正格子タタキが施され、底部との境界にはヘラケズリが施される。格子タタキの凹部は一辺3～4mmの正格子で、凹み内には木目と思われる横方向の筋が観察できることから、木製のタタキ板で横方向に叩いたことが考えられる。また、底部には下駄跡と思われる凹みが残っているが、ユビオサエによって消されていた。



写真25 NG89-48次SD703平底深鉢(4)出土状況

SD704：幅1.7m、深さ0.15mの南北方向の溝である。

SD705：調査地の北西部で検出された、幅1.2m、深さ0.1mの溝である。

NG93-1次調査

長原2層基底面で掘立柱建物・井戸・溝などの遺構をが検出された(図248)。

SB703：調査地南東隅で検出された掘立柱建物で、柱間は東西1.3m、南北1.8mである。柱穴は直径0.2m前後で、柱痕跡は直径0.1mあった。

SB704：調査区北西隅で検出された掘立柱建物で、東西2間(3.4m)、南北2間(2.6m)以上ある。

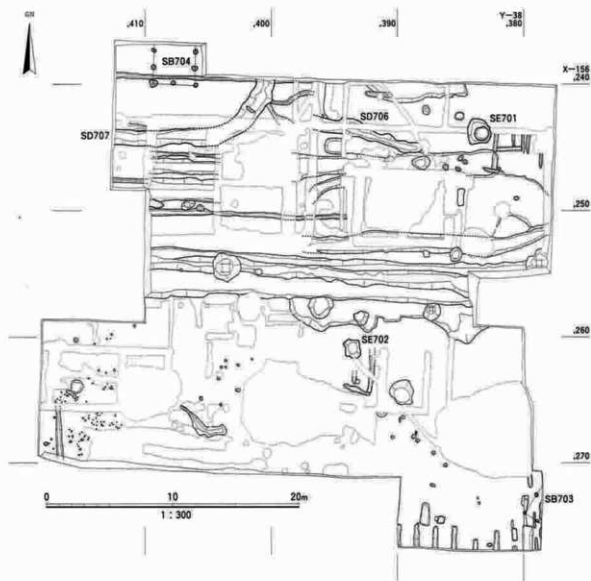


図248 NG93-1 次古墳～江戸時代遺構配置図

建物の方向はほぼ正南北で、柱穴の掘形は一边0.6mの方形のものや直径0.4m程度の不整円形のものがあった。

SE701：調査地北東隅で検出された井戸で、平面形が一边1.5～1.8mの不整形を呈し、深さが約1.2mある(図249・図版34下)。内部は黄灰色シルト混り砂礫、灰色砂礫混り粘土質シルトが堆積した後、黒褐色粘土質シルト、暗緑灰色粘土質シルトで埋戻されていて、最終的には水成の黒褐色砂礫混り粘土質シルトが堆積していた。底から約0.2m浮いた状態で土師器甕5が2つに割れて出土した(図247)。5は球胴の甕で、外面はハケで仕上げられる。

SE702：一边約1.8m、深さ0.9mで、平面形が不整形を呈する遺構で、井戸と判断した。掘形は東部が2段に掘込まれており、内部には下から黄灰色シルト混じり砂礫、オリーブ黒色シルト混り砂礫、黒色シルト混り砂礫が堆積していた。黒色シルト混り砂礫からは酸化焰焼成の韓式系土器の細片が出土し、埋土の状況からも古墳時代中期の井戸と思われる。

SD706：幅0.6～1.1m、深さ0.15mで、断面の形状がU字形を呈する東西方向の溝である。古墳時

代中期の土師器甕や壺が出土した。

SD707：幅1.6m、深さ0.3m前後の断面逆台形を呈する溝である。埋土からON46段階の須恵器杯身6や杯蓋が出土した(図247)。6は口縁端部が丸く仕上げられる。

NG94-83次調査

長原7Bii層基底面で南北方向の溝SD708・709が検出された(図250)。

SD708：幅0.9～1.5m、深さ0.3m前後あり、断面は逆台形を呈する。また、下端にそって三日月形の窪みが多数見られた。掘削具の痕跡と思われる。ここから土師器甕7・8、高杯9が出土した(図247)。7は山陰系の二重口縁を有する甕で、8は胎土に角閃石を多量に含み、外面に粗いタタキメを残す甕の底部である。9は脚外面には縦方向のヘラミガキ、内面にはシボリメが残る。これらの遺物は庄内式期に位置づけられる。

SD709：南北方向に延び、幅0.5～1.1m、深さ0.3mある。南側でSD701を切る。土師器甕の口縁部10やTK47型式に該当する須恵器杯身11が出土した(図247)。

d. 飛鳥～奈良時代の遺構と遺物

NG89-48次調査

SD601：幅1.1m、深さ0.2mの南北方向に延びる溝である(図246)。長原6層に相当すると思われる暗黄灰色砂礫混り粘土質シルトで埋まっている。

NG94-83次調査

SD602：幅0.7m、深さ0.1mの南北方向の溝である(図250)。溝内には長原6B層に属する灰色砂礫混りシルトが堆積しており、北端近くからは飛鳥Ⅲに位置づけられる土師器杯C12が出土した(図247)。12は内側の器表面が磨滅して暗文の有

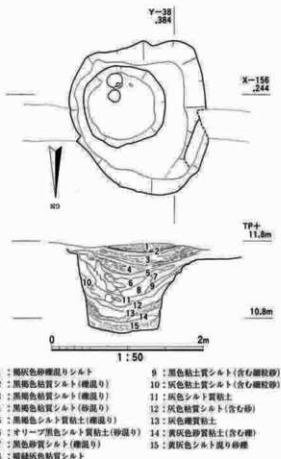


図249 NG93-1次SE701実測図

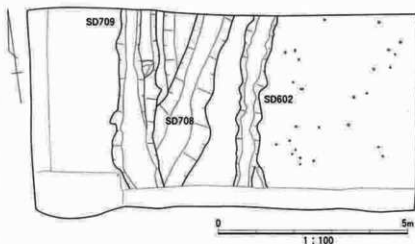


図250 NG94-83次古墳～飛鳥時代遺構配置図

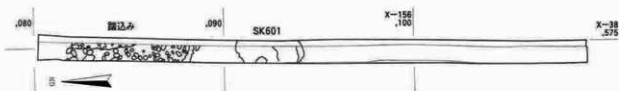


図251 NG92-53次古代遺構配置図

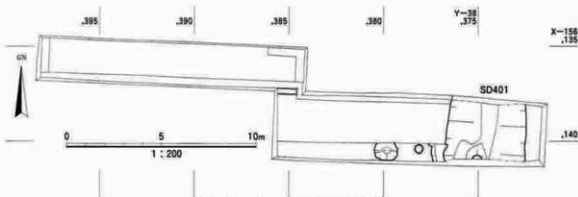


図252 NG92-63次中世遺構配置図

無を確認することができなかった。

NG92-53次調査

土壌1基と踏込み群が検出された(図251)。いずれも時期を決定する遺物が出土しなかった。長原6～7層準の遺構と思われる。

SK601は南北3.6m、深さ0.3mあり、東と西は調査区外に広がる。

踏込み群は北側に広がる。上位に本来作土層があったためと思われる。

e、中世の遺構と遺物

NG92-63次調査

SD401：中世の南北方向の坪境溝である(図252)。幅約4m、深さ1.1mある。瓦器などの中世の遺物が出土した。

3) まとめ

まず、NG89-48・93-1次調査で弥生時代の水田が検出されたことが特筆される。この水田は瓜破台地東斜面から派生した沖積微高地上に立地しており、東・西川辺川に挟まれた緩斜面に営まれている(図253)[大庭重信1999]。東隣のNG82-41次などでも水田が検出されており、総面積は13,000㎡に達する。本節で報告したように、畿内第Ⅱ様式の土器が水田上面に貼り付いて出土していることから、弥生時代中期前葉には廃絶していたようである。

古墳時代では集落関係の遺構が検出された。東隣のNG82-41次調査地では長原106・107・208号墳が検出されており[大阪市文化財協会1999b]、それらの時期が長原古墳群の3期に位置づけられることから、集落の方が若干古くなる。

なお、本節での報告対象調査では石器遺物が多量に出土しているが、整理作業が間に合わず、十分に報告することができなかった。いずれ報告する機会を作りたいと思う。(寺井)

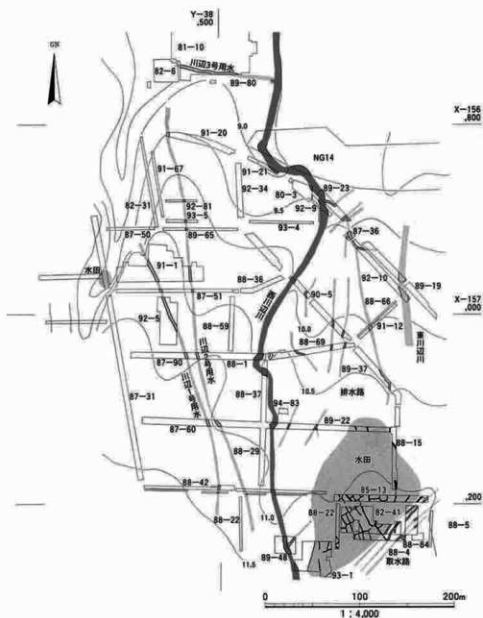


図253 NG93-1次調査地周辺の水田と遺構([大庭1999; 図81]を一部改変)

第4節 NG86-3・64次およびその周辺の調査

1) 調査地と周辺の概要

本節ではNG86-3・64次調査およびNG85-63・87-36・93-56次調査を報告する(図254)。これらの調査地は長原遺跡東南地区で最も東南隅に当り、特に旧石器のブロックが検出されることが多いことで知られている。また、隣接する八尾南遺跡ではYS87-8次調査などで古墳時代中期の古墳や集落関係の遺構が多く検出されている[八尾市文化財調査研究会1995: pp. 1-130]。

NG86-3・64次調査は住宅供給公社による共同住宅建設に伴って行われた調査である。調査の結果、旧石器時代の石器ブロックが検出された。

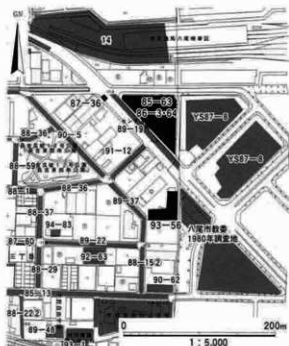


図254 NG93-1次などの調査地位置図

表30 NG86-3・64次層序表

層序	長原層序	説明	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	1	現代作土	20					近・現代
2	2	黄褐色砂礫混りシルト	20	作土			近世以降の陶磁器・瓦	江戸時代
3	4B	灰オリーブ色シルト	20	作土			瓦器・土師器	鎌倉時代
4	6	暗褐色シルト質粘土	10	作土			土師器・灰窯器	奈良時代
5	8	暗灰黄色粘土質シルト	20					常世時代
6	9A	黒褐色シルト質粘土・粘土	5~10					
7	9B	灰黄褐色シルト質粘土	15~20				植物遺体	縄文時代
8	9C	黒褐色シルト質粘土	5				石版	
9	10・11	灰~暗灰黄褐色粗粒砂質シルト	40					
10	12Bii	暗灰黄色粘土質シルト	5~10				(火山灰の2次堆積)	
11	13A	明黄褐色粘土質シルト	10~15		上面から乾涸		ヤヌカイト断片など	旧石器時代
12	13B	にべい黄色シルト質粘土	5~10					
13	14	灰オリーブ色シルト	>40					

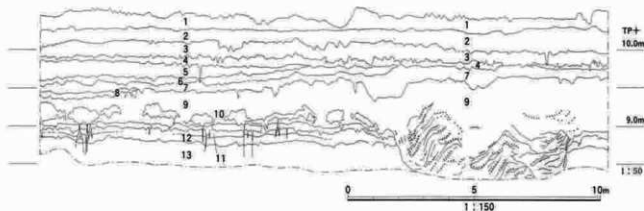


図255 NG86-3・64次南西壁断面図

NG85-63次調査はカルバート(暗渠)建設に伴って行われた調査である。ただ、この調査終了後にNG86-3・64次調査が引き続き同一敷地内で行われたため、調査地が重複することになった(図258)。

NG87-36次調査は飛行場南幹線下水管渠築造工事に伴って行われた。67㎡と狭い調査ではあったが、縄文時代晩期から弥生時代前期の溝や、古墳時代中期の土壌墓と思われる遺構が検出された。

NG93-56次調査は試掘調査(NG92-78次)で長原2~12層の地層が良好に残っていることが確認された。当初の予定では旧石器時代の調査に照準を絞り、東西2本、南北2本の平行するトレンチ(幅3m)を設定し、GL-1.5mまで掘削することになっていた。しかし、予想外に古墳時代中期の遺構がまとまって検出されたことから、面的な調査が必要になり、平行するトレンチの間の未調査部分も調査範囲に加えることとした。その結果、古墳時代中期の集落構造を考える上での重要な成果を上げることができたが、弥生時代以前の調査は残された期間がわずかであったことから、不十分になった。なお、古墳時代集落の成果については[京嶋覚1994]で一部紹介されている。

2) 調査の結果

i) 層序

NG86-3・64次調査では、南西壁で地層の観察を行った(図255・表30)。

NG93-56次調査では、東西方向の断面で地層の観察を行った(図256・表31)。重機掘削で現代作

表31 NG93-56次層序表

層序	探照層序	岩相	層厚(m)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	1	現代作土および粘土						近・現代
2	2	暗褐色砂質シルト	2~5	作土				江戸時代
3	3	黄褐色砂質シルト	<5			▼SK301~304		室町時代
4	3 or 4	灰色砂混り粘土質シルト				↓鳥居の溝		
5	7B	暗褐色砂混り粘土質シルト	<5					古墳時代
6	8CI	黄褐色細~粗粒砂	50~60	水底				弥生時代
7	8CII	黄褐色~黄灰色粘土質シルト~粘土	20~30	水底		→路込み		
8	9A	灰色含砂粘土	5~15	暗色帯				
9	9BI	灰色細~粗粒砂	30~40	水底		→SD901		縄文時代
10	9BII	灰色粘土質シルト	9~20					
11	9CI~III	暗灰色粘土	20~30					
12	10~12	灰色含砂粘土質シルト	10~20					
13	10~12	黄灰色粘土質シルト	10					
14	13B	灰色粘土質シルト						旧石器時代

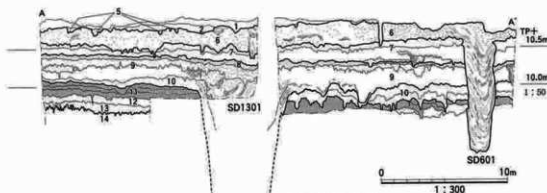


図256 NG93-56次東西方向断面図

土まで除去したため、それ以下の地層を記録している。長原7B層に相当する第5層は、調査地の西部では遺構の埋土でしか確認できないが、東部の北端では薄く遺存する。下位層が砂である部分は砂質シルトである。

ii) 遺構と遺物

a. 旧石器時代の遺構と遺物

NG86-3・64次調査

西側調査地の北東端において、長原13A層(図255・表30の第11層)中で旧石器のブロックが検出された(図257・図版35)。このブロックから約40点のサヌカイト製の石核・剥片と多数の小円礫が出土した。石核・剥片はブロックの中央では非常に密に分布し、周辺にいくにつれて徐々に疎になる。小円礫の分布もほぼ同様で、約2m四方の範囲に集中する。

個々の石器の出土状態はさまざまで、ほぼ水平のもの、垂直に立ったもの、斜めに傾いたものが認められる。垂直分布は石核・剥片だけを見ると比較的レベルに近く分布するが、小円礫を加えると20cm前後の幅がある。小円礫は本来、当地の長原13A層には含まれないもので、しかも小円礫の分布が石核・剥片のそれと一致することから、両者は有機的に関連して、ひとつのブロックを形成していたと判断できる。

石核・剥片の内訳は、縦長剥片石核・縦長剥片・剥片素材石核・横長剥片で、石核には原面打面を

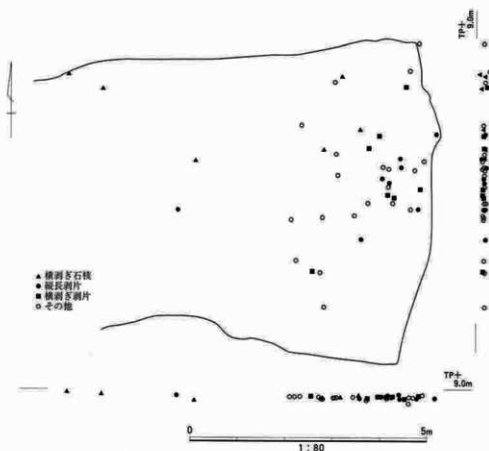


図257 NG86-3・64次旧石器平面・垂直分布図

もつ円錐形のものとは剥片素材の2種がある。前者の石核はブロックの中心部からやや離れた位置で出土したが、それに対応する剥片はブロック中心部に見られる。剥片素材石核と縦長剥片などはおおむねブロック中心部付近に分布する。なお、石核・剥片はすべてサヌカイト製であるが、いわゆるハリ質のものは1点も含まれない。また、ブロック内には若干の炭が認められた。

石核・剥片の観察から、連続的に貝殻状あるいは縦長の剥片を剥離する技術とともに、剥片素材の石核を用いた横長剥片剥離技術の存在が予想される。また、石核やかなりの数の剥片の打点周辺にはサヌカイトの原面が残っており、剥片剥離が原面打面の石核から行われたと考えられる。

b. 縄文時代の遺構と遺物

NG86-3・64次調査

長原12Bii層(図255の第10層)上面で自然流路NR1201、長原9C層(図255の第8層)上面でNR901が検出された(図258・図版36)。前者は幅7.5m、後者は幅4.0m、深さ1.5mあり、いずれも埋土は上位の砂で、遺物は出土せず、流木と植物遺体が見つかったに過ぎない。

NG87-36次調査

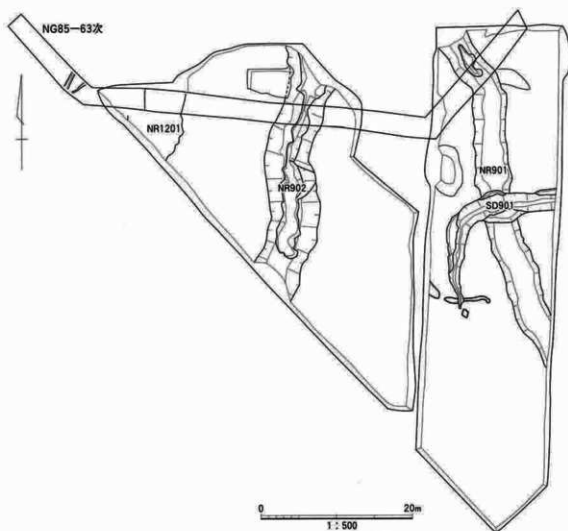


図258 NG86-3・64次縄文～弥生時代遺構配置図

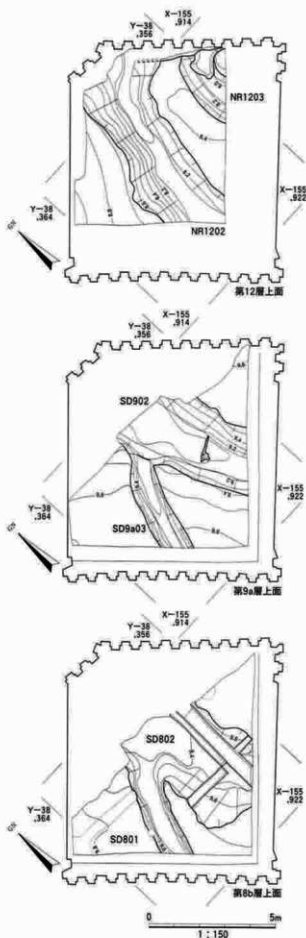


図259 NG87-36大縄文-弥生時代遺構配置図

長原12B層と思われる灰白色粘土質シルト層の上面で自然流路NR1202・1203が検出された(図259)。NR1202は幅2.0~2.5m、深さ0.8mあり、黒色粘土質シルト~シルトで埋まっていた。NR1203は幅1.2m、深さ0.4mある。

NG93-56次調査

長原9Bii層(図256の第10層)上面で南北方向の自然流路NR903が検出された。幅約7m、深さ約2mある。埋土の上部はにぶい黄褐色細粒砂、下部はにぶい黄褐色粗粒砂~細礫で、長原長原9Bi層に該当する水成層で埋まっていた。なお、いずれも調査期間が十分残されていなかったために、平面図を作成することができなかった。

c. 弥生時代の遺構と遺物

NG86-3・64次調査

長原9A層(図255の第6層)下面でSD901、同上面でNR902が検出された(図258、図版36中・下)。NR902は幅6.5m、深さ2.3mあり、長原8Ci層の砂礫層で埋まっていた。出土遺物はなかった。

SD901はし字状に曲がる溝である。最大幅4.0mで、深さは0.6mである。埋土はシルトや粘土で、長原式土器や畿内第I様式と思われる土器片が出土した。

NG87-36次調査

長原9A層上面で溝SD902・903が検出された(図259)。SD902は幅2.5m、深さ0.5mの溝で南北方向に延びる。SD903は幅1.0m、深さ0.3mあり、北側でSD902に合流する。いずれの溝も暗褐色粘土で埋まっていた。

NG93-56次調査

長原8Cii層(図256の第7層)上面では南東から北西方向に延びる自然流路NR801が検出された。幅2.5m、深さ1.5mで、長原8Ci層の水成

層で埋没していた。なお、調査期間が十分残されていなかったために、平面図を作成することができなかった。

d. 古墳時代中期の遺構と遺物

NG93-56次調査

長原8C層によって形成された標高10.5～10.8mの微高地上で、掘立柱建物1棟、井戸3基のほか、土壌および溝といった多くの遺構が検出された(図260・図版37)。

SB701：2間(3.4m)×2間(3.3m)の掘立柱建物で、中央にも1基の柱穴がある(図260左上・図版37中)。柱穴の大きさは一辺が0.3～0.4mの方形ぎみの平面形を呈し、隅柱のうち、四隅の柱穴が深

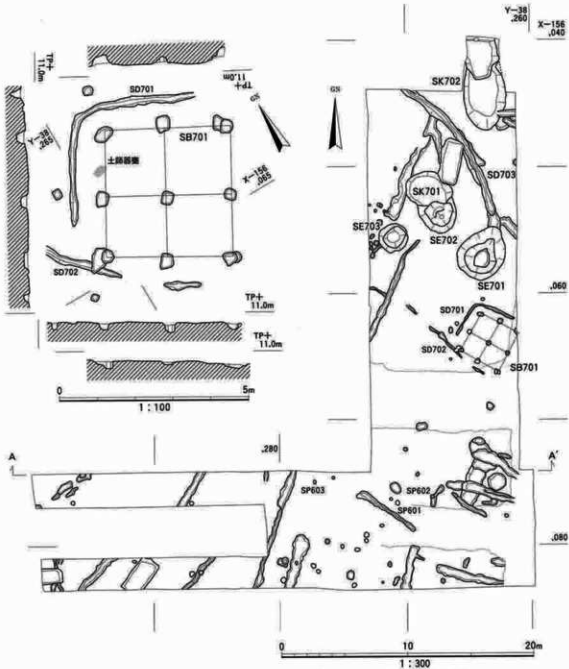


図260 NG93-56次古墳～飛鳥時代遺構配置図およびSB701実測図

く、建物中央の柱穴は四隅の柱穴と同じくらいの深さがある。柱痕跡は不明確であったが、確認できたものは直径0.1mほどであった。建物方位はN30°Eである。

SB701の北西隅および南西隅の各柱穴からそれぞれ北および南に1.2m離れて、一辺0.15～0.25mの小柱穴があり、西側柱列の中央の柱から西にも1.2m離れた位置に同様の柱穴がある。軒を支えるなどの補助支柱の穴と思われる。

SD701：SB701の北および西側に、柱筋から0.7～0.8m離れて存在する溝である。幅0.15～0.2m、深さ0.05mある。

SD702：SB701の南側に延びる溝で、幅や深さはSD701とほぼ等しい。この溝はさらに建物の西方に延びて、調査範囲外までの約20m以上続いている。

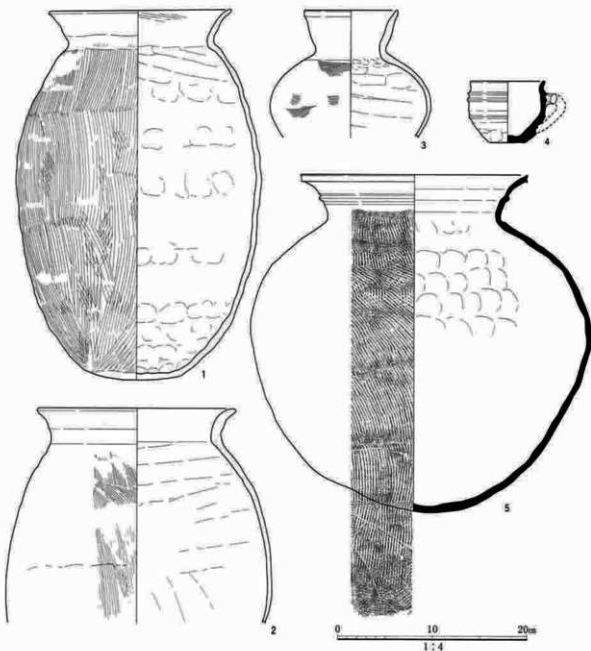


図261 NG93-56次SD703出土遺物

SD703: SE701から北西に弧を描くように延びる溝である(図版37下)。幅0.5~0.8m、深さ0.35mである。この溝のSE701との接続部は深さ0.06mと浅く、井戸から0.8m離れたところから深くなっている。また、溝の底は検出された範囲内においてはほとんど高低差がなかった。古墳時代中期の地形が北西方向に低くなっていることから、井戸水を北西方向に送水するためのものと考えられる。埋土は水成と思われる黒褐色粘土層で、中部に砂を多く含む。底が深くなる地点では水成の中~粗粒砂が薄い層をなしていたが、それ以北は粘土層であった。また、SE702・703からも浅い溝が延びており、SD703に取付いている。

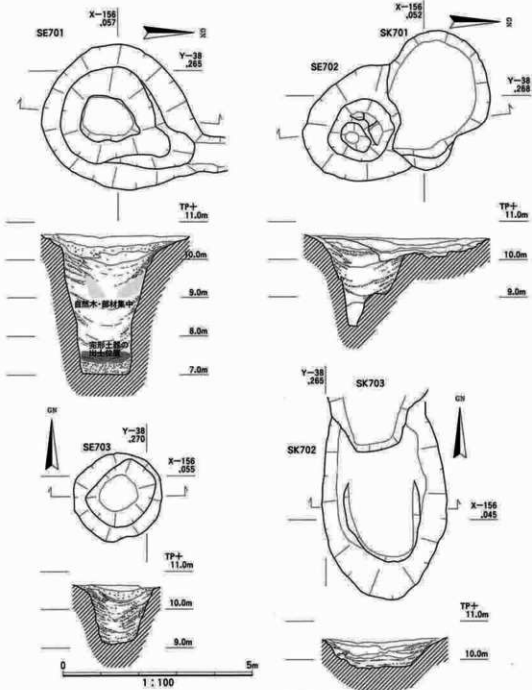


図262 NG93-56次各遺構実測図

SD703からは土師器甕1・2、壺3、須恵器把手付桶4、甕5が出土した(図261)。1と4は北部の溝底に完形の状態で正位に置かれていた。さらに北側2mの位置には、完形に復元できる須恵器甕5が割れた状態で出土したが、これも本来は置かれていたものと思われる。

SE701：調査地北部で検出された井戸である(図262)。上端が3.4m×4.1mの楕円形で、最上部から2.3m下方では直径1.5m程度の円形であり、深さは3.6mある。東北部は突出する形状で、壁の傾斜は緩やかになり、SD703が取り付けている。埋土は上から約0.7mまでは黒褐色粘土質シルトで、それ以下は2.5mの厚さで周囲から流れ込んだ砂の薄層を介する黒色粘土または粘土質シルトとなり、下方にいくほど汚れている。そして、最下部の0.3mは汚れの少ない淡灰色中～粗粒砂である。

遺物は上から1.7mまでのものと、底の砂層に堆積した粘土質シルト層から出土した遺物に分けられる。前者については、上から1.0～1.7mの間に大量の加工木が出土した。図化できていないが、それらは建築部材と思われるものが多くを占めており、梁桁の一部と思われる丸太材や垂木および板材、角材や鼠返しなどがあつた。多くは焼けており、火災にあつたか、建築廃材を燃料などにしたものと思われる。また、自然木や落葉樹の葉などの堆積が突出部付近に見られた。

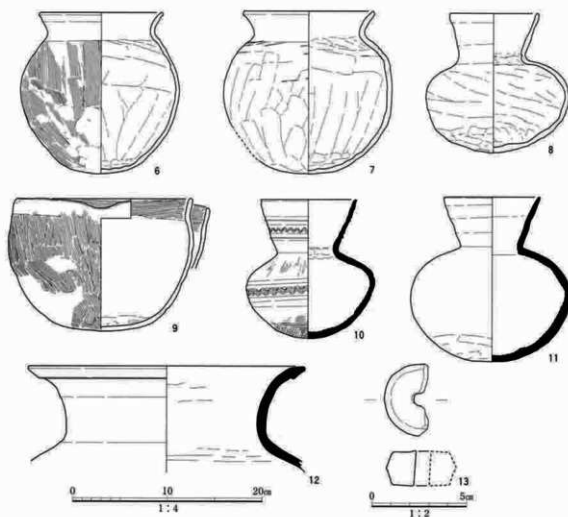


図263 NG93-56次SE701・702出土遺物
SE701(6～12)、SE702(13)

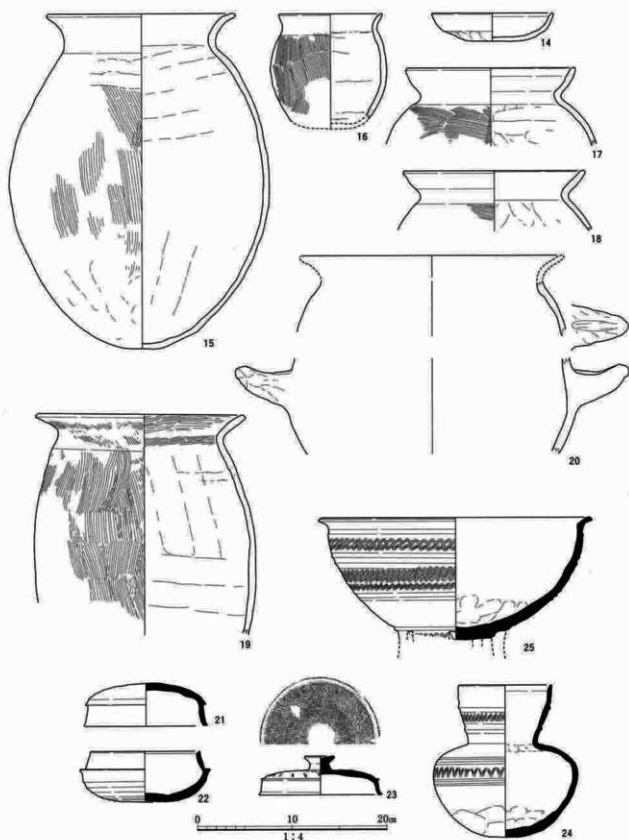


图264 NG93-56次各遺構出土遺物

SK701(15・16)、SK702(17~24)、SK703(25)、SP601(14)

これらの加工木の堆積のやや上位で完形の土師器甕6・7、壺8、片口鉢9、須恵器壺10・11が出土したのに加え、須恵器甕の口頸部12も出土した(図263)。須恵器におけるTK73型式からTK216型式にかけての時期のものと思われる。

SE702：SE701の北西で近接して検出された井戸である(図262)。上端は直径2.8mで、深さ1.5mのところまで直径0.8mになり、最終的な深さは2.3mになる。埋土は下部が黒色または灰色粘土質シルト、中部は黒色または灰色シルトの薄層を介在する細～粗粒砂となり、上部は黒色粘土である。井戸がほぼ埋まり、浅い窪みになった段階で、北側にSK701が掘削され、最終的にはこの土壌とともに埋まっている。この井戸からの出土遺物は少なかったが、埋土の中部から須恵器壺の口縁部や、酸化焙焼成の算盤玉形紡錘車13が出土した(図263)。なお、須恵器壺の口縁部は後述するSK702から出土した壺24と接合した。このことから須恵器におけるON46段階のころに埋没したと思われる。

SE703：上端は直径2.3mのやや方形ぎみの円形を呈し、深さが1.6mある井戸である(図262)。埋土は下部が灰色粘土質シルト、中部が薄いシルト層が介在する細～中粒砂、上部が炭化木の細片を含む黒色粘土、最上部は褐色ないしは黒色のシルトまたは粘土質シルトが堆積している。埋土中部から土師器甕の底部が出土した。

SK701：平面形が長径3.6m、短径2.9mの楕円形で、深さは0.45mと浅く、井戸SE702を切っていた。埋土は下部が黄灰色または褐灰色粘土質シルトないし砂質シルトで、上部は砂を含む黒褐色粘土であり、炭を多く含む部分があった。ここから

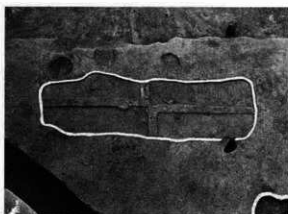


写真26 NG87-36次SX701(南から)

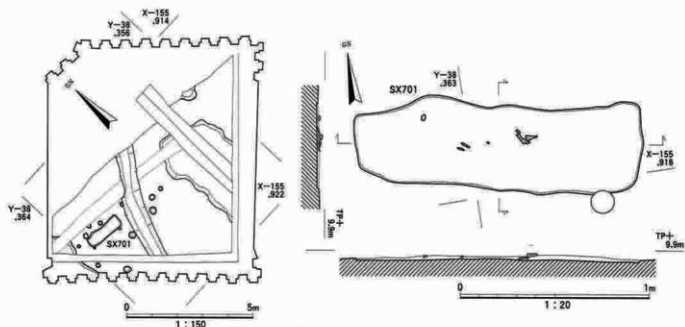


図265 NG87-36次古墳時代SX701の位置と実測図

は土師器長胴甕15や小型の平底深鉢16のほか、多くの土師器・須恵器片が出土した(図264)。

SK702:調査地北端で検出された南北5m以上、東西3.3mの土壌で、北部は別の遺構に切られていた。深さは0.75mで、埋土は黒褐色シルト質粘土または粘土である。出土遺物には土師器甕17~19や鍋20、須恵器杯身22、杯蓋21、高杯、同蓋23、壺24などがあり、完形もしくはそれに近い状態で出土した(図264)。須恵器はおおむねON46段階に属する。

SK703:SK702を切る土壌で、拡張した北端部で検出された。須恵器器台25などが出土したが(図264)、調査期間の関係で完掘できなかった。

NG87-36次調査

調査地の西隅で長原7B層準のSX701が検出された(図265・写真26)。1.54m×0.43mの長方形に近いプランを有し、深さは数cm以下である。埋土中に土師器や須恵器の細片に加え、骨片も出土しており、埋葬施設であった可能性がある。なお、本調査地の西約100mの地点に位置するYS87-8次調査では弥生時代後期の方形周溝墓1基、古墳時代中期の方墳3基が見つかった[八尾市文化財調査研究会1995:pp.77-95]。

e. 飛鳥時代の遺構と遺物

NG93-56次調査でピットSP601~603が検出された(図260)。検出面は古墳時代の遺構と同一であるが、埋土が明らかに違っていた。SP601からは飛鳥Ⅳに位置づけられる土師器杯C14が出土した(図264)。

f. 中世の遺構

NG93-56次調査では長原3層基底面においてSK301~304が検出された(図266)。これらは平面形が1.2m×0.8mの隅丸長方形を呈し、ほぼ同じ大きさであるが、深さは0.15~0.4mと差がある。SK301はもっとも深く、埋土下半部は灰色砂質シルト、上半部は砂の偽礫や粘土を含む暗灰色シルトで、後者の下面で木製の箸1本と少量の土器片が出土した。ほかの土壌からは遺物は出土していない。このような土壌はNG91-1次調査(本章第2節)などでも検出されており、時期は室町時代かそれ以降と思われる。

3) まとめ

旧石器のブロックについてはNG86-3・64次調査で良好な状態で検出することができた。ただ、残念ながら本節では整理時間の不足で、十分に検討して報告することができなかった。今後機会を作って十分な報告をしたいと思う。

古墳時代中期についてはNG93-56次調査で集落遺構を検出された。この遺構群は八尾市側のYS87-8次調査地を中心

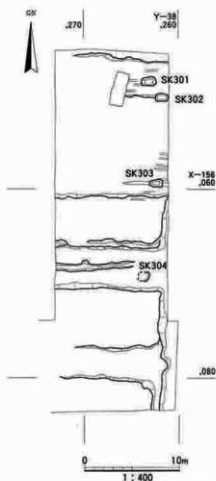


図266 NG93-56次中世遺構配置図

とする集落の西南端が検出されたものと思われる[八尾市文化財調査研究会1995：pp.1-130]。この集落を含む八尾南・長原遺跡東南地区の特徴は、竪穴住居が認められず、早くから掘立柱建物のみからなること、須恵器型式でいうTK216型式もしくはON46段階の時期で終わるということであろう。YS87-8次調査地では井戸から木製の鞍が出土しており、調査地内の空閑地を馬の放牧地と考えている[八尾市文化財調査研究会1995：pp.118-121]。なお、集落が廃絶する要因としては、古墳群の築造が考えられ、YS87-8次調査地やNG82-41次調査地では須恵器型式でいうTK208~TK47型式の方墳が検出されている[大阪市文化財協会1999a：pp.50-59]。

(寺井)

第5節 NG85-18次およびその周辺の調査

1) 調査地と周辺の概要

本節では長吉長原東3丁目の西部に位置するNG85-18・87-56・87-81次調査を報告する(図267)。

NG85-18次調査地は塚ノ本古墳(長原1号墳)の北側に位置する。試掘で古墳の存在が確認されたので、本調査に至った。調査の結果、長原29号墳の東側周溝の一部と長原129号墳が検出された。

NG87-56次調査はマンション建設に先立って行われた。調査は通路に当たる中央部分を残し、南・北の2区について実施した。近隣では古墳や平安時代の建物跡が検出されているが、本調査ではそのような遺構は発見されず、古代の水田が検出された。

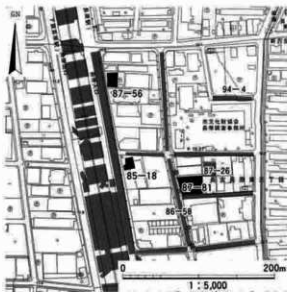


図267 NG85-18次などの調査地位置図

NG87-81次調査は長原150・151号墳が発見されたNG86-58次調査地の東側に位置し[大阪市文化財協会1993b: pp.145-240]、北東部にはNG87-26次調査地がある[高井健司・高橋工1989]。調査では幅3mの東西方向のトレンチを2本設定して、中世の地層以下を精査した。その結果、長原178号墳が発見された。

2) 調査の結果

i) 層序

NG87-81次調査地の北壁で長原178号墳の墳丘がかかっている部分で地層を観察した(図268・表32)。当地は東側に低くなる地形で、長原5層(第7層)は東側にのみ堆積する。また、長原7B層の暗色帯は古墳墳丘盛土の下でのみ確認された。

ii) 遺構と遺物

a. 古墳時代の遺構

NG85-18次調査

古墳が2基検出された(図270)。

長原29号墳：地下鉄工事の際に行われたNG1次調査[長原遺跡調査会1978]で明らかになった古墳の周溝東側が検出された。今回の成果から本古墳は一辺15mと推定できる。なお、NG1次調査では本古墳の周溝よりTK216・208型式の須恵器が出土した。

長原129号墳：調査地南側で検出された方墳で、南隅を除き、墳丘をほぼ全部明らかにすることが

表32 NG87-81次層序表

層序	長原層序	岩相	層厚(m)	特徴	自然現象	遺構	おもしろ遺物	時代
1	1	暗オリーブ灰色シルト	20	現代作土				近・現代
2	2	灰色含シルト中～粗粒砂	20	作土				江戸時代
3	3	灰色含粘土中～粗粒砂	5～10	作土				室町時代
4	4	灰色含砂シルト	10	作土				鎌倉時代
5	4	灰色含砂粘土質シルト～粘土	20	作土				
6	4	灰色含砂礫シルト	20	作土				
7	5	灰白色細礫～中礫	40	水成				奈良時代
8a	6Ai	暗青灰色含砂粘土質シルト	20	作土				
8b	6B?	暗緑灰色含粘土中粒砂	15					飛鳥時代
9a	7Ai	褐色粘土質シルト～黄灰色シルト	5～10	作土				
9b	7B	黒褐色粘土	<5					古墳時代
10	12	黄褐色シルト～明緑灰色含砂粘土						旧石器時代

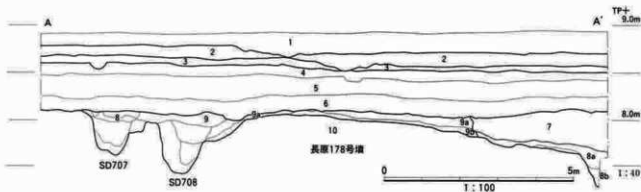


図268 NG87-81次北壁中央断面図

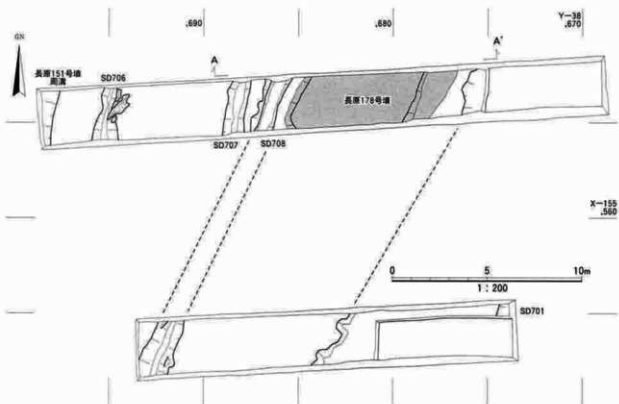


図269 NG87-81次古墳～飛鳥時代遺構配置図

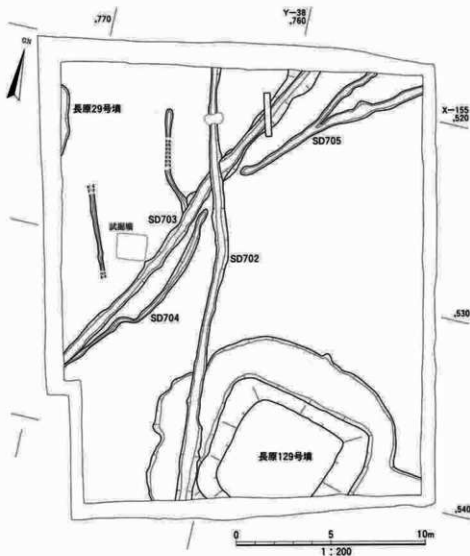


図270 NG85-18次古墳～飛鳥時代遺構配置図

できた(図270・図版38上)。墳丘は基部が長辺8.5m、短辺7m、周溝幅2.5mである。周溝底から墳丘最高部までの高さは0.4mで、盛土は削平のため0.1m程度しか残っていなかった。周溝からは5世紀中葉頃の土師器・須恵器の破片が少量出土した。

NG87-81次調査

北区中央で長原178号墳、北区西端で長原151号墳の周溝が検出された(図269・図版38下)。また、古墳時代前期末から中期初頭に位置づけられる溝SD701も検出された。

長原178号墳：一辺6.5～7mと推定される方墳である。西側の周溝はSD707・708に切られており、ほとんど残存していないが、墳丘側の斜面と盛土を確認した。墳丘東側には周溝埋土の痕跡と思われる黒褐色粘土が踏込み状に残っており、この踏込みが途切れるところが本来の墳丘裾であったと思われる。墳丘中央部には古墳が築造される前の表土であった長原7Bi層が残っており、その上に長原13層に由来すると思われる黄色粘土を主体とする盛土がウロコ状につまれていた。なお、本古墳は長原塚ノ本古墳の周辺に分布する古墳としては一番東側に位置する。なお、時期を確定できるような遺物

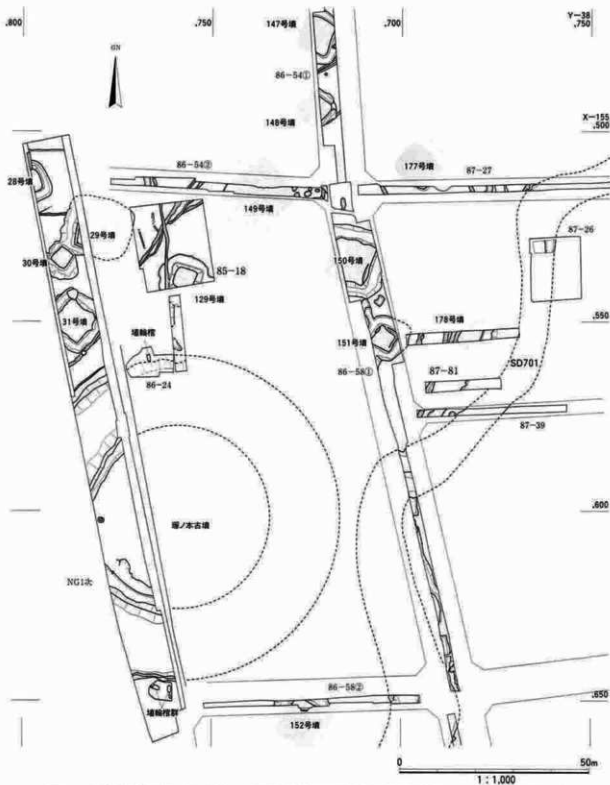


図271 長吉長原東3丁目西部の古墳～飛鳥時代遺構配置図([大阪市文化財協会1993b]の図150を改変)

は出土しなかった。

長原151号墳：北区西端で本古墳の周溝の一部が検出された。NG86-58次調査で検出された古墳の位置や向きから判断して、東側の隅に当る[大阪市文化財協会1993b：pp.183-184]。なお、以前の調査では少量の遺物しか出土していないが、竈窯焼成でB種ヨコハケが施される円筒埴輪片が出土

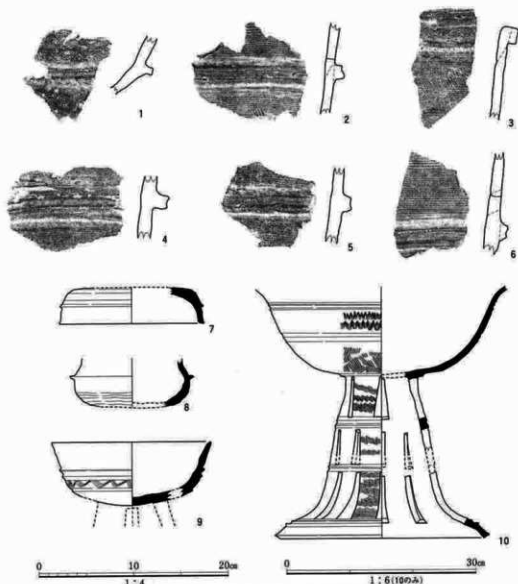


図272 NG85-18次長原7Ai層出土遺物

している。

SD701：北区と南区の東端で水成の砂や粘土で埋まる溝の肩が検出されたが、本調査では十分な断面観察はできなかった。この溝は[大阪市文化財協会1993b：pp.166-168]でSD03、[大阪市文化財協会1994：pp.79-80]でSD701と報告されたものと一連である(図271)。それらの報告によると、長原8A層で埋まる流路を長原7Bi層準で掘直されており、長原7Bi層が堆積した後、最終的に長原7Ai層で埋没しているということである。NG86-58次調査では長原7Bi層に相当する粘土層から古墳時代前期末から中期初頭に位置づけられる土師器や、塚ノ本古墳に使用されていたと思われる鰭付朝顔形埴輪が出土した。

b. 飛鳥時代の遺構と遺物

NG85-18次調査

長原7Ai層基底面で溝が4条検出された(図270)。ここでは肩がしっかりしているSD702・703につ



図273 NG85-18次SD601平面図

いて説明する。

SD702：調査地中央を南北に延びる溝で、幅0.6m、深さ0.5mある。埋土の下位には青灰色シルト質粘土に灰白色粘土質シルトの偽礫を含む加工時形成層が堆積していた。

SD703：南西から北東に向って延びる溝で、幅0.6m、深さ0.4mである。埋土の下位はSD701と同様に偽礫を含む加工時形成層が堆積していた。SD701に切られているが、埋土の状態からあまり時期差はないと思われる。

なお、本調査地の長原7Ai層から朝顔形埴輪1、円筒埴輪2～6、須恵器杯身8、杯蓋7、無蓋高杯9、高杯形器台10が出土した(図272)。埴輪やTK216型式に属する須恵器7～9は本来古墳に伴っていた可能性があるが、10は受部の底部に平行タタキメを残していることから、TK10型式かその前後の型式に属し、古墳よりも新しいものと思われる。

長原6Ai層上面では「コ」字状に巡る溝SD601が検出された(図273)。溝の幅は0.2～0.3m、深さは0.1mである。北接するNG

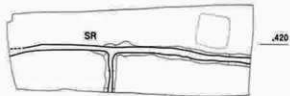
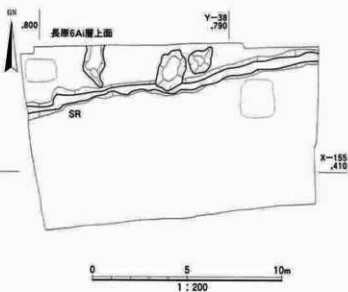


図274 NG87-56次飛鳥～奈良時代遺構配置図

86-54②次調査地でも続きが検出されており、総合すると南北21m、東西3.8~4.1mの長方形の空間を囲うことになる。これがいかなる目的で掘られたのかは不明である。

NG87-81次調査

長原178号墳の西側で溝が3条検出された(図269)。いずれも出土遺物は少量である。

SD706: 幅0.6~1.3m、深さ0.1mの浅い溝で、北区でのみ検出された。底面は凹凸が著しく、長原7Ai層を作土とする水田が耕作されている段階に形成されたものである。

SD707: 幅1.0m、深さ0.5mあり、北区でのみ検出された。下部には灰色粗粒砂が堆積するが、上部は長原13層に由来するシルト偽礫で埋められていた。

SD708: 幅1.0m、深さ0.55mあり、長原178号墳の西側周溝を切る。下部には暗灰色含砂粘土が堆積するが、上部はSD707と同様に長原13層に由来するシルト偽礫で埋められていた。7世紀代と思われる土師器鉢の破片が出土した。

NG87-56次調査

長原6Biもしくは7Ai層に相当すると思われる地層の基底面で溝を2条、ビット6基が検出された(図274左・図版38中)。

SD709: 幅0.7m、深さ0.15mあり、東西方向に延びる。埋土は若干の粗粒砂を含む粘土を主体とする。

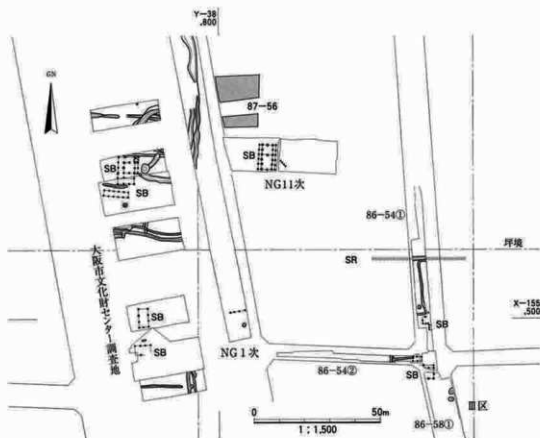


図275 NG87-56次調査地周辺の平安時代遺構配置図([大田市文化財協会1993b]の図190を改変)

SD710：幅1.0m、深さ0.2mあり、東西方向に延びる。埋土の最下部には水成層と思われる灰白色中～粗粒砂が堆積し、その上には灰白色粘土が堆積した後、黄灰色シルトで埋め戻されていた。東側の底のレベルが低いことから、東側に水を流していたことがわかる。

SP701～706：長軸が0.2～0.6mあり、不整形なピットである。SP705は検出面からの深さが1.0mあり、直径0.07mの柱痕跡を確認した。これ以外のピットでは柱痕跡は確認されなかった。

また、長原6Ai上面では水田畦畔が検出された(図274右)。

c. 平安時代の遺構

NG87-56次調査地では長原4B層に相当すると思われる灰オリーブ～灰黄色シルト層が残っていて、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器が多く含まれていたが、遺構は検出されなかった。当調査地の南隣のNG11次調査地では10～11世紀の大型建物SB351が検出されていることから[大阪市文化財協会1982：pp.108-109]、当地は空閑地であったのかもしれない(図275)。

3) まとめ

本節では塚ノ本古墳の東側に分布する方墳を新たに2基、既報告のものを2基、計4基を調査して報告した。新たに発見された長原129・178号墳については、時期を決定づけるような遺物は出土しなかったが、近隣の古墳は須恵器型式でいうTK73～208型式の時期に当り、おそらくこれらの古墳も同時期であろう。塚ノ本古墳周辺の古墳群の広がりについて、SD701よりも東では確認されていないため、この溝が東を画していたと考えられる。

(寺井)

第七章 東・東北地区の調査

第1節 NG87-67次およびその周辺の調査

1) 調査地と周辺の概要

本章では長吉長原1・2丁目に当る東地区の調査を報告する(図276)。本地区や長吉六反地区(長原遺跡東北地区)では1980年代末から現在まで市営住宅の高層住宅への建替えに伴って多くの発掘調査が行われてきた。その結果、弥生～古墳時代の遺構が濃密に分布していることが明らかになっており[大阪市文化財協会2002a・2002b・2003a・2005a]、それを基にして研究も多く行われている。ただ、本章で報告するのはいずれもこの地区で高層住宅化が進められる以前の調査ばかりである。

NG81-3～6次調査は下水工事に伴う一連の調査で、遺構が検出されたのはNG81-3次調査のみである。その他の調査はGL-2.5～3mまで掘削したが、攪乱が及んでいたため、遺構や包含層は



図276 NG87-67次などの調査地位位置図

検出されなかった。

NG84-6・75次調査は下水管渠築造工事に伴う調査である。この中でNG84-6次調査は大正川沿いの南北に細長い調査地を5区に分けて進められた。その結果、弥生時代後期の溝や、庄内式期の方形周溝墓に加え、上層では初期須恵器や形象埴輪が出土した。

NG86-20次調査は給油所の石油タンク設置に先立って行われた調査で、GL-3mまで掘削した。調査の結果、古代の水田や溝が検出されたが、出土遺物は非常に少なかった。

NG86-44次調査は長吉長原2～3丁目、長吉長原東1～2丁目、長吉六反3丁目にわたって行われた下水工事に伴う調査で、計74箇所の試掘坑で断面観察を行った。ただ、掘削がGL-1.3mまでに留まったため、時期のさかのぼる遺構・地層の確認はできなかった。

NG86-56次調査は地下鉄谷町線の長原駅につながる階段の建設工事に伴う調査である。近隣では小方墳が多く見つかっている。本調査では古墳は検出されなかったが、飛鳥時代の水田畦畔が調査された。

NG87-8次調査は下水管渠築造工事に伴う調査である。4箇所の人孔が調査対象となり、最大GL-3mまで掘削し、長原7B層や長原15層と思われる地層を確認した。長原7B層からは布留式の甕が出土した。

NG87-67次調査は中学校の体育館増築に伴って行われた。調査の結果、弥生時代中～後期の竪穴住居や古墳時代中期の土壇が検出された。

以上のように本書で報告対象となったこの地区の調査は下水工事などに伴う小規模なものが多い。よって、本節では遺構を把握することができたNG84-6次やNG87-67次調査を中心に報告する。

2) 調査の結果

i) 層序

本節で報告する調査は前述の通り、小規模な調査が多く、十分な断面図が作成された調査はない。ここでは長原7B層に焦点を置いて調査が進められたNG87-67次調査地の断面模式図を示すことにした。図277の通り、長原7B層を第7a～e層に細分されている。

第7a層は緑灰色砂礫混り粘土層である。SD709・714・715は本層下面の遺構である。埴輪や須恵器が含まれる。調査区南部には第7a層で構成される高まりが存在する。

第7b層はオリーブ灰色粘土層である。SD712・SK701は本層下面の遺構である。

第7c層はオリーブ黒色粘土層で、下部は緑灰色シルト層である。SD710・711・713が本層下面の遺構であるが、各溝の底には砂礫が顕著に含まれる。須恵器が出土した。

第7d層は黒色砂礫混り粘土層で、トレンチ全体に広がる弥生～古墳時代の包含層である。本層基底面でSB701・702・801が検出された。また、南側では本層途中面で畿内第V様式の甕がかたまって出土した。

第7e層は緑色砂礫混り粘土である。中央部の窪んだ部分に堆積する。本層基底面で弥生時代後期の土器を多く含む大溝SD707が検出された。

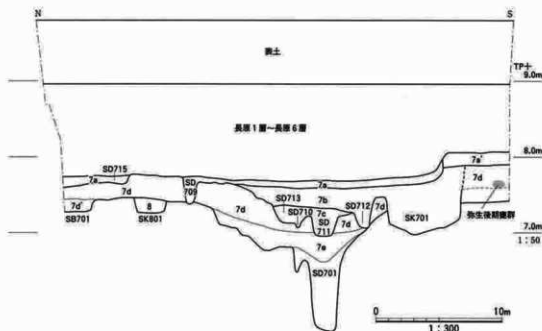


図277 NG87-67次断面模式図

ii) 遺構と遺物

a. 弥生時代中期の遺構と遺物

NG87-67次調査

第7d層(長原7Biii層に相当)基底面で、方形の土壌SK801が検出された(図278・図版39上)。SK801は南北2.8m、深さ0.1mある。東側は側溝にかかったため、不明であるが本来は正方形に近い形であったと思われる。底面は平坦で、小型の竪穴住居の可能性もあるが、明確な柱穴や周壁溝は見つからなかった。

SK801からは畿内第Ⅲ様式の甕・壺・高杯が出土し、壺2・高杯3を図示した(図

281)。2は口径22.8cm、体部最大径27.2cm、残存高30cmの広口壺で、口縁端部及び頸部から体部上半に簾状文が施される。最大径以下には横方向のヘラミガキののち、縦方向のヘラミガキが施される。胎土は石英・長石・チャートを含む非生駒西麓産である。3は高杯の脚部で、外面に縦方向のヘラミガキが施され、脚内面にはシボリメが残る。これらの遺物は河内Ⅳ-1様式に位置づけられる。

b. 弥生時代後期～庄内式期の遺構と遺物

NG81-3次調査

土壌や溝、ビッドが検出された(図279)。この中で弥生時代後期の壺片が出土したSK701について説明する。

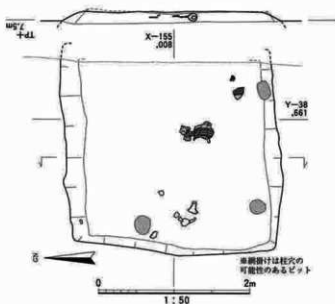


図278 NG87-67次SK801実測図

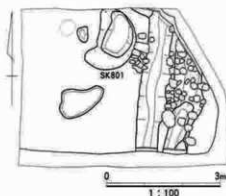


図279 NG81-3 3次遺構配置図

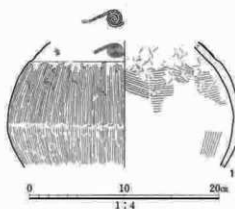


図280 NG81-3 3次SK701出土遺物

SK701は長軸1.6m、短軸1.0mの不整形な土壇で、深さは0.55mである。埋土は黄色粘土偽礫を含む黒色粘土であった。ここから弥生土器壺1が出土した(図280)。1は胴部に縦方向にヘラミガキが施され、肩部には強いナデの後、渦巻きのスタンプ文が施される。弥生時代後期前半頃のものであろう。

NG87-67次調査

竪穴住居および溝・井戸が検出された(図281)。

SB701：直径約6mに復元される竪穴住居で、やや角張る部分があることから、本来の平面形は隅丸多角形であったと思われる。また、明確な周壁溝は検出できず、見つかった柱穴は1基だけである。住居の中央付近から遺物がかたまて出土し、この中で壺4・甕5・甕6・高杯7・土製紡錘車8を図示した(図282)。

4は広口壺の口頸部で、口縁端部がやや拡張気味に面を有する。5は甕の体部上半で、口縁端部は上方に摘み上げられる。体部には粗い平行タタキが施される。6は鉢の底部を焼成後に外側から穿孔したものである。7は脚部が広

く、中実の脚柱部をもつ。8は土器片を転用したものである。この中で7が庄内式期に属するものである。

SB702：北東隅で見つかったため、規模・形状は不明である。廃絶後に埋め戻されており、その後にはSB701がつくられていることから、時期はSB701の直前と思われる。

SD701：幅約3m、深さ0.8mの断面逆台形を呈する溝で、北東-南西方向の窪みの深い部分に沿

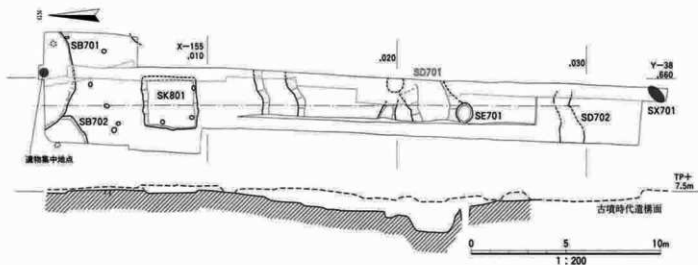


図281 NG87-67次弥生時代遺構配置図

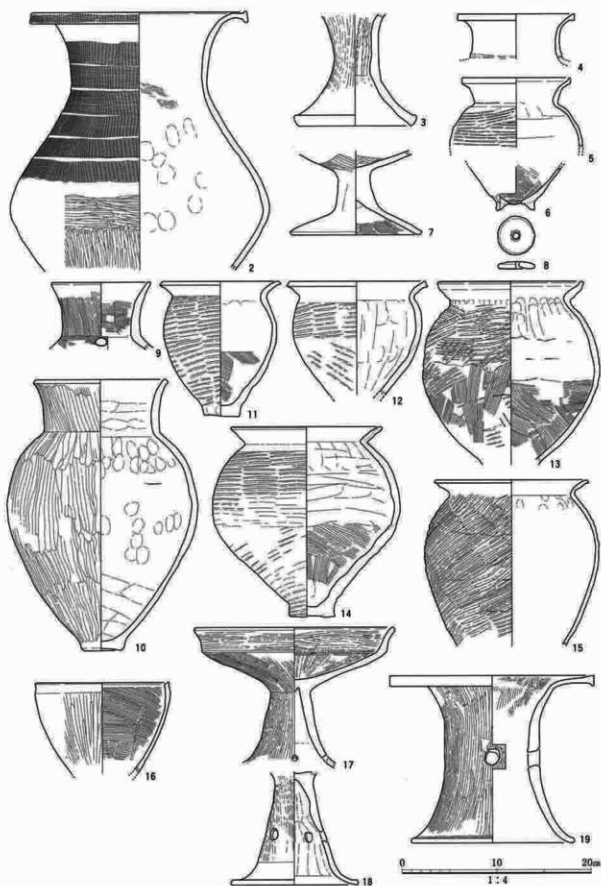


圖282 NG87-67次SK801・SB701・SD701出土遺物
SK801(2・3)、SB701(4~8)、SD701(9~19)

て延びる。埋土はオリーブ黒色粘土で、弥生時代後期の遺物を多く含み、図282には壺9・10、甕11～15、鉢16、高杯17・18、器台19を図示した。9は小型化した長頸壺で、肩部に円形浮文が貼付けられる。10は外面に縦方向のヘラミガキが施される壺で、口縁は直立して外反する。11・12・15は体部下半があまり張らないのに対し、13・14は張りが比較적きつい。17は杯部が屈曲して稜をもち、口縁部はやや外湾する。脚部には4方向に円形スカシが穿たれる。杯部内外面および、脚部外面にはヘラミガキが施される。18は外面ヘラミガキで、5方向に円形スカシが穿たれる。19は脚部部の屈曲についてははっきりしないが、受部については上部で水平近く屈曲を見せる。外面および受部内面にはヘラミガキが施され、体部には4方向に円形スカシが穿たれる。

以上の遺物について、10・17～19は河内V-2様式の特徴を有するが、9・13・14は河内VI-2様式に属すると思われる。

SD702：SD701の南側で検出された溝である。調査終了際に発見したため、輪郭が検出されたのみで、掘削はできなかった。幅は1.3mである。

SE701：SD701の南側のところで検出された直径1m強の井戸状の掘込みである。SD701掘削後に見つけたため、SD701以前の遺構の可能性があるが、切合い関係は十分確認できていない。また、調査終了際に発見したため、掘削はできなかった。

SX701：調査地の南東隅で検出された、甕がかたまって出土した土器溜である(図283・図版39中)。甕は数個体出土し、中には口縁をそれぞれ合わせたものや、ほかの甕の体部に口縁部を密着させたものがあつた。ただ、この土器溜には掘形は見当たらず、盛土も確認されなかった。体部が張る20の特徴から、河内VI-2様式かそれ以後のものと思われる。

NG84-6次調査

方形周溝墓や土壌・溝が検出された。

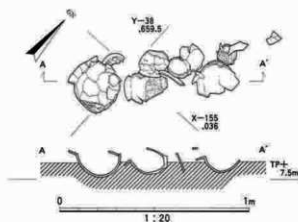


図283 NG87-67次SX701実測図

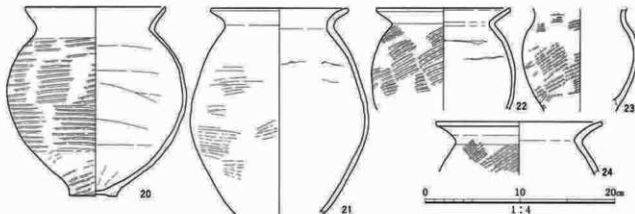


図284 NG87-67次SX701出土遺物

SD704：1区で検出された、幅0.5m、深さ0.2mの溝である(図293)。弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が出土した。

SD706：4区で検出された、幅2.0m、深さ0.5m溝である(図292)。庄内式期の土器が出土した。

SD707：4区で検出された2段掘りの溝で、上端の幅1.5m、深さ0.5mある(図292)。底から畿内第V様式の壺38が出土した(図289)。

38は平底で、やや縦にやや長い球形の体部を有する長頸壺で、器壁が荒れているため、器面調整は観察できない。肩部に1箇所粘土粒が付着するが、不整形であるため、装飾用かどうかはわからない。河内V-1様式のものと思われる。

SD708：幅3～4mの南北方向に延びる溝である。湧水が激しく、完掘することができなかった。検出面から0.3～0.4m下がったところで畿内第V様式の壺25～30、壺31～33、高杯34～37が出土した(図287・288)。

25～30は外面に2～3条/cmの粗い平行タタキが施され、25・26・28・29は内面に縦方向のナデで仕上げられる。

31は細頸の長頸壺で、外面は縦方向のヘラミガキで仕上げられる。32は口縁端部が外反する長頸壺で、外面にはハケメ、内面には接合痕が残る。33は頸部に断面三角形の突帯を巡らせ、やや上げ底気味の平底を有する壺である。口縁端部には刻み目があり、体部には縦方向のヘラミガキが施される。内面には接合痕

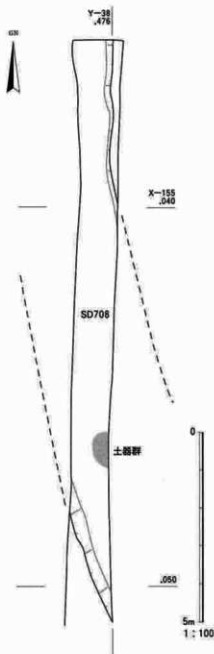


図285 NG84-6次5区SD708平面図

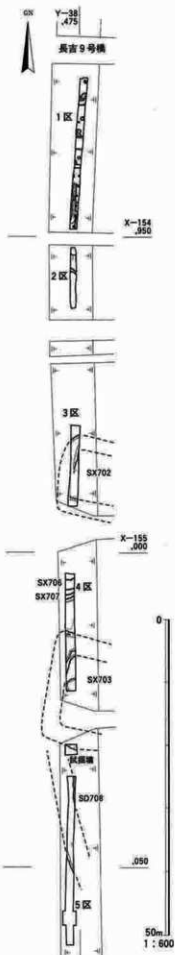


図286 NG84-6次調査地全体図

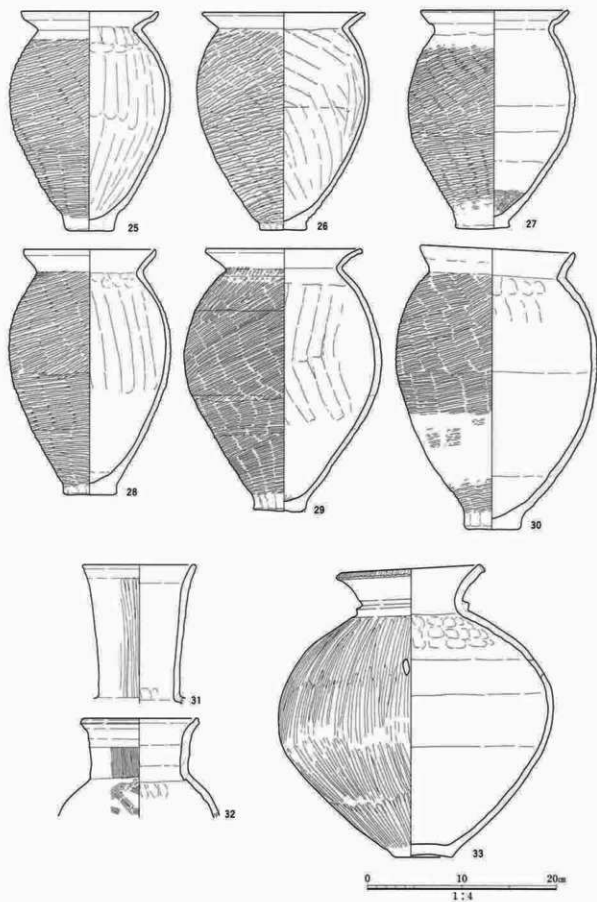


图287 NG84-6次SD708出土遗物(1)

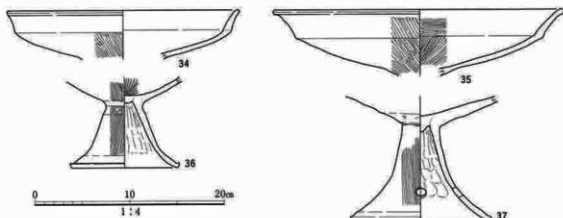


図288 NG84-6次SD708出土遺物(2)

が残る。

34は35より口縁部が外傾する。36・37は杯部と脚部の接合部分では円板充填が認められ、脚部は裾がやや外反する円錐形を呈する。

以上の遺物について、一連の溝と推定されるNG99-15次のSD807の中・下層出土物の時期とほぼ等しく、河内V-2～3様式に該当する。

SX702：幅2.0m、深さ0.4mの「コ」字状に巡る溝が検出された(図290・図版40)。盛土は認められなかったが、一辺約8mの規模の方形周溝墓になると思われる。溝北半部の底面に積み重なるようにして20個体以上の土器が並んで出土し、南側でも甕・高杯が出土した(図291)。

40は外面に粗い平行タタキが施され、内面はハケの後、ナデで仕上げられる甕である。最大径は中位にあり、丸底である。四国に分布する粗製の甕に類似する。41・42は外面がタタキのちハケ、内面がヘラ

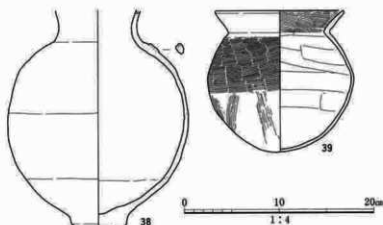


図289 NG84-6次SD707・SX703出土遺物
SD707(38)、SX703(39)

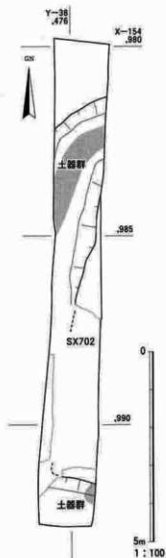


図290 NG84-6次3区3区平面図

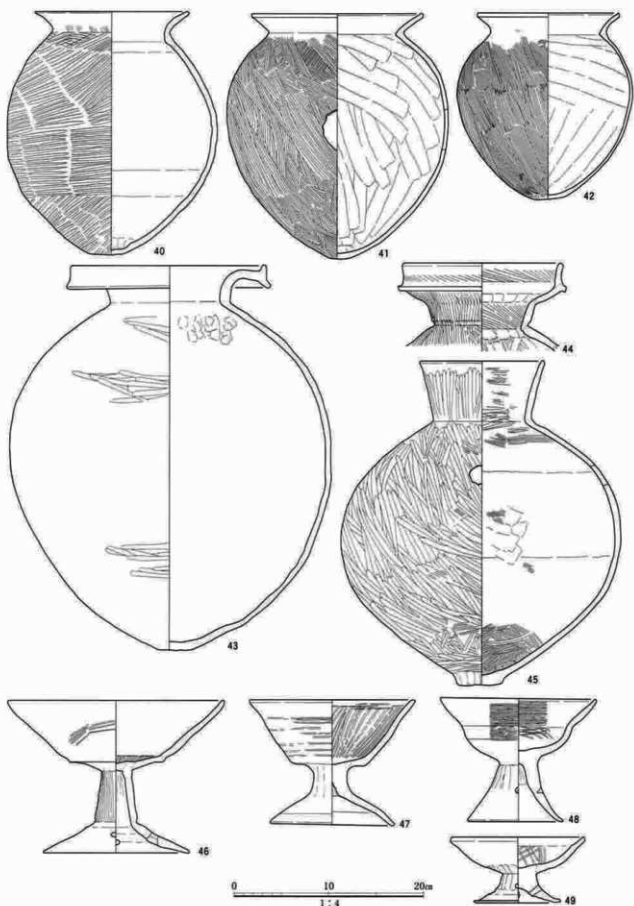


图291 NG84-6 次SX702出土遗物

ケズリで仕上げられる庄内式甕である。いずれも最大径が上位にあり、底部には平底の名残がある。41は体部に焼成後に穿孔されている。

43は器高40cmを越える壺である。口縁部は強く外湾し、口縁端部は上下に拡張する。44は複合口縁を有する壺である。内外面ともハケが施され、口縁端部や屈曲部にはナデが施される。讃岐系と思われる。45は直口壺で底部は突出した平底である。外面はミガキで仕上げられる。肩部に焼成後穿孔がされている。

46~49は高杯である。46は口縁部が直線的に伸び、中空の脚柱部を有する。全体的に薄手でていねいに作られている。47も口縁部が直線的に伸びる。短い脚柱部の内面にはシボリメが残り、脚柱部は大きく開く。杯部内面には放射状の暗文が、外面には粗い横方向のヘラミガキが施される。48は杯底部が丸みがあり、口縁部は外傾して伸びる。脚部は円錐形状に開く。49は低脚の高杯である。

以上の遺物について、変41・42の形態から庄内式期Ⅱに該当すると思われる[米田敏幸1991]。

SX703：幅3.0m、深さ0.6mの屈曲する溝が検出されたことから、方形周溝墓の北東隅と思われる。周溝から内面に赤色顔料が付着した庄内式甕39が出土した(図289・図版40)。なお、直径約2m、深さ0.35mあるSK702は、この方形周溝墓の主体部という可能性も考えられたため、慎重に掘削したが、土器の細片が出土した程度で、主体部の痕跡は見つからなかった。

39は体部に丸みのある庄内式甕である。体部上半にやや右上がりの細かい平行タタキを施し、下半はハケやナデでタ

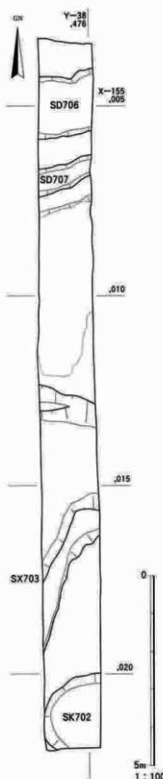


図292 NG84-6次4区平面図

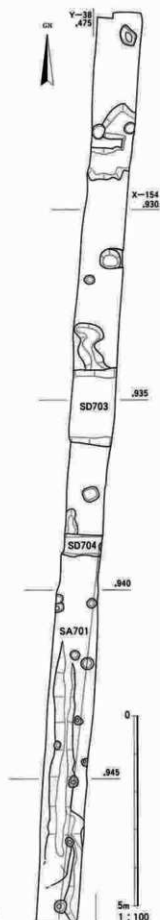


図293 NG84-6次1区平面図

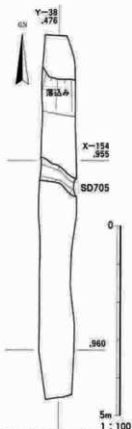


図294 NG84-6 次2区平面図

タキメが消されている。内面は頸部までヘラケズリが施されている。庄内式期Ⅳのものと思われる。

c. 古墳時代中期の遺構と遺物

NG84-6 次調査

柱列や溝、土器溜が検出された。

SA701：1区で検出された。南北方向に1.6～1.7mのほぼ等間隔に並ぶ柱列である(図293)。柱穴は直径0.3mの円形で、柱痕跡が残っているものもあった。横か建物を構成する柱列と思われる。北端の柱穴がSD704を切っていることと、後述するSD703から古墳時代中期の土師器・須恵器が出土したことから、この時期のものとは判断した。

2区落込み：2区の北部で検出された落込みである(図294)。古式土師器の甕50、鉢形の甔51に加え、須恵器杯身53が出土した(図295)。50は受口状口縁を有する甕で、近江地方の特徴を有する。53は口縁端部が丸く仕上げられ、底部に回転ヘラケズリを施す。TK216型式のものと思われる。

SD703：2区で検出された。幅2.0m、深さ0.6mある。SA701の北端の柱穴から北に2.5m離れたところに位置し、SA701の北側を画する溝になる可能性がある。古墳時代中期の土師器・須恵器が出土した(図295)。

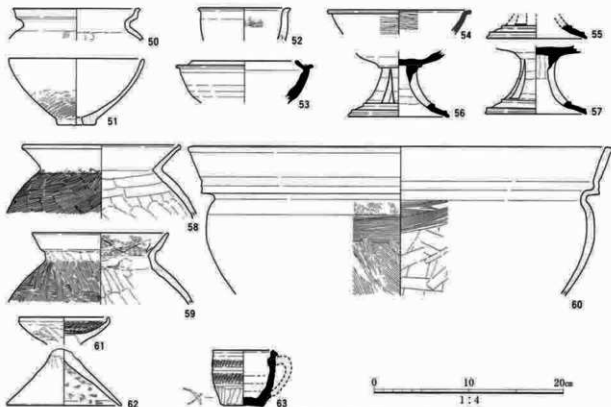


図295 NG84-6 次2区落込みおよびSD703・705出土土遺物
2区落込み(49・50・52)、SD703(51・53～56)、SD705(57～62)

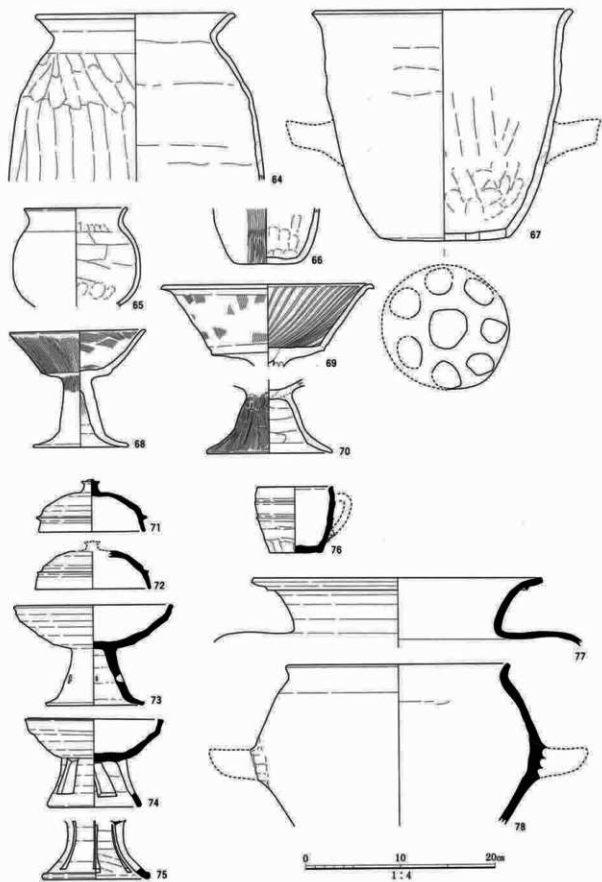


图296 NG84-6 次SX703上層土器溜出土遺物

52は平底深鉢の口縁部と思われる。外面はタタキメのような痕跡が見られるが、器面が荒れているためはっきりとは見えない。内面には炭化物が付着する。54は瓦質焼成の高杯口縁部である。内外面には横方向のヘラミガキが施されている。55～57は須恵器高杯の脚部で、3方向に三角形のスカシ孔が穿たれる。

SD705：幅0.5m、深さ0.3mの溝である。土師器甕58・59、鉢60、小型器台61・62に加え、須恵器把手付碗63が出土した(図295)。この中で58・60～62は古式土師器の範疇に含まれるものである。63は凹線によって文様帯をつくって、波状文を施し、体部下部には縦方向の手持ちのヘラケズリが施される。

SX703上層土器溜：SX703周溝の埋没途中の窪みから古墳時代中期初頭の土師器・須恵器に加え、衣蓋・船・家・人物といった形象埴輪がまとまって出土した(図版40下)。形象埴輪は家形を除いていずれも明瞭な黒斑を有するもので、出土状況から近隣の古墳が破壊された可能性が高い。

土師器には甕64・65、平底深鉢66、甕67、高杯68～70がある(図296)。64は内外面ともにナデで仕上げられる。65は外面はナデで、内面はヘラケズリが施される。66は外面にハケが施され、底部から体部にかけての立上りに丸みがあることから、土師器化したものである。67は外面の剥離が激しいため、調整はわからないが、内面は体部下半にユビオサエ、その上にはユビナデが観察される。蒸気孔は中央に1つとその周囲に8つの円孔がある。69は大型の高杯で、杯部内面に放射状の暗文が施される。

須恵器には高杯73～75、同蓋71・72、把手付碗76、甕77、鍋78がある(図296)。73・74は杯部が碗形を呈しする無蓋高杯である。73の脚部には刺突が5個所に認められ、貫通していないものもある。

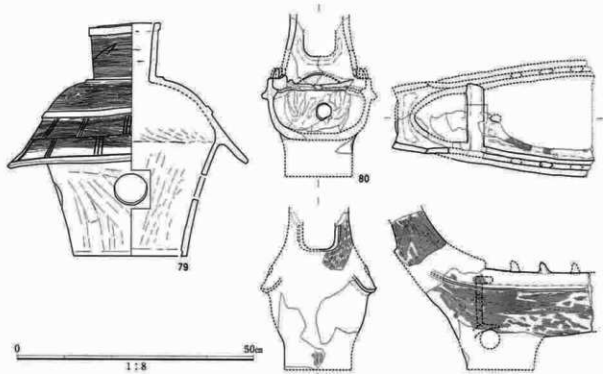


図297 NG84-6次SX703上層出土形象埴輪

74は5方向、75は8方向に方形のスカシが穿たれる。71はつまみの頂部が隆起し、裾の稜が明瞭な蓋である。72も同様の形態になると思われる。76は体部に稜が2条巡り、最下部は断続的なヘラケズリである。77は口径が30cmあり、口縁端部の下には稜が1条巡る。78は胎土に砂粒を多く含み、土師器の胎土に類似するが、還元焰焼成であるため、窯で焼かれたことがわかる。

埴輪には前述のように数種類の形象埴輪が含まれるが、ここでは衣蓋形埴輪79と船形埴輪80を図化した(図297)。

79は完形に復元できる衣蓋形埴輪の笠の部分で、器高が49cm、笠の直径が51cmある。立飾りを受ける筒部は外面に筋の長いヨコハケを施した後、ヘラ記号が施され、頸部には断面方形の突帯が巡る。笠部の外面は筋の長いヨコハケが施された後、断面方形の突帯で上下が2分される。さらに下部は沈線で区分され、3条単位の縦方向の沈線が施される。

80は全体の約半分が残り、残存長は45cmである。船首(もしくは船尾)は先端が破損しているが、反り上がり、円筒形の脚台が付く形態である。船首(もしくは船尾)の近くには仕切り板があり、断面

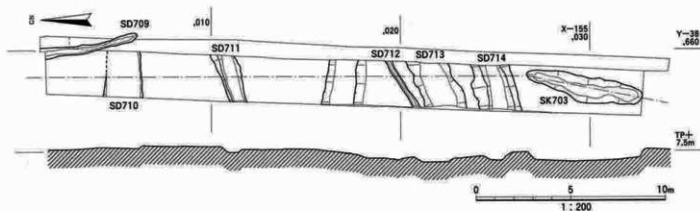


図298 NG87-67次古墳時代遺構配置図

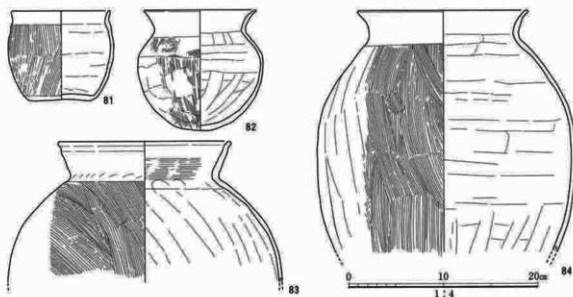


図299 NG87-67次古墳時代遺物
SK703(81-83)、長塚7B層(80)

し字に曲げることによって、上面に平坦面を作り出している。側面にはフェンダーを表現したと思われる突起が巡り、それ以下は断面がU字形を呈する。舷側端部にはピボットの表現がある。線刻による表現はないが、全体的に高廻り1号墳(長原169号墳)出土の船形埴輪に類似する[大阪市文化財協会1991: pp.51-53]。

NG87-67次調査

土壌・溝が検出された(図298)。主要なものを説明する。

SK703:調査地の南側に検出された長さ6.1m、幅1.3mの土壌である。土師器甕・須恵器甕などが出土し、土師器甕82-84を図示した(図299)。

溝SD712-714はいずれも東西方向に延びる(図版39下)。この中で、SD712・713はSD701の窪みを掘り直したもので、底には水成の砂礫が堆積していた。

この他、遺物では長原7B層から韓式系平底深鉢81が出土した(図299)。口縁が短く折れ、体部はハケで仕上げられる。

3) まとめ

本節では弥生-古墳時代の遺構・遺物を報告した。

弥生時代後期では大溝を2条検出した(SD701・708)。SD701は東西方向に延び、東150mの地点に位置するNG95-36次調査地(註1)で検出された東西方向の溝と一連のものと思われる。なお、この溝が延びている部分は周囲よりやや低くなっており、自然の窪みに沿って掘られ、排水などの機能があったと思われる。

一方、SD708は出戸自然堤防の東裾に沿って南北方向に延びる。このような南北方向の溝は近隣ではNG99-15次調査地のSD807[大阪市文化財協会2002a: pp.51-67]やNG03-6次のSD037[大阪市文化財協会2005a]がある。方向的に見て、SD708とSD037は一連の溝と思われ、集落を区画した可能性が高い[大庭重信2005]。

古墳時代ではNG84-6次調査地で船形や衣蓋形といった形象埴輪がまとまって出土したことが特筆される。本調査が行われた当時は、近隣で古墳は確認されていなかったが、2003年に本調査地の西隣で行われたNG02-8次調査において、長原古墳群の1期に比定される長原213号墳が発見された[高橋工2003、大阪市文化財協会2005a]。しかし、この古墳は築造された直後に新たに展開する集落によって破壊され、近くに家形埴輪が投棄されていた。本調査で見つかった形象埴輪も本来近隣に分布していた古墳に備わっていたが、直後に破壊されたことを物語るであろう。(寺井)

註)

(1)1995年8月から翌年2月にかけて行われた調査で、位置は図276に示したとおりである。調査成果は部分的に[櫻井久之1996a-c]などで紹介されているが、未報告である。

第2節 NG84-86次およびその周辺の調査

1) 調査地と周辺の概要

本節では平野区長吉戸7・8丁目で行われたNG80-1・80-2・83-65・84-5・84-18・84-74・85-17次調査を報告する(図300)。この地域は近年では長吉東部地区土地区画整理事業や市営住宅建設などの事業に伴って広い面積の調査が行われているが、本節で報告するのは下水工事などに伴う小規模なもののばかりである。

NG80-1・84-5・84-18次調査は下水工事に伴って行われた。NG80-1次調査では5m×6mのトレンチを1箇所設定し、奈良時代の土壌が検出された。

NG84-5次調査はNG02-1次と03-5次調査地の間に位置し、NG03-5次調査では弥生時代中期の方形周溝墓が検出されている[辻美紀2004]。調査ではTP+8.1~8.3mの標高で中世の水田が検出されたが、顕著な遺構・遺物は発見されなかった。

NG84-18次調査ではGL-2.5mまでしか掘削できなかったため、平安から鎌倉時代の水田と流路が検出されたのみである。ただ、深掘りをした人孔部分ではTP+7.1~7.6mで長原式土器や弥生時代中期の土器を含む包含層を確認した。

NG84-74次調査は道路のコーナーを1箇所掘削したが、顕著な遺構・遺物は見つからなかった。

NG83-65・84-86次調査は関西電力による管路の新設工事に伴う調査である。NG83-65次調査は夜間に行われ、GL-3.5mまで掘削した。調査の結果、弥生時代中期と飛鳥時代の遺構が検出された。NG84-86次調査は深田橋のすぐ北側で、大正川を横断するトレンチが設定された。トレンチの中央はNG16次調査地と重なる。調査の結果、古墳時代前期から中期の遺構が検出され、井戸からは大量の庄内式期の土器が出土した。

NG85-17次調査は大阪市土木局によるカルバート建設に伴う調査である。上部は近世の流路で壊されていたが、下部ではTP+5m前後のところで縄文時代晩期の土器片を出す地層が残っていた。



図300 NG84-86次などの調査地位置図

2) 調査の結果

i) 層序

表33 NG83-65次層序表

層序	長原層序	器種	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物	時代
1	7A	灰色粘土	>30					飛鳥～奈良
2	7A	暗灰色含砂粘土	<10	SK706塵土				古墳
3	7B	暗灰色含砂粘土質シルト	30				土師器・須恵器	
4	7B	黒色細粒砂質粘土	20					
5	8C	青灰～青緑色粘土質シルト	50					弥生
6	8C	灰～オリーブ色細粒砂	10					
7	8C	青緑色細粒砂	10～20					
8	8C	青緑色シルト	10					
9	8C	緑灰色粗粒砂	70					
10	9C	黒褐色シルト質粘土	10	緑色帯				縄文
11	9C	黒褐色粘土質シルト	10	緑色帯				
12	13	緑灰色細粒～粗粒砂	10					旧石器
13	14	青灰色含砂シルト～砂礫	>100					

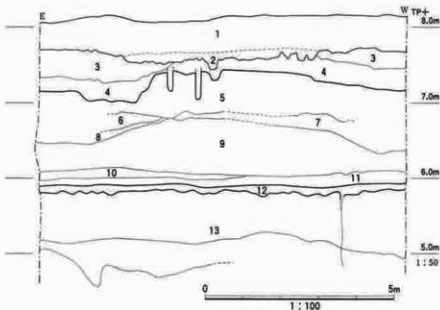


図301 NG83-65次南壁断面図

NG83-65次調査地の南壁で層序の記録を行った(図301・表33)。GL-2.7mまでは重機で除去したため、長原7A層より上は記録できていない。なお、当地はNG83-63次調査地[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1985]とともに、「出戸自然堤防」でもっとも高い位置と考えられている[高橋工1999]。

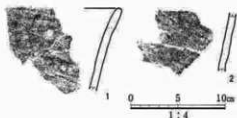


図302 NG85-17次出土縄文土器

ii) 遺構と遺物

a. 縄文時代の遺物

NG85-17次調査地の長原9C層と推定される黒色粘土層から縄文土器1・2が出土した(図302)。これらは口縁部を若干肥厚させ、頸部が外反する粗製の深鉢である。口縁の特徴から縄文時代後期中頃の北白川上層3式に該当すると思われる。

b. 弥生時代の遺構と遺物

NG83-65次調査

長原8B層基底面で土壌、ビットが検出された。

SK801: 調査地の東際に検出された。東西2.5m以上で、深さ0.25mである。埋土は黒色細粒砂質粘土で、畿内第Ⅲ様式の土器が出土した。

SK802：調査地の西際で検出された。東西1.7m以上あり、深さは0.4mである。埋土はSK801と同じく、黒色細粒砂質粘土である。

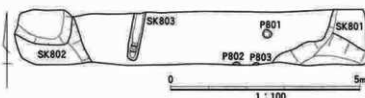


図303 NG83-65次弥生時代遺構配置図

SP801～803については図301の

4層（長原7B層相当）の途中面から掘られている柱穴である。長原8B層基底面で検出されたため、ここで報告したが、弥生時代後期以後の遺構になる。

また、NG80-1次や85-17次調査では遊離資料ではあるが、弥生時代中～後期の土器が出土している。3はNG80-1次調査地のSD601から出土した弥生土器片で、シカと思われる線刻画が描かれている（図304）。



図304 NG80-1次絵画土器拓影

c. 古墳時代の遺構と遺物

NG84-86次調査

長原7B層の途中面で古墳時代前期から中期の遺構が検出された（図305～307）。

SB701：東区で検出された掘立柱建物で、南東-北西方向の柱間は2.5m、南西-北東方向は1.8mある。コーナーの柱穴には柱材の一部が遺存していた。

SP701・702：西区で検出されたピットである。距離は1.8mあるが、組合うかどうかはわからない。古墳時代中期の土器片が出土した。

SK701～705：西区で検出された土壌である。深さはSK701が0.4mあるが、そのほかは深さ0.1m前後の浅い皿状を呈する。いずれからも須恵器が出土していることから、古墳時代中期のものである。

SX701：東区の東側で検出された落込みである。「出戸自然堤防」の東斜面に当たるとされる[高橋1999]。埋土には須恵器が含まれる。

SE701：東区で検出された井戸である（図308・図版41上）。一辺1.8m程度の隅丸方形を呈し、深さは検出面から1.3mであるが、土器はそれよりも上から出土していることから、本来は1.5m程度あったと思われる。土器が多量に出土し、その取り上

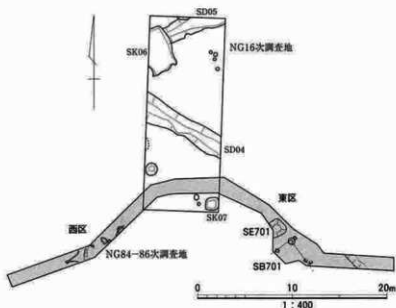


図305 NG84-86次とNG16次調査地の関係

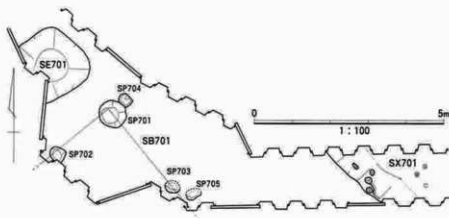


図306 NG84-86次東区道構配置図

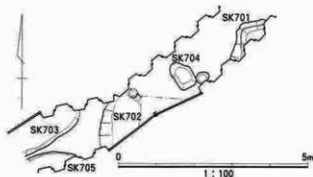


図307 NG84-86次西区道構配置図

げに手間がかかったため、十分な断面図が作成できなかったが、大まかに廃絶後の堆積層(1層)と機能時堆積層(2層)に分けることができる。さらに前者は上部の黒色シルト質砂層(1a層)と下部の黒

色細粒砂泥り粘土層(1b層)に細分される。

(寺井)

SE701から多数の土器が出土した。完存率の高いものを中心に、時期的な特徴を示したり、非在地と推測される資料を図示した(図309～311)。遺物はSE701の機能時堆積層である2層から出土した38～56と廃絶後の堆積に含まれる4～37がある。後者は1a層から出土し

た4～30と、1b層から出土した31～37に分けられる。

4～10は第V様式系の甕である。4～6は小型、7～10は中型である。中型のものには肩部の張り出しが顕著な7・8とそうでない9・10とがある。

4は外面をタタキで整えた逆円錐台部の上に粘土紐を積み上げて体部上半をつくり、外面に右上がりのタタキを施す。タタキは5条1単位とし、左のものが右のタタキを切っている。逆円錐台部とその上に積み上げる粘土紐の接合痕は明瞭に残る。内面は逆円錐台部と上半部において、それぞれ右下から左上方向にハケを施す。5も4と同様に逆円錐台部とその上の粘土紐との接合痕が明瞭に認められる。口縁端部を上方に立ち上げ、外面に2条の沈線を入れる。また、底部は外側縁に粘土紐を接合し

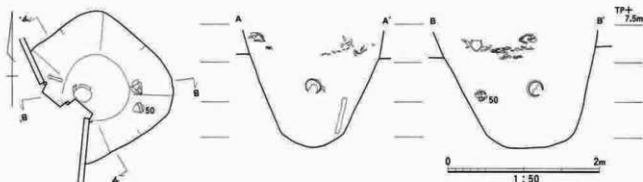


図308 NG84-86次SE701実測図

て、輪台状に成形する。6の逆円錐台部は下位から上位に連続してタタキを施す。逆円錐台部とその上の粘土紐との接合痕は丁寧にナデ消しがなされる。その後、上半部において腹部、肩部の順にタタキが施される。7は逆円錐台部とその上の粘土紐との接合痕がわずかに認められ、その接合痕の上からタタキが施される。8は外面のタタキを部分的にナデ消し、ハケ調整を施す。口縁部はていねいな横方向のナデで整える。9は逆円錐台部とその上の粘土紐との接合痕をナデ消しするが、接合痕がわずかに遺存する。内面はナデ調整であり、逆円錐台部では縦方向、それより上では横方向に施す。10は逆円錐台部とその上の粘土紐との接合痕を消去せず、直接その上にタタキを施す。内面は右下から左上方向にナデを施す。

11～13は庄内式甕である。いずれも非生駒西麓産の胎土である。

11は体部が張り出し球形を呈する。底部を欠損するが凸レンズ状の狭い平底に復原される。タタキの単位は粗いが、主軸を合わせ連続的に施される。肩部を細かなタデハケで調整する。ハケは上から下方向に施される。口縁部は内面をハケで整えた後、内外面にヨコナデを施す。端部には1条の沈線が入る。内面のケズリは体部下半が下から上方向、上半が右下から左上方向に施す。頸部やや下に接合痕が観察されるが、その直下でケズリは止まる。胎土には1～2mmの長石の角礫、0.5mmの石英・長石が多く、微細な雲母も含まれる。12は肩部が張る外形である。図示していないが狭い平底の底部片があり、同一の胎土・色調を呈することから12と同一個体である可能性が高い。タタキの単位は8条/1.5cmである。体部下半から肩部までをタデハケで整える。内面は下半から肩部を縦方向、肩部を右下から左上方向、頸部直下を右から左方向にケズリを施す。肩部には部分的に施されたハケ調整が残存する。口縁部内面には端部から2cm下の所に接合痕が見られ、外面においてもそれに対応する位置までタタキが認められる。口縁部は内外面ともヨコナデを施し、端部は丸く整える。胎土には2mm大の花崗岩の角礫や1mmの長石・石英が多く、微細な雲母も含まれる。13も12と同様に肩が張る。体部外面は粗いタタキを施した後、縦方向のハケを施す。タタキメは口縁部下半まで達する。内面はケズリで整えており、体部下半は下から上方向、腹部から肩部は右下から左上方向、頸部直下は右から左方向と部位ごとにそれぞれ方向が異なる。口縁部は内外面を横方向のナデで整え、端部にわずかに面を持たせる。胎土には0.5～1.0mm大の長石・石英が多く、0.5～2.0mmの赤色斑粒も含まれる。

14は丹後・丹波系の甕である。二重口縁であり、外面には3条の擬凹線文が認められる。しかし、この擬凹線文が明瞭なのは口縁部の1/6であり、1/2では横方向の強いナデとなっている。やや上げ底ぎみの平底であり、外面にはヘラ切りの痕跡とそれに伴う砂粒の移動が認められる。外面は縦方向のハケ調整後、植物繊維状の原体による斜方向の調整を施す。植物繊維状の原体は幅2～4mmの繊維を3～5条を束ねたものと想定され、起点は不明瞭である。内面は頸部から胴部上半を右下から左上方向にケズリを施した後、さらに胴部下半を縦方向のケズリで整える。口縁部内面はヨコナデで調整するが、工具の痕跡が遺存しており屈曲も鈍い。退化した擬凹線文と頸部のしまった外形が特徴であり、白米山式[高野陽子2003]に属すると判断される。胎土には4mm大の花崗岩片や2mm前後の長石、石英の角礫の他、チャートや1mm大の赤色斑粒などが含まれる。

15～19は北・東四国地域の甕、あるいはその地域の影響を受けたとみられる甕である。15・16は

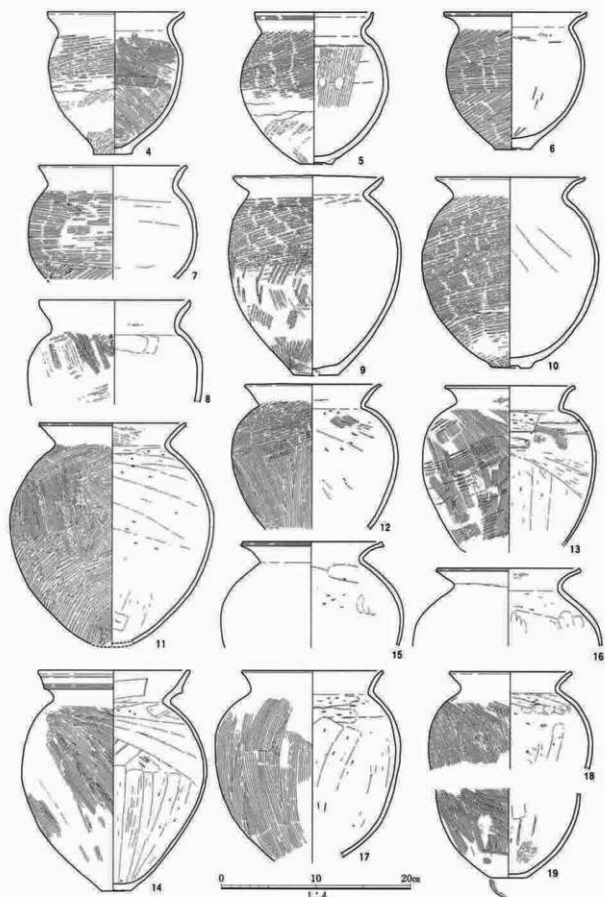


图309 NG84-86次SE701-1a层出土土器

阿波型甕である。いずれも肩部が張り、外面はナデで整える。内面はナデ調整後、肩部に左から右方向のケズリを施し、部分的にユビオサエをする。17は頸部直下に右から左方向のケズリを加える。いずれも口縁端部はわずかに上方につまみ上げる。15には口縁端部外面に明瞭に1条の沈線が認められるが、16は沈線というよりも鈍い凹凸である。

17~19は外面をハケ、内面をケズリで整える。内面のケズリは肩部より下が縦方向、肩部から頸部にかけて横方向である。17の肩部のケズリは左から右方向であるが、18は右から左方向である。いずれも口縁端部には15・16のような沈線は認められない。19は底部外面にもハケ調整が認められる。

20は庄内式甕のように口縁端部をわずかにつまみ上げる。胴部外面の煤や底部の被熱痕は認められず壺に分類される。内外面をハケ調整し、口縁部はていねいなヨコナデで整える。21は外面に縦方向のミガキを施す短頸甕である。22は直口短頸甕である。口縁部外面に浅い凹線を施す。頸部から口縁部にかけては外面をナデ、内面をミガキで整える。内面頸部直下にはシボリの痕跡が残る。

23は広口甕である。口縁端部に2条の凹線を施す。体部外面と口縁から頸部内面にかけて横方向のミガキで整え、部分的に肩部内面にもミガキが達する。頸部直下にオサエが認められる。24は壺の体部下半である。最大径位付近には横方向、下半には縦方向のヘラミガキが施され、内面はハケ調整である。内面には成形時の接合痕があり、この接合痕を境にして内外面の調整方向がそれぞれ変化する。

25は長頸甕である。逆円錐台部に粘土紐を付加しながら、体部上半部、頸部を成形する。体部外面はタタキで整え、肩部から頸部、口縁部にかけて縦方向のハケを連続的に施す。内面は体部下半部を縦方向のハケで整えるが、肩部から頸部にかけては接合痕が残存する。頸部内面は下方から螺旋状にハケを施す。口縁部は内外面ともにヨコナデで整える。また、口縁部直下には記号文として、ヘラ描き沈線を縦方向に2条入れる。

26~28は高杯である。26は碗形高杯の杯部である。内外面をナデで整えた後、縦方向のミガキを施す。27は低脚高杯の脚部である。脚部は外面を縦方向のミガキ、内面をハケで整える。スカシ孔は4個所である。28の杯部は屈曲位から口縁部にかけて緩やかに外反する。外面は杯部上半と下半でそれぞれ縦方向のミガキを施す。内面は下半を放射状のミガキで整えた後、屈曲位を横方向にミガキを施し、さらに上半部を縦方向のミガキで平滑にする。杯部内面の屈曲位に横方向のミガキを施す。脚部は中実で、内面上部にシボリメが残る。外面は幅広い縦方向のミガキである。スカシ孔は4個所である。

29は器台あるいは壺の口縁部である。外面にヘラ描き鋸歯文を施し、上・下縁にキザミメを入れる。鋸歯文の谷部には2個1単位の円形浮文を貼り、その上から竹管文を押圧する。30は丸底の鉢である。口縁部を横方向のナデ、底部を浅いケズリで整える。底部内面にはユビオサエの痕跡が認められる。

31は第Ⅴ様式系の甕である。逆円錐台部の上に粘土紐を付加して体部上半を成形する。体部外面のタタキは肩部に位置を保った状態で施しており、肩部は平行であるが、それより上では右上がり、下では右下がりとなっている。底部は円盤充填によって成形したことがうかがえる。

32は庄内式甕である。0.8mm前後の大きさの長石・石英の角礫を含む。角閃石は観察されず。非生駒西麓産である。底部は直径2.2cmの凸レンズ状の平底である。肩部に右上がりのタタキが認められ

る。タタキの単位は8条/2.2cmと粗い。内面のケズリは肩部までは縦方向、肩部は左から右方向、頸部直下は右から左方向のケズリを施す。

33は北・東四国系の甕である。体部外面を縦方向のハケで整えた後、腹部にナデを施す。口縁端部に1条の沈線を施す。内面は縦から斜め方向にケズリを施す。

34・35は鉢である。34の口縁部は内湾して立ち上がり、内外面に接合痕が残存する。主に外面をナデ、内面をハケ後ナデで整えており、底部外面には浅いケズリ調整が加えられる。丸底であると推測されるが、丸底で外面に浅いケズリを施す内湾口縁の鉢は北・東四国地域で多く見られる。35は外面を斜め方向のミガキ、底部内面を放射状のミガキで整える。また、底部外面にケズリを施して尖底にする。36は碗形高杯の杯部である。内外面を横方向のナデで整えた後、口縁部外面と端部に多条沈線を施す。内面は口縁部に精緻な横方向のミガキを施した後、放射状に暗文を入れる。37は高杯杯部である。杯部上半は外反しており、屈曲部の稜線は明瞭である。器面は磨滅しているが、内外面に精緻な横方向のミガキが観察される。にぶい橙色の胎土であり、含まれる砂粒は細かく量も少ないため精良な胎土に分類される。これらの特徴から吉備地域の低脚高杯である可能性が高い。

38～44は第V様式系の甕である。38～42は小型、43は中型、44は大型である。いずれも逆円錐台部の上に粘土紐を付加して体部上半を成形する。いずれの底部も短く外反して立ち上がる。

38の外面には、逆円錐台部とその上の粘土紐との接合痕が残り、接合時のオサエのみの無調整部分が約2cm幅で帯状にめぐる。内面は工具でナデ調整を施す。39は内面に逆円錐台部とその上との接合痕が明瞭に残り、体部上半にも粘土紐の接合痕が認められる。外面上半部のタタキは左の単位が右のものを切っている。40は外面に逆円錐台部とその上との接合痕がわずかに認められるが、上半部のタタキが逆円錐台部にまでおよび、逆円錐台部のタタキと切合いを持つ。41は逆円錐台部とその上の粘土紐との接合痕が明瞭に残る。上半部のタタキは接合痕の直上にまでおよび、上半部に右下から左上方向にハケ調整する。42は外面に逆円錐台部とその上の粘土紐との接合痕が認められる。上半部から逆円錐台部にかけてタタキが連続している部分が認められ、タタキによる整形が、成形後に胴部上半から底部にかけて連続して行われたとみられる。工具を用いたとみられるナデの痕跡が右下から左上方向に明瞭である。口縁部は先が細くなっており、端部がわずかに上方を向く。43は体部が張り出し球形を呈する。外面には逆円錐台部とその上との接合痕が残り、内面にも体部上半に粘土紐の接合痕が残る。縦方向のハケが施されるが、これらの内面の接合痕は完全には消去されていない。44は肩部、腹部、底部で外面の調整や整形手法が異なる。底部即ち逆円錐台部は内外面ともにナデ調整する。腹部は外面にナデとタタキを施すが、内外面とも粘土紐の接合痕が明瞭に残る。肩部は主軸をそろえて連続的にタタキを施す。

45・46は甕の逆円錐台部と相同形の鉢、47・48は口縁部が屈曲し外側に開く鉢である。外面は前者がタタキを施し、後者がナデで整える。

49は手焙形土器である。「く」の字口縁の鉢の内側に蓋部を取り付ける。開口している側の鉢口縁部には挟りが入れられており端面をナデで整える。外面全体と内面覆い部に縦方向のミガキを施す。体部中位に1条の突帯がめぐり、口縁部と突帯上にはキザミメが密に入る。

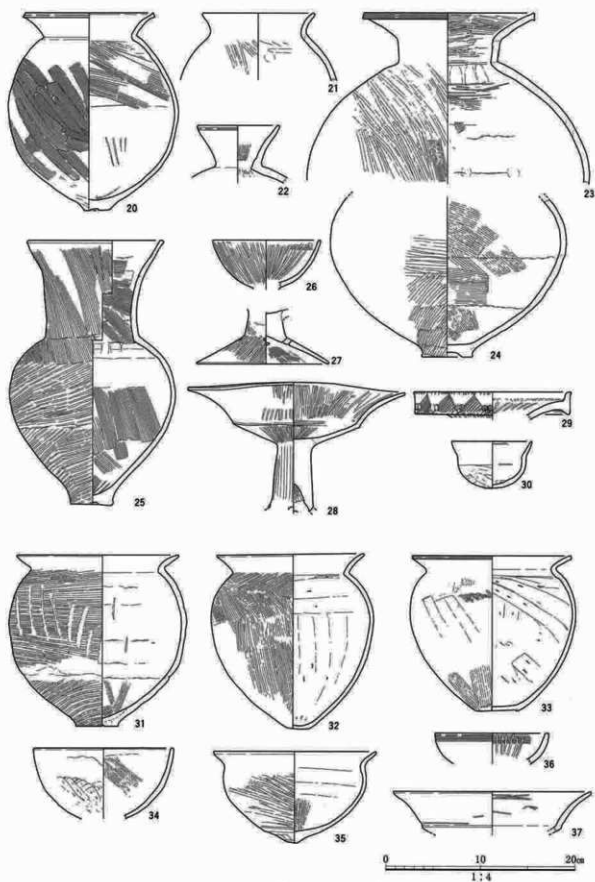


图310 NG84—86次SE701—1a·1b层出土土器
1a层(19~29)、1b层(30~36)

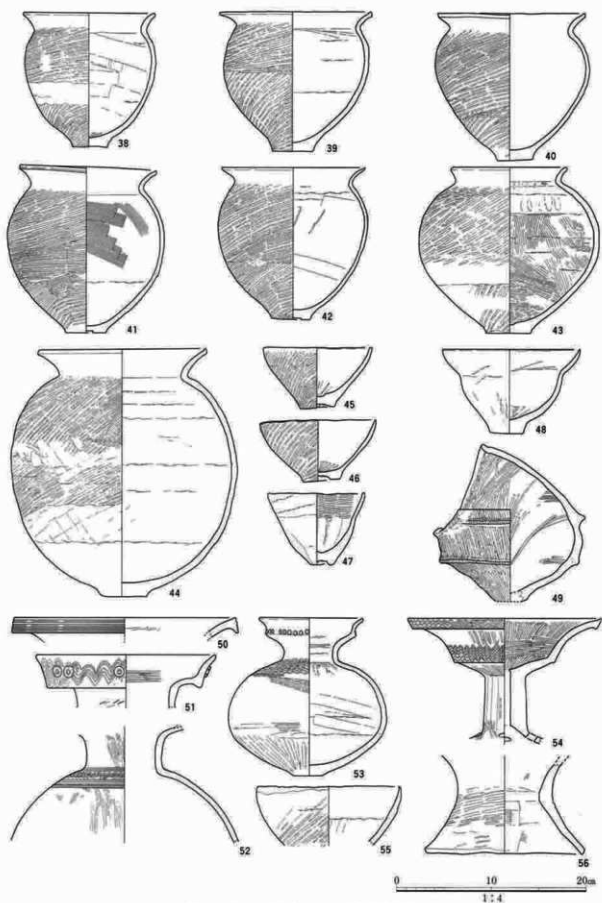


图311 NG84-86次SE701-2層出土土器

50は外面に凹線文を施す広口壺である。51・52は中型、53は小型の二重口縁壺である。いずれも櫛描文で装飾する。51は5条1単位の櫛描波状文を口縁部外面に施した後、2個1対の円形浮文を貼り、それぞれの浮文の上から竹管文を押圧する。口縁部内面には屈曲部付近に横方向のミガキを施す。52はハケ、ナデを順に施した後、肩部に櫛描直線文と波状文を施す。櫛描文は3条1単位であり、各文様帯は2単位で構成される。施文は上から下へ行う。また、文様帯より下には櫛描文施文後に縦方向のミガキを施す。

53は口縁部を竹管文、肩部を櫛描波状文で飾る。櫛描文は4条1単位で、上から下へ行う。施文後に肩部は斜め方向、腹部は横方向、底部は縦方向のミガキで整える。

54は櫛描波状文を施した有段高杯である。口縁端部は上下に拡張して面を持たせる。櫛描波状文はこの口縁部と段部分の外面に施す。3条1単位とみられる。内面は主に縦方向のミガキで整えるが、屈曲部から段部分にかけては横方向のミガキである。脚部は内面に軸芯棒の痕跡があり、外面はハケ調整後に面取りを行う。スカシ孔は4箇所である。

55は被熱の痕跡がある鉢である。口縁部内外面に接合痕が残り、タタキ調整も不完全である。内面下半は縦方向のナデで、接合痕より上から口縁部にかけて横方向のナデで整える。56は器台と考えられる。外面には粗いタタキメが認められる。端部はオサエで整える。

SE701の機能時堆積層である2層から出土した土器群には庄内式甕が含まれていないが、廃絶後の1層から出土した土器群にはそれが含まれる。そして、1a層から出土した庄内式甕は肩部の張ったものと体部の張った球形の胴部のものが共存する。一方、1b層からは肩部が張った外形のもののみ出土する。SE701の埋没後に投棄されたこれらの資料は、定型化する庄内3式より前の資料であり、1a層が庄内式期2の新段階、1b層が庄内式期2古段階から庄内式期1に属する資料とみられる[米田敏幸1991]。

また、2層出土の第V様式系の甕はいずれも底部が短く外反して立ち上がる。一方、1a層のものには直線のあるいは内湾ぎみに立ち上がる個体も含まれる。直線のあるいは内湾ぎみに立ち上がる底部の第V様式系の甕は、庄内式期1の基準資料である中田遺跡刑部土坑出土資料にも見られる。比較しうる他の形式が無く、甕の底部という限定された要素からの推測に過ぎないが、2層出土の土器群は庄内式期1よりやや古い時期のものとして位置づけておきたい。

(杉本厚典)

NG85-17次調査

遊離資料であるが、近世の溝から庄内式期の甕・壺が出土した(図313)。57は体部外面に平行タタキが施された後、頸部にハケが施され、内面はヘラケズリである。58は波状文の後、竹管文が施された円形浮文が貼付けられた二重口縁壺で、59は東海系の丹塗りの壺である。

d. 飛鳥～奈良時代の遺構

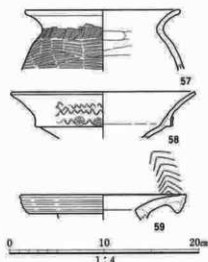


図312 NG85-17次出土遺物

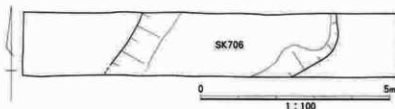


図313 NG83-65次SK706

NG83-65次調査

長原7A層上面で土壌SK706が検出された(図313)。東西幅4.7m、深さ0.1m未満で、埋土は暗灰色砂質粘土である。土師

器・須恵器の細片が出土した。

NG80-1次調査

TP+7.2m付近で奈良時代の溝SD601・602、土壌SK601・602が検出された(図314)。SD601・602は東西方向の幅1m程度の溝で、埋土は砂と粘土が互層になっている。SD602から奈良時代の須恵器が出土した。

なお、本調査地の西30mに位置するNG01-14次調査地では蛇行しながら東西方向に延びる奈良時代の流路が検出され、平城宮土器Ⅱ・Ⅲの土器がまとまって出土した[大阪市文化財協会2004b]。

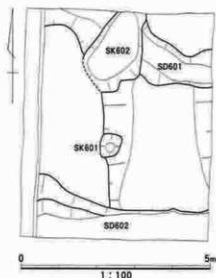


図314 NG80-1次奈良時代遺構配置図

3) まとめ

本節で報告した調査はいずれも小規模なものばかりである。この中でNG84-86次調査のSE701からは庄内式期の良好な一括資料が出土したのは特筆できる成果である。土器の中には14の丹後・丹波系の甕のように、他地域の特徴を示すものもいくつかあり、NG85-17次調査地の東海系甕59とあわせて当時の地域間交流を知る手掛りとなる。

近隣では庄内・布留式古段階にかけての遺構が多く見ついている。NG84-86次調査地と重複した位置にあるNG16次調査地(註1)では井戸や土壌が、南西のNG99-15次調査地では井戸や落込みが検出されている。一方、それより南のNG84-6次(第Ⅶ章第1節)やNG02-8・03-6次調査地[大阪市文化財協会2005]では円形・方形周溝墓が検出されており、NG84-86次調査地周辺が居住域で、それ以南に墓域が分布していることがわかる。

(寺井)

註)

(1) 1979年2～4月に長原道跡調査会によって行われた。未報告。

第3節 NG84-4次およびその周辺の調査

1) 調査地と周辺の概要

本節では平野区長吉六反で行われたNG84-4・84-49・88-6・93-77・95-77次調査を報告する(図315)。この地域は近年では長吉東部地区土地区画整理事業や市営住宅建設などの事前調査で広く深い調査が行われているが、本節で報告するのはいずれも小規模なもののばかりである。

NG84-4次調査は下水道管渠推進工事に伴って6個所の推進ピットと全長98mの管路を対象に



図315 NG84-4次などの調査地位置図

行われた。その結果、古墳時代中期の溝から多量の遺物が出土した。

NG84-49次調査は地下送電線工事に伴って行われた。調査の結果、顕著な遺構・遺物は検出されなかったが、長原9C層(六反10C層)までの地層が良好に残っているのを確認した。

NG88-6次調査はマンション建設に伴って行われ、一辺5mの正方形のトレンチを2箇所設定して進められた。その結果、飛鳥時代の溝が検出された。

NG93-77次調査は大阪市と八尾市の境に位置する平野川の分流に対する改修工事に伴って行われた。調査の結果、弥生時代前期の土器や石廬丁が出土した。

表34 NG95-77次層序表

層序	長原層序	六反層序	岩類	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	おもな遺物など	時代
1	1	1	暗灰黄褐色細粒砂質シルト	10	作土				近現代
2	2	2	黄色細粒砂質シルト(3層-2層分可)	20	作土				江戸時代
3a	3	3	オリーブ黒色細粒砂質シルト	10	作土				室町時代
3b	3	3	黄褐色シルト質細粒砂	20	作土				
4a	4A	4A	黄褐色細粒砂	10	水成				鎌倉時代
4b	4B	4B	にぶい黄褐色砂質シルト	15	作土		→踏込み		
4c	4B	4C	黄褐色シルト質細粒砂	15	作土			「て」字状口縁	
4d	4B	4C	褐色シルト質中～細粒砂	10	作土				奈良時代
5	5	5	黄褐色細粒砂	5	水成				
6	6	6	極細粒砂質シルト	15	作土				飛鳥時代
7a	7B	7A1	暗緑灰色シルト～シルト質細粒砂	70-100	水成				
7b	7B	7A11-111	灰色細粒砂～砂礫	200	水成			須恵器・土師器	古墳時代
7c	7B	7A1v	暗緑灰色砂質シルト	20			・SX701 ・SD801・SK801		
8a	8B	9B	暗オリーブ灰色細粒砂質シルト	20	褐色帯				弥生時代
8b	8A*	9C11	オリーブ黒色シルト	5					
9a	9A	10A	黒色シルト	15	褐色帯				
9b	9B	10B1	オリーブ黒色粘土質シルト	15					縄文時代
9b11	9B	10B11	暗オリーブ灰色粘土質シルト	20					
9b111	9B	10B111	オリーブ黒色シルト	30					
9b1v	9B	10B1v	暗オリーブ色シルト	15					
9bv	9B	10Bv	オリーブ灰色細粒砂質シルト	5-10					
9c1	9C1	10C1	黒色シルト	10	褐色帯			多量の埴物遺体	
9c11	9C1	10C11	黒褐色シルト	10	褐色帯				
9c111	9C11	10C111	灰色シルト	10		横割れ(地震?)			
9c1v	9C11	10C11v	灰色シルト	5					
10a	10・11	111	暗オリーブ色シルト～細粒砂質シルト	10					
10b	10・11	111	暗緑灰色細粒砂質シルト	20					
10c	10・11	111	暗緑灰色細粒砂質シルト	15					
11a	10・11	1111	オリーブ灰色シルト質粘土	5					
11b	10・11	1111	オリーブ灰色シルト質粘土	5					
12a1	12A	12A1	灰色粘土質シルト	5	褐色帯				
12a11	12A	12A11	オリーブ黒色シルト質粘土	5	褐色帯				
12b1	12B	12B	灰色シルト	5	褐色帯				
12b11	12B	12B	灰色粘土質シルト	15					
12b111	12B	12B	オリーブ灰色粘土質シルト	15					
12b1v	12B	12B	暗オリーブ灰色シルト	10					
12bv	12B	12B	暗オリーブ灰色粘土質シルト	15					
12b1v1	12B	12B	暗オリーブ灰色シルト	15					
12c1	12C	12C1	灰色砂質シルト	5					
12c11	12C	12C11	灰オリーブ中～細粒砂	5				断面ある様	
12d1	12C	12D111	黄灰色シルト～砂	10	生物擾乱				
12d11	12D	12D1v	黒灰色シルト～砂	30	生物擾乱				
13	15	15B	灰白色砂礫	80		不整合面			旧石器時代
14	16A	16A	灰白色シルト質砂礫						

NG95-77次調査は大阪市立クラフトパーク建設に先立って行われた。工事予定地のほぼ中央に一辺10mのトレンチを定め、シートパイルを打設してから、GL-7mまで掘削した。調査の結果、長原16A層以上の地層を良好な状態で観察することができた。

2) 調査の結果

i) 層序

NG95-77次調査地の北壁と東壁で地層を観察した。これによって得られた見解を、下位層から順に説明する。なお、以下の地層については六反層序で述べることにする。

TP+1.8m付近では、RK15B層と16A層の不整合面を確認することができた(表34・図316の第13・14層)。これは中段位段丘面が低位段丘構成層に相当する水成層に削り込まれたことを示している。

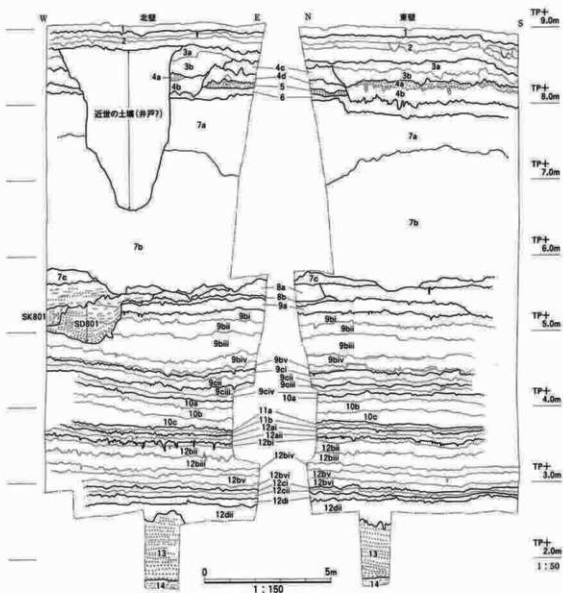


図316 NG95-77次北壁・東壁断面図



写真27 NG95-77次磨面のある礫

のある礫が出土した(写真27)。

TP+3~5mまでは静水状態で堆積したシルト～シルト質粘土が堆積しており、しばしば暗色帯が介在する。RK10Ci層に相当する第9ci層の上面では葦科の植物が大量に倒れた状態で検出された。これはこの一帯が一時的に水が少なくなり、葦科の植物が繁茂したことを示す。

また、第9cii・9ciii層では、これらの地層を斜めに横断する横割れを確認した。

第8a層より上位では地層・遺構から人間活動が確認できる。第7c層上面では土手状遺構SX701が検出された。第7b層は六反地域でよく見つかる河成堆積層で、6世紀初頭を下限とする須恵器が出土した。

ii) 遺構と遺物

a. 弥生時代の遺構と遺物

NG93-77次調査

RK10A層に相当すると思われる地層(TP+7m付近)から、弥生時代前期の土器と石庖丁が出土した。弥生土器は削出し突帯に沈線を施す壺体部片や、口縁端部に刻みを入れ、体部に沈線を施す甕片、底部などがある。石庖丁は刃部と背部の一部を残す破片で、紐孔が1つ認められた。背部と刃部は平行せず、三角形に近い形状であったと推定される。灰色を呈する石材を使用している。

NG95-77次調査

溝SD801が検出された(図317・図版42中)。幅約3m、深さ0.8mあり、北からやや西に振った方向に延びる。南側の延長上には、NG97-12次調査地のSD903があり、おそらく一連のものと思われる(図318)。なお、SD903からは弥生時代中期初頭の土器が出土している[大阪市文化財協会2000b: pp.68-70]。

また、断面観察によってSD801を切る土壌SK801が検出された。断面で確認したため、平面形態はわからない。深さ0.2mあり、多量の偽礫で埋まっていた。弥生時代後期の壺底部1が出土した。

b. 古墳時代の遺構と遺物

NG95-77次調査

調査地の南西隅で、地層観察用の土手を壊しているときに、土手状遺構SX701が検出された(図版42下)。杭は7本確認され、いずれも水平に近い角度で南側から打込まれ、その上には植物繊維が被

TP+3m付近では縄文海進時にできた巣穴が多数見つかった(図版42上)。第12di層と第12dii層は激しく擾乱されていたため、分層が困難な状況であった。当調査地の約60m南で行われたNG97-52次調査地でも同様の生痕が見つかり、第12di層に相当する地層で横大路火山灰が検出されたことから[大阪市文化財協会2000b: pp.19-29]、第12di・12dii層はそれぞれRK12Dii・12Div層に相当する。また、その上位の第12cii層からは磨面

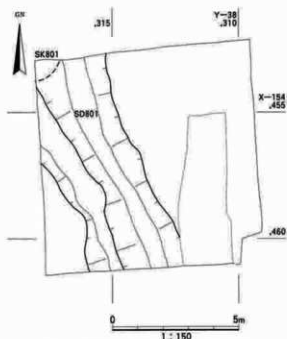


図317 NG95-77次SD801・SK801平面図

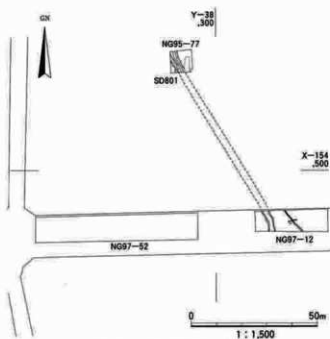


図318 NG95-77次SD801と周辺道路との関係

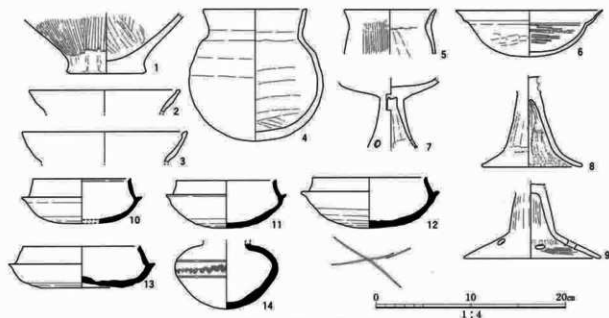


図319 NG95-77次出土遺物

SK801(1)、SX701(2・3)、RK7Aii~iii層(4~14)

せられていた。ただ、調査前のシートパイル打設時にかなりの破壊を被ったため、どのような構造であるかは十分確認することはできなかった。なお、植物繊維の下から布留式新相以降の特徴を有する土師器甕の口縁部2・3が、上位の砂層からは土師器4~9、須恵器10~14が出土した(図319)。13はTK10型式に属することから、砂層の年代の下限は6世紀中頃と推定される。

NG84-4次調査

本調査では6個所にトレンチが設定された。各トレンチの名称は調査時に従って、1702~1707区と呼ぶ(図320)。古墳時代の遺構は1705・1707区で検出された。

SD701:1705区で検出された。幅1.9m以上、深さ0.6mの断面逆台形を呈する溝で、北でやや西に振った方向に延びる(図321左・図版41中)。また、西肩直下では写真28のように、2個所に柄穴が穿たれた建築部材と思われる板状木製品が杭で留めた状態で検出された。遺構内には植物遺体や流木を多量に含む暗灰色砂質シルトや暗灰色極細粒砂・シルト混り砂礫が互層になって堆積していた。

この溝からは土師器壺15~17、小型丸底壺18、鉢19、高杯20~22、須恵器把手付鉢23、陶質土器壺24~27、木製品28~30が出土した(図322)。25~27は体部外面に縄文タタキが施され、その後に沈線が施される。

28は全体の1/2が残る壁で、全長49.3cm、残存幅9.6cm、高さ6.0cmある。平面形は長方形で、器体の刳込みは上面から行われ、深さ4.5cmの内底面は平坦に刳抜かれている。内外面とも木目に平行に削り上げた後、さらに全体をていねいに磨いて器面を整える。29は板状の木製品である。30は鉄斧柄の着装部分で、柄の大半は欠失するが、残存長17.6cm、幅2.6cmあり、着装部は全体を細かく削出

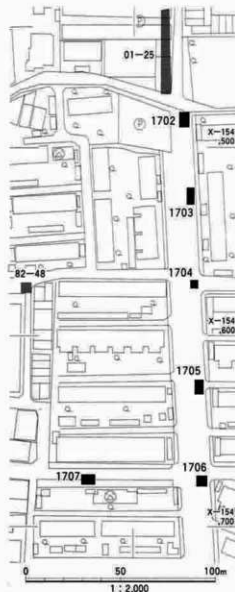


図320 NG84-4次各トレンチ配置図



写真28 NG84-4次SD701木製品出土状況

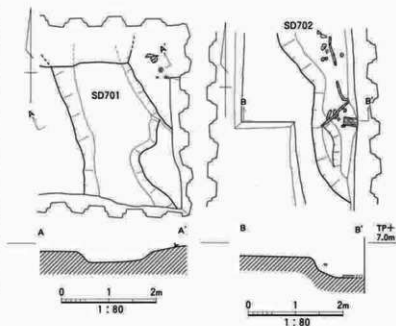


図321 NG84-4次SD701・702実測図

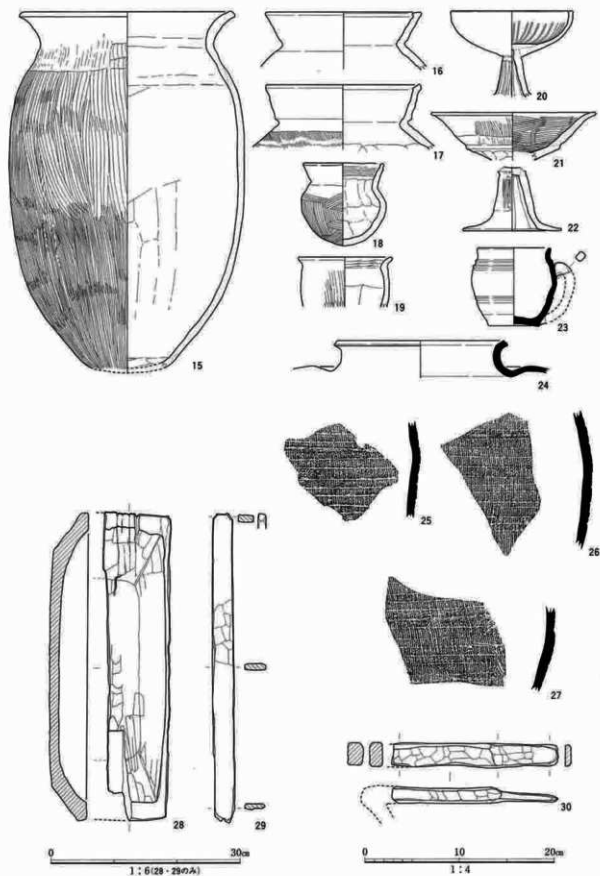


図322 NG84-4 次SD701出土遺物

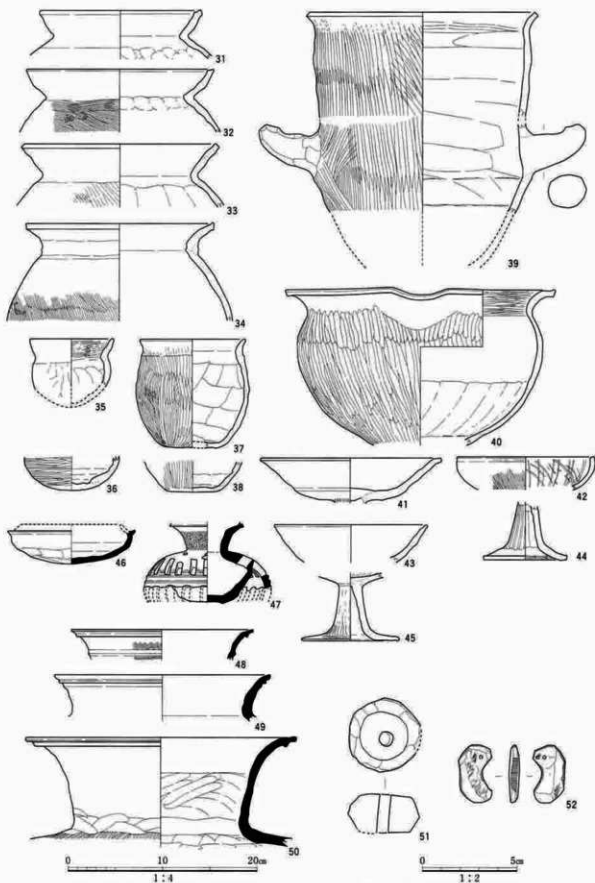


图323 NG84-4次SD702·包含层出土遗物
SD702(31~50)、RK7Ai层(51)、RK7Bii层(52)

して整形する。

SD702:1707区で検出された。幅1.6~2.0m、深さ0.3mで、断面逆三角形を呈する溝で、南北方向に延びる(図321右・図版41下)。溝内には炭化物や有機物を多量に含む黒色粘土質シルトが堆積しており、溝の東肩から流れ込んだような状況で土師器甕31~34、小型丸底壺35・36、平底深鉢37・38、甗39、片口鉢40、高杯41~45、須恵器杯身46、甕47、壺48~50などの遺物が多量に出土した(図323)。46の底部には手持ちのヘラケズリが施されており、TK73型式もしくはTK216型式に属するものである。47は二重甕で、外側の体部には上下に方形スカシが巡り、頸部下には円孔が施される。

これ以外に、1706区のRK7Ai層に相当する暗灰色シルト質粘土層からは滑石製勾玉52、1707区のRK7Bii層に相当する黒色シルト質粘土層からは酸化焰焼成の算盤珠形紡錘車51が出土した(図323)。

c. 飛鳥~平安時代の遺構と遺物

NG88-6次調査

東西のトレンチで溝が3条検出された(図324)。

SD601:東側のトレンチで検出された。幅約1.1m、深さ0.2mでいびつな方向に延びる。埋土の上



図324 NG88-6次遺構配置図

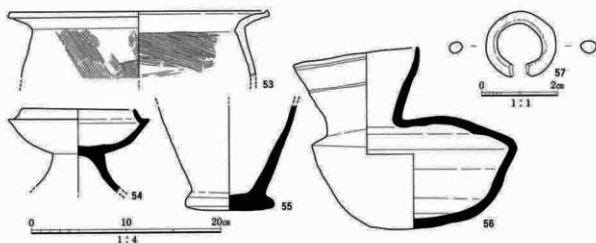


図325 NG88-6次出土遺物

SD601(54)、SD602(53・55・56)、RK3~4層(57)

部が暗灰黄色粘土、下部は灰色細粒砂であった。図325のような飛鳥時代初頭の須恵器高杯54が出土しているが、後述するように、検出面と同じであるSD602からは奈良時代の遺物が出土していることから、時期が下る可能性が高い。

SD602：西側のトレンチで検出された。北壁にかかるため幅は不明である。埋土の上部は灰色粗粒砂～シルト、下部は緑灰色粗粒砂であった。東西方向に延びていることから、SD601と一連の溝である可能性もある。遺物には土師器甕53・須恵器鉢55・平瓶56がある(図325)。56は肩部が稜をもって屈曲する形態で、平城宮土器Ⅰに該当すると思われる。

SD603：西側のトレンチで検出された。幅約1m、深さ0.1m未満である。

また、遊離資料であるが、本調査地ではRK3～4層に相当すると思われる明黄褐色細粒砂質シルト層から、金環57が出土した(図325)。

3) まとめ

本節で報告した調査は冒頭で記したとおり、大規模な調査が行われる以前のものばかりである。ここで近年の成果を踏まえて、本節の成果について補足しておきたい。

まず、NG84-4次調査地周辺は1980年代前半に下水工事に伴う小規模でありながら深い調査が数度行われ、古墳時代の遺物が多量に出土するものの、全体が把握できなかったというのが現状であった。例えば、NG84-4次調査地の西側で行われたNG82-48次調査では、古墳時代の包含層から古墳時代中期初頭の土師器とともに、滑石製品が多量に出土しているが、わずか20mの調査であったため、いかなる地層・遺構に伴うものなのか検討することができなかった(註1)。しかし、1998年度以降、大規模な調査が進み、流路に平行して盛土を行い、それに伴って古墳時代前期末から中期初頭の土器や滑石製品などの祭祀遺物が埋められていることが明らかになってきた[大阪市文化財協会2004a]。

NG95-77次調査では六反地区で初めて中位段丘構成層(RK16A層)まで確認し、縄文海進時の生痕が検出されたものの、旧石器～縄文時代にかけての人間活動の痕跡についてははっきりわからず、検討は不十分であった。しかし、60m南のNG97-12・52次調査では旧石器のブロックが検出され[大阪市文化財協会2000b]、250m南のNG99-41次調査では縄文時代早期の押型文土器が多量に出土し、同時期の遺構も検出された[大阪市文化財協会2002a]。

以上のように六反地域は通常調査が及ばない深い地点に、旧石器～古墳時代の遺構・遺物が良好な状態で埋没している。近年の調査の蓄積で各時期の状況が明らかになってきており、今後とも重要な地点であることには変わりない。

(寺井)

註)

(1)1983年4月1日～11日にかけて行われた調査で、位置は図320に示した通りである。未報告である。

第Ⅷ章 遺構と遺物の検討

第1節 長原古墳群集成

1) はじめに

長原遺跡では2006年10月までに213基の古墳が検出されている(図328～331、表36～41)。長原古墳群については[京嶋寛1997]や[櫻井久之1993・2001]によって全体的な検討がなされてきたが、本書で計41基(追加調査を含めると44基)を報告することができたので、この機会に長原古墳群を集成するのは有益なことである。以下で先行研究を参考にしながら、簡略ではあるが現状での到達点を整理しておきたい。なお、本節末の集成表(表36～42)は[櫻井2001]の表を追加・修正したものである。

2) 時期

長原古墳群は出土した土器や埴輪によって4つの時期に区分されている[京嶋1989]。

1期は埴輪に黒斑があり、須恵器がまだ出現していない時期で、4世紀末～5世紀初頭と推定される。この時期の古墳には長原1(塚ノ本古墳)、85(一ヶ塚古墳)、40、169(高廻り1号墳)、170(高廻り2号墳)、176、196、213号墳の8基が該当する。塚ノ本古墳の造営を契機に古墳群が形成され始め、各古墳は長原遺跡内に分散している。また、長原遺跡東南地区に接する八尾南遺跡や、北地区に接する喜連東遺跡でもこの時期の古墳が検出されている[八尾南遺跡調査会1981、黒田慶一1987]。なお、213号墳に関しては造営後に営まれた5世紀中頃の集落に破壊されている。隣接するNG84-6次で出土した埴輪も、この時期の古墳の破壊を反映しているであろう(第Ⅷ章第1節)。

2期は宮窯焼成の埴輪が用いられ、TK73～208型式の須恵器が伴い、年代はおおむね5世紀中～後葉に推定される。小方墳が急増する。この頃の集落は「東ムラ」と「西ムラ」に分かれる。

3期はTK23・47型式の須恵器が伴い、年代は5世紀末～6世紀初頭と推定される。2期に引き続き小方墳が多く造営される。集落は「東ムラ」が衰退し、「西ムラ」が拡大する。

なお、2・3期の古墳は遺跡の北端、北西隅、中央、東南の4つの群に区分できる[京嶋1997]。この中で遺跡中央のものがもっとも密集する。また、東南の群には八尾南遺跡で見つかっている古墳も含めることができる[八尾市文化財調査研究会1995: pp.121～122]。

4期はMT15・TK10型式の須恵器が伴い、6世紀前～中葉に推定される。長原130(七ノ坪古墳)、153、181(南口古墳)、207号墳がこの時期に該当する。この時期の古墳は長原遺跡の西半に偏っている。七ノ坪・南口古墳は前方後円墳であり、前段階に集落であった地域に造営されている。また、対応する集落はNG84-25次(第Ⅲ章第1節)やNG93-26次(同3節)など長原遺跡の西端に分布しており、この時期を最後に衰退する。

	40m以上	15m以上	7m以上	7m未満	規模不明
1期	 1 (本ノ本) 85 (一ノ本)	 170 (高廻り2) 169 (高廻り1)	 213	 196	40 176
2期		 57 39	 5 9 10 11 15 26 31 44 45 47 50 51 53 61 62 79 102 103 105 109 110 129 132 134 139 147 160 161 173 179 183 199 201 210	 18 28 30 49 83 114 137 141 167 172 180	29 59 65 67 71 73 74 77 80 81 100 108 112 115 149 152 166
3期		 118 190	 3 5 7 13 27 32 34 52 54 58 63 64 86 87 89 94 106 111 113 131 142 143 162 187 188 207	 6 33 35 36 60 135 146 200	2 4 37 38 82 84 107 140 193 212
4期		 130 (七ノ坪) 181 (南口)	 153 206		

図326 長原古墳群の変遷図([櫻井1993]の図1を加筆・修正)

3) 墳丘形態と外部施設

最大規模の塚ノ本古墳とそれに次ぐ一ヶ塚古墳はそれぞれ直径55m、47mあり、一ヶ塚古墳には造出しが付く。これらの古墳には葺石や段築は確認されていないが、段築は本来あった可能性が高い。

墳丘が確認されている9割以上が方墳で、その大半が一辺10m前後かそれ以下の大きさである。造出しを有し、前方後方形を呈するものもある。

前方後円墳はいずれも長原古墳群の4期に登場する(七ノ坪古墳・南口古墳)。これらの古墳はそれまで集落域であったところに造営され、これらを最後に長原遺跡では古墳は見られなくなる。

塚ノ本古墳、一ヶ塚古墳、高廻り2号墳、87号墳、131号墳、190号墳では埴輪が据えられた状態で検出された。本節第2章第1節で報告した87号墳では円筒埴輪に加え、巫女形などの形象埴輪や須恵器甕が墳丘に据えられた。また、190号墳と南口古墳では周堤に円筒埴輪が並んでいた。

ただし、長原古墳群では上面が削平されているために、多くの場合が周溝に転落した状態であった。これらも含めて、墳丘の規模と埴輪の関係を見ると、15m以上の規模の古墳では七ノ坪古墳を除くと、いずれも埴輪が伴っている(図326)。ただ、7m未満の規模の古墳については、180号墳や200号墳のように主体部が残っていて上面の残りが良好であったにもかかわらず、埴輪が伴わない例もあることから、この規模の古墳では埴輪が本来据えられなかったものもあると考える。

4) 主体部と副葬品

表35 長原古墳群主体部検出古墳一覧〔櫻井1993〕の表1に加筆)

古墳名	時期	埋葬施設	位置	出土遺物	備考	文献
1号墳	1	埴輪棺(1)	墳丘裾	(なし)	赤色顔料	長原遺跡調査会1978
		埴輪棺(2)	墳丘裾	(なし)	赤色顔料	
		埴輪棺(3)	墳丘裾	鉄剣・管玉・勾玉	赤色顔料	
		埴輪棺(4)	墳丘裾	(なし)		
		埴輪棺(5)	墳丘裾	(なし)	赤色顔料	
40号墳	1	埴輪棺	墳丘裾	(なし)		高井健司1990、櫻井久之1991
83号墳	2	木棺直葬	墳丘上	鉄剣・不明鉄製品		大阪市文化財協会1990
87号墳	3	土器棺	墳丘上	(なし)		本書第Ⅱ章第1節
94号墳	3	木棺直葬	墳丘上	(なし)		大阪市文化財協会1979
		木棺直葬	墳丘上	(なし)		
105号墳	2	木棺直葬	墳丘上	管玉・ガラス小玉・壺		大阪文化財センター1986
130号墳 (七ノ坪)	4	横穴式石室	後円部	勾玉・管玉・白玉・ガラス玉・太刀・短刀・鉄針・鉄鏃・ I字形鐵板付簪・剣形古幣・木芝鉄板張り輪軸・鐵金具・ 鍔金具・環状雲珠・方形止金具・鉾金具		高井健司1986・1987a
		土器棺	墳丘裾	(なし)		
166号墳	2	木棺直葬	墳丘上	鉄剣・U字型鋤先・鉄製ミニチュア農具		本書第Ⅲ章第1節
		木棺直葬	墳丘上	金環・刀子		
167号墳	2	土器棺	墳丘上	(なし)	中心主体	大阪文化財センター1986
168号墳	2	木棺直葬	墳丘上	圭頭太刀・環頭小刀・小型鉄製品・壺		大阪文化財センター1986
179号墳	2	木棺直葬	墳丘上	鉄刀		岡村勝行・清水和明1990
180号墳	2	土器棺	墳丘上	(なし)	中心主体	本書第Ⅱ章第1節
187号墳	3	木棺直葬	墳丘上	刀子・ガラス小玉		久保和士1992
		木棺直葬	墳丘上	ガラス小玉		
190号墳	3	土器棺	墳丘上	(なし)		久保和士1992
200号墳	3	木棺直葬	墳丘上	鉄剣(もしくは鉄刀)		本書第Ⅱ章第3節
206号墳	4	木棺直葬	墳丘上	滑石製紡錘車		松本百合子1995
210号墳	2	木棺直葬	墳丘上	鉄刀・鉄鏃(長蓋鏃)		大阪市文化財協会1999a
213号墳	1	粘土槨	墳丘上	鉄刀・壺		大阪市文化財協会2005a
喜連2	1	木棺直葬	墳丘上	鉄剣・鉄鏃・壺		佐藤隆1992

長原古墳群は後世の削平が著しい場合が多いため、主体部が残っているケースは、検出されている古墳の数に比して非常に少ない。現在のところ表35のように18基(喜連東遺跡を含めると19基)の古墳で確認されている。

1期では塚ノ本古墳や40号墳で埴輪棺が見られるが、近年調査された長原213号墳には粘土槨の主体部があり、鉄刀と壺3つが副葬されていた〔大阪市文化財協会2005〕。2・3期は木棺直葬や須恵器の大甕などを利用した土器棺で主体部が作られる。4期では七ノ坪古墳のように片軸の横穴式石室が採用され、馬具などの副葬品が伴っていた。(寺井)

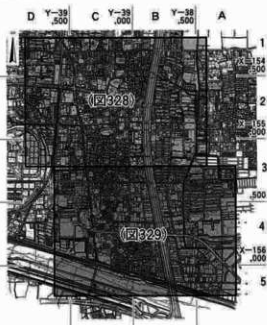


図327 図328・329の位置(縮尺1:30,000)



图328 长安古坟群分布图(北半)

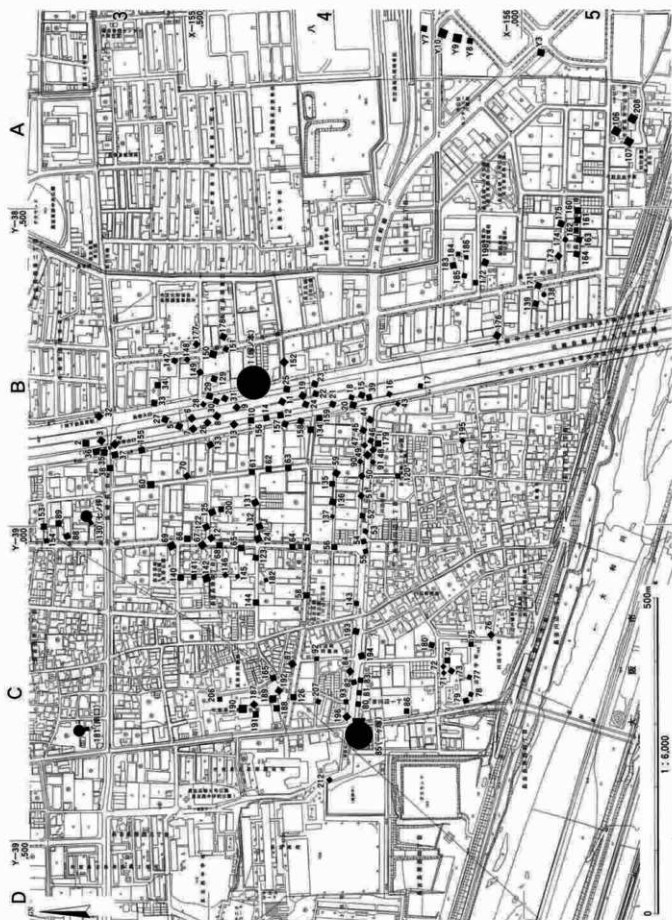


圖329 長安古城分佈圖(南半)

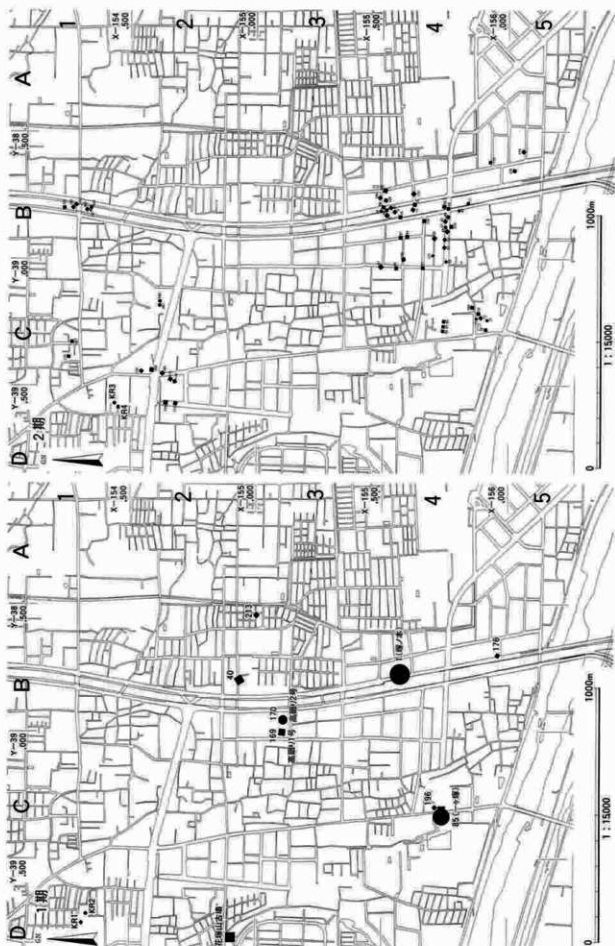




図331 長原古墳群 3 - 4 期 (時期が確定できたもののみ)

表36 長原古墳群—概表(1)

古墳番号/時期/位置	発掘回数	墳丘長(m)	土壌部	須知部	地層	出土品	備考	文庫
1 1 4B NG1	5回	55		円筒(横付含む)・壺・甕			塚ノ木古墳・有正堂の地蔵	大阪市文化財協会1982a, 大阪市文化財センター1978b
2 3 3B CENTING 1 方				杯・高杯・甕				大阪市文化財センター1978
3 3 3B CENTING 2 方通		11.2		杯・高杯・甕				大阪市文化財センター1978
4 3 3B CENTING 3 方			板瓦土部	杯・高杯・甕・部	円筒・朝顔			大阪市文化財センター1978
5 3 3B CENTING 4 方通		8		杯・高杯・甕・部	円筒・甕			大阪市文化財センター1978
6 3 3B CENTING 5 方		6.9		高杯・甕	円筒			大阪市文化財センター1978
7 3 3B CENTING 6 方		8		高杯	円筒			大阪市文化財センター1978
8 2 4B CENTING 7 方		9.8		杯・甕	円筒			大阪市文化財センター1978
9 2 4B CENTING 8 方		10.3		杯・甕	円筒			大阪市文化財センター1978
10 2 4B CENTING 9 方		11.7		杯・高杯・甕・部	円筒・朝顔・高杯・甕			大阪市文化財センター1978
11 2 4B CENTING 10 方		8.5		杯・高杯・甕・部	円筒・中甕			大阪市文化財センター1978
12 4B CENTING 11 方				甕	高杯			大阪市文化財センター1978
13 2 4B CENTING 12 方		6.8	甕	甕				大阪市文化財センター1978
14 3 4B CENTING 13 方		8	甕・土部					大阪市文化財センター1978
15 2 4B CENTING 15 方		7		甕	円筒・朝顔			大阪市文化財センター1978
16 4B CENTING 16 方		4						大阪市文化財センター1978
17 2 4B CENTING 17 方					円筒			大阪市文化財センター1978
18 3 4B CENTING 18 方		3.7		甕	円筒			大阪市文化財センター1978
19 4B CENTING 19 方		6						大阪市文化財センター1978
20 4B CENTING 20 方								大阪市文化財センター1978
21 4B CENTING 21 方		6						大阪市文化財センター1978
22 4B CENTING 22 方		6						大阪市文化財センター1978
23 4B CENTING 23 方		5.5						大阪市文化財センター1978
24 4B CENTING 24 方		5			円筒			大阪市文化財センター1978
25 2 4B CENTING 25 方		5.5			円筒			大阪市文化財センター1978
26 3 4B CENTING 26 方	7.4	杯		杯・高杯・甕	甕			大阪市文化財センター1978
27 3 3B CENTING 27 方	7			杯・甕	円筒			大阪市文化財センター1978
28 2 4B NG1 1 方	6	○		甕	円筒・甕			大阪市文化財センター1978
29 2 4B NG1 2 方				杯・高杯・甕	円筒・甕			大阪市文化財センター1978
30 2 4B NG1 3 方		4.3	甕	甕	円筒			大阪市文化財協会1982a, 本番資料第5巻
31 2 4B NG1 4 方		8.5		甕・高杯	円筒			大阪市文化財協会1982a
32 3 3B NG1 6 方		7		杯・高杯・甕・部	円筒		周溝内に出土部群納土層	大阪市文化財協会1982a
33 3 3B NG11 1 方		5.6		甕	円筒			大阪市文化財協会1982b
34 3 3B NG11 2 方		10		甕	円筒			大阪市文化財協会1982b
35 3 3B NG19 1 方	4	○		甕・甕	円筒			大阪市文化財協会1982b
36 3 3B NG19 2 方		5.4	甕・甕	杯・高杯・甕	円筒			大阪市文化財協会1982b

表37 長原古墳群一覽表(2)

古墳番号	墳形	墳高(米)	墳長(米)	上層部	墳底部	構造	出土品	備考	文庫
37	3	3B	NG19	2 方	空	空			大阪市文化財協会1982b
38	3	3B	NG20-2	方	空	空			大阪市文化財協会1989
39	2	4B	NG24	方	15	空			大阪市文化財協会1989
40	1	2B	NG2	1 方?		空			高井智司1996、原升久之1991
41	2B	NG2	2 方?			空			
42	2B	NG2	3 方?			空			
43	2	4B	NG3-3	方		空			
44	2	4B	NG81-2	1 方	11.8	空			大阪市文化財協会1989、本館資料1989
45	2	4B	NG81-2	2 方	11.5	空			大阪市文化財協会1989
46	4B	NG81-2	3 方			空			大阪市文化財協会1989
47	2	4B	NG81-2	4 方	8.6	空			大阪市文化財協会1989
48	4B	NG81-2	5 方	4.8		空			大阪市文化財協会1989
49	2	4B	NG81-2	6 方	6.2	空			大阪市文化財協会1989
50	2	4B	NG81-2	7 方	9.8	空			大阪市文化財協会1989
51	2	4B	NG81-2	8 方	7.8	空			大阪市文化財協会1989
52	3	4B	NG81-2	9 方	9.2	空			大阪市文化財協会1989
53	2	4C	NG81-2	10 方	9.2	空			大阪市文化財協会1989
54	3	4C	NG81-2	11 方	7.2	空			大阪市文化財協会1989
55	4C	NG81-2	12 方			空			大阪市文化財協会1989
56	3	4C	NG81-2	13 方	5.4				大阪市文化財協会1989
57	2	4C	NG81-2	14 方	15	空			大阪市文化財協会1989
58	3	4C	NG81-2	15 方	13	空			大阪市文化財協会1989
59	2	4B	NG82-12	方		空			大阪市文化財協会1993a
60	3	3B	NG82-19	1 方	5.2	空			大阪市文化財協会1990
61	2	4B	NG82-19	2 方	9	空			大阪市文化財協会1990
62	2	4B	NG82-19	3 方	10.5	空			大阪市文化財協会1990
63	2	4B	NG82-19	4 方	9.5	空			大阪市文化財協会1990
64	3	4C	NG82-19	5 方	7	空			大阪市文化財協会1990
65	2	4C	NG82-19	6 方		空			大阪市文化財協会1990
66	3C	NG82-19	7 方	7.5		空			大阪市文化財協会1990
67	2	4C	NG82-19	8 方		空			大阪市文化財協会1990
68	4C	NG82-19	9 方	10		空			大阪市文化財協会1990
69	3C	NG82-19	10 方	11.5		空			大阪市文化財協会1990
70	3B	NG82-19	11	8.6		空			大阪市文化財協会1990
71	2	4C	NG18	1 方		空			大阪市文化財協会1990
72	4C	NG18	2 方	3		空			本館資料1989

表38 長原古墳群一覽表(3)

出題形式	時間	出題数	総出題数	難易度	主眼点	出題内容	解説	備考	形式上の特徴	備考	文献
73	2	4C	NG18	3	方						本書第1章第1節
74	2	4C	NG18	4	方						本書第1章第1節
75	4C	NG18	5	方							本書第1章第1節
76	3	4C	NG18	6	方						大田市文化財協会1999a、本書第1章第1節
77	2	4C	NG18	7	方						本書第1章第1節
78	4C	NG18	8	方							本書第1章第1節
79	2	4C	NG18	9	方	9 高杯					本書第1章第1節
80	2	4C	NG82-27	1	方	高杯					大田市文化財協会1990
81	2	4C	NG82-27	2	方	高杯					大田市文化財協会1990
82	2	4C	NG82-27	3	方	杯分葉					大田市文化財協会1990
83	2	4C	NG82-27	4	方	6					大田市文化財協会1990
84	3	4C	NG82-27	5	方						大田市文化財協会1990
85	1	4C	NG82-27	6	方	中皿					大田市文化財協会1990
86	3	4C	NG82-46		方	11.5					大田市文化財協会1990、1999a、1999b
87	3	4C	NG83-38		方	12					本書第1章第1節
88	3	3C	NG83-41	1	方	10 小皿					
89	3	3B	NG83-41	2	方	10					
90	4B	NG83-46	1	方	6.7						
91	4B	NG83-46	2	方							大田市文化財協会1992b
92	4C	NG83-52	1	方	8						大田市文化財協会1992b
93	4C	NG83-52	2								大田市文化財協会1992b
94	3	2C	DD1	1	方	8					大田市文化財協会1979
95	2C	DD1	2								大田市文化財協会1979
96	2C	DD1	3								大田市文化財協会1979
97	2C	DD1	4								大田市文化財協会1979
98	3C	DD1	5								大田市文化財協会1979
99	2C	DD80-1		方	7						
100	1B	CENT-JY	7	方	107	高杯					大田市文化財協会1986a
101	3	B	CENT-JY	方	3						大田市文化財協会1986a
102	2	B	CENT-JY	1	方	7					大田市文化財協会1986a
103	2	B	CENT-JY	2	方	11					大田市文化財協会1986a
104	1B	CENT-JY	3	方							大田市文化財協会1986a
105	2	B	CENT-JY	4	方	7.3					大田市文化財協会1986a
106	3	5A	NG82-41	1	方	11					大田市文化財協会1999a
107	3	5A	NG82-41	2	方						大田市文化財協会1999a
108	2	2C	DD84-1	1	方						大田市文化財協会1999a

表39 長原古墳群一覽表(4)

古墳番号	時期	位置	築造年代	墳丘長	墳丘幅	土師器	埴輪器	埴輪	出土品	備考	文獻
109	2	2C	DBM-1	2 方	7.6		杯身・蓋	円筒・蓋			
110	2	2D	NGM-12	1 方	5.3		杯蓋・高杯蓋・高杯蓋・器台	円筒・朝顔・高蓋			大阪市文化財協会1193a
111	3	2D	NGM-12	2 方	10.8		杯身・高杯蓋・高杯蓋・器台	円筒・朝顔・高蓋・人物・馬			大阪市文化財協会1192c
112	2	2D	NGM-13	3 方			蓋	円筒・朝顔・高蓋・高蓋			大阪市文化財協会1192c
113	3	2D	NGM-25	1 方・蓋	14		杯蓋・蓋	円筒・高蓋・人物・馬			本館蔵品調査1期
114	2	2C	NGM-25	2 方	4		杯身				本館蔵品調査1期
115	2	2C	NGM-25	3 方			杯身				本館蔵品調査1期
116	3	2D	NGM-25	4 方・蓋	16		○				本館蔵品調査1期
117	2D	NGM-25	5 方	10.6							本館蔵品調査1期
118	2D	NGM-25	6 方								本館蔵品調査1期
119	2C	NGM-25	7								本館蔵品調査1期
120	4B	NGM-46	1 方	3				円筒			本館蔵品調査2期
121	4C	NGM-48	1 方	7.4			蓋	円筒			大阪市文化財協会1192c
122	4B	NGM-48	2 方	5.5			蓋	円筒			大阪市文化財協会1192c
123	4C	NGM-48	3 方	6							大阪市文化財協会1192c
124	4C	NGM-48	4 方					円筒・朝顔・蓋			大阪市文化財協会1192c
125	4B	NGM-48	5 方	6.2	蓋			円筒			大阪市文化財協会1192c
126	4C	NGM-73	1 方								大阪市文化財協会1192c
127	2	1C	DBM-3	1 方	13.5			○			大阪市文化財協会1199a
128	1C	DBM-3	2 方	5.3				○			大阪市文化財協会1199a
129	2	4B	NGM-18	1 方	8.3	○		円筒			本館蔵品調査5期
130	4	2B	NGM-23	敷面	24.4	小皿・蓋・蓋(附)	杯・杯身・高杯(附)・器台		七ヶ所古墳・横穴式石室		高井聖司1986
131	3	4B	NGM-24-2	1 方	10.5	蓋・高杯	杯蓋・杯身・高杯蓋・高杯蓋・高蓋	円筒・朝顔・高蓋・人物・馬			大阪市文化財協会1193a
132	2	4B	NGM-24-2	2 方	8		杯蓋・高杯蓋・高蓋	円筒・高蓋			大阪市文化財協会1193a
133	4B	NGM-34-3	1 方	7			杯蓋	円筒・朝顔			大阪市文化財協会1193a
134	2	4B	NGM-34-4	1 方	5		杯身	円筒・朝顔			大阪市文化財協会1193a
135	3	4B	NGM-34-3	2 方	5		杯身	円筒・朝顔			大阪市文化財協会1193a
136	4B	NGM-34-3	3 方	10			杯身	円筒・朝顔			大阪市文化財協会1193a
137	2	4B	NGM-34-3	4 方	4.5		杯身				大阪市文化財協会1193a
138	5B	NGM-64	円?	2.7	小皿・人形蓋		杯蓋・蓋				
139	2	3B	NGM-64	1 方	7	○	杯蓋・杯身・蓋				
140	3	3C	NGM-70	1 方			杯蓋・高杯蓋・高蓋	円筒・朝顔			大阪市文化財協会1193a
141	3	4C	NGM-70	2 方	5	蓋	杯蓋・高杯蓋・高蓋	円筒・朝顔			大阪市文化財協会1192a
142	3	4C	NGM-70	3 方	12		蓋	円筒・朝顔・高蓋			大阪市文化財協会1193a
143	4C	NGM-28	1 方	11							
144	4C	NGM-30									

表40 長原古墳群一覽表(5)

古墳番号	時期	位置	墳形	墳高(m)	土師器	埴輪器	埴輪	附土器	備考	文獻
145	4C	NG66-43-2 1 方								大阪市文化財協会1993b
146	3 4C	NG66-43-2 2 方	円墳	5.2	筒作	杯蓋・杯身・蓋	円筒		玉縁部剥離	大阪市文化財協会1993b
147	3 3B	NG66-54-1 1 方		9		杯蓋	円筒・中層			大阪市文化財協会1993b
148	3B	NG66-54-1 2 方					円筒			大阪市文化財協会1993b
149	2 4B	NG66-54-1 1 方				杯蓋・杯身・小杯・蓋	円筒			大阪市文化財協会1993b
150	2 4B	NG66-58-1 1 方		12	筒作・蓋	杯蓋・杯身・高杯・蓋・蓋型台	円筒・朝顔・蓋・成人			大阪市文化財協会1993b
151	4B	NG66-58-1 2 方		7	小形丸蓋	杯蓋・杯身・蓋	円筒			大阪市文化財協会1993b
152	2 4B	NG66-58-2 1 方				杯蓋・蓋・蓋型	円筒・朝顔・蓋・成人			大阪市文化財協会1993b
153	4 3B	NG66-60-1 1 方		10	筒作・蓋	杯蓋・蓋・蓋型				大阪市文化財協会1993b
154	3C	NG66-60-1 2					円筒・馬			本報告目録第3編
155	4B	NG66-66 1 方					○			本報告目録第3編
156	4B	NG66-66 2 方					円筒			本報告目録第3編
157	4B	NG66-66 3 方					○			本報告目録第3編
158	4B	NG66-66 4 方					円筒			本報告目録第3編
159	3B	NG66-66 5 方					円筒			本報告目録第3編
160	5A	NG66-70 1 方		9	蓋		円筒・馬			大阪市文化財協会1993b
161	5A	NG66-70 2 方		9	筒作・蓋	杯蓋・朝顔・蓋・成人	円筒・朝顔・蓋・成人	鉢		大阪市文化財協会1993b
162	5B	NG66-70 3 方		11	蓋		円筒・馬	鉢		大阪市文化財協会1993b
163	5B	NG66-70 4 方		8			円筒			大阪市文化財協会1993b
164	5B	NG66-70 5 方					円筒・蓋			大阪市文化財協会1993b
165	4C	NG66-85 方		6.5		杯蓋・杯身・高杯・蓋・蓋型	円筒・蓋	○	本報告目録第3編、会誌、別添	大阪市文化財協会1993b
166	2 3C	NG66-91 方			杯蓋・杯身・蓋・蓋型	杯蓋・杯身・蓋・蓋型	円筒		大阪文化センター1986a	大阪市文化財協会1994
167	2 1B	CENT.JY 5 方		3	蓋(横)			美	堀田5号墳、土器類	大阪文化センター1986a
168	2 1B	CENT.JY 6 方						鉢	堀田5号墳、木桶蓋	大阪文化センター1986a
169	1 3C	NG67-35 1 方		15.1	小形丸蓋・鉢		円筒・朝顔・蓋・成人・高杯・蓋・蓋型・高杯・蓋型	鉢	高田11号墳、有田製の埴輪	大阪市文化財協会1991
170	1 3B	NG67-35 2 方		18.6	高杯		円筒・蓋・成人・高杯・蓋・蓋型・高杯・蓋型		高田11号墳、高田王、有田製の埴輪	大阪市文化財協会1991
171	5B	NG67-31 方		5	蓋	杯蓋・蓋・蓋型	円筒			大阪市文化財協会1994
172	2 4B	NG67-51 方		5	○	杯蓋・蓋・蓋型				大阪市文化財協会1994
173	2 5B	NG67-60 1 方		8	鉢・蓋	杯蓋・蓋・蓋型				大阪市文化財協会1994
174	5B	NG67-60 2 方			○		○		高田朝顔・高田	大阪市文化財協会1994
175	5A	NG67-60 3 方		8	蓋					大阪市文化財協会1994
176	1 5B	NG67-76 方					円筒(横付文付)・朝顔・蓋・蓋型・高杯		有田製の埴輪	大阪市文化財協会1994
177	4B	NG67-27 方		7	○					大阪市文化財協会1994
178	4B	NG67-81 方								本報告目録第5編
179	2 4B	NG68-19 方		8.3	高杯・蓋・蓋型・蓋型	高杯・蓋・蓋型・蓋型			本報告目録第5編	岡村健行・池本明1990
180	2 4C	NG68-56 方		12		杯蓋・杯身・蓋(横)			土器類	本報告目録第1編

表4-1 長原古墳群一覽表(6)

店番番号	時刻(位置)	発着人数	通信番号	電報番号	土曜器	通称	儀式土曜	備考	文獻
181	4 3C	NG58-54	非月形	25		円筒・家・次室・倉・人物・馬	裏	熊口古墳,外堀のみ	大坂市文化財協会1995
182	3 4C	NG59-60	方	7.5		円筒			本館蔵Ⅱ遺跡3期
183	3 4B	NG59-1	方	10.8		円筒			本館蔵Ⅲ遺跡2期
184	4B	NG31-1	1方	6.8	○				本館蔵Ⅳ遺跡2期
185	4B	NG31-1	2方	8					本館蔵外遺跡2期
186	4B	NG31-1	3方	7					本館蔵Ⅴ遺跡2期
187	3 4C	NG31-18	4方通孔	7.5		円筒・銅鈴・家・風文		本館蔵第2基	久慈和士1992
188	3 4C	NG31-18	1方通孔	8		円筒・銅鈴・家・人物・馬			久慈和士1992
189	4C	NG31-18	2方	7	○	円筒			久慈和士1992
190	3 4C	NG31-18	3方通孔	17.5	裏(皿)	円筒・銅鈴・式通・倉・馬・風文・馬・動物		土堀間・外堀のみ	久慈和士1992
191	4C	NG31-18	4方	5.5	○	円筒			久慈和士1992
192	4C	NG31-53	5方			円筒			久慈和士1992
193	3 4C	NG31-30	6方			円筒・銅鈴			久慈和士1992
194	4C	NG31-30	1方						
195	4B	NG31-55	2方	7.5		円筒・風文			
196	1 4C	NG31-81	方	6		裏		有馬町の遺跡	
197	2D	NG34-67	方7			円筒			大坂市文化財協会1992c
198	4B	NG32-5	方	9.7	○	円筒			本館蔵Ⅵ遺跡2期
199	2 2C	NG32-90	方	9	裏・小室&盛器	円筒			本館蔵Ⅶ遺跡1期
200	3 4B	NG32-92	方	6.3	○	銅鈴・式通・人物・馬			本館蔵Ⅷ遺跡3期
201	2 2C	NG32-37	2方	7	○	銅鈴・式通		本館直轄	本館蔵Ⅸ遺跡1期
202	2C	NG32-37	3方	6	平鉢皿	円筒・銅鈴		若ウス小・智玉	本館蔵Ⅹ遺跡1期
203	2C	NG32-37	4方	6		銅鈴			本館蔵Ⅺ遺跡1期
204	3C	NG32-37	5方	8		銅鈴			本館蔵Ⅻ遺跡1期
205	2C	NG32-37	6方	7		銅鈴			本館蔵Ⅼ遺跡1期
206	4 4C	NG34-66	1方	7.4		銅鈴・作・倉・通・高・作・銅鈴・通・臺		本館直轄,清石製陶所蔵	徳仁子1995
207	3 4C	NG37-36	方	8		銅鈴・臺		本館直轄	大坂市文化財協会2001b
208	5A	NG32-41	3方	14		円筒・瓦・風通			大坂市文化財協会1999a
209	1C	D084-3							大坂市文化財協会1999a
210	2 1C	D084-3	方	9.5					大坂市文化財協会1999a
211	1C	D084-3	方	4.5					大坂市文化財協会1999a
212	3 4C	NG39-42	方			銅鈴			大坂市文化財協会2003b
213	1 3B	NG02-08	方	11		銅鈴		銅土器,熊口・聖域	大坂市文化財協会2005

表42 長原古墳群周辺の古墳

古墳番号	古墳名	位置	発掘年次	形状	長さ(m)	幅(m)	土壌層	出土品	埋葬	年代	備考	文献
八尾前1	1	横外			方	12.5	腰					八尾市遺跡調査会1981
八尾前3	4	4A			方	(10)	○					八尾市文化財調査委員会1995,2006
八尾前4	3	横外	YS82-1		方	(6)	○					八尾市文化財調査委員会1995,2006
八尾前5	3	横外	YS82-1		方	(7.5)	○					八尾市文化財調査委員会1995,2006
八尾前6	3	横外	YS82-1		方	7	○					八尾市文化財調査委員会1995,2006
八尾前7	3	4A	YS83-2		方	7.9	○					八尾市文化財調査委員会1995,2006
八尾前8	3	4A	YS87-8		方	6.6	○					八尾市文化財調査委員会1995,2006
八尾前9	3	4A	YS87-8		方	14.5	○					八尾市文化財調査委員会1995,2006
八尾前10	3	4A	YS87-8		方	(13.5)	○					八尾市文化財調査委員会1995,2006
八尾前11	2	横外	YS88-12		方	6.2						八尾市文化財調査委員会1995,2006
八尾前12	2	横外	YS88-12		方		○					八尾市文化財調査委員会1995,2006
八尾前13	3	横外	YS88-12		方	7.9						八尾市文化財調査委員会1995,2006
八尾前14	4	横外	YS88-12		方	8.5						八尾市文化財調査委員会1995,2006
花岡山	1	2D			方?	30						八尾市文化財調査委員会1995,2006
KR1	1	D1	KR87-2		方	7-8						八尾市文化財調査委員会1995,2006
KR2	1	D1	KR89-5		方	7.5						八尾市文化財調査委員会1995,2006
KR3	2	D1	KR89-1-00-1		方	7.5						八尾市文化財調査委員会1995,2006
KR4	2	D1	KR89-1-00-1		方	7.8						八尾市文化財調査委員会1995,2006

第2節 長原117号墳出土の両耳付短頸壺について

1) はじめに

古墳時代中期の長原遺跡は、朝鮮半島系の土器が多く出土することで知られている。その中には鳥足文タタキが施された土器のように、朝鮮半島の具体的な地域に系譜が求められるものも多くある。本書の第Ⅲ章第1節で報告した長原117号墳出土の両耳付短頸壺も、後述するように器形や耳の形態によって系譜を朝鮮半島の具体的な地域に求めることができる資料である。ここではまず、朝鮮半島の両耳付短頸壺の地域性や日本での出土例を概論した後、長原117号墳出土資料について比較検討し、須恵器生産開始以降の日本における両耳付短頸壺の受容と展開について若干の検討を加えたい。

2) 朝鮮半島における両耳付短頸壺

朝鮮半島では両耳付短頸壺の耳の形態は、孔の穿ち方で図332の左上のようにA・B類の2類に大別することができる。

まず、A類は縦方向に孔が穿たれるもので、原三国時代末から三国時代中頃(3～5世紀)の全羅・忠清道(いわゆる馬韓・百濟地域)に分布している。底部形態は平底と丸底があり、管見による限り、前者が全羅道、後者が忠清道に多いように窺える。また、A類に対応する蓋は、天井部が平坦で、両側に縦方向に孔が空いた耳が付いたり、張り出した天井部の裾に孔が穿たれたりする。口径が10数cmのもので、全羅道で多く見られ、務安郡の社倉里遺跡のように土壌墓から壺と蓋がセットで出土することもある[国立光州博物館ほか1984]。

B類は肩部に横方向に孔が穿たれた耳を両側にもつもので、慶尚道一帯(いわゆる加耶・新羅地域)に分布する。原三国時代末から三国時代初頭のもので、器高が15cm程度の小型品で、格子タタキが施され、焼成はややあまい。一方、三国時代前期(4世紀代)になると、器高が20cmを超え、無文もしくは縄文タタキが施され、焼成は堅緻になる。集落遺跡でも出土するが、おもに木槨墓や堅穴式石槨から出土する場合が多い。

以上のように両耳付短頸壺は、それぞれの形態でほぼ地域が限定できる器種であるが、互いの地域で異なる形態の両耳付短頸壺が出土することもあり、朝鮮半島内での地域間交流を知るうえでも有効な資料である。

3) 日本における出土事例

A類については古墳時代前期(庄内式～布留式併行期)の段階で、北部九州を中心に搬入品、模倣品および耳のみを採用した折衷品が多く出土している。この段階の搬入品と考えられるものには還元焰焼成だけでなく、酸化焰焼成のものもある。また、在来の技法を交えて作られた模倣・折衷品についても北部九州や山陰地方でも出土している。

しかし、須恵器出現後は近畿地方に集中するようになる。この中で還元焰焼成の土器については、

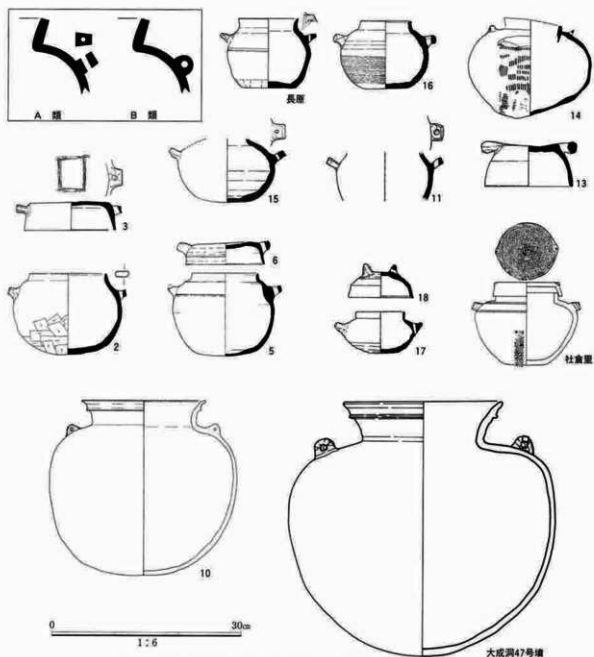


図332 両耳付短頸壺の分類と朝鮮半島・日本の類例(引用文献より転載)

朝鮮半島から搬入されたのか、それとも陶邑などの日本国内で生産されたものか判断するのが難しいものもある。焼成の堅緻さや胎土の特徴、後述するような須恵器的な技法が見られないという点から、表43のものを搬入品と考えたが、今後精査して朝鮮半島からの搬入品か否かの判断をする必要がある。この中で和歌山市六十谷遺跡の4・5は蓋と壺がセットであり、大正年間に家形壺などの陶質土器といっしょに出土したらしく[河上邦彦・奥田豊1972]、古墳の主体部であった可能性も残される。四ツ池遺跡の2は六十谷遺跡の5と形態が類似する。なお、セスドノ古墳例はつまみを有する蓋がセットで出土しているが、蓋の形態が朝鮮半島に類例がないため、須恵器の可能性も残る。

また、A類の耳を有するもので日本で製作されたと考えたものは表44に挙げた。これらは胎土や焼成の特徴に加え、体部にカキメなど須恵器独特の技法が見られたり、焼け歪みがひどく近隣で生産

表43 日本出土の両耳付短頸蓋の搬入例

番号	形態	地域	遺跡名	遺構	時期	特徴	参考文献
1	A	大阪	四ツ池	SD004	5世紀前半	外面に火焼あり。	堺市1991
2	A	大阪	四ツ池	SD004	5世紀前半	丸底の底部に手持ちのヘラケズリ。	堺市1991
3	A蓋	大阪	小阪	河川1遺物群2	5世紀前半	天井部に下駄痕。口縁部に火焼あり。	大阪センター1992
4	A蓋	大阪	久宝寺	NR5001	5世紀後半	天井部に放射状のヘラ掻き。	大阪センター2000
5	A	和歌山	六十谷	古墳?	5世紀	埴になる蓋がある。	河上他1972
6	A蓋	和歌山	六十谷	古墳?	5世紀		河上他1972
7	A	福岡	セストノ古墳	横穴式石室	5世紀後半	小さな平底。蓋がセットで出土。	田川市1984
8	A蓋	福岡	セストノ古墳	横穴式石室	5世紀後半		田川市1984
9	B	鳥取	青木堀場	包含層	5世紀後半	横文タタキ。	赤子市2000
10	B	大阪	水源地	調査地点1一溝	5世紀前半	二重口縁。	神谷・三好1985

※時期については表44を参照し、最も近いものと示した。表44も同じ。

表44 日本で生産されたと思われる両耳付短頸蓋A類および蓋

番号	地域	遺跡名	遺構	時期	特徴	参考文献
11	大阪	大庭寺	1-OL土器溜り中層	5世紀前半	耳は扁平。体部にカキメが見られる。	大阪府協会1995
12	大阪	大庭寺	1-OL土器溜り中層	5世紀前半	蓋で耳は欠損。一方の耳は焼成前に破損し、破損した面が軸を渡る。	大阪府協会1995
13	大阪	大庭寺	1-OL土器溜り上層	5世紀前半	蓋で環状の耳が付く。12よりひとまわり大。	大阪府協会1995
14	大阪	小阪	井戸1	5世紀前半	体部に平行タタキ。他の破片が溶着。	大阪センター1992
15	大阪	陶邑	TK216号窯跡	5世紀中頃	扁平な耳あり。丸底。	田辺1981
16	大阪	大坂城下層	第7層	5世紀末	平底で、体部下平にカキメが施される。	田中清美1989
17	大阪	一領賀	1-6号墳	6世紀前半	丸底。蓋と埴になる。	大阪府1993
18	大阪	一領賀	1-6号墳	6世紀前半	蓋で天井部に丸みあり。	大阪府1993
19	大阪	大庭寺	包含層	6-7世紀	蓋で天井部に丸みあり。	大阪センター1998
20	奈良	龍崎	SD-01	6世紀中葉	小型品。	横考研1999
21	福岡	茶臼山東	窯跡	6世紀後半		築城町1998

されたことを窺わせるようなものを含む。

代表的な例としてはTK216号窯出土の15で、面取りされた扁平な耳が付き、丸底であることから忠清道で多く見られる形態に近い。大庭寺遺跡の11もTK216号窯の15と同様に面取りされた扁平な耳が付くが、体部にはカキメが施されていた(註1)。また、大庭寺遺跡の蓋(12・13)は口径に比して器高が高く、13の環状の耳とともに朝鮮半島では見られない形態である。

さらに大阪府立大手前高校敷地内の大坂城下層遺跡の16についてもカキメがあるため、国産と判断できる。小阪遺跡の14は耳が体部の大きさに比して小さい上に、焼け歪みがひどく、他の破片が溶着していることから、近隣の生



図333 日本出土の両耳付短頸蓋の分布

産地(陶邑)のものであろう。一須賀Ⅰ-6号墳ではMT15型式の須恵器と共伴して蓋とセットで出土しており(17・18)、これは時期が確認できる限りではもっとも新しい例である。蓋(18)は天井部に丸みがあり、側面ではなく上に耳が付き、朝鮮半島で見られるものとは異なる。

一方、B類については陶邑などの窯跡では見られないことから、鳥取県米子市の青木稲場遺跡(9)、大阪府高石市の水渾地遺跡(10)のものは搬入品と思われる。

4) 117号墳出土資料の検討

ここで再度、長原117号墳出土の両耳付短頸壺を見てみよう(図334)。

この両耳付短頸壺は、口縁部や体部、耳に欠損箇所があるが、図上では完形に復元することができる。口径が9.3cm、器高が11.0cmあり、口縁部は短く外反し、平底である。外面はヨコナデが施され、体部最大径部には凹線が1条巡っている。外底面はナデで滑らかに仕上げられており、下駄痕はない。また、体部最下位には断続的なヘラケズリが施されている。これは朝鮮半島南部の平底の土器によく見られる技法である一方で、初期の陶邑でも見られる。

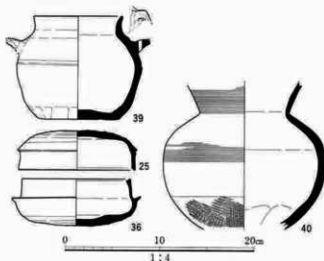


図334 長原117号墳出土遺物

内面はヨコナデで仕上げられていて、底部との境界部分には強いユビナデが施されている。破断面から接合痕を見出せなかったが、円板の上に体部を継ぎ足したことが想定できる。

耳は外面にヨコナデが施された後、肩部に対して垂直に貼付けられている。実物には1個所にしか残っていないが、対になる側の残存部には耳を接合した際のナデの痕跡が残っているため、本来は両側にあったことが容易に確認できる。残存範囲で見る



写真29 長原117号墳出土両耳付短頸壺(1)



写真30 長原117号墳出土両耳付短頸壺(2)

かざり耳は扁平で、端部は平坦に仕上げられているが、側面は雑で、朝鮮半島の耳で扁平なものはていねいに面取りされているのとは異なる。

焼成は還元焰焼成で、堅緻に仕上がっている(須恵質)。色調は内外面とも灰色であるが、断面は紫灰色を呈する。自然釉はやや緑がかった色調のもので、口縁部内外面、外面の体部上半、内底面に付着している。よって、口縁を上に向けて窯詰めされたことがわかるが、口縁端部には自然釉が付着していない。また、窯の壁体と思われる塊が体部外面に付着している。

胎土には長石の砂粒が少量含まれる。胎土分析など科学的な検討は行っていないが、大庭寺遺跡の資料を実見した際に、類似している印象を受けた。

共伴遺物は報告でも記したとおり、須恵器型式というTK208型式の蓋杯と壺であり、時期は5世紀後半に位置づけられる。

本例を朝鮮半島の例に照らし合せてみると、底部が平底で、耳の形態がA類に該当することから、全羅道で多く見られるものと形態的に近いといえる。また、体部に凹線が巡る例は、4世紀末から5世紀初頭に推定される全羅南道務安郡の社倉里4号土壙墓出土資料(図332-b)にある[国立光州博物館ほか1984]。

しかし、耳の作りが雑で、胎土が陶邑産の須恵器に類似していることは国産の可能性を支持する。大庭寺遺跡で見られたようにカキメなどの須恵器特有の技法が見られない上に、化学的に裏付けられていない胎土の観察結果を基に国産とするには根拠が弱い。初期の陶邑には朝鮮半島の器形・技法に忠実なものもあるため、とりえず国産の可能性が高いという考えでまとめておきたい。

5) おわりに

以上、日本国内出土の両耳付短頸壺を朝鮮半島南部の資料と比較しながら検討し、長原117号墳出土資料の位置づけを行ってみた。結論的には国産の可能性が高いとしたものの、課題も残された。

古墳時代前期の段階では北部九州での出土が圧倒的に多いが、5世紀代に入ると、朝鮮半島の情報は畿内に集中するようになり、それを反映してか両耳付短頸壺の出土例も近畿、特に大阪府下に集中する。この時期、陶邑では須恵器生産が始まるが、[酒井清治2004]によると、加耶系が多いとされるTG231・232号窯の段階でも百済・梁山江流域の器形や技法が採用されているという。そして続くTK73・216号窯の段階になると、梁山江・錦江流域の影響が強く見られ、ここで須恵器が定型化したと考える。こういった影響から、須恵器生産が始まった頃の陶邑およびその周辺で集中するのであろう。この須恵器に採用された両耳付短頸壺および蓋は、採用直後から独自性があることは前述した通りである。

ただ、古墳時代前期および中期で共通するのは、両耳付短頸壺が本格的に採用されることがないという点である。古墳時代前期については土器文化に対する影響力が少なかったことが考えられるが、須恵器生産が開始されて以降についても数は少なく、細々と継承されている程度である。これは全羅道系の壺が積極的に採用され、須恵器の器種構成の一部を占めるのとは対照的であり、選択的に器種が導入されていることが考えられる。この段階には朝鮮半島ですでに両耳付短頸壺が減少しつつある

一方で、甕は6世紀になっても継続して作られていることから、日本と朝鮮半島南西部の器種構成の変遷がある程度バラレルであったことを示すものであろう(註2)。

(寺井)

註)

(1)2005年3月に大阪府文化財センター南部事務所にて実見させて頂いた際に確認した。

(2)本節の検討に係わる資料調査については、大阪府文化財センター、堺市教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所のご協力を頂いた。記して謝意を表したい。なお、本研究は平成14～16年度および平成17年度科学研究費補助金(若手研究B 課題番号14710281・17720206)の助成を得た。

引用・参考文献

- 今津啓子1989、「周堤をもつ堅穴住居」：大阪市文化財協会編『葦火』21号、pp.6-7
- 1991、「杉中勝太郎氏による建設工事に伴う長原遺跡発掘調査報告(NG89-8)」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『平成元年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.129-147
- 植木久1983、「まとめ」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ、pp.237-246
- 上野裕子・鈴木京子1989、「長原遺跡出土の鉄製ヤス」：大阪市文化財協会編『葦火』21号、p.8
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1985、「吉内邸新築工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-65)略報」：『昭和58年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.16-21・pp.77-87
- 大阪市文化財協会1979、「平野区長吉出戸4丁目所在遺跡発掘調査略報」：『大阪府下文化財担当者研究会(第1回)資料』
- 1982、「長原遺跡発掘調査報告」Ⅱ
- 1983a、「長原遺跡発掘調査報告」Ⅲ
- 1983b、「瓜破遺跡発掘調査報告」
- 1989、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅰ
- 1990、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅱ
- 1991、「長原遺跡発掘調査報告」Ⅳ
- 1992a、「長原遺跡発掘調査報告」Ⅴ
- 1992b、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅲ
- 1992c、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅳ
- 1993a、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅴ
- 1993b、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅵ
- 1994、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅶ
- 1995、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅷ
- 1996、「長原遺跡発掘調査報告」Ⅵ
- 1997a、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅸ
- 1997b、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅹ
- 1997c、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅺ
- 1998、「長原遺跡東部地区発掘調査報告」Ⅰ
- 1999a、「長原遺跡発掘調査報告」Ⅷ
- 1999b、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅻ
- 1999c、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅻ
- 1999d、「長原遺跡東部地区発掘調査報告」Ⅱ
- 1999e、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅻ
- 1999f、「大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1996年度-」
- 2000a、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」ⅩⅤ
- 2000b、「長原遺跡東部地区発掘調査報告」Ⅲ
- 2001a、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」ⅩⅥ
- 2001b、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」ⅩⅦ
- 2001c、「長原遺跡東部地区発掘調査報告」Ⅳ
- 2002a、「長原遺跡発掘調査報告」Ⅷ

- 2002b、『長原遺跡発掘調査報告』IX
- 2002c、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XVII
- 2002d、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』V
- 2003a、『長原遺跡発掘調査報告』X
- 2003b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XX
- 2003c、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XX
- 2003d、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』VI
- 2003e、『喜連東遺跡発掘調査報告』I
- 2004a、『長原遺跡発掘調査報告』XI
- 2004b、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』VII
- 2005a、『長原遺跡発掘調査報告』XII
- 2005b、『長原遺跡発掘調査報告』XIII
- 2006、『長原遺跡発掘調査報告』XIV

大阪府教育委員会1993、『大阪府立近つ飛鳥博物館(仮称) 一須賀古墳群 I 支群発掘調査概要』

大阪府埋蔵文化財協会1995、『陶器・大庭寺遺跡』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第90輯

大阪府文化財調査研究センター1998、『大庭寺・伏尾遺跡』大阪府文化財調査研究センター発掘調査報告書第27集

2000、『河内平野遺跡群の動態』VII

大阪文化財センター1978、『長原』

1980、『亀井・城山』

1986a、『城山(その1)』

1986b、『城山(その2)』

1986c、『城山(その3)』

1992、『小阪遺跡』

大庭重信1999、『弥生時代中期前葉の水田とその経営主体』:大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』VII、pp.97-100

2005、『まとも』:大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』XII、pp.315-324

岡村勝行1993、『古墳時代の長原ムラの調査から』:大阪市文化財協会編『華火』44号、pp.4-5

岡村勝行・清水和明1990、『松田氏によるマンション建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG88-19)略報』:大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『昭和63年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.279-299

尾上実・森島康雄・近江俊秀1995、『瓦葺椀』:中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』、pp.315-337

神谷正弘・三好孝一1985、『大阪府高石市水原地遺跡出土の須恵器について』:『古文化談義』第15集 九州古文化研究会、pp.63-78

河上邦彦・奥田豊1972、『和歌山における陶質土器』:園田香融編『和歌山市における古墳文化』 関西大学文学部考古学研究紀要第4号、pp.160-171

京嶋覚1982、『長原遺跡の方墳群』:大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』II、pp.66-75

1989、『古墳時代長原遺跡の概要』:大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』I、pp.14-17

1992、『瓜破台地の考古学的環境』:大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』III、pp.1-6

1994、『井戸 井戸 井戸』:大阪市文化財協会編『華火』49号、pp.6-7

1997、『初期群集墳の形成過程-河内長原古墳群の被葬者像をもとめて-』:立命館大学考古学論集刊行会編『立命館大学考古学論集』I、pp.213-226

1999、『古代・中世の会賀と長原』:大阪市教育委員会編『大阪の歴史と文化財』第2号、pp.53-60

2001a、『馬と地域社会』:大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要』第4号、pp.133-148

- 2001b、「道路状遺構と「磯津津道」-長原遺跡の交通史的検討-」:立命館大学考古学論集刊行会編『立命館大学考古学論集』Ⅱ、pp.233-249
- 慶星大学校博物館2003、『金海大成洞古墳群』Ⅲ 慶星大学校博物館研究叢書第10輯
- 久保和士1992、「堤をもつ古墳」:大阪市文化財協会編『華火』36号、pp.2-3
- 1995、「長原遺跡の花文陶器」:大阪市文化財協会編『華火』56号、p.8
- 1999、「動物遺体の調査結果と検討」:大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ、pp.107-120
- 久保和士・松井章・宮地淳子・佐久間桂子2000、「長原遺跡95-14次調査出土の動物遺存体」:大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XV、pp.159-172
- 黒田慶一1987、「喜連東遺跡発見の方形周溝墓と方墳」:大阪市文化財協会編『華火』10号、pp.5-8
- 建設省国土地理院1983、『土地条件調査報告書(大阪平野)』
- 古代の土器研究会1992、『古代の土器』 都城の土器集成
- 国立光州博物館・百済文化開発研究院1984、『付録1 務安社倉里墓陪墓』:『靈岩高樹里古墳群』 光州博物館学術叢書
- 堺市教育委員会1991、『堺市文化財調査概要報告第18冊』
- 酒井清浩2004、「須恵器生産のはじまり」:『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集 国立歴史民俗博物館、pp.339-365
- 櫻井久之1991、「長原40号墳の形象埴輪」:大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ、pp.192-210
- 1993、「長原古墳群の調査」:大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.1-7
- 1996a、「5世紀の屋敷地のすがた-長原遺跡東北地区の調査から-」:大阪市文化財協会編『華火』60号、pp.2-3
- 1996b、「鳥足文のある土器の一群」:大阪市文化財協会編『華火』61号、pp.6-7
- 1996c、「なぜ、弥生土器は埋められたのか」:大阪市文化財協会編『華火』62号、pp.2-3
- 1998、「鳥足文タケキメのある土器の一群」:大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要』創刊号、pp.21-32
- 2001、「長原遺跡の小方墳」:大阪府文化財調査研究センター編『大阪府埋蔵文化財研究会(第43回)資料』、pp.61-74
- 佐々木恵介2004、「防弁札・制札」:平川南・沖森卓也・榮原永遠男・山中章編『文字と古代日本』1 支配と文字 吉川弘文館、pp.182-210
- 佐藤隆1989、「5世紀の建物発掘-長原遺跡の調査-」:大阪市文化財協会編『華火』22号、pp.6-7
- 1992、「平安時代における長原遺跡の動向」:大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.102-114
- 1993、「喜連東遺跡の古墳と埋葬施設」:大阪市文化財協会編『華火』42号、pp.6-7
- 佐原真1968、「近畿地方」:『弥生土器集成』本編2 東京堂出版、pp.53-72
- 清水和明・鳥居信子1996、「長原里」の本間」:大阪市文化財協会編『華火』61号、pp.2-4
- 杉本厚典2003、「八尾南・長原・城山道跡における集落構成の変化-弥生時代から古墳時代にかけての地域社会の一樣相」:大阪市文化財協会編『大阪歴史博物館研究紀要』第2号、pp.31-70
- 関川高功1987、「畿内中期古墳出土の鉄製農具について」:横田健一先生古稀記念会編『文化史論叢(上)』、pp.325-342
- 高井健司1986、「長原七ノ坪古墳とその馬具」:大阪市文化財協会編『華火』創刊号、pp.2-3
- 1987a、「城下マンション(仮称)建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG85-23)略報」:大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.149-185
- 1987b、「長原古墳群で埋葬施設を確認」:大阪市文化財協会編『華火』第8号、pp.6-7
- 1988、「森本氏による事務所ビル建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG86-91)略報」:大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『昭和61年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.188-201
- 1989、「長原166号墳」:大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『よみがえる古代船と5世紀の大阪』、pp.78-79
- 1990、「黒斑をもつ円筒埴輪の一例」:大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.285-293
- 高井健司・高橋工1989、「宏和産業(株)による共同住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査報告(NG87-26)」:大阪市教育

- 委員会・大阪市文化財協会編『昭和62年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.223-236
- 高野陽子2003、「北近畿における弥生時代後期から古墳時代前期の土器様式」：大阪府文化財センター編『古墳出現期の土師器と実年代』、pp.307-333
- 高橋工1993、「小さいけれど長原代表遺跡～長原200号墳を発見」：大阪市文化財協会編『華火』44号、pp.2-3
- 1994、「ふたつの製埴土器」：大阪市文化財協会編『華火』53号、pp.4-5
- 1999、「長原遺跡および北部周辺地域における古墳時代中期～飛鳥時代の地形環境の変化と集落の動態」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ、pp.79-106
- 2000、「弥生時代長原ムラに河内の原風景を見る」：大阪市文化財協会編『華火』87号、pp.4-7
- 2003、「粘土彫をもつ古墳」：大阪市文化財協会編『華火』105号、pp.2-3
- 高橋工・佐藤隆1991、「東野俊氏による建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG89-25)略報」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『平成元年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.148-167
- 高橋工・杉本厚典・大庭重信・相川一徳2000、「長原遺跡東北地区の基本略序」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅲ、pp.9-17
- 田川市教育委員会1984、『セスドノ古墳』田川市文化財調査報告書第3集
- 田中清美1989、「上町台地北部出土の韓式系土器について」：『韓式系土器研究』Ⅱ 韓式系土器研究会、pp.70-83
- 1998、「長原87号墳出土の巫女の埴輪」：大阪市文化財協会編『華火』76号、pp.6-7
- 2004、「花塚山古墳」：大阪市史編纂書・大阪市資料調査会『新修大阪市史 史料編』第Ⅰ巻 考古資料編、pp.211-213
- 田辺昭三1981、『須恵器大成』角川書店
- 趙哲済1991、「長原の永期の狩人」：大阪市文化財協会編『華火』32号、pp.4-5
- 2001、「長原遺跡の地層」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅦ、pp.7-28
- 2003、「大阪平野の私たちと人類遺跡」：日本第四紀学会2003年大阪大会実行委員会編『大阪100万の自然と人のくらし』日本第四紀学会、Ⅰ-XⅢ・pp.1-16
- 趙哲済・榎野博幸1997、「平野区の長原で、ナウマンゾウの白歯の化石」：大阪市文化財協会編『華火』69号、pp.6-7
- 築城町教育委員会1998、『船迫遺跡群』築城町文化財調査報告書第6集
- 辻美紀2004、「～長原遺跡発～二つの方形周溝墓」：大阪市文化財協会編『華火』108号、pp.2-3
- 寺沢薫・森井貞雄1989、「河内地域」：寺沢薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年』近畿Ⅰ、pp.41-146
- 永島曜臣1987、「辰巳マンション建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG85-1)略報」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.118-126
- 長原遺跡調査会1978、『長原遺跡発掘調査報告』
- 花田勝弘2002、『古代の鉄生産と渡来人—倭政権の形成と生産組織—』雄山閣
- 松岡良憲1997、「古墳時代以前の扉口装置」：『堅田直先生古希記念論文集』、pp.161-169
- 松本百合子1995、「最新の206号墳」：大阪市文化財協会編『華火』57号、pp.4-5
- 宮本長二郎1996、『日本原始古代の住居建築』
- 村元健一2003、「長原遺跡とその周辺の古代の様相」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅴ、pp.86-100
- 森島康雄1990、「中河内の羽釜」：『中近世土器の基礎研究』Ⅵ 日本中世土器研究会、pp.55-62
- 八尾市文化財調査研究会1995、『八尾南遺跡』財団法人八尾市文化財調査研究会報告47
- 八尾南遺跡調査会1981、『八尾南遺跡』
- 米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室2000、『青木稲葉遺跡・福市遺跡(大成地区)』
- 米田敏幸1991、「土師器の編年 近畿」：石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編『古墳時代の研究』第6巻(土師器と須恵器) 雄山閣出版、pp.19-33

あ　と　が　き

本書では1979年度から95年度にかけて行われた100件を超える調査を収録したものである。一般に10年ひと昔と言われるが、これらの調査のほとんどすべてが10年以上前の調査であり、さらに半分近くが20年以上前の調査であったことは、正直編集を困難にした。調査の中には整理途中で終わっていたり、記録が散逸していたりするものもあり、加えて、編集期間が約1年間であったため、不十分な状況を回復することはできなかった。特に、旧石器をはじめとする石器遺物については、今後の研究で補わなければならない。

以上のように本書は多くの課題を残したが、41基（追加調査を含めると44基）の古墳を新たに報告するなど、長原遺跡のアウトラインを描くための内容はとりあえず報告できたと考える。これが新たな出発点ということでご寛恕頂き、今後不足分を補いながら、長原遺跡の調査研究を深めていきたい。

（京嶋寛）

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

- M MT15型式 23, 83, 107, 110, 116,
~118, 290
- O ON46段階 26, 64, 65, 88, 94, 99,
211, 224, 225, 226
- T TK23型式 23, 42, 45, 62, 81, 83,
88, 107, 108, 110, 116~
118, 123
TK43型式 192, 194
TK47型式 83, 123, 124, 211, 226
TK73型式 72, 116, 147, 224, 271
TK208型式 16, 26, 65, 79, 88, 108,
291
TK216型式 26, 72, 168, 191, 224,
226, 232, 246, 271
TK217型式 192
- U U字形銀先 68, 70
- あ 朝顔形 (埴輪) 16, 147, 150, 231, 232
飛鳥Ⅱ 127, 133, 144, 195
飛鳥Ⅲ 83, 195, 211
飛鳥Ⅳ 225
- い 家形埴輪 18, 250
生駒西麓産 164, 171, 237, 255, 257
一ヶ塚古墳 11, 273, 274
井戸 4, 11, 28, 30, 38, 52,
53, 56~58, 72, 76, 87,
92, 94, 99, 101, 107,
118, 119, 128, 131, 134,
136~138, 141, 155~
158, 175, 177, 194, 198,
199, 209, 210, 219, 221,
222, 224, 226, 238, 240,
251, 253, 262
- う 白玉 81, 83, 128
馬 4, 55, 56, 88, 90, 118,
123, 124, 226, 275
馬形埴輪 24, 41, 62, 64
- え 延喜式 142
円筒埴輪 15, 16, 18, 19, 23, 35,
41, 42, 52, 62, 72, 88,
147, 150, 168, 190, 191,
194, 230, 232, 274
- お 大阪湾岸系 79, 118
押型文 3, 272
オニグルミ 183
- か 瓦器 28, 30, 53, 56, 97~99,
138~140, 155~157, 177
~179, 197, 198, 212,
234
化石林 181, 183, 185
火葬墓 169, 175, 180
滑石製品 83, 272
唐草文軒平瓦 156
ガラス製小玉 150
甕柱 95, 101, 107, 118, 121,
176, 219, 220
川辺2号用水 199, 200
棺外副葬 68
韓式系土器 4, 70, 72, 209, 210
- き 畿内第Ⅰ様式 161, 218
畿内第Ⅱ様式 207, 212
畿内第Ⅲ様式 237, 252
畿内第Ⅳ様式 161, 208
畿内第Ⅴ様式 172, 236, 241
衣蓋形埴輪 62, 64, 249

- 吉備系 258
金環 57, 70, 88, 272
- く 草摺形(埴輪) 16, 23
管玉 150
- け 剣形木製品 94
- こ 黒色土器 28, 53, 97, 98, 137, 138, 177, 178, 234
瓶 92, 108, 110, 123, 238, 246, 248, 271
- さ サスカハ 13, 31, 60, 147, 169, 171, 185, 186, 188, 201, ~203, 205, 216, 217
- し 滋賀里 171
四国系 258
自然堤防 3, 4, 250, 252, 253
七ノ坪古墳 119, 129, 273~275
鳥島 58, 186, 195, 197, 198
主体部 11, 13, 19, 23, 26, 30, 31, 37, 45, 54, 57, 66, 68, 70, 88, 147, 150, 151, 168, 189, 190, 245, 274, 275, 288
庄内式土器 169
縄文土器 186, 202, 252
- す 水田 4, 11, 24, 26, 28, 30, 31, 32, 35~37, 41, 45~47, 49, 52, 54, 66, 83, 87, 99, 127, 130~134, 141, 155, 169, 173~175, 179, 192, 194, 200, 201, 207, 212, 227, 233, 234, 236, 251
蜀先 68
スタンプ文 238
- せ 製埴土器 76, 79, 87, 96, 117
- 生痕化石 3
刺札 141, 142
青磁 157
石鼓 60, 121, 146, 147, 169, 186, 188, 202, 203
線刻 16, 18, 19, 24, 52, 64, 147, 190, 250, 253
- そ 双孔円板 83, 110, 117
総柱 35, 72, 101, 106, 118, 121, 128, 176
算盤玉形紡錘車 224
- た 高杯形器台 52, 108, 116, 232
高廻り 140, 190, 250, 273, 274
竪穴住居 76, 81, 88, 99, 101, 105, ~108, 117~119, 121, 123, 128, 152, 226, 236, ~238
樽形埴 72
丹後・丹波系 255, 262
- ち 中位段丘構成層 272
- つ 塚ノ本古墳 36, 37, 227, 229, 231, 234, 273~275
造出し 11, 19, 23, 30, 57, 60, 62, 65, 77, 274
筒形器台 52, 70, 107
坪境 98, 99, 179, 192, 195, 197~199, 201, 212
- て 低位段丘構成層 2, 265
手鎌 68
鉄鼓 70
鉄刀 31, 62, 64, 152, 275
鉄斧 68, 268
出戸自然堤防 250, 252, 253
- と 東海系 261, 262
陶質土器 268, 288
彫材 77, 78

巴文軒丸瓦 156

な ナイフ形石器 3, 60, 201

ナウマンゾウ 181, 183, 185, 186, 199

長原古墳群 16, 30, 88, 128, 129, 140, 151, 168, 190, 200, 212, 250, 273~275

(長原古墳群) 1期 250, 273, 275

(長原古墳群) 2期 16, 26, 65, 147, 150, 168, 273

(長原古墳群) 3期 54, 64, 128, 129, 212, 273, 275

(長原古墳群) 4期 129, 273~275

長原式土器 151, 186, 207, 218, 251

に 日本書記 142

鶏形埴輪 16, 23, 24

は 羽釜 28, 138, 151, 155~157, 175, 199

白磁 28, 157

波頭文軒平瓦 156

盤 268

ひ 備讃瀬戸系 117

ふ 黒字硯 28

複弁蓮華文軒丸瓦 178

袋状鉄斧 68

船形埴輪 249, 250

布留式 92, 236, 262, 267, 287

へ 平安遺文 141

平安時代Ⅲ 36, 54, 180

平安時代Ⅲ古 53, 56, 175, 177, 178, 180

平安時代Ⅳ古 30, 36, 138, 141, 177

平安神宮火山灰 3

平城宮土器Ⅰ 272

平城宮土器Ⅱ 262

平城宮土器Ⅲ 262

平城宮土器Ⅳ 262

平城宮土器Ⅴ 87

平城宮土器Ⅵ 87

ほ 方形周溝墓 4, 161, 162, 164, 168, 225, 236, 240, 243, 245, 251, 262

掘立柱建物 4, 31, 35, 52, 55~57, 72, 88, 90, 94~96, 99, 101, 107, 118, 119, 121, 123, 128, 129, 143, 150, 151, 169, 175, 177, 180, 208, 209, 219, 226, 253

ま 勾玉 271

櫛材 77~79

曲物 28, 53, 88, 128, 136~138, 155, 157, 177

み 巫女形埴輪 23

南口古墳 129, 151, 273, 274

む 無蓋高杯 65, 79, 83, 92, 110, 147, 232, 248

も 木簡 99, 132, 137, 139, 141, 142

木棺 31, 37, 42, 44, 45, 168, 197, 275

や ヤス 119, 127

ゆ 有蓋高杯 15, 76, 81, 92, 107, 108, 110, 116, 147, 168

有茎尖頭器 60, 188

よ 横大路火山灰 144, 266

両耳付短頸壺 65, 287, 290, 291

緑釉(陶器) 38, 53

わ 轆 46, 87, 173

〈地名・遺跡名など〉

- い 生駒山地 2
- う 上町台地 2
 - 瓜破道跡 55
 - 瓜破台地 2, 56, 212
- お 大坂城下層 289
 - 大庭寺道跡 289, 291
- か 河内平野 2, 201
- き 喜連東道跡 158, 273, 275
- し 城山道跡 161, 162, 168
- す 陶邑 288, 290, 291
- て 出戸池 133, 143
- ち 朝鮮半島 65, 287~292
- な 中田道跡 261
- ひ 東除川 4, 11, 131, 140, 143
 - 平野川 3, 264
- へ 平安京 53
- や 八尾南道跡 214, 273
 - 太和川 11, 201
- よ 四ツ池道跡 288

**Archaeological Report
of the
Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume XV

November 2006

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

SA : Palisade or fence

SB : Building

SD : Ditch

SE : Well

SK : Pit

SP : Pit or Posthole

SR : Paddy field balk

SX : Other features

NR : Natural Stream

CONTENTS

Foreword

Explanatory Notes

Chapter I Excavations in the Nagahara Site	1
S.1 Outline of the Nagahara site	1
1) Outline	1
2) Location and geographical setting	2
3) Introduction of the recent notable Researches	3
S.2 List of the excavations reported in this volume	8
Chapter II Researches on the Southwestern and Southern sector	11
S.1 Researches on the NG18 and the surrounding	11
1) Outline of the Researches and the surrounding	11
2) Results of Current Researches	12
3) Conclusion	30
S.2 Researches on the NG83-66 and the surrounding	31
1) Outline of the Researches and the surrounding	31
2) Results of Current Researches	31
3) Conclusion	36
S.3 Researches on the NG92-92 and the surrounding	37
1) Outline of the Researches and the surrounding	37
2) Results of Current Researches	38
3) Conclusion	53
S.4 Researches on the NG86-62 and 93-91	55
1) Outline of the Researches and the surrounding	55
2) Results of Current Researches	56
3) Conclusion	56
Chapter III Researches on the Western sector	57
S.1 Researches on the NG84-25 and the surrounding	57
1) Outline of the Researches and the surrounding	57
2) Results of Current Researches	58
3) Conclusion	88
S.2 Researches on the NG91-70 and the surrounding	90
1) Outline of the Researches and the surrounding	90
2) Results of Current Researches	90
3) Conclusion	99
S.3 Researches on the NG92-95 and 93-26	101
1) Outline of the Researches and the surrounding	101
2) Results of Current Researches	101
3) Conclusion	118
Chapter IV Researches on the Central sector	119

S.1 Researches on the NG89-25 and the surrounding	119
1) Outline of the Researches and the surrounding	119
2) Results of Current Researches	119
3) Conclusion	128
S.2 Researches on the NG92-2 and the surrounding	130
1) Outline of the Researches and the surrounding	130
2) Results of Current Researches	132
3) Conclusion	140
Chapter V Researches on the Northern sector	143
S.1 Researches on the NG93-37 and the surrounding	143
1) Outline of the Researches and the surrounding	143
2) Results of Current Researches	143
3) Conclusion	151
S.2 Researches on the NG88-90 and 91-16	152
1) Outline of the Researches and the surrounding	152
2) Results of Current Researches	152
3) Conclusion	156
S.3 Researches on the NG84-34 and the surrounding	157
1) Outline of the Researches and the surrounding	157
2) Results of Current Researches	157
3) Conclusion	168
Chapter VI Researches on the Southeastern sector	169
S.1 Researches on the NG83-8 and the surrounding	169
1) Outline of the Researches and the surrounding	169
2) Results of Current Researches	169
3) Conclusion	179
S.2 Researches on the NG91-1 and the surrounding	181
1) Outline of the Researches and the surrounding	181
2) Results of Current Researches	181
3) Conclusion	199
S.3 Researches on the NG93-1 and the surrounding	201
1) Outline of the Researches and the surrounding	201
2) Results of Current Researches	201
3) Conclusion	212
S.4 Researches on the NG86-3 & 64 and the surrounding	214
1) Outline of the Researches and the surrounding	214
2) Results of Current Researches	215
3) Conclusion	225
S.5 Researches on the NG85-18 and the surrounding	227
1) Outline of the Researches and the surrounding	227
2) Results of Current Researches	227
3) Conclusion	234
Chapter VII Researches on the Eastern and Northeastern sector	235

S.1 Researches on the NG87-67 and the surrounding	235
1) Outline of the Researches and the surrounding	235
2) Results of Current Researches	236
3) Conclusion	250
S.2 Researches on the NG84-86 and the surrounding	251
1) Outline of the Researches and the surrounding	251
2) Results of Current Researches	251
3) Conclusion	262
S.3 Researches on the NG84-4 and the surrounding	263
1) Outline of the Researches and the surrounding	263
2) Results of Current Researches	263
3) Conclusion	272
Chapter VIII Examination of features and artifacts	273
S.1 Collection of the Nagahara Tomb cluster	273
1) Forword	273
2) Phase	273
3) Mound and outer facility	274
4) Burial facility and mortuary goods	274
S.2 Examination of the jar with two loops unearthed from the Nagahara Tomb No.117	287
1) Forword	287
2) Jar with two loops in Korean Peninsula	287
3) Example in Japan	287
4) Examination of a similar instance	290
5) Conclusion	291
Bibliography and References	293
Postscript	
Index	
English Contents and Summary	
Reference Card	

ENGLISH SUMMARY

The Nagahara site is located in the southeast of Hirano Ward in Osaka City (fig.1 and 2) and contains archaeological remains dating from the Palaeolithic to the Modern periods. In this volume, we report on the results of 104 excavations (with total area of 34,386 square meters) undertaken at the Nagahara Site prior to development projects between fiscal 1979 and 1995, and divided the excavated area reported in this volume as seen in Fig 2.

Several significant results are detailed below.

1) The Palaeolithic and Jomon peiod

From strata dating to 87,000 B.P., a petrified broad-leaf forest and many botanical remains were unearthed at NG91-1 in the southeastern sector of the site complex. In addition, from the upper strata of this age, the fossil footprints of a Naumann's elephant were found. But, there was no evidence of human activity.

In the several investigations of the Southeastern sector, we found concentrations of lithic materials and stone tools such as backed knives and scrapers.

Investigations of the Northern and Northeastern sectors revealed fragments of pottery and stone tools dating to the late and terminal Jomon were unearthed.

2) The Yayoi period

At NG89-48 & 93-1 in the southeastern sector of the complex, we excavated a paddy field dating to the Early to Middle Yayoi period.

In the northern, eastern and northeastern sectors we discovered the remains of square-shaped and moated burials (NG84-34 in the Northern sector) and the pit-dwellings (NG87-67 in the Eastern sector) from the Middle Yayoi period and pit-dwellings(NG87-67) and ditches (NG87-67 and 84-6) from Late Yayoi period. The pit-dwellings and ditches were found in high spots of the eastern and northeastern sector and the burials were found in lower places.



fig.1 Location of Osaka in Japan

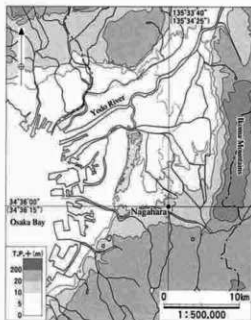


fig.2 Location of the Nagahara site in Osaka

This indicates that residential and burial areas were divided into high and low places respectively.

3) The Early Kofun Period

In NG84-86 in the Northeastern sector of the site complex, large quantities of pottery were unearthed from a well. Some of them are from other regions, such as northern Shikoku, Tango and Tokai.

In NG84-6 in the Eastern sector, square-shaped, moated burials were excavated.

4) The Middle to Late Kofun Period

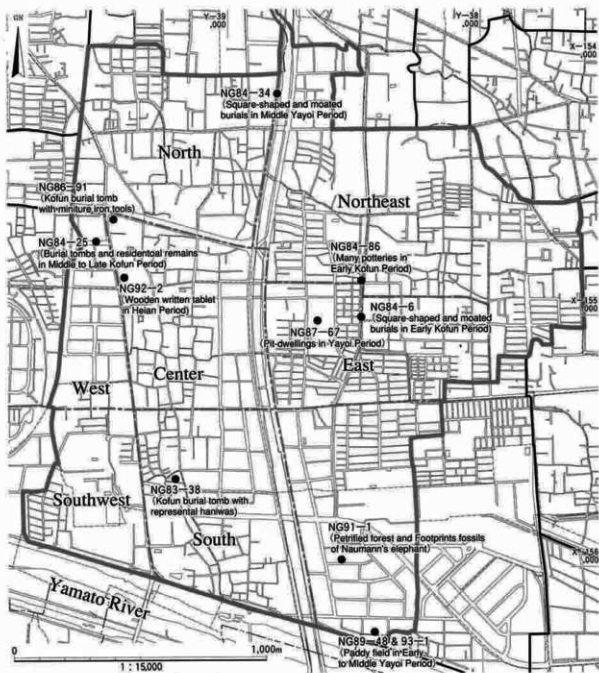


fig.3 Detailed plan of the excavated area in the Nagahara site

In this volume, we report 44 burial tombs in total and summarize all of the tombs of the Nagahara tomb cluster in Section 1 of Chapter VIII. The significant tombs reported in this volume include Tomb No. 87, from which were unearthed haniwa, such as representations of a shamaness, horses and domestic fowl, and Tomb No.166 with miniature iron tools.

Additionally, we report on residential remains, such as the pit-dwellings, posthole-type buildings, ditches, pits and so on, found in each sector of the Nagahara site. The settlements from middle 5th century were distributed in eastern half of the Nagahara site, and the ones after late 5th century were in western half. So we believe that the late 5th century the residential area was moved from eastern to western areas. But the western residential area disappeared sometime in middle 6th century.

5) The Asuka to Nara Period

In the southern, western and central sectors, we investigated paddy field, which suffered from flood in several time. We believe the whole area of the Nagahara site except the Northeastern sector became the paddy field.

6) The Heian Period

At NG92-2, in the central sector, a wooden tablet, on which the date of "Jiryaku 2 (1066)" and the place name of "Nagahara" were written, was unearthed from a well. Moreover on this tablet a sentence indicating a land dispute was written and it is a very important record for examining the land ownership system of the Heian Period.



原 色 図 版



鶏形埴輪



馬形埴輪

圖 版

長原71～74号墳
(A区を南から)



長原74号墳周溝
遺物出土状況



SD603完掘状況
(A区を南から)





長原87号墳全景
(北から)



長原87号墳墳丘断面と
埴輪列



長原87号墳主体部
(西から)



長原180号墳全景(南から)



長原180号墳主体部(東から)



NG89-12次
奈良時代水田(南から)

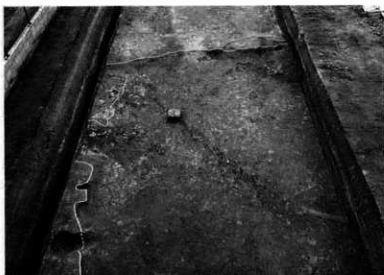


NG83-66次
奈良時代水田(南から)



NG83-66次
SB401(北から)

NG87-70次
長原6Bi層上面全景
(東から)



NG87-70次
長原6Ai層上面全景
(東から)



NG89-69次
長原182号墳全景
(東から)





長原200号墳検出状況
(南から)



長原200号墳完掘状況
(南から)



長原200号墳主体部
(西から)

1区奈良時代
水田全景(北から)



SR501埴輪出土状況
(南東から)



3区平安時代
遺構全景(東から)

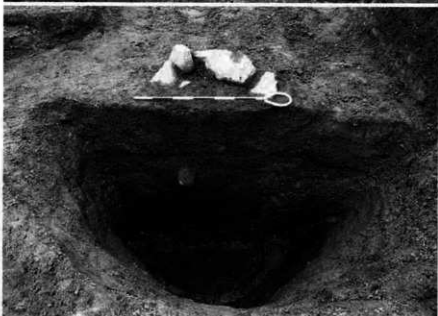




NG92-45次
北区畦畔断面



NG94-67次
平安時代遺構全景
(南から)



NG94-67次
SE402断面
(北から)



A区古墳時代遺構全景(航空写真：右が北)



B区古墳時代遺構全景(東から)



長原113号墳
(東から)



長原116・117号墳
(上から)



長原117号墳
(北西から)

SB702(南から)



B区南側の
古墳時代溝群
(南から)



SE701木器出土状況





A区奈良時代水田全景
(航空写真：右が北)



A区北東部
奈良時代水田
(航空写真：右が北)



SX601(南から)

長原166号墳全景
(東から)



長原166号墳
第1主体部
(南東から)



長原166号墳周溝
韓式系鍋出土状況





NG89-36次古墳時代
遺構全景(北から)



NG89-36次SX701
検出状況(西から)



NG90-66次SD407
完掘状況(北東から)

NG91-70次
SE701断面



NG91-70次
SD402断面
(北から)



NG93-14次完掘状況
(北から)





NG93-80次SD601
(北西から)



NG89-15次
調査地西部完掘状況
(東から)

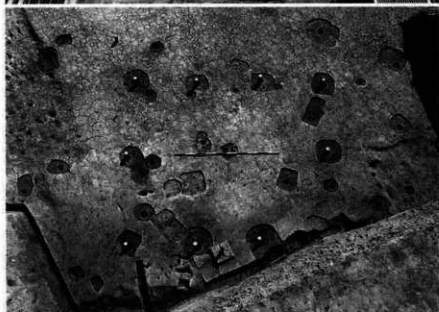


NG89-15次SD401
(北から)

古墳時代遺構全景
(北から)



SB703



SB711~713
(北東から)





SB714・SE701
(東から)



SD709・713
(北から)



SD709遺物出土状況
(南から)

古墳時代遺構
完掘状況
(北から)



SB701(北から)



長原6Aⅰ層上面
検出水田
(北から)





SE401～403
およびSD401
(南から)

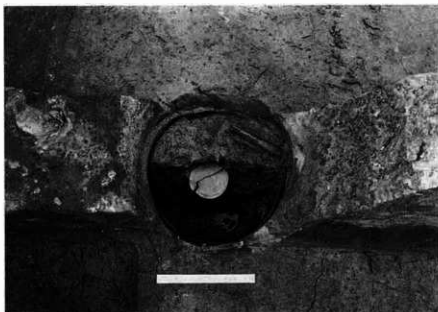


SE401断面(北から)



SE401曲物検出状況
(北から)

SE402曲物検出状況
(南から)



SE403曲物検出状況
(南から)



SE402断面(南から)





NG90-13次
SD602完掘状況
(南から)



NG95-2次完掘状況
(北から)



NG95-2次
SK402断面
(東から)

NG93-37次
長原199・201・202
号墳(東から)



NG93-37次
長原204号墳
(北から)



NG87-43次
第5層基底面全景
(東から)





SE301遺物出土状況



SE302



SE305

NG91-16次
東壁断面図(北西から)



NG88-90次SE401
(北から)



NG88-90次SE402
(北から)





SX801墳丘断面
(2区西壁)



SX801周溝遺物
出土状況(西から)



SX802周溝遺物
出土状況

NG83-8次
SX701(西から)



NG83-8次
SD601・602および
SX601(西から)



NG86-23次
NR601(西から)





NG89-47次
平安～鎌倉時代遺構全景
(西から)



NG89-47次
SB404柱穴内石製礎板
(南から)



NG81-12次
SX401出土状況

長原16B層上面
化石林全景
(南東から)



縄文時代石器ブロック
検出状況(南から)



SD902(南東から)





長原183～186号墳
(北から)



長原183号墳
(北から)



長原184号墳

SD902(南東から)



長原198号墳
(南西から)



SK710遺物出土状況
(南東から)





旧石器ブロック検出状況
(東から)



NR901・SD901
検出状況(北から)



調査地北西部柱穴群
(北から)

弥生時代水田断面
(南から)



弥生時代水田全景
(南東から)



弥生時代水田北東部
(北東から)





NR901(北から)



SK801高杯出土状況
(東から)



SE701完掘状況
(北から)

旧石器時代石器ブロック



横長剥片出土状況



石核出土状況





NR901(南から)



SD901(北から)



NR902(南から)

調査地東北部
古墳時代遺構
(北から)



SB701(北西から)



SD703遺物出土状況
(南から)





NG85-18次
長原129号墳(南から)



NG87-56次
SD709・710
(東から)



NG87-81次
長原178号墳および
SD707・708(西から)

SK801(東から)



SX701(北西から)



SD712~714
(南東から)





SX703周溝(北から)



SX702周溝(北から)



SX703上層地輪出土状況

NG84-86次
SE701遺物出土状況



NG84-4次
SD701遺物出土状況



NG84-4次
SD702遺物出土状況





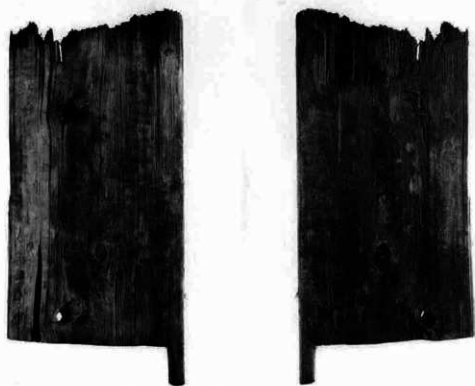
縄文海進時の
生痕化石



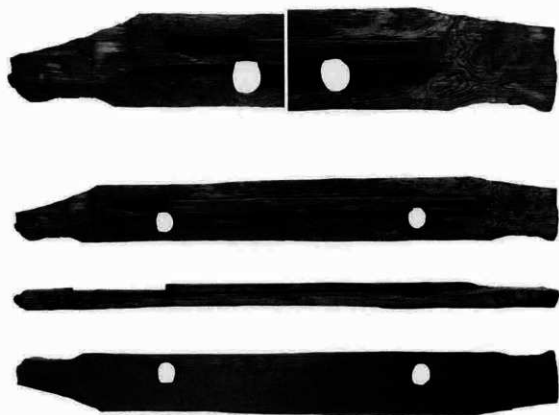
SD801完掘状況
(東から)



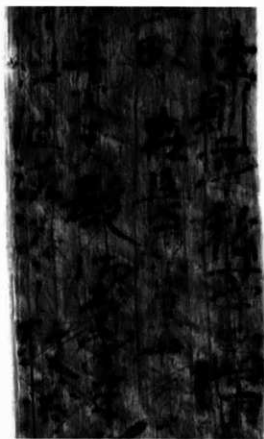
SX701断面
(西から)



扉材



桤材



左：NG92—2次SE401出土木簡、上：拡大



NG94—67次出土緑釉陶器

大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告 XV

ISBN 4-900687-97-9

2006年11月30日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法門坂 1-1-35

<http://www.occpa.or.jp/>

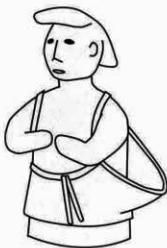
(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

印刷・製本 アインズ株式会社 大阪営業所

〒541-0041 大阪市中央区北浜2-1-14

**Archaeological Report
of the
Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume XV



November 2006

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Report
of the
Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume XV



November 2006

Osaka City Cultural Properties Association